

## 今週の主張 1月1日

### 21世紀はプロレタリア文学の年だ

明けましてお目でとうございます。いよいよ21世紀ですね。僕のまわりの左右の活動家たちも、「うわー、21世紀まで生き延びたよ!」と狂喜してました。そうですよね、「右翼」や「左翼」は20世紀中に滅びると思われてましたからね。どっかの新聞で「21世紀に持ち越したくないもの」という特集があって、「右翼・左翼」と答えてた人もいましたからね。「それって、鈴木さんじゃないの」。あっ、ヤダ、ヤダ。正月から忌わしい赤坂の声だ。ウルセー、消えろよ。ともかく、今年もよろしく願います。管理人ともどもお願い申し上げます(背後霊の赤坂も「よろしく」と言っております)。

それにしても不思議ですね。1990年代後半には、「21世紀はいつからか」という大論争がありました。「2000年から21世紀だ。なんせ2000になったんだから、当然だ」という人がいて、もう一方に、「いや、0は最後の数だ。物事は1から始まるのだ。だから21世紀は2001年からだ」という人がいた。それで、ああでもない、こうでもないで大論争になった。だから、2000年になったら、「さあ、21世紀だ!」といってハシャグ人と、「もう一年ある。ハシャグな」という人と二つのグループに分かれて闘うのかと思った。内ゲバになり、殴り合い、殺し合い、埋め合いも起きるんじゃないかと心配した。

ところがだよ。2000年になったら誰一人として騒がない。「今日から21世紀だ!」とハシャイでる奴はいない。そんなカレンダーも出てない。2、3年前に主張してた人はどうしたんだ。卑怯な奴らだ。探し出して大衆の前で自己批判させるよ。糾弾しろよ。査問しろよ。全く、人騒がせな奴らだ。それに新聞でもテレビでも、さんざん論争をあおって、「はたしていつから21世紀か?」なんてやってたのに、2000年にはマスコミはピターッと沈黙した。そして、「2001年から21世紀ですよ」と一斉に声をそろえていい出した。恐ろしいよね、直前まで議論はあっても、こうと決まると全員がそれになだれ込む。戦争の時だってそうだったんだらうな。と比較しちゃダメか。これは全く違う話だ。いつから21世紀かという問題は、もっと簡単だったんだ。歴史年表を見たらすぐに分かる。いつから19世紀は始まったか、いつから18世紀は始まったか、それで解決がついた話だったんだよ、バカらしい。それをもっともらしく、〈論議〉してたりして。バカだね、日本人は。いや、書くことがないから新聞が、「こんな論議があるよ」と大きく書いたのかもしれない。おいらたちも、読むものがないから、それを読んでいて、「あら大変だ、一体いつから21世紀だろう」と思ったんだ。つまらん。

でも、いいかげんなマスコミの「虚報」「虚論議」に踊らされた人々はかわいそうだね。明日をも知れない病人は、何とか21世紀にまで生き延びたいと思ったろうし。でも、もう10日がんばればいいのか、もう1年がんばらなくちゃいかなのか分からん。闘病生活も不安だったでしょうな。一方、生まれる子供もそうよ。今生まれたら新世紀ベビーになって皆に祝福されるのか、世紀末ベビーと言われて呪われ

るのか分からない。出るに出れない。いや、それは子供をつくる親の問題か。だから、新世紀ベビーをつくる為に、いつ「仕込み」をしたらいいのかさかのぼって計算するんだろう。それが間違ったら困る。

…と人民を不安におとし入れたくせにマスコミは何ら謝罪の言葉もない。おかしいよな。話かわって、今、NHKの「生きもの地球紀行」を見てたんだけど、絶滅寸前の野生動物って多いんだよね。雪山に住むユキヒョウってやってたけど、日本の右翼も左翼も21世紀中には滅びるよね。そしたら、「最後の右翼」とか「残り一匹になった左翼」なんてのはどうするんだろう。どっかで飼育して、増やすのかな。でも、一頭ずつしかいないし増やしようがない。めんどろ、両方を交尾させればいいじゃないかって。右翼が男、左翼が女なら、それも出来る。これもいいかもしれないな。で、何を考え、どんな行動をするんだろう。ウーン、悩んじゃうな。正月早々、そんな難しい問題は考えられんよ。だから、次に考えよう。

年末、紅白歌合戦を見ながら本を読んでいた。面白い本だ。ものすごい本だ。だってタイトルからして、『プロレタリア文学はものすごい』(荒俣宏著。平凡社新書)というんじゃよ。見出しも面白い。「プロレタリア文学はホラー小説である」「プロ文学はセックス小説だった」「プロ文学はSFだった」…と。前に僕が取り上げた壺井栄の『二十四の瞳』も出てるよ。「日本で最もよく読まれたプロレタリア文学」と紹介されている。本当にそうだよ。大石先生は生徒に、「あかって、なんのことか知ってる人？」なんて聞くんだから。プロレタリア運動の初歩をガキに教えてるんですよ。だから父兄からも「大石先生はアカじゃなかるうか」と不安がられたりするんです。

ともかく、この本は面白い。もしかしたら、21世紀はプロレタリア文学再評価の年になるかもしれない。そうだ、「21世紀は再び赤軍派の時代になる」と誰かが週刊誌に書いとったぞ。「お前じゃないか、バカ!」と、赤坂の声が聞こえた。「自作自演男め。それも虚報だ!」って。ひどいなー。

では本題に入る。『右であれ左であれ』(エスエル出版会)で井上章一さんと対談した。『美人論』でベストセラー作家になった人だ。この他にも、『美人研究--女にとって容貌とは何か』(河出書房新社)や、『おんな学事始』(文芸春秋)など、一連の美人研究の本がある。この『おんな学事始』に面白い話が紹介されている。

徳永直という有名なプロレタリア作家がいた。「とくなが・すなお」と読むんだよ。1892~1958年。熊本県出身。労働争議の体験をもとに「太陽のない街」を雑誌「戦旗」に書き、労働者出身のプロレタリア作家として認められる。

あれっ、戦旗派でこの前、討論集会に呼ばれて出てきたよ、と思った。でも時代が違う。ブントの機関紙は「SENKI」で昔の「戦旗」とは違うんだ。でも、なんか変な因縁だなと思った。と、ここまで書いたら電話だ。ウルセーな、せっかく書いてる時に、又、赤坂だろう、邪魔しやがって、と思ったら、何と「SENKI」の人だ。「この前の話をのせたい。ゲラをこれから送るから見てくれ」という。へー、いま「戦旗」のことを書いてたばかりだよ、こんな偶然があっただけいいものかって驚いたね。

「又、話を面白くするために作ってんだろう」と思ってるかもしれないが、ホン

トウなのだ。何なら埼玉県蕨の「せんき社」に問い合わせてもらってもいい。僕は嘘はついてない。

ところで、徳永直は、この他に、代表作として「はたらく一家」「妻よねむれ」などがある。「妻よねむれ」というのは、奥さんが死んだんで、安らかに眠ってくれという意味だろう、安らかに眠らせて自分は二度目の結婚をする。でも、その妻はたいそう醜い女であった。社会主義者なんだから、女性の表面的な美醜というブルジョワ的価値観にとらわれないのかと思ったが、違う。「醜い女は嫌だ。とても抱く気になれない」といって、なんと、手つかずのまま実家におくり返したんだ。ひどいね。正月から何ということをするんだ。あっ、おいらが書いてんのが正月で、奥さんを追い出したのは正月じゃないのか。ともかく、ひどい。当時はフェミニズム団体もなかったから抗議されなかったんだろう。それに、すごいのは、両者がこのことを小説に書いたんだ。両者といっても徳永は作家だけど、ブスの奥さんは？ そう、奥さんは作家じゃない。でも、このブスの奥さんの姉が実は、誰あるう、あの『二十四の瞳』を書いた壺井栄だったんです。ジャーン！ 何という運命の悪戯！

ブスだからといって妹が追い出されるなんて許せるか！ と壺井は怒り狂い、二つの小説を書いた。一つは『妻の座』、もう一つは『岸打つ波』だ。社会主義者、プロレタリア文学者はそもそも弱者の味方だ。それなのに、ブスだということで女性を差別する。許せない。こりゃ左翼の内ゲバだ。正義は壺井の方にある。徳永はおそれ入るしかない。と思いきや、こっちも小説を書いて反論する。思想は思想、女の好みは好み。と、別だろうと思ってるんだ。きたない女よりはきれいな女の方がいい。これは人類永遠の真理であって、ブルジョワ思想ではない、というんですな。

徳永は『草いきれ』という小説でそのことを書く。いかにブスだったかをこう書く。「大きなネコ背、もりあがった肩、なみはずれて大きな顔…」。こんな醜い女とは暮らせないと正直に書くのだ。だから徳永直だ。スゲー。やっぱ、プロレタリア文学は衝撃だよ。ものすごいよ。このブスな奥さんは、それでも徳永に捨てられまいとして、こう哀願する。「閑子(妻。壺井の妹のこと)はあごをそらせ、からだをよせてきた。『わたしはソラ豆のように不器量だけどね、わたしの心はソラ豆のように純情よ』。野村(徳永のこと)は青くなった」ひやーっ、すごいね。でも、ソラ豆って純情なのかな。それに、ソラ豆は醜くっても、うまいから食べる気がするけど、ソラ豆のような女はつまむ気にならんと徳永は思うんだよ。

この小説を紹介した後に井上章一は、書いている。「ところで、左翼と面喰いは、はたして両立しえないものなのか」。ウーン、本質的な疑問だ。ブントの人たちに聞いてみよう。元ブントの見沢知廉は面喰いだし、元左翼の管理人も面喰いだ。やっぱ、「人民の味方」「弱い者(ブス)の味方」といいながら、社会的強者(=美人)が好きなんだ。ひどい。(乃木坂注・その点、「40才の美人より二十歳のブス」が好きな鈴木さんは偉い!)その証拠に、明治の社会主義者、幸徳秋水も、友人に紹介された新妻を「不美人はいやだ」といって結婚そうそうに捨てている。フェミニズム運動がないから当時の左翼はやりたい放題だったんだ。

ところでだ。井上章一は、なぜ、これらの小説を紹介したのか。たんに、壺井の

妹はブスでかわいそうだ。徳永は許せない。…という話だけに終わらせていない。なぜ壺井は妹の小説を二つも書いたのか。それについて、こう想像する。

「なぜ壺井栄は妹に関する小説を二つも書いたのか。よほど徳永に腹を立てたにちがいない。しかしそれだけではない。妹は不美人だということを活字の上で強調したかったのではないか。自分は妹よりもましたということを暗々裡に書いておきたかったのではないか」

ゲッ。何という「暗い想像」だ。ここまで人間心理の裏の裏を読むなんて。すごい人だ。というわけで、今週は終わります。では又、来週。

[HOME](#) [BACK](#)

新世紀記念インタビュー／鈴木邦男、「今年の決意」を語る

皆様、新年明けましておめでとうございます。

旧管理人、といってもしよっちゅうでしゃばっている赤坂です。

昨年は鈴木邦男HPをおひきたていただき、誠にありがとうございました。

今年もよろしくお願い申し上げます。

さて、昨年12月31日のことです。

私はライター仲間のりえぞうさんとなっちゃんとともに、本HPでもおなじみロフトプラスワン（新宿歌舞伎町）の忘年会にお邪魔しておりました。もうじき新世紀かあと感慨にふけていると、ケータイが鳴っております。「君が代」です。「あのお方」からの電話は「君が代」が鳴るようになっていますのです（ウソ）。

「もうオレは華屋与兵衛に着いてるよ。今どこ？」「は？」「新世紀インタビューを年越しながらやろうっていったの赤坂だろ？ 初心に戻って最初にインタビューをした場所でやろうって。2000年の総括、といっても縛って殺すんじゃなくて、あと21世紀のトーフ、じゃない抱負を聞きたいといってたじゃないか」。えー？ そんなこといったかなあ？ いやに具体的だなあと思いましたが、電車のあるうちに友人も帰る、というのでしぶしぶロフトをあとに、高田馬場へ。あ、邦男さんタクシー代返してね。1580円かかったから。

- 遅くなりましたあ。

**も一何やってたんだよー。すみませーん、このおばさんに田舎ぜんざいお願いします。ぼくにももうひとつ。**

- ひえーおかわりすんですかあ。あたしゃ、そんな辛気臭いものいりません。氷クリーム白玉宇治金時ください。えっないの？ じゃー、いちごクリームあんみつ大盛りで。

**やめろよ赤坂。店員さんが笑いをこらえてるじゃないか。なんでそんなバカなこというんだよ。せっかく27日のオフ会のお礼をいおうと思ってたのに。**

- いやーあれはセッティングは乃木坂さんだし、盛り上がったのは来てくださった皆様のおかげなんで、わたしはカンケーないです。楽しかったですね。

**うん、赤坂の“生突っ込み”を見られて嬉しいってジョージさんもいったしね。でもなんか“生突っ込み”ってヒワイだな。イヒヒヒ。これからは3ヶ月に1回くらいやろうよ。大阪でも札幌でもやろうよ。大恩ある赤坂大先生の旅費は僕が出すから。**

- …なんか最初とエライ違いですねえ。みんなには会いたいけど、年の瀬で忙しいだろーし、自分だってヒマじゃないし、やんなくても死なないし、東京だと来れない人もいるし、別にいーじゃないかって怒ってませんでした？

いってないよ、そんなこと。ロフトプラスワンに出るよりずっといいよ。

– あっやっぱロフトがキレイなんですね！ オフ会には平野オーナーも来て下さったというのに、なんてことを。

ロフトも平野さんも加藤梅造店長もキレイじゃないよ。でも、時々ヘンな展開になるだろう？ 意味ない糾弾がやなんだよ。議論にならないんだもん。…ところで、「オフ会」ってどういう意味？

– そおおおんなことも知らなくてHPやってるんですかあ。呆れたあ。決まってるでしょ、「不快」の丁寧語ですよ。失礼なメールやカキコを「不快」に思っていて、カオ見たらやっぱ不快。つまり「お不快」。

ふーん、なるほど。って信じるか、バカヤロー。最近特に性格悪いな、もう更年期か、可哀想に。まあそんなのどうでもいいや。オフ会の話だ。立花健治さんの話がよかったなあ。

– は？ 立花さんは見えてませんよ。

同僚の岩井さんが手紙をもってきてくれたんだよ。「検査入院で参加できなくて残念です」って書いてあった。

– どこに感動したの？ 入院？

話の腰を折るなよ。その次に「『今週の主張』の2回分、妻ともども非常に楽しませていただきました。本当にありがとうございました」だって。エツと思ったね。第1回目は立花さん夫婦が『新婚さんいらっしゃい』に出演した時の話だったけど、第2回目は「巨乳残酷物語」だからね。絶対怒ると思ったんだよ。

– 絶対怒ると思うならなぜ書くんでせう？ いつも思うんだけど。

でも今回はいったことをそのまま書いたんだよ。奥さんが見るとは思わなかった。あんなこと書いたら絶対に夫婦喧嘩、妻は茶碗投げ、夫は日本拳法で回し蹴り。そして救急車、離婚…。そのときはしかたない、責任を取って僕が「巨乳妻」をひきとろうと密かに決めていたのに。

– ネライはそれですか。でも、奥さんが嫌がりますよ。まだお若いし、これからが花なんだから。何が悲しくて還暦間際のじいさまにもらわれなきゃあかんの？ だいたい、その手紙、ホンモノですか？ 自作自演じゃないんですか？

失礼な、ちゃんとホンモノだよ。赤坂も掲示板にカキコしてたよね。「シロートさんにひどいじゃないか」って。SPA！ ではプロを激怒させて、謝罪をしたけど、シロートの巨乳妻のほうが寛容だったんだ。人間ができてる。正直ホッとした。なんていい夫婦だろうと目頭が熱くなった。巨乳の人は心が広い、人格者だっ

という風説は本当だったんだね。まあ何にでも例外はあるけど。

－ あっ今チチに視線を感じた！ セクハラ！ だいたい、胸なんか大きくても走るとき邪魔だし、他に使い道ないし「駄乳」ですね、私の場合。ほっといてください。ところで、立花さんの野菜嫌いは直ったんですか？ 次回書くっていったのに、書いてなかったでしょ？ 予告して書かないの増えてるけど、やっぱりアルツハイマー？

「アル中ハイマー」の赤坂にいわれたかないけど、これは忘れてた。すみません。やっぱり野菜嫌いは直らないんだって。でもジューサーとかミキサーで液体にすると飲めるんだって。ヘンな人だね。だったら垂れた巨乳も液体にして飲めばいいのに。ところでジューサーとミキサーってどう違うの？

－ 私、ちょっとトイレ。

都合が悪くなるとこれだよ。じゃー読者に向けて独りで語ってみよう。この前、テレビ番組『知ってるつもり?!』でゴルバチョフをやったけど、感動したね。日本にはあれだけの政治家はいないよ。「刈り入れの時にはいないかもしれないが、自分は種を蒔くんだ」といっていた。米ソ冷戦を終わらせたのは彼だよ。それらのにロシアの民ときたら…。もったいないよ。これだけの人材を放っておくなんて。70歳でまだまだ働ける。ロシアで必要としないなら、日本に来てもらって首相をやらしてもらったらいい。ジミー・カーターやマーガレット・サッチャーなんかも呼んで文部大臣や外務大臣をやらしてもらったらいい。在日外国人の参政権なんていってる場合じゃないね。優秀な外国人には政治家になってもらおうよ。サッカー、野球、それに国技の相撲だって外国人がどんどん入ってるんだから。国会も2割くらい外国人枠を設けるとか…。あ、戻ってきた。ちゃんと手洗った？

－ 邦男さんの声、トイレまで丸聞こえですよ。一人で何しゃべってんですか。外国人枠は賛成だけど、サッチャーはいや。でもこれじゃー水会からおんだされるのはムリもないですね。

(ちょっとむっとする) 番組のコメンテーターが佐高信さん、舛添要一さん、辻元清美さんだったけど、辻元さんてスーツの上から見ても爆乳だね。内圧で厚い服が突き上げられてるよ。どっかの雑誌で爆乳娘って書いてあったけど、本当だね。

－ それはSPA! で邦男さんが書いてたんでしょーが! ああもう辻元さんゴメンナサイ。こんなボケ老人無視してくださいね。あたし、なんでこんなアホじいと世紀末を迎えなくちゃいけないの? シクシク。

泣くなよ、こんな所で、いいトシをして。もっとハナシのレベルを上げよう。雑誌『まとりた』（問い合わせ・モジカンパニー・電話03-3815-6881、電子メールアドレス・[maturita@coral.ocn.ne.jp](mailto:maturita@coral.ocn.ne.jp))で、今連載してんのよ。「日本の矛盾に迫る!」と銘打ったオピニオン誌なんだけど、2000年11月30日に出た

第7号の特集は「口に出すのも恥ずかしい？ 愛国心のサジ加減」。掲示板でも少し紹介してたよね。僕が書いたのは「愛国心は一人ひとりの心の中にあるもの。言葉にした途端インチキになる」。なかなか挑発的な文章だなんて思うんだ。

- そうなのは自分でいうもんじゃないですよ。でも、次号が楽しみですわね。

次号の第8号はまだでてないけど、特集が「金権、野合、老害…日本」ていうの。2000年1月下旬発売だって。9号が「絶滅寸前！ 日本の左翼」、10号が「なぜ、いつまでもモメるのか日本国憲法、誰のもの？」と、続くんた。

- 9号が特に気になるけど、「絶滅寸前」たってもうしちゃってるんじゃない？？でも、なんか昔の『週刊金曜日』みたいですね。邦男さんの得意なテーマばかりだし。もう入稿すんでますよね。

あたりまへぢゃないか、キミ。連載のタイトルがまたよくてね。編集担当者が考えてくれたんだけど、「鈴木邦男の“哀国者”の憂鬱」。ヒヤーと思ったわ。案外ピッタリかもしれないわ。で、テーマは「情報化で進む日本の匿名社会が怖い」。これは最近の僕の持論。匿名コラムとかインターネット上の匿名攻撃とか、名前を名乗らない手紙、電話でのイヤガラセとか増えてるけど、いつから日本はこんなに卑劣、卑怯になったのかを考えてたんだ。名前を消すとモラルも消えちゃうんだよ。その辺のことを書いたんだ。HPの掲示板でも人をほめたり、本を紹介したりするのは匿名でかまわないけれど、姿を現している人を攻撃するときには自分も本名でやるべきだと思うわ。それがフェアな論争じゃないか。自分は闇の中に隠れたままで石を投げるのは卑劣だよ。

- そうですね。でも、邦男さんのHPの掲示板はいいことも多いでしょ？

もちろん。ジョナサン・ローチの『表現の自由を脅かすもの』なんて、ここで教えてもらって読んだし、他にも参考になることが多いし、励まされることもある。感謝してる。それと、最近、リクルート社の求人情報誌『B-i-n-g』の12月27日発売号の特集「キミの21世紀を歩け！」で書いたのは、「哲学する人の将来にはきつと何かがある」ということ。要は、本を読んで考える時間をもとう、ということなんだ。ケータイ、ゲーム、カラオケ、酒、だけで終わってもいいのか、と。「自分で思索しなくても、テレビで見たり、新聞で読んだり、人から聞いた話だけで仕事ができることもある。でもそれでは墮落するだろう？ライターでもいるんだよね、こんな人。忙しくて本なんか読んでいられない。毎日、締切に追われて書きまくっているってのが。幸か不幸か僕にはそんなに執筆依頼はないし、あったとしてもイヤだね。どんなに忙しくても月に20冊か30冊は本を読みたいし、一人で考える時間がほしい。そんな時間が取れないなら、もの書きなんかやめるべきだと思う。その点、僕はいまだに学生みたいな気分だね。ものを書くとき以外は、読書、図書館通い、芝居、映画鑑賞…思索してるんだから。

- それってトモダチ少ないだけって気もしますけどね。うそうそ、確かにライ

ターって勉強してない人多いですよね。自戒をこめてそう思います。だから私も勉強してるんです。なぜか今は、じーさまとあんみつ食ってますけどね。まあ老人介護ボランティアだと思ってますから。でもおつきあいとかけっこうあるでしょ？トシとると特に。

**ウルセー！ そいつの悪口を書けばすぐにトモダチでなくなるよ。**

ー おおお、クライ過去が…。まあ読者様は応援していただきますから、だいじにね。あと、どんなの書くんですか？

読書論の本も書きたいな。今まで4冊書いてるけど、さっぱり売れないしな。有名人でないと読書論なんか売れないんだね（ため息）。ともかく、このHPも読者の方が「勉強になった」とか「役に立った」とか「自分もこの本を読まなくっちゃー」と刺激になるようなものにしたいよね。管理人もだけど、「がんばるな新左翼」とか「原理の道」とか「市民運動家通信」の連載も張切って書きなさい。他の人もどんどん書いて、レベルをあげなくっちゃー。あっもう午前1時だよ。足かけ2世紀も赤坂とおしゃべりしちゃったよ。最も長いおしゃべりだなー。じゃーまた来週からまたがんばってね。

ー あたしゃ、受験の追いこみなんで…とほほ。乃木坂じいやにがんばってもらいませうね。あんみつごちそうさまでした。なんか、テーマの「決意」ってあんまり聞けなかった気がするけど、気のせい？

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張 1月15日

### 読書ノルマと「二人の皇帝」

年賀状、たくさん頂きました。ありがとうございます。今年はメール年賀状も多かったです。でも普段はメールでも1年に1回位はと、手書きの年賀状をくれた人もいて、風情があっていいですね。中には「一家の写真」とか、「妻との写真」もあったりして、ホッとしたり、ムツとしたりしますね。立花さんのところは写真なかったですね。「新婚さんいらっしゃい」に出た有名な巨乳美女なんですから、それを強調した年賀状にしたらいいのに。奥さんは水着で、旦那は上半身裸。日本拳法で鍛えた肉体美を見せるんですよ。あるいは夫は軍服で切腹し、奥さんは介錯してる写真とか、これじゃまるで三島由紀夫の『憂国』ですな。

立花さんと予備校で同僚のIWAIさんの年賀状は写真つきでした。美人の奥さんですよ。それに可愛い子供。はじめ、タレントかモデルがいて、その横にファンが写ってるのかと思った。でも違った。奥さんだそうです。子供の笑顔も決まっているし、写真とられ慣れてんのか。あるいは「レンタル家族」から借りてきたのか。そんなことはないね。ファルコンさんも写真つき。かわいい奥さんと、かわいい子供。いいですね。本人は写ってないけど、そこが謙虚でいいですね。他にも知り合いの予備校の先生から写真つきの年賀状がきた。やたらとかわいい女の子と一緒に映ってる。「アイドル撮影会」で一緒にとったのかと思ったら、「結婚しました」と書いていた。不愉快だ。そしてアッと叫んだ。

彼とは3ヶ月前に一緒に酒を飲んだ。その時、変なことを言ってた。彼は30才で、お母さんが57だそうだ。27の時の子供だ。「おやじが死んじゃって、おふくろは一人なんですよ。淋しいんですよ」と言う。そりゃーかわいそうにね。君が親孝行してやれよ、と言った。ところが、「鈴木さん、どうです。うちのおふくろと結婚しませんか」。ゲツとおいら。のけぞったね。な、なにを言い出すんだ、こいつはと思った。でも彼は本気だった。その後、どんな話をしたかよく覚えてない。余りにショックが大きかったもんで。そして3ヶ月後、この年賀状だ。そうか。こいつは、自分が結婚し、家を出るもんだから、お母さんがさらに淋しくなると思い、パートナーを探していたのか。

それと、ある忘年会でこんなことがあった。「僕の姉は昔、全共闘をやっていたんです。同級生の女性で、独身の人がいるんです。どうですか。結婚がダメなら付き合うだけでも…」でも全共闘世代だろ。いくつ? 「50ですけど」。「どうせ結婚すんだったら子供がほしいよ」といたずらして言っちゃった。「大丈夫でしょう。ギリギリ間に合いますよ」。間に合うかよ。何をいってんだ、こいつは。

あーあ、明るい話はないな。再び年賀状の話だ。昔、サンボを習いにロシアにいった仲間からも年賀状がきた。かわいいロシア娘と、子供が写っている。だれが見ても一家だ。でもちがう。街で知り合って、写しただけなのだ。何かズルイ写真だ。福沢諭吉がアメリカに行った時、たまたま写真館にいた女性と写真をとった。それみたいだ。来年はおいらもマネして、その辺のネエちゃんと写真をとって年賀

状を出そうかな。子供も「レンタル家族」から借りて。正月だけ、一家三人の気分になれるな。

あーあ、空しいな。こんな話題は。本の話に移る。昔は「読書ノート」をとっていた。左側に気に入った箇所を抜き書きし、右側には自分の感想などを書く。気に入った文をうつすだけでも勉強になる。読むだけでなく、書いてみると、あっこの意味だったのか。いや、もしかして、こんなことも言ってるのかも…と、いろんなことが分かってくる。だが、この方法だと時間がやたらかかる。だから今はやってない。そのかわり、「HANDY MEMORY」に読んだ本の名前と著者名を書いている。毎月何冊読んだかもメモしている。そして、大学ノートの方には、感動したところを書いている。何Pageのどこがよかったかを書いて、後で探せるようにしているのだ。

さて、年末にはいつも「HANDY MEMORY」に書いた読書数の集計をやっている。じゃ、ここで計算しよう。2000年はですな、1月(35冊)、2月(36冊)、3月(36冊)、4月(32冊)、5月(32冊)、6月(33冊)、7月(37冊)、8月(50冊)、9月(36冊)、10月(32冊)、11月(41冊)、12月(35冊)…だ。ほう、すごい。全部の月が30冊を越してる。普通の年ならノルマに達しない月が2月や3月はあって、〈平均〉でやっところさ〈30冊〉を確保してたんだ。それなのに、2000年は、全ての月が30冊以上。40冊を越した月が8月、11月と2月もある。だから、この二つの月に「努力賞」をあげた。学校や原稿でメチャ忙しかった4月もがんばって32冊を達成した。だからこの月には「敢闘賞」をあげよう。あとは技能賞か。じゃこれは9月だね。8月が50冊読破し、次の月はガクリとくると思いきや、よく技術でカバーして36冊も読んだ。これはベテランのテクニクに違いない。…と、おらは思うだよ。

本の他には、カセットやビデオもある。中野図書館から借りたものだけでも、135本ある。このうち三分の一は、ビデオだ。ビデオは、オペラ、バーンシュタイン、落語、美術館ものと見て、今は文芸ものだ。江藤淳、遠藤周作、加賀乙彦などの文芸講演会のビデオだ。これは、勉強になるね。トルストイ、ドストエフスキー、モーリャック、森鷗外…などを取り上げている。読んだ作品では、「ヘー こんな読み方があったのか」「この作品にはこんな背景があったのか」と自分の知らない見方を教えてもらえる。又、まだ読んでない作品は、「じゃ読んでみよう」という気になる。入門書としても優れている。

ところで、正月は皆さん、いかがおすごしでしたか。僕は郷里の仙台に2日から6日まで帰ってました。仙台は近年まれに見る大雪が降ってました。でも東京に戻ってきたら、東京も又、大雪でした。だから今年はきっといいことがあるでしょう。仙台では寒いので、コタツにあたって本ばかり読んでました。集中的に山本周五郎を読んでました。うまいですね、ホロっとするし。この人の本には当り外れがないし。どれもいい。彼の本を読んでも、僕なんてものを書くのが恥ずかしくなる。一気に全部読んじゃってもいいんだけど、そうしたらもう読むのがなくなると思うと淋しくて…。

他には『世界の冒険文学』(講談社)のシリーズを読んでいた。前に、『二十四の

瞳』や『しろばんば』の入った『少年少女日本文学館』（講談社）を紹介したよね。それと同じく、少年少女向けなんだ。でも少年少女だけではもったいない。絵や、頭注も入って読みやすい。名前だけは知ってるけど、全体のストーリーの分からない話がある。たとえば、オルツィの「紅はこべ」、ボアゴベイの「鉄仮面」など、題名は知っていても、さて、どんな話かとなると皆、知らないだろう。「フランケンシュタイン」「宝島」「タイムマシン」「ハックスベリィ・フィンの冒険」などもある。あれっこれはこんなに面白い話だったのかと驚くことが多かった。

「モンテクリスト伯」「真田十勇士・猿飛佐助」「白い牙」「偉大なる王」も面白かった。それに北村寿夫の「笛吹童子」も面白かった。これは僕が小学生の頃、ラジオでやっていた。「新諸国物語」として、他に「紅孔雀」や「オテナの塔」などがあった。なつかしかった。

正月、読んだので一番面白かったのは『運命・二人の皇帝』だった。原作は幸田露伴だが漢文調の難解な文なので田中芳樹が読みやすく書き改めた。洪武帝は明帝国の初代皇帝だ。第2代皇帝は建文帝で、この人は洪武帝の孫だ。ところが燕王(洪武帝の第4子)が反乱を起こす。つまり、叔父と甥の戦争だ。長い闘いの果てに燕王は勝利し、永楽帝になる。建文帝は秘密の抜け穴から脱出し、命からがら逃げのびる。僧になって全国を流浪する。何と38年も流浪する。その間、永楽帝は死に、その子も死に、さらにその子も死に…と、皇帝はひい孫がついでいる。そして、僧になった建文帝がやっと発見される。もう今さら恨みをいやく人もいない。現皇帝も、「ぜひ城にもどってほしい」と迎える。38年ぶりに城に入り、涙の対面だ。ウーン、凄い話だ。さすが中国はデッカイ。規模のデッカイ話があるもんじゃと感動した。幸田露伴は中国の『従亡録』という歴史書を読んで書いたという。

感動して、ここで終わってもよかったんだが、巻末に「解説」があるので、じゃ一応読もうかと読んだ。そこには何と、驚くべきどんでん返しがあった。「全ての小説は推理小説である」という言葉があるが、まさにその通りだと思った。恋愛でも次はどうなるか、どういうどんでん返しがあるかハラハラして読んでるでしょう。「夕コペ」もそうですよね。だから、どんな小説、よみ物でも全ては推理小説の要素をもってるんですよ。

さて、『運命・二人の皇帝』の「解説」は、登尾豊(熊本県立大学教授)が書いている。幸田露伴の原作は文章も素晴らしいから大人になったらぜひ読んでみましょうと、ほめまくる。ただ、最後のところにアッと驚くことを付け加えている。実は、建文帝の城に抜け穴はなかったのだ。僧になって38年も全国を流浪してたというのは嘘だった。城で死んだんだ。つまり、幸田露伴が基にした『従亡録』は偽書だったんですな。日本でもあるでしょう。源義経が生きていて、ジンギスカンになったとか。西郷隆盛は城山で死なないでロシアに行ったとか。あのたぐいの話だったんですな。あとでそのことを知り露伴はガックリきたそうですよ。だったら、「いや、俺は初めから偽書と知っていて、フィクションを書いたんだ」と威張ってればいいのに、人間が真面目だから居直れなかったんでしょうな。でもでも、やっぱ小説としては面白い本でしたよ。ぜひ読んでみましょう。

ということで又、来週。おーい、乾よ、約束の連載を描けよー。『ザ・ゴルゴ

学』(小学館)はもう3刷だよ。すごいね。7万部も売れてるらしい。さて今年は誰にインタビューしようか。

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張 1月22日

### 成人式なんかいらねーんだよ

「エッ、僕でいいんですか?」と思わず聞き返してしまいました。だって、植垣康博さんの『兵士たちの連合赤軍』(彩流社)の「解説」を頼まれたのだ。本が売り切れで、新装版を出すそう。それに是非、「解説を」と彩流社から頼まれた。僕はいいけど植垣さんが嫌がるんじゃないかな。「いや、鈴木さんとはいろいろあったけど、他にいないし。あの本のことを一番理解してるのは鈴木さんですし」と言う。正月中ずっと考えて、1月10日に原稿を書いて送った。がんばって書いた。10日の夕方、もうちょっとで出来ると思ったら、植垣さんから電話。『兵士たち』を出す時にもう一冊、本を出すという。『連合赤軍27年目の証言』(彩流社)だ。

『創』で僕がインタビューしたのもそれに載せるという。僕のこと書いたので一応読んでくれという。だから「ジョナサン」で会った。久しぶりにいろんな話をした。2月には2冊同時に出るそう。楽しみだ。

だから連合赤軍のお仕事が21世紀、はじめての仕事になった。誰かが週刊誌で、「21世紀は再び赤軍派の時代になる」と書いてたが、まさにその通りになった。あっ、21世紀最初の仕事は1月9日ㄨ切のSPA! だった。でもこれも田中義三さん(赤軍派)の「よど号裁判」のことを書いたんだ。1月24日(水)発売だが、何と「法廷イラスト」入りだ。凄いぞ。見逃さないように。

掲示板を携帯電話の画面で見たら、成人式について論争していたね。石原慎太郎都知事は「あんなものいらん」と言ってたけど賛成だね。「騒いだ奴は逮捕されて当然だ」と言っていた。高松だったかなクラッカーをならして騒いで5人が逮捕されたんだ。あんなこと位で逮捕かよ。職員が闘えばいいじゃないか。だらしがない。それにしても成人になった途端、即、逮捕なんて凄い体験だね。貴重な体験だよ。

都知事が言うように、成人になったからといって公の会で祝ってやる必要はない。多分、外国ではこんな馬鹿なことはやってないだろうよ。(やってたら誰か教えてくれよん。そういう情報を知らせ合うのがHPだろうが)。日本でも元服(げんぷく)は昔あったが、これは一人前の武士として、まず腹の切り方を教えたんだ。それが、武士だけでなく、誰でも20才になったら成人として祝うようになったのは明治以降だろう。そして、〈徴兵制〉が出来てからじゃないのか、とおいらは推論する。つまり、今までは武士しか戦争をしなかったのに、町人も農民も〈徴兵制〉で等しく兵隊にとられ戦争に行くようになった。20才になったのは、兵隊にいて国にご奉公できるということでお祝いなんだ。「成人の日」は、大人になって国のために死んでくれ、という日なんだ。と思うよ、きっと。だから、戦争もないし、徴兵制もないんなら、わざわざ公の会を使って祝ってやる必要はない。

大体、若いから祝うというのは中年差別だ。老人差別だ。ふざけている。20才の若さがそんなに貴いのか。祝いたければ自分の金で一人で祝え。あるいは七五三とか結婚式のように勝手に知り合いを集めて祝え。そして、集まった親類や友人や先

輩、先生方が「バカヤロー。体ばかりでかくなりやがって!」「頭はカラッポなのに何が成人だ!」とあって、クラッカーをならしたり、コップを投げつけたりして遊ぶ。いいねー。おいらも出てみたい。

成人式は廃止すべし! 昔の全共闘諸君はデモを組み、会場に押しかけて「成人式粉碎!」と叫んで、石や火炎瓶を投げたらいいんだ。「公の会で祝うなら還暦式をやれ!」とか言ってる。あるいは70才、80才、90才の人を祝うべきだ。そうだ。あの柳美里を脅迫した犯人に頼もう。「成人式をやめなかったら爆弾を仕掛けるぞ」と脅してもう。そうしたら、どこもやめちゃうだろう。

高倉健は今、新しい映画を撮っているが、69才だよ。いいね、若くて。老人なんていわせない迫力があるよ。1月31日は大阪ドームで「猪木祭」があった。立花健治さんからビデオを送ってもらって見たけど、面白かった。57才の猪木(おいらと同じ年)は現役復帰してヘンゾ・グレーシーと試合をしていた。いやー、感動しましたね。だから成人式なんていらん。中年・老人を大事にすればいいんだ。

1月13日(土)。NHKスペシャル「人間国宝ふたり」を見た。よかったね。「文楽・300年の至芸。82才と76才。終わらぬ修業の道」とサブタイトルがつけられていた。文楽は東京では国立劇場(小劇場)で3ヶ月に1回位やっている。僕は欠かさず見ている。文楽は「人形遣い」と「義太夫語り」がいて、今回、NHKで取り上げたのは、そのトップの二人だ。「人形遣い」の中村玉男は82才。人間国宝だからどんな立派な家に住んでるのかと思ったら、大阪の老人ホームに奥さんと二人で住んでいる。そして電車に乗って会場に通う。エッと思った。いいのかよこれで。今まで1万回以上の舞台をつとめている。「毎日が勉強です」という。すごいね。82才で現役で、毎日、さらに精進している。ウーンとうなったね。

もう一人の「義太夫語り」の竹本住大夫は、やはり人間国宝で、76才。自分の芸にも厳しいが、後輩の指導も厳しい。指導風景も出ていたが、「修業21年目」の弟子をボロクソに叱り飛ばす。「バカヤロー、いつになったらおぼえるんだ!」「何をやってんだ、お前は!」…と。はじめから終わりまで怒鳴りっ放しだ。21年目の人間ならどこの世界でも中堅だ。あるいはトップだ。それなのに、こんなに怒鳴られる。おいらだったら一日も続かないな、と思った。でも、こわいけどこの76才の住大夫は、「義太夫語り」では日本でトップなのだ。中村玉男が、「住大夫さんの芸は70才をこしてからよくなった。語りに情が深まってきた」と言っていた。50、60はこの世界でヒヨコなんだ。70才からグンと伸びたんだと。いいですね、こういうのって。

でもいくらトップで実力あっても、ちょっと嫌だなと思った。「修業21年目」の弟子をあんなに怒鳴り飛ばして…と思った。ところが、このあと驚いた。76才の住大夫は、現役引退した兄弟子の竹本越路大夫(88才)の所に行って、稽古をつけてもらうのだ。そして、一対一で語って直してもらう。「ハイ、ハイ」と素直に聞いている。こりゃ凄いなと思った。自分はトップに登りつめても、さらに勉強してるんだ。この越路大夫さんは、引退はしたが、今も勉強している。「義太夫は一生が修業だ。いや、もう一生ほしかった。一生だけでは足りない」と言う。これも又、凄い言葉ですよ。

久しぶりにいい番組を見たと思ったね。何も「新婚さん」や「キスイヤ」ばかり見てるわけやないで。乾と違うんや。いい番組は、欠かさずキチンと見ている。それと、この日は12チャンネル(テレビ東京)で10時から、「美の巨人たち。ユトリ口の描くパリの街角。悲しみの日」も見たが、よかった。この「美の巨人たち」はおすすめですよ。

ユトリ口は母が画家で、奔放な女だった。たえず男出入りを繰り返していた。「女が画家として世に出るには男を利用するしかなかったんです」と同情的な解説をしていた。母をしたいながらも相手にしてもらえず、14才の時からアルコール依存症になる。その治療のために医者は絵を描くことをすすめる。そして画家・ユトリ口が生まれたんだ。刑務所の中で発狂寸前の囚人がいて、治療のために小説を書くことをすすめられて、作家になった人もいたな。ともかく、ユトリ口は「飲むか描くか」だった。「埋めるか、書くか」という作家もいた。「殺すか、書くか」「食うか、書くか」という人もいる。でも、ユトリ口が描くのはパリの風景ばかりだ。

「私は人間を正視できない。だから人間を描けないのだ」と言っていた。そんなはがれ落ちそうな心を絵具で塗りかためるように絵を描きまくった。母は結婚してとっくに去っていった。それだけではなく、息子のために結婚をまとめてやった。ユトリ口51才の時、62才の女と結婚したのだ。10才以上も年上の女だが、金持ちだった。「これなら息子の生活も大丈夫だろう」と母が無理にまとめたのだ。ユトリ口は年上妻に〈母〉を見て、甘えたという。何とも悲惨でかわいそうな話だ。ここでハッと思った。先週書いたけど、おいらもそうなるとこだったんだ。「母の陰謀」じゃなくて、ある「息子の陰謀」で年おいた母と結婚させられそうになった。まるでおいらはユトリ口だ。

老人妻と結婚したためか、ユトリ口は晩年、生気を失い、ただただ画商のいわれるままに描いた。外に出てスケッチする気力もなく、パリの絵葉書を壁に貼って、それを描いた。さらに悲惨だったのは、自分が若い頃に描いた絵を模写したんだという。思わず涙が出ましたね、かわいそうで。そしてユトリ口は71才で死んだ。〈文楽〉ならば、まだまだこれからなのにね。だから、皆も、心を若くして勉強しましょう。携帯で1日50回も電話してる人はせめて半分にして、その分、本を読めよ、文楽を見ろよ!

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張 1月29日

### ぶんぶん荒鷲、ブント飛ぶぞ!

先週の「SPA!」では、「よど号裁判」の田中義三さんの法廷イラストを載せました。今は法廷の中でメモをとってもいいし、イラストを描いてもいいんです。ちょっと前まではダメだったんです。だから、昔はポケットの中で紙に書いたり、手で隠して書いたものです。書いてることを悟られないために、正面を見ながら書くわけですから大変ですよ。それでなくても下手な字がさらに読めなくなる。「まるで清水浩二の字のようだな」と皆に言われました。清水とは見沢知廉(作家)氏が右翼運動をやってる時に使った組織名(コード・ネーム)です。自分の字が読めなくて、「これ何ていう字?」と他人に聞いたもんでした。「お前が分かんないのに俺が分かるわけねえだろう」と言われちゃいました。そうですよね。

でも今はメモは自由。イラストも自由。田中裁判の時は最前線で、5人ほどがイラストを描いてました。おいらも今度は画用紙とクレヨンを持っていこう。そう、連合赤軍事件の植垣康博さんはボールペン画のプロだ。「どうです。法廷イラストを描きませんか。話題になりますよ」とすすめてみた。「面白いね」といったけど、断われた。被告も支援者も皆、知ってるし、さらに田中さんの弁護士とも知り合いだ。「あれ、植垣は何をしてるんだ」と言われちゃう。なるほどね。

で、先週のSPA!ではイラストレーターの水屋夕暮さんに描いてもらった。ただし、確実に入廷してもらわなくてはならない。当然だが、裁判は傍聴希望者が多いと抽選になる。傍聴席は大きな法廷でも、30席とか40席しかない。だからほとんどが抽選だ。オウム裁判の時など、有田芳生さんや江川紹子さんを入れるために、テレビ局や週刊誌は「並び屋」を何十人と雇った。確実に傍聴するにはその手しかない。イラストレーター・水屋さんを入れるために僕も初めて、「並び屋」を雇った。「並び屋」といってもそういう職業があるわけではない。だから「便利屋」に頼んだ。どうも学生のバイトのようだった。「今日は何の裁判があるんですか?」と脳天気なことを聞いていた。「よど号ハイジャック事件だよ」と言ったら、「よど号って何ですか?」と聞いてくる。「ウルセー、仕事だけしてくれればいいんだよ」と怒鳴っちゃった。

並び屋は4人のうち2人、当たった。僕らも当たった。だったら高い金を出して並び屋なんか雇わなけりゃよかったなと思ったね。でも、僕らが外れることもある。だから保険は必要だ。余った券は、月刊「創」の人と、支援者にあげた。「これは金がかかった券だから金を払ってくれ」とも言えず、タダであげた。

このイラストレーターは、いろんな裁判を傍聴して法廷イラストを描いている。宮崎勤やオウム裁判にも行ってる。「バランスをとるために新右翼の裁判にも行ったことがあるんですよ」と言う。驚いた。「じゃ三島裁判か。ぜひイラストを見せてくれ」と言った。「その頃は法廷イラストは描けませんでした。それに私はまだ生まれてません」。じゃ、経団連事件裁判か。あれは24年前だ。「その時も生まれてません」。嘘だ。実は3年前の「東京証券取引所占拠事件」だった。元・統一戦

線義勇軍書記長代行の板垣哲雄氏の裁判だ。板垣氏はなぜ書記長「代行」かという  
と、書記長が見沢知廉で、この人が何か殺人事件をおこし獄中に入っていたので、  
板垣氏が「代行」をしてたんだそう。その時、板垣氏が捕まったら、「書記長代  
行代行」をおかなくっちゃならない。さらに彼が捕まったら…。もう面倒だ。「代  
行業」に頼もう。エッ、あれは車の運転だけなの。だったら便利屋に頼んでやっ  
てもらったらいいだろう。

板垣氏のイラストを見せてもらったが、これが又、いいんですな。本人の特徴が  
よく出てるし、実物よりもいい男だ。せっかくだからこれも載せようと思ったが、  
SPA! ばかりじゃまずいと思い、「レコンキスタ」(一水会機関紙)の方に回した。そ  
して、僕が「東証占拠事件」について書いた。2月号に出るから、見てほしい。も  
うレコンは出来ているはずだ。

えー、機関紙といえば、ブント(以前は「戦旗派」といった)の機関紙は立派です  
ね。レコンなんかはタブロイド版ですが、「SENKI」は大型のブランケット版とい  
うんですかね。朝日や毎日や産経と同じ大きさだ。それが6頁もある。そして、何  
と月に3回も出ている。5日、15日、25日だ。凄い。そしてあのワークショップの  
ことが、1月15日号と25日号に二回にわたって掲載されている。ワークショップっ  
て何かって? 僕もよく意味は分からんけど、ティーチ・インみたいなもんじゃない  
の。去年の11月17日に、社会文化会館(元の社会党会館だ。おどろいたか!)の  
5F・三宅坂ホールで、ブント主催のワークショップが開かれ、その第二部「ト  
ークライブ・21世紀の社会運動を展望する」に出たんですよ。他には宮崎学さん(作  
家)、荒岱介さん(ブント代表)、鈴木正文さん(編集者)だ。とても楽しかった。気分  
よく話せた。野次ったり、乱入したりする人もいないし。ロフトとは大違いだ。ブ  
ントの人は皆、いい人だ。それに若い人ばかり、1200人もつめかけていた。今  
時、若い人がこんなに集まるなんて、奇跡ですよ。その感動を「SPA!」の今週号  
(1月31日発売号)に書いた。

でも、今いったように、トークの詳しい内容は「SENKI」に載っている。2時間  
のトークの全てが載っている。読み返してみても、面白い。ぜひ買ってみて下さ  
い。都内では神田の書泉グランデ 03(3295)0011、文鳥堂書店四谷店  
03(3353)2603、芳林堂書店池袋本店 03(3984)1101、模索舎 03(3352)3557…  
などに置いてある。遠い人は直接、せんき社に申し込んだらいいだろう。埼玉県蕨  
市塚越1-13-3 塚越ビル せんき社 048(445)2921 です。一部300円(+税15  
円)。半年4100円です。

エート、編集発行人は文人正さんですね。アッそうか、今、気がついた。「ブン  
ト・ただし」と読むのか。ブントは正しい、という意味なんでしょうな。というこ  
とはペンネームか。荒岱介さんのペンネームなのかな。でもでも、文人正という人  
が本当にいたら、これもすごいね。生まれながらにしてブントに入るしかない。

「中核 正」とか「革丸 正」なんて名前の人もいるのかな。

「SENKI」(1月15日号)は、トークの前半の紹介で、こんな見出しが並んでい  
る。「教条主義的な運動は不自由」「社会主義崩壊をどう見るか」「議会を通じた  
社会変革はできるか」。最後のところは、おいらが、「荒さんを国会に!」といっ

たからだ。荒さんは「国会議員になる運動では世の中変わらない」と答えていた。

「SEMKI」(1月25日号)はトークの後半だ。「権力への抵抗が民衆運動の変わらぬ使命」と大見出し。小見出しは「天皇制の行方をめぐって」「愛郷心は誰でも持っている」「権力をめざさない今のブント運動には注目している」。宮崎学さんは、「利権集団化した今の日本の右翼など取るに足りない」。おいらは、「86年に戦旗派が皇居を攻撃したのは許せない」と言っている。会場の写真を見て、あれっと思った。一番前にあの見沢知廉がいる。へー、最前列で聞いていたのか。当日、「どうして来たの?」って聞いたら、「何いってんですか。僕は元・戦旗派ですよ」と言っていた。後で荒さんが、「そんなことはない」と否定していた。一体、どっちがホントなんだろうか。

この号の1面を見たら、新春ワークショップが1月7日にはもう開かれている。熱心な人達だ。長野で、「改憲か護憲か」の討論をしている。何だ、おいらも呼んでくれりゃよかったのに。でも、改憲なんかいう人はいないだろう。と思ったら、アラ不思議、荒さんがこんな発言をしている。

「…現行憲法が2001年のこの日本の現実にそぐわなくなっているという現実から出発して議論していくべきだ。世襲の天皇制は、どう考えても基本的人権と矛盾だ。天皇制を廃止し完全な共和制を実現する。それが改憲の根拠となることです」

ウワー、〈改憲派〉なのか。知らなかった。驚きだ。それに、このワークショップのキャッチコピーがすごい。「いま、反体制がイケてる」ヒャー、「イケてる」がいいですね。現行ブルジョワ憲法を改正し、共和制にする。反体制なんだ。かっこいい。

あっ、深作欣二監督の「バトル・ロワイヤル」の映画評も載ってましたね。多彩な記事がブントある。この暴力映画を絶賛してるのかと思ったら、違う。たしなめていた。今は合法運動をやってるからだろうか、おいらなんて単純だから、感動して見ちゃったね。ガキ同士が殺し合うとこなんて、「ザマーミロ」「もっとやれ!」と心の中で拍手してたもんね。いいじゃないか映画なんだから。それで心がスッキリするのなら何でもありだよ。普段、中学や高校で生徒を持て余し、手をやいている先生方も、皆喝采して見てるらしいね。だったら日教組(もうないのかな)推薦映画にすりゃいいんだよ。不振の日本映画界にあって、この映画と、あとは「腹腹時計」(渡辺文樹監督)だけだね。

1月14日(日)、家で原稿を書いたら、突然、渡辺監督から電話。「今、ビラ貼りで近くまで来たんだけんど」と言う。(福島人だから少しなまる)。それで、「ジョナサン」で会った。手をまっ黒にしていた。ビラ貼りをしてたからだ。偉いなと思った。この春からは又もや話題作をつくるべく撮影に入ると言っていた。「バトル・ロワイヤル」見ました?と聞いたら、「見てない」という。ダメじゃないか。

「腹腹時計」が出てたのに、といたら驚いていた。「どうして自分の映画が?」と言ってたが、何も映画がでてるわけじゃない。74年に連続企業爆破をした東アジア反日武装戦線〈狼〉の爆弾テキスト『腹腹時計』が出てたのだ。ガキ同士が無人島で殺し合うが、その時、一人のガキが、「昔、過激派だったおじさんからもらった」といって『腹腹時計』をカバンから取り出して、爆弾を作るのだ。「あれは本

物ですか?」といろんな人に聞かれた。本物です。僕も持ってますから分かります。何せ僕の処女作が『腹腹時計と〈狼〉』(三一書房)ですからね。この本については詳しいんですよ。

ということで、HPの読者への指令だ。『腹腹時計』と『バトル・ロワイヤル』を見ること。次の掲示板はその問題で大討論会をせよ!

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張 2月5日

### 第二の見沢知廉、現わる!

1月30日(火)、ジャナ専に行った。「ジャナ専って?」とお聞きのあなた。日本ジャーナリスト専門学校のことですよ。高田馬場にある。そこの文芸科で火曜日の2時限目(10:40~12:10)に「現代史」の授業をしている。ついでに言うならば、木曜日は河合塾コスモで「現代文」と「読書ゼミ」の授業をしている。又、4月からは「都民カレッジ」(社会人向けの学校)で授業をやる。毎週水曜日の3時限目(1:00~2:30)で10回やる。これは申し込めば一般の人も受けられる。詳細が分かったら紹介しよう。今年のテーマは「三島由紀夫を読む」だ。だから、火、水、木は学校の先生。金、土、はライター、日、月は学生(図書館などで自分の勉強よ)…ということだ。

さて、30日にジャナ専に行ったんだよ。早目についたので教員室で予習をしていた。「先生、今日は早いね」とか言って生徒が何人か声をかける。生徒には人気はないが、でも、あわれと思ってか、たわむれに声をかける生徒もちょっといる。バイトしてる生徒も多い。新聞奨学生もいる。朝早くから大変だと思う。キャバクラでバイトしてる人もいる。「安全だし高収入だからいい」と言う。去年教えた女の子がきた。彼女もキャバクラでバイトし、親の仕送りなしで自活してるという。偉いね。「センセ、今度、同伴出勤してね」と言う。いいよ。キャバクラは行ったことないし、社会勉強だ。

そして、ひょいと掲示板を見た。「ジャナ専大賞」が発表されてた。毎年、生徒の応募作の中から小説、詩、写真…などの部門ごとに大賞を決める。本にもなる。又、3月の卒業式の時には表彰され、賞金ももらう。アッと思った。前期に教えた鈴木敏春君が詩の部門でジャナ専大賞をとっていた。すごい!それに詩のタイトルがすごい。「風流夢譚」だ。ヒャー。1960年の安保騒動の時、世の中を震撼させた深沢七郎の小説「風流夢譚」にちなんでつけたんだ。この小説は〈夢〉の中で革命がおこり、皇居前で天皇、皇后、皇太子が処刑されるというブラックユーモア小説だった。フランス革命のパロディかもしれない。しかし、右翼は激怒し、深沢七郎は全国放浪の旅に出る。掲載した中央公論社は連日、右翼に攻撃され、殺人事件まで起きる。愛国党の17才の少年・小森一孝が中央公論社長宅を襲い、お手伝いさんを刺殺、奥さんに重傷を負わせたのだ。

この「風流夢譚」は右翼からは猛攻撃されたが、三島由紀夫だけは、「文学として優れている」と評価した。でも、その発言で、今度は三島も右翼に攻撃された。毎日、右翼が押しかけてきて、地元の警察が警備に来たほどだった。この時から三島の「右翼嫌い」は始まる。「楯の会」を作りながらも、外部の右翼とは一切、接触させなかった。右翼と交流があった者は除名にした。右翼を徹底的に嫌ってたし、軽蔑してたのだ。「こんな奴らに天皇や愛国心と言ってほしくない」と思っていたのだ。「風流夢譚」は三島と右翼を分ける試金石になったのだ。

さて、それに題材をとった詩がジャナ専大賞をとったんだ。敏春君は早大を出て

から、わざわざジャーナリストになるために、ジャーナ専に入り直した。出発点からして違う。覚悟が違う。だから、授業は真面目に出てるし、よく勉強している。ジャーナ専始まって以来の秀才と言われている。どこで知ったのか僕のこのHPも見てるといふ。もしかしたらカキコもしてるかもしれない。でもハンドルネームだから分からない。さっそく教員室から敏春君に電話してやった。「よかったね。次は新日本文学賞だね。そして作家デビューだよ」と言ってやった。

12時10分、授業が終わり、帰ろうとしたらその「大賞男」が来た。うれしくて駆けつけてきたんだ。「じゃお祝いにメシでもおごろう」となった。男二人だけじゃ淋しいので、近くにいた女子を二人さそった。「キャー、先生にナンパされた!」と騒いでる。何いってんだこいつは。そこで、ファミレス「華屋与兵衛」でメシを食った。

一人の女の子は「私も小説を書いてるんです」と見せてくれた。面白いし、うまい。「ジャーナ専大賞に応募すりゃよかったじゃないか」といったら、「応募したけど落ちたんです」「・・・」と、しばし沈黙。もう一人の女の子は本屋でバイトしてた時、ストーカーにつけ狙われた体験を喋ってくれた。これは小説のネタになる。書いてみなよとすすめた。ファミレスで話すのも「文芸科」の授業のうちだ。

敏春君は、ジャーナリストになるか、作家になるか、詩人になるか迷ってるようだ。いいね、若くて、才能があり余っている奴は。「本ばかり読んでてもダメだ。人生経験もウンと積まないと」と思い、最近、「文学のために」恋愛をしてるらしい。一時はうまくいったのに彼女に別の男が出来たらしい。それで悩んでいるという。「うまくいった恋愛は文学にはならん。失敗し、苦悩する恋愛だけが文学のテーマになる。いい展開じゃないか」と励ました。

いっそ、テレビの「キスイヤ」に出たらいい。ものすごい評判になるし、小説も書ける。「キスイヤ」は元統一教会の乾太一にも出ると言っただけだ。元統一教会でソウルで合同結婚式。なのにオウムの女と浮気して、統一教会の妻とは離婚。そしたらオウムは東大生の彼をつくって逃亡。乾はヤケでテレクラに入りびたり。いいね、これも小説になる。そうだ、おいらが勝手に二人の応募しちゃおうかな。島田紳助は何かの番組で一緒したから知ってるし。そこで、「キスイヤ」に出て結ばれたら次は、「新婚さんいらっしやい」に出る。こりゃ、いいよ。結ばれなくて破局になっても(もう、二人とも破局か)、それはそれで文学になる。いいね、文学のためにもっと荒れる! もっと乱れる! 「美は乱調にあり」だよ。

そうだ。一水会の街宣車を借りて、「女を返せ!」と叫べばいいじゃないか。北方領土返還のついでに、「女も返せ! 女は固有の領土だ!」と叫ぶ。なんならいっそ、女に逃げられ男共に開放して、「帰ってきてくれ」コールをする。〈人助け〉だ。いいことだ。そしたら社会現象になり、SPA! にも載るだろう。それでもダメだったら、そんな薄情な女は思い切れ。マント、高下駄で蹴飛ばしてやれ。宮さん、必ず来年の今月今夜のこの月は僕の涙でくもらせて見せる…と歌いながら蹴飛ばしまくればいい。それで打ち所が悪くて死んだら? その時は中央高速で富士の樹海だよ。埋めちゃうんだよ。ますます「新日本文学」に近くなるじゃないか。

「心中という手もあるんじゃない」と女子学生がいう。「心中高田馬場」か。い

いな。「それで決まり!売れますよ」と二人の女の子。「でも死んじゃったら僕は小説を書けないじゃないですか」と敏春君。当然だよ。オレが書くんだよ。いつでもオレは漁夫の利だ。元々、家は漁夫だったし。「君は小説の題材だけでいいんだよ。何もクスリに頼ってまで無理に小説なんか書かなくても」となぐさめてやった。「僕はクスリなんかやってませんよ」。あ、それは別の作家だった。

ここでハッと気がついた。「心中」っていうのは二人が死のうと思って〈合意〉するから出来るんだ。近松門左衛門のお話は皆そうだよね。でも、大賞男のケースは違う。男は心中したいほど愛しているが、女はすでに他の収入のいい、商社マンに心を奪われている。だったらおいらも小説のタイトルを変えなくちゃならない。「無理心中高田馬場」だ。「だから頑張れよ!」と励ました。

もし実現したら素晴らしい。愛不在の現代日本において、人々に愛と希望を与える。連日、ワイドショーにも取り上げられる。おいらもコメンテーターで出れる。「いやー、優秀な学生だったのに、惜しかったですね。第二の見沢知廉といわれてたのに…」とコメントするよ。

ということで、大賞男・鈴木敏春君の前途は洋々ですな。よかった、よかった。ところで法廷イラストレーターの水屋夕暮さんだ。SPA! で田中義三さん、「レコンキスタ」で板垣哲雄氏のイラストを描いている。四コマ漫画も描いてるようで、「第二の松田洋子になりたい」と言っている。松田さんはSPA! でやっていた「リスペクター」で有名だ。他に「薫の秘話」もある。なにげない漫画の中に、左翼や右翼、革命といった政治ネタがビシバシと出てくる。面白いし、刺激的なマンガだ。「松田洋子を目指してんだね」といったら、「そのためにはまず何でもいいから結婚して、そして別れなくっちゃ」。何ちゅことを言うんだ。

ともかく敏春君も水屋さんもがんばって下さい。では最後に質問コーナーの答えだ。ええと、愛さん。読書ノルマにはマンガは入らんぞなもし。これはおいらの「読書論」の本に23回も書いとるよ。ちゃんと読めよ。マンガを入れたら月に千冊だって読めるじゃんか。バカ! いけない、読者にケンカ売っちゃ。それと『ザ・ゴルゴ学』は入りますよ。あんな厚くて内容のある本、ちょっと読み切れません。あれ一冊読破したら普通の本、5冊分はありますね。読んだ人は「5冊読破」とHandy Memory に書いときましょう。

他にメールが二通か。勉強の仕方ですね。僕の本では、『行動派のための読書術』『新右翼』なんかが入門書としていいんじゃないですかね。高田馬場や池袋の芳林堂には僕の本が何冊かおいてます。ない時は一水会に注文したらあります。tel 03(3364)2015 東京都新宿区下落合1-2-5 第23鈴木総合ビル3階。

一水会では「レコンキスタ」という新聞を月一で出してるし、僕も連載を書いています。いろんな本の紹介も書いてます。又、月一、「一水会フォーラム」をやっていて、僕も必ず出てます。その時、来たら会えますから、勉強法について話しますよ。今月は2月14日(水)午後6時半開場7時開演。場所は高田馬場シチズンプラザ2階のグループ懇話室です。[こちらを参照](#)

あとは、このHPのオフ会を3ヶ月に一回ずつやっていますから、そこに来てもらってもいいですね、では。

(追伸)。ブント代表の荒岱介さんが太田出版から本を出した。『破天荒伝』1600円。面白い。売れてるようだ。早大で社会学同委員長で暴れまくっていた頃から、今までの波乱万丈の物語だ。刑務所の中で野村秋介さんと出会った話などもある。ぜひ読んで下さい。大賞男の敏春君も読めよ。

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張 2月12日

### 次のオフ会は無声映画です

2月3日(土)は、高田馬場でオフ会をやりました。仕事で上京中の立花さんを囲んで、居酒屋「土風炉」で7時からやりました。前の会場と違って、ここは新しいし、ちょっと高級っぽいし、料理もうまいし、いいですね。トモンビルの5階です。エレベーターに乗ったら、あれっここは何度も来たことがあるぞと思いました。赤坂デブじゃない、デジャブですね。いえ、これも、違う。昔、ここは映画館だったんです。高田馬場東映と東映パラスの二館があったんです。いつもすいて僕らは好きだったのにな。たとえば、「失樂園」なんて新宿東映や銀座東映では満員なのに、ここ馬場東映だけはガラガラ。本当にいい映画館だった。パラスは外国の名画をやったし、毎月おいらは見に来てた。一時はオールナイトをやったこともある。早稲田の学生さんが一杯見に来てたからだろう。それなのに学生さんは映画を見なくなり、つぶれ、そこを2階か3階に分けて、飲み屋街になった。いい居酒屋が出来たのはいいが、何か「文化」をつぶした上でおいらたちは酒を飲んでるようで、ちょっと心が痛んだだよ。

大体、早大生が不実なんだ。このビルはトモンビルという。早大のことを稲門という。ここから名前を付けたんだ。おいらたち同窓会は稲門会というし。又、このトモンビルの2Fには大きな喫茶店「トモン」があった。よく、本を読んだもんだよ。パロン吉元の「柔侠伝」「日本柔侠伝」「現代柔侠伝」のシリーズが全部あった。ここでおいらは全巻読破した。これは戦後日本の「最高のマンガ」といわれている。三代にわたる柔道家が主人公だが、右翼、左翼、アナキスト、ヤクザが登場し、活躍する〈大思想マンガ〉なんだ。おいらも感動したし、連合赤軍の植垣さんも感動した。それで、彼は組織名を「バロン」にしたんだ。これは全て本当の話だ。

その文化的な喫茶店「トモン」も今はない。軽薄な居酒屋になってしまった。トモンビル全体が文化的な香りをなくし、酒と焼肉とハンバーグになってしまった。そんな嘆きを胸に秘めながら土風炉でビールを飲んだ。

あっ、オフ会の話だったね。みなさん、よくおこし下さいました。大阪からわざわざ立花さんありがとうございました。岩井さん、まんじゅうありがとうございました。とてもおいしゅうございました。敏春君、故郷の安倍川もちありがとうございました。おいしゅうございました。赤坂さま、ギリチョコありがとうございました。少々苦いけど、でも、おいしゅうございました。何か、マラソンの円谷選手の遺書のようになっちゃうな。それだけ語彙が不足してんだよ、こいつは。と自己批判。ついでに、皆に、「スパ! でブントをほめすぎだ」と叱られました。二次会では、口フトの平野さんにコーヒーをおごってもらったので、500円分、「自己批判」しました。すんましえん。

でもね、「人をほめて」叱られたのは初めてだね。今まで批判したり、馬鹿にしたりして、それで「許せん」「謝罪しろ!」と抗議されたことは多いけど。「あれは

ほめ殺しだと言ってくれ!」という人もいたね。でも、そんな高度なテクニックはおいら使えませんよ。いいと思ったらいいと書くし、悪いと思ったら悪いと書く。それを見て、「鈴木はダメだな」「未熟だな」と思われたら、仕方ありません。「ブントは昔何をしてたか知ってるか」といっても、僕だって昔のことをいわれたらとても生きちゃいけない。でも今は〈更正〉して、キチンと市民社会のルールを守って生きている。ブントも昔はいろいろ悪さをしたようだけど今は〈更正〉して「合法運動」をやっているという。その点だけでも評価できると思う。

又、あの集会に僕を呼ぶときに反対した人がかなりいて、「鈴木が来るならブントをやめる」「出席しない」という人がいた。それでもかまわずに僕を呼んでくれた。これはありがたいと思った。数年前に大阪の部落解放同盟でも、反対が一杯あったのに僕を呼んでくれた。本当に感謝している。又、去年の11月には、つくば市の青年会議所が呼んでくれたけど、「はじめは冗談じゃない。右翼なんか嫌だと皆が反対だった」という。それを説得して僕を呼んでくれた。ありがたい。ご恩は一生忘れません。

だから、「ブントは嫌いだ」「こんな奴らは許せん」という人も、負けずに集会をやって、負けずに運動したらいい。そんな口クでもないブントだというなら、あなたがたがやったら、もっと素晴らしい運動ができるだろうし、人も集まるだろう。その時は僕も呼んで、そこでぜひ糾弾して下さい。いつでも行きますよ。

えーと、ブントの話ばかりになっちゃうと困るんで次にいきますか。あれっ、個人的なメールも随分来てますね。どれどれ。やっぱり、「なんでブントを持ち上げるんだ。変節漢!」「早大で荒に袋叩きにされ石をぶつけられた怨みを忘れたのか。弱虫!」「復讐をはたしてみろ!」「お前はブントの正体を知らないのだ、アホ!」…etc. いっぱいありますね。「ほめてくれてありがとう」なんてメールはないんですね。ブントの人は見てないんでせうか。あるいは、「鈴木のことだから魂胆があるんだ。ほめ殺しだ。その手に乗るな」と思ってるんでせうか。

あっ面白いメールがありましたね。これは神奈川のチチンパイパイさんですね。かわったハンドルネームですね。「禁煙法、反携帯法、賛成です。荒先生が首相になったらもう一つやってほしいです。それは"Aカップ保護条例"です」。なんじゃこりゃ。だからメールで返事を書きました。そしてもう少し詳しく聞きました。なんでも日本のブラジャーはAカップは余りない。あっても、フィットしない。空いちやう。フーン、それほど小さいんでしょうか。だったら無理にブラジャーなどしない方がいいんじゃないの。でも、それじゃ男と間違われるって。「大体、日本の独占資本はアメリカ追随主義だ。大きさだけを追い求めている。日本文化の否定だ。Aカップもちゃんとつくれ! デカパイだけを優遇するな! Aカップだって人間だ。人権がある!」

…と、まあ、こんな政治主張らしいんですね。でも「条例」だと東京都しか適用できない。(都知事はデカパイが好きだから無理だし)。あるいは、あなたの住んでる神奈川県だけだ。だから、「Aカップ保護法」として荒岱介首相にやってもらえない。まてよ、Aカップといっても年輩の人には分からんかもしれん。だから、「貧乳保護法」にしたらいい。「失礼な! その名前からして差別だ」と怒鳴られた。

じゃ、「反巨乳法」にしたらいい。巨乳は皆、逮捕する。巨乳の奥さんを持つてる夫は皆、家にかくして、外に出さない。立花さんとも巨乳の奥さんは家においておく。働きに出さない。これしかない。(この項、解決がつかないので、又、いつか続きを…)。

そうだ、オフ会は7時から始まったが、その前に赤坂が立花さんに会って、「巨乳の手入れ」についていろいろ聞いてたそうです。どうしたらたれないか。どうしたら、すばらしいスタイルを保てるか。巨乳の夫ならではのアドバイスがいろいろあったそうです。近々書いてもらいましょう。

赤坂の住んでるそばの日暮里だったか鶯谷だったかに、夢精、じゃない無声映画をやる映画館ができたそうですよ。活弁つきで。土、日は楽団も入るんだそうです。いいですね、ぜひ行きましょう。赤坂が案内するといっていました。

その予習をかねて、今、「日本映画主題歌集」(全15巻)のCDを買って、聞いている。1巻は戦前編(1923~32)だが、面白い映画がある。「感激時代」「先端的だわね」(共に松竹)。いいねえ、見てみたい。「いいのね誓ってね」(松竹)の主題歌は「ザッツ・オーケー」。それに変なのがあるぞ。松竹で「乳姉妹」。何だこれは。さらに「乳姉妹の歌」なんてのもある。戦前にも叶姉妹みたいなのがいたのかね。歌詞が入ってるから、なめるように読んだが、何故、乳姉妹なのか分からん。書いてない。「花は一日、女は三日 黄金の帯しめ ダイヤも飾りゃ 末の雨かぜなぜ 気にかかる 惜しや悲しや玉の輿」といった詞が並んでいる。「花は一日、女は三日」って何だろう。不可思議だ。形而上学的だ。昭和7年に二枚とも発売されてんだね。赤坂の近くの無声映画館でやってくんないかな。

「日本映画主題歌集2」(戦前編 1933~38)にも、変な映画がある。「一つの貞操」「花嫁行進曲」(花嫁が皆でデモをするのかしら。シュプレヒコールをしながら)。だったら「乳姉妹行進曲」もやってほしい。「人妻椿」「日本女性読本」…。そして、分かんないのが新興映画の「浄婚記」。ミス・コロンビアが「わたし浄婚よ」という歌をうたっている。「浄婚(じょうこん)」という言葉は初対面なんで、辞書を調べたが載ってない。清らかな結婚というのだろうか。あるいは清らかな処女を守りたいから(赤坂のように)、不浄な結婚なんてしないわ、という意味なのかしら。だったら、これからは赤坂のことを「浄婚女」と呼ぼう。間違っても「浄婚オバサン」と言わないように。でも「重婚女」に聞こえるかもしれん。だったらいいのか。二重の喜びで。「わたし浄婚よ」の歌詞をみたら。

「恋と情の花束は 君に別れのおくりもの いいのよ わたし浄婚よ ひとり旅ゆく 想い出は 浄くかなしい青春譜」。これが一番。あとも似たようなもん。そして、「いいのよ わたし浄婚よ」が何度も繰り返される。不思議な映画、不思議な主題歌だ。これは昭和12年か。おいらの生まれる前だ。ぜひ見たい。赤坂よ、近くの無声映画館にメールを出して、注文を出しといてくれよ。

ということで、次のオフ会は「無声映画館」です。詳細は赤坂までメールで。

【追加でお知らせ】『裏BUBUKA』(株式会社コアマガジン発売)が創刊されました。「鈴木邦男の出版クリエイター養成特別講座」です。「出版界を目指すならコレを読み!」と銘打ってます。「まずお前から養成してもらえ。ロクに字も書けんく

せに」と浄婚娘・赤坂にひやかされました。だから僕の勉強もかねて、いろんな人に話を聞こうと思ったんです。第1回目はカリスマ編集者の末井昭さん(白夜書房編集長)です。

それともう一冊、紹介です。赤坂おすすめの『まとりた』(vol.08)です。発行・マジカンパニー。952円。tel03(3815)6881です。評判がよくて、新宿の紀伊国屋、馬場の芳林堂などにもおいてるそうです。今回の特集は「日本の恥問題」。僕も書いてます。「情報化で進む日本の匿名社会が怖い」です。他に、福島瑞穂、川田悦子、大林宣彦さんらが書いてます。

#### 【さらに追加】

植垣康博さんの『兵士たちの連合赤軍』(彩流社。1800円)の新装版が出ました。僕が解説を書いています。詳しくは来週に。植垣さんは静岡でトーク酒屋を開店したんですね。名前は「バロン」ですか。やっぱりね。気分は今でも「柔侠传」ですね。

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張2月19日

### 『ビルマの豎琴』と滝田さんと植垣さん

あれっ。赤坂がないよ。乾もない。爺やもない。風見愛もない。変だな。レンタカーを借りて、風見愛の運転で、静岡まで駈けつけるって話だったのに。嘘つきめ。嘘つき浄婚娘め。結局、律義に東京から駈けつけたのはおいら一人じゃにゃーだか。2月9日(金)、夜7時、元連合赤軍兵士、植垣康博さんが静岡市内で討論酒場「バロン」をオープンさせた。10日からオープンなんだけど、9日は前夜祭。「この前夜祭にぜひ来てくれ」と、ファックスで案内が届いた。忙しかったけど、植垣さんの為ならばと他の予定をうっちゃって新幹線に。でも赤坂たちは来てない。

あわてて新幹線に乗ったのに…。フー。この日は忙しかった。2月7日(水)発売のSPA! に書いた小山さんのことで取材を受けてたからだ。KSDの汚職事件で逮捕された小山孝雄さん(前参院議員)と僕は学生時代、「生長の家」の同志だった。僕なんかと違い、小山さんはとても信仰的で、真面目な人だった。いつも正座し、背筋をピンと伸ばしてお祈りしていた。その姿ばかりが印象に残っている。その頃の思い出を書き、そんな敬虔な信者の小山さんが何故?と書いた。でも、KSDのことは何も知らないし、最近の政治活動のことも知らない。こんな昔話を書いても仕方ないし、やめようかなと思ったんだ。でも、反響が大きかった。やっぱり書いておいてよかったと思った。赤坂にいわせれば「鈴木はズルイ」という。ただ、ボーっと座っているだけで、〈事件〉の方からどんどん飛び込んでくる。それを書いているだけだ。取材も何もない。たとえば、知らない人が封筒わたした。それが決起文だった。お巡りのガサが入った。霊界の三島から電話がきた。昔の学生運動仲間が殺された。自殺した。逮捕された。本人はそれをただ書いているだけ。ズルイ…と。

でも、黙っててガサ入れされるっていうのもキツイぞなもし。ともかく、小山さんの昔話を書いたら、朝日新聞と東京新聞が、相次いで取材にきた。二人とも、とても興味深かったという。小山さんの人間性があらわれていたという。マスコミは当事者を糾弾するばかりで、事件を生み出した時代背景や政治構造を描くことがない。それでさらに小山さんの話を聞かせてくれという。だから、ジョナサンとバーゴラ(近くのスパゲティ屋)で2時間ずつ話をした。マスコミでは、はじめから「汚職議員」「被告」扱いだ。中には、「性感マッサージ嬢を連日呼んでいた」なんてのもあった。小山さんはそんなことをする人じゃないよ。なぜ、「生長の家」時代のことをどこも書かないのか、それも不思議だ。多分、宗教は出したくないんだろう。宣伝に利用されるから。又は抗議されるから。あるいは、両方かもしれない。その点、「信仰者・小山さん」について書いたのはSPA! だけだったんだ。

小山さんに会うと怖かった。余りに心の清らかな人の前に出ると皆も怖いでしょう。汚いおいらの心が見抜かれてるんじゃないかと。この人は聖フランチェスカのように花や鳥とも話ができるんだろうと思った。又、竹山道雄の『ビルマの豎琴』に出てくる水島上等兵のようだと思った。いつも合掌し、人の神性を拝んでいた。

そうだ、『ビルマの豎琴』をもう一度読んで見ようと思って、芳林堂で買った。うわー、懐かしい。それから東京駅にいかなくちゃと思ってたら、「宮さん必ず来年の、今月今夜のこの月は…」と「金色夜叉」のメロディーが。あっ、おいらの携帯だった。出るとストリッパーの沢口ともみさんだ。仕事で四国をまわり、先週は池袋の劇場だったという。「タッチショー」に出てたら、あの「過激派の教祖・滝田修」が来たという。「ウヒヒヒ、久しぶりやな。やわらかいな。温かいな。革命的やな」と言いながら乳を念入りに揉んでったそうです。「また、パンツくれへんか」とも。ダ、ダメだよ、そんなことをいうと、書きちゃうよ。書きちゃイケンと思いつつも、手がふるえて自制できない。ウーッ、ダメだ。ドバツ。ほら、書きちゃった。

そこで話は新幹線の中に移る。金曜の5時45分発なんで、めっちゃ混んでますねん。しゃあないからデッキで立ったまま『ビルマの豎琴』を読んだ。しかし、うるさいねえ。せまいデッキで、5、6人が大声で携帯で話し合ってる。お互いの話がつれるんじゃないの。おいらは電車の中では絶対に使わん。マナーを心得ている。しかし、おいら以外の全員にマナーはない。こりゃやっぱ、ブント代表・荒岱介さんが首相になって「反携帯法」を作ってもらうしかない。「禁煙法」と「貧乳保護法」も一緒に。そうだ、最近知ったけど、荒さんて、文芸評論家の荒正人の甥なんだってね。だから若い時は作家を志したらしいよ。だからナイーブで、文学的なんだ。武闘派フラメンコダンサーで、僕に日本刀をくれて、決起をうながした板坂剛は、何と言語学者の板坂元の甥なんだよね。そして、僕はあの有名な鈴木正の甥なんだよ。「鈴木正って誰?」と赤坂の声。「だから、おいらの叔父さんだよ」。「だから、鈴木正は何者なんだよ。政治家か、学者か、俳優か?」「普通の会社員だったよ。政治家や学者でない人間は馬鹿にするのは、人民への差別だ」「何いってんのよ、"あの有名な"って言うから聞いてんじゃないの」。「だから、仙台市柏木1丁目のあたりでは有名なんだよ。もう亡くなっちゃったけど」「……。ハイハイ。分かりました」。「なんだよ、その言い方は。お前だっておいらの兄貴と結婚したら、鈴木正の姪になるんじゃないか。他人ごとじゃねえぞ」「……」。

あっいけない。いつまでも浄婚アホ娘と付き合っではいられない。、竹山道雄の話だ。1903(明治36)年大陸生まれ。東京帝大を出て、第1高等学院教師、東大教授になる。シュヴァイツァー『わが生活と思索より』、ニーチェ『ツアラトウストラスく語りき』などを翻訳する。1947(昭和22)年、『ビルマの豎琴』を雑誌「赤とんぼ」に連載。44才の時だ。翌年、中央公論社より刊行。1951(昭和26)年、48才で東大教授を辞め、評論家活動に専念する。1956(昭和31)年、『昭和の精神史』を新潮社より刊行。これはいい本だ。学生の時、僕ら民族派学生の必読文献だった。みんなも読んでみたらいい。他に、『古寺遍歴--奈良』『ヨーロッパの旅』『時流に反して』などがある。勿論、僕は全部読んだ。

そして忘れられないのは、1959(昭和34)年に56才で、雑誌「自由」を創刊し編集委員となったことだ。僕が高校2年の時に出たんだ。大学に入ってから毎月のように読んでいた。当時は左翼の雑誌ばかりだったが、その中で、反左翼で孤軍奮闘、がんばっていた。そのかなり後になって「論争ジャーナル」が出来、三島由

紀夫、石原慎太郎が書くようになる。つまり、今から40年前だが、「正論」「諸君!」の前身になったものが「自由」で、それを作ったのが竹山だった。1984(昭和59)年、80才で竹山は死去する。

僕は講演会を何度か聞いたことがある。竹山は自由主義者だった。自由主義ということは「反共」であり、左翼から見れば〈右翼〉だった。この「自由」という雑誌もそうだった。さらに『昭和精神史』は5.15事件、2.26事件なども取り上げていたし、竹山は〈右派のイデオログ〉と思っていた。ところが、『ビルマの豎琴』を読み返してみても驚いた。これはむしろ〈反戦小説〉ではないか。だって、〈闘う〉よりは僧になった方がいいと言っている。

たとえば、こう言っている。「われわれ日本人は前には袈裟に近い和服を着ていましたが、近頃ではたいてい軍服に近い洋服を着るようになりました」

こういうところにも、人間が世界に対する態度の根本的な差異があらわれているという。西欧と同じ服を着ることにより、精神も変わり戦闘的になったという。又、ビルマでは一生の間に一定期間内、僧になる義務がある。日本は義務で兵隊に行く。はたして、どちらが〈進んでいる〉のだろう。と問う。

「一生に一度軍服を着る義務と袈裟を着る義務とでは、そのよってきたるとこは違います。つまり、人間の生きていき方が違う。一方は人間がどこまでも自力をたのんで、すべてを支配していこうとするのです。一方は人間が我をすてて、人間以上のひろいふかい天地の中にとけこもうとするのです。ところで、このような心がまえ、このような態度、世界と人生に対するこのような行き方はどちらの方がいいのでしょうか?どちらが進んでいるのでしょうか?」

これは鋭く、深い問いだ。今、こんなことを言えば、「反日」だとか、「自虐」とか言われかねないだろう。つまり、自由主義というものは左からは「右翼」といわれ、右からは「反日・売国奴」といわれるんだ。まるで誰かのようだ。竹山は左翼全盛の時に勇気をもって愛国心を説き、日本人の誇りを説いた。と同時に、日本人の誤ちも正直に認めていた。今の左右の軽薄な文化人とは全く違う。思想の深さと広さが違う。さらにこんな箇所がある。

「わが国は戦争をして、敗けて、くるしんでいます。それはむだな欲をだしたからです。思いあがったあまり、人間としてのもっとも大切なものを忘れたからです。われらが奉じた文明というものが、一面にははなはだ浅薄なものだったからです。」

これは水島上等兵の手紙という形で書かれているが、著者、竹山の正直な考えだろう。又、日本人は一人一人は冷静でも、全体になるとたけりだし、それに異議をとえられなくなる。おたがいにあおりたてられて、しかも虚勢といったものから、後にはひけなくなる。一人一人の意志とははなれたものが全体をしめて動かす。もっと別の行動に出た方がいいのでは…と思っても、そういうことが言い出せない。大勢にひきずられる弱さがあるのだ。又、何より、いったい今どういうことになっているのか事情がわからない。判断のしようがない。たとえ自分が分別あることを主張したくても、はっきりした根拠をたてにくい。それで、威勢のいい無謀な議論の方が勝つ--。

…と、こんなことも言ってます。これは、深い文学ですね。子供だけに読ませるのは勿体ない。それに、映画だけでは伝わらないですね。皆さんも、ぜひ、小説で読んでみて下さい。

この本を読んだあと、静岡の植垣さんのスナック「バロン」に行きましたが、ゲストの南米のミュージシャンが何と、南米の豎琴をひいていました。さらに何と何と、植垣さんはフルートを吹いて合奏してくれました。驚きました。「ここを静岡の反戦運動の拠点にするんだ」と言ってました。そういえば植垣さんも水島上等兵に風貌が似ておりますね。

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張 2月26日

### 『花埋み』は「だめんず」の聖典だ

「SPA!」（2月7日号）は特集が凄かったですね。永久保存版ですよ。なんせ、「顔バレ覚悟！私たちが『だめんず・うぉーかー』です」。そしてもう一つが、「Hがすべての男たち。[ヤリヤリくん]下半身哲学を語る」。これも凄いというか、ひどいというか、うらやましいというか。20代で300人の女とHした男なんていて、チクショーと思いますね。こんな奴は逮捕しろよ。「別に強姦じゃないんだから犯罪じゃないでしょう。口がうまいだけで…」と赤坂はいうが、でも限度があるだろう。それに「平等の原理」からいってもいけないんじゃないか。自由主義社会じゃ放置されてるけど、平等が最高規準の社会主義国家じゃ逮捕されるよ。ブントの荒岱介さんに首相になってもらうしかない。（神楽坂注・いいんですか？こんなこと書いて。また口フトの平野店長にルノアールで「謝罪」をさせられますよ）

「口がうまい」といえば、昔、変な宗教をやっていたり、昔、変な左翼をやっていたりした奴って、みな口がうまいですね。「勧誘」「オルグ」の技術を身につけてますからね。中年でテレクラにはまって女あさりをしまくっているのは皆、このてあいですよ。変な宗教ならば、多額の献金をさせ、あるいは財産を全て捧げさせ、あげくの果てに自殺しても、「これであの人は天国にいけたのです。幸せだったんです。私はいいことをしたんです」とうそぶいている。人間を（文字通り）身ぐるみはぐのだ。そんな恐るべきテクニックを持っている。それに比べたら、ナンパは財産も命もとるわけじゃない、女の体（の一部）をとる（借りる？）だけだ。こんな簡単なことはない。「生長の家」や「幸福の科学」などの大人しい宗教ではこんな凄いテクニックはないし、教えてくれない。ところが、「統一教会」やオウムにはある。だから元統一教会の犬井君（あえて仮名にする）などは今や、「テレクラの帝王」といわれている。統一教会は元「原理研究会」といわれていた。どっかのホームページで「原理の道も一歩から」という昔の懺悔話を書いているが、だまされてはいけない。原理研で得た恐怖の

テクニック、ノウハウで女たちをゲットしてるんだ。本当は「テレクラの道も<原理>から」なんだ。今度、彼にインタビューして、それをまとめてみよう。

彼にゲットされた女性に話を聞いたことがある。「ともかく話がうまい。悩みも聞いてくれる」という。これが原理の手なんですよ。「会ってもっと話を聞いてもらいたくなる」。こりゃ、セラピストですな。でも会う時どうすんの。「ルノアールでSPA!を持ってますから」というのかな。いえいえ、顔の特徴を聞くんです。

「芸能人だったらどんな感じ？」今の若い人はこんな聞き方をするんですね。犬井くん、全く臆せず、「真田広之に似てるって皆にいわれます」。プツとおいらはコーヒーを吹き出しちゃいました。よういうよ。それで女が犬井を見つけたというから、この女（ゲットされた餌。えもの）もよほど目が悪いんですね。「そうよ。どう見ても松村邦弘じゃないの」と赤坂はいつてるが、それは言いすぎだよと僕は叱っておいた。

だからこのSPA!の「ヤリヤリくん」に僕は犬井を推薦しておいた。きっと登場してるだろう。しかし、男は顔をかくして、卑劣な奴だ。「だめんず」の女たちは「顔バレ覚悟」なのに、ヤリヤリ男たちは覚悟がないのかよ。ああ恥ずべき日本だ。日本はどこに行く。憂国だ！三島だ！

とここでメールだ。わずらわしい。メールをよこす奴らって「返事」を強要するから嫌いだよ。1日に何十通もメールが来て、返事をしてる。面倒だ。おっ、又もや、例の変なハンドルネームの奴だ。神奈川のチチンブイブイさんだ。「貧乳保護法」の提唱者だ。いちいち返事書くの面倒だから、チャットにした。「ゲンキ？イマナニシテルノ」。「ウルセー、タメグチキクンジャネエヨ」と書いたら終わりだから、「SPA!をよんでるよ」と言った。「それと、図書館から借りてきた本を返さなくちゃいけないんで焦って読んでいるよ」と。だからお前なんかとチャットしてる暇はないんだと言外に言いながら。でも、チャッター（こんな言葉はにやあのか）は無神経だから気が付かない。「それは何の本」「うるせーな。渡辺淳一の『花埋み』だよ。日本で初めて女医になった人の話だよ。ものすごい苦勞して、勉強して、女医になったんだよ。お前なんかと違うよ。おそれいったか。荻野吟子っていうんだ。知らんだろう。荻野式とは違うんだぞ」。と言ったら、「あっ、私も読んだ、それ」。へエー、案外とインテリじゃん。本を読んどるんか、とおいらの気持ちは一変した。軽蔑から尊敬に。

「感動したよね。世の偏見と闘い、女性に医師の試験も受けさせない国家と闘い、死にもの狂いで勉強し、やっと女医になったんだもん。彼女の苦勞に比べたらおれたちの苦勞なんてたかが知れてるよな。読んでて泣いちゃったよ」と話した。ところが。ところがだ。このチチンブイブイさんは何と言ったと思う。

「でも、この女もだめんずなのよね」「えっ、なーにそれ」「だって、やっと女医になって人生の頂点を極めたと思ったら、下らない男にひっかかってダメになっちゃうのよ」。ギョ！まだそこまで読んでない。推理小説の結末を教えられたようでガクッときた。やっぱり、チャットなんかしなきゃよかった。でも勇気をふるいおこして、『花埋み』を読み通しましたよ。たしかに、だめんず（それも宗教やってる）にひっかかって、後半生はボロボロになるんだ。ああ無情！

粗筋をちょっと紹介する。荻野吟子は、良家の娘だったが結婚したばかりで夫に性病（膿淋）を移される。夫はボンボンだったけど一回、女を買いにいったらうつされたのだ。それなのに吟子は家に帰され、離婚。この病に一生苦しむ。漢方じゃ治らないので東京にいき、新しい医学（西洋医学）の医者にみてもらう。ベッドに寝かされ、足を開かされる。その時の屈辱、恥辱は死ぬほどだったという。それが嫌で、女性も医者にかからず、死ぬことが多い。これは医者が男だけだからだ。女医がいたら、女性の患者も来れるようになる。そうだ、私が女医になって、病に苦しんでいる女性を救おう。そう決意する。死にもの狂いで勉強する。そして、とうとう女医になる。まさに涙なくしては読めない。さらに、女性だけがなぜ、こんなに苦勞し差別されるのかと考える。そんな時、キリスト教を知る。「女性の地位を認めているのはキリスト教だけです」といわれ、教会に通う。まじめな吟子だから、すぐに熱中する。別にオウムや統一教会のようなものじゃない。有名な海老名弾正

の教会に通うのだ。ここらあたりまではいい。

その教会で、大久保慎次郎夫妻と知り合う。特にこの大久保夫人は、名流夫人といわれ、付き合いも広い。そして何と、徳富蘇峰、蘆花兄弟の実姉なんだ。さらに久布白落実の母なんだ。そして、こいつこそが〈サタン〉だったのだ。いや、本人はそうは気づかないが、結果的にそうなった。大久保夫人の知り合いの同志社の学生が上京するが、泊まる所がない。たのまれた大久保夫人は、「荻野医院なら部屋が余ってるからいいんじゃないの」と安請け合いする。そして何と何と、この学生、志方善之（26才）と、荻野吟子（40才）は激しい恋に落ち、周囲の反対を押し切って結婚してしまうのだ。さらにこの男は、「キリスト教徒の愛の国を北海道につくる」といって北海道の原野を切りひらいて村をつくろうとする。武者小路実篤の「新しき村」のようなものだ。吟子も医院を処分して北海道に渡る。やっぱり、この男は「だめんず」だったんだ。こんな奴を紹介した大久保夫人が一番悪い。「理想の村」をつくることに賛成するはずのキリスト教徒も、吟子の北海道行きには皆、反対した。「才能がもったいない」と。そうだろう。日本で初めて女医になって、女性の地位を高め、やっとこ

れからという時に、口のうまいアホな男につれられて、北海道で「屯田兵」になったんだ。キリスト教徒も「もったいない」と反対するだけじゃなく、力づくでも阻止すりゃよかったんだ。どうしても納得しなけりゃ、だめんず男の志方を殺したらいい。それが神の愛というもんだろう。自分たちが殺せなかったら、必殺仕事人がゴルゴ13に頼むとか……。まったく、無責任なキリスト教徒たちであることよ。

ともかく、北海道では惨憺たるものだった。どんどん人は死ぬ。仲間はずり帰る。又、同じキリスト教徒なのに、「組合教会派」と「聖公会派」の内ゲバがあり、志方と吟子は追い出される。次はマンガン鉱を探しにいて、それも失敗。

「よし、じゃもう一度、医院をやる。札幌に出よう」と思うが、この時はもう彼女の技術が古くなり、通用しなくなっていた。又、女性の意識も進み、「男の医者の前では恥ずかしくて肌を見せられない」という女性もいない。女医でなければ……という必然性はなくなっていたんだ。あはれ！下らない男に付き合っていたために、後半生はパーにされた。そして大正2年、享年63才の生涯を閉じたのでした。

いやあ、これは悲しくも感動的な、そして、いろいろと考えさせられる本でした。ぜひ、よんでみて下さい。渡辺淳一は医者をやっていただけに、医者の話を書かせると本当にうまいですね。他には、野口英世の生涯を書いた『遠き落日』（角川文庫）がありますね。これも凄い本ですよ。あまりにリアルな伝記で、「野口英世ってこんな悪党だったのか」と驚かされます。いや、世界的偉人なのは間違いありませんが、こと金や女、そして自分の野心を達成するために手段を選ばぬやり方。それらはもう驚くばかりですよ。ただこの小説が映画になった時は子供向けということもあって、ドロドロした人間的部分はすっかりそぎ落とされ、聖人のような医者として描かれておりました。

では今週はこれで終わりです。

最後にお知らせ。前にも書きましたが、「都民カレッジ」で今年も10回、講義

をすることになりました。場所は有楽町の「東京フォーラム」地下です。  
4/11（水）～6/20（水）まで、毎週水曜日の1:00～2:30です。受講料は10回で一  
万五千円です。今年のテーマは「三島由紀夫を読む」にしました。本を読んだり、  
ビデオを見たり、当時の民族派学生運動の話をしたりと、楽しくやろうと思っ  
てます。受講資格は18才以上の社会人です。お問い合わせ、お申し込みは、  
03(3215)4321です。

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張3月5日

### ここが、「アンブレイカブル」の世界だ

2月14日（水）に一水会フォーラムがありましたよね。「謎の怪人プロデューサー」康芳夫さんが来まして、会場のシチズンプラザの部屋は超満員でした。60人位来たのでしょうか。又、康さんの話を聞きたさに謎の美女軍団もドットきてました。詩人、作家、女子大生、美大生、画家、カメラショップ店員…と、20人も来てました。康さんは、モハメッド・アリを日本に呼び猪木との試合をしかけた人です。又、「人間か猿か？」と騒がれたオリバー君を呼びました。それに、ネッシーを探しに行ったり、「ノアの箱舟」を探しに行ったり…と、夢多き仕掛人です。三島由紀夫に頼まれて、沼正三の『家畜人ヤブー』を出版したのもこの人です。

又、三島と共に自決した森田必勝とも親しく、何と、森田は康さんの出版社でバイトしてたんです。この日は僕も「聞き役」で一部参加しました。終わって下の居酒屋で二次会をしてたら、そこに、もう一人ビッグなお客様が。いや、「お客様」というのは変かな。何せ一水会顧問だから。あ、これも違った。顧問はおいらだった。一水会相談役の見沢知廉さんが来られたんですよ。いつものように華やかだけど、ちょっと落ち着きがない。でも、女性たちの見る目が違う。「ウワー、あの人気作家の見沢先生だわ」と目が言っている。顔に書いてある。悔しい。うらやましい。うっとりとして皆、見ているんだよな。

でも、歩き方がちょっと変だ。「また、ラリってんの？」と聞いたら、「失礼な。タクシーから降りた時に、足をくじいたんですよ」と言う。「注意して歩けよ。歩く時は左右の足を交互に出すんだよ。歩き方を忘れたんじゃないの」と言ってやった。そのあと二次会が終わって皆、帰った。すぐ家に帰る人、ゴールデン街に行く人、ファミレスでお茶する人と。僕は専門学校生たちと「ロイヤルホステス」でコーヒーを飲んだ（ロイヤルホストだろうが、と赤坂に馬鹿にされた）。そこで専門学校生の悩みを皆で聞き、励ましてやった。僕は聖書と渡辺淳一の『阿寒に果つ』を読めとアドバイスしてやった。

さて翌日、見沢知廉さんの女性秘書から電話。「緊急入院した」という。エッ、小説を書いてて過労でぶっ倒れたのかと思った。今までもそんなことがよくあったからだ。ところが違う。骨折で手術するという。「一水会のフォーラムに行った時、足をひきずってたでしよう？」と言う。確かにそうだが。でも、高田馬場駅からシチズンプラザまで徒歩で8分位かかる。そこを歩いてきたんだ。ちょっと捻挫した位かと思ってたのに。それが何と「左足複雑骨折」「靭帯断裂」だという。手術は23日だという。それまで仕事あるからと、松葉杖をつけて、通院してた。そしたら家の中で転んで尾骨を折った。ウツ、まるでガラスの男だ。

23日に手術をして、その直後、秘書からFAX。「本人が淋しがってるので見舞いに来てほしい」とのこと。前の入院の時は皆に知らせ本人も160人に手紙書いたけど、今回は限定7人にしか知らせないという。その7人に選ばれたわけだ。

めいわ…、いや、光栄ですね。これは行かねば、行くとも、行きますと答えた。

しかし、前回入院した時は160人に手紙書いたのか。驚きだ。第一に、160人も友達がいるというのが驚きだ。俺なんて16人もいない。多分1人もいない。うう、俺は孤独だ。いいんだ、本だけが友達だよ（神楽坂注・あいかわらず自虐的ですわねー。そんなこと言って、巷では「鈴木には愛人が〇〇人いる」と、もっぱらの噂ですよ）。見沢はいいよな。新潮文庫には3冊も入る（神楽坂注・『天皇ごっこ』『囚人狂時代』『母と子の囚人狂時代』の3冊。みなさん、ぜひ読んでみて）。若い女の子にはキャーキャーいわれる。「でも小説が書けない」と言う。そういうながら160人に手紙を出してる。これも驚きだ。じゃ、手紙を通しナンバーにして、それを小説にすればいいじゃないか。1人に2枚ずつ書いたら320枚で一冊の本が出来る。もらった方はビックリするね、「えっ、どうして俺の手紙はNO.100とNO.101なの」と。でも、どうせ字が汚くて読めないんだ。手紙なのか小説の下書きなのか分かりゃしない。（神楽坂注・その点、みんなから「字がきれいですね」「原稿が読みやすいですね」と言われてる鈴木さんとは対照的ですわね。老後は書道の先生になったらいいですよ）

ともかく、その位、気分を楽にして小説を書きゃいいのに。しかし、この大作家は生真面目なんですよ。そんないい加減なことが出来んのですよ。

さて、2月27日（火）の夕方、行ってきました、病院に。「見沢知廉さんの見舞いに来たんですけど」と受付で聞いたら、「そんな人いませんよ」と冷たい。あっそうか。これはペンネームだった。えーと、清水だったかな、芥川だったかな、川端だったかなと考え、やっと分かった。本人は思いの外、明るかった。「今日から個室になったんで機嫌がいいんですよ」と付き添い人が言う。「へエー、昨日まで雑居房で、今日から独房なのか」と言ったら、「刑務所のことを思い出させないで下さいよ」と怒られた。

「薬にばかり頼ってるからだよ。もっと健康的な生活をしろよ。キチンと寝て、キチンと食べて。不規則な生活して、薬ばかり飲んでるから骨が弱くなんじゃないのか」と言ったら、「いや、12年の刑務所生活の後遺症ですよ。塩見さん（神楽坂注・元赤軍派議長。現在、「自主日本の会」を主催している人）もそうですよ。中ではカルシウムがとれないから皆、骨が弱くなるんですよ」と言う。そうかなー。でも、ちょっと転んですぐ骨折なんて、おばあちゃんみたいだ。まるで映画「アンブレイカブル」みたいだと思った。

この映画は今やってるから、このHPを見てる人も見に行ったらいい。これは面白い映画だ。ブルース・ウィリスは、航空事故や列車事故に遭っても一人だけ助かる。壊れない人（アンブレイカブル）なんだ。一方、サミュエル・L・ジャクソンは子供の時から骨折ばかりしている。ガラスの男だ。そしてこの二人が出会う。「壊れやすい男」は「壊れない男」の謎を追い、そして突きとめる。さらにラスト、あっと驚く結末が！ これはよく出来た映画だ。こんな映画を見たら日本の映画なんてチャチで見れなくなる（いけない。また反日的なことを言っちゃった）。皆も見て、掲示板で論じ合ってね。でも、結末は言わないで。匿名だからといって、書いていいことと悪いことがあるけんね。

それで、この映画の「壊れやすい男」みたいだねと見沢に言ってやった。「そうなんですよ。すぐ壊れるし、すぐ捕まるし」とボヤいていた。そして言う。「でも一方には、どんなことをやっても怪我しないし、捕まらない奴もいる。スパイの死体遺棄を実行した人間は4人とも捕まったのに、命じた人間は捕まらない。そいつは赤報隊事件や一連の火炎瓶事件と関連があると思われてるけど逮捕されない。おかしい。この謎は追求しないと…」と、ブツブツと言っている。えっ、俺のことを言ってるの。そんなことはないよな。薬が切れて妄想モードになっただけなんだよな。そうだ。これから別の病院に移って、リハビリが始まるんだそう。大変だ。なんせ全治2ヵ月の重傷なんだ。「でも“見沢がテロに襲われて重傷”というニュースが流れてるんですよ」と嬉しそうに言う。事の発端は米原潜事故だ。それに対し一水会が連日抗議している。そしたらどっかのHPに、「一水会が米大使館に抗議に行き逮捕されたって本当ですか」という書き込みがあった。そして「逮捕されたらしい」「された」「なんでも大使館に火炎瓶を投げたらしい」と話が大きくなった。本当はそんなことはないのに噂だけが独り歩きした。そして、その関連で「見沢テロ」と書かれたんだと。でも、その関連というと、一水会が米大使館に抗議に行ったんで、その復讐でCIAが見沢を襲ったのかな。でもタクシーから降りる時に、こけて骨折したというよりは格好いい。「テロ説」を流そうか。でも、「こけて骨折」は皆、知っちゃったから、もう無理だ。それで一時間の接見。いや、面接。じゃない、見舞いを終えて帰ってきた。あっ、忘れるところだった、と病人の写真を撮ってきた。「エッ、こんなとこ、写真撮んですか。ひとが痛くてウンウンなってるのに」。「まア、こんな時もあったんだと、あとで見ていい記念になるだろう」と言っておいた。「いや、何か別のたくらみがあるに違いない。きつと…」と言ってたが、まあ病人の妄想ですよ、これも。

病院の帰り、ロフトプラスワンに寄った。近かったし、今日は一水会の木村代表がやってるはずだと思い出して。「ゲストに見沢知廉と鳥肌実を頼んでるんですよ」と言ってた。まあ、二人とも無理だろう。でも、ロフトに行ってみ沢がいたらコワイな。それで、おそろおそろ入った。やっぱ見沢はいなかった（神楽坂注・あたりまえでしょーが）。ところが鳥肌がいた。スゲー！ あんな大物が…。ロフト始まって以来のビッグなゲストじゃねえか。それで、（すぐ帰る予定だったのに）つついラストまで聞いちゃいましたよ。よかったですよ。「鳥肌来たる！」と予告したら、ロフトに入り切れない位、人が来たでしように。もったいない。でも、この日、来た人たちは本当にラッキーでしたよね。

夜中の12時頃までいて、そのあと、木村代表を先頭にゴールデン街に。おいらは原稿があるし、明日の学校の予習もあるから帰らなきゃと思いながら、「帰る」と言えないで、ズルズルと皆に引きずられてゴールデン街に。気が弱いんだ。自分でもイヤになる。ついでに風見愛さんや神楽坂も誘って、ゾロゾロと。そして、一団の列が途切れた時、脱走した。「あっ卑怯だ！ 私たちを誘っておきながら自分だけ逃げるなんて」と風見たちに糾弾されたが、その声を尻目に、タクシーに。というわけで波乱の2月27日はおわり。おつかれ様でした。

[HOME](#)   [BACK](#)

## 今週の主張3月12日

### 今だからこそ『不道德教育講座』

3月3日（土）。お昼に近くの「パーゴラ」でご飯を食べました。「パーゴラ」はスパゲッティ屋さんです。僕はイタリア人じゃないからスパゲッティは余り好きくありません。でもここは家から近いし、すいてるし、ゆっくりできるからいいのです（何か小学生の作文みたいだな）。食後のコーヒーを飲みながら2時間位本を読んだりします。定食屋やソバ屋ではこうは行きません。3月3日はひな祭りなので、三島由紀夫の『不道德教育講座』（角川文庫）を読みました。ひな祭りと三島は関係なかったですかね。でも、経団連事件の日であり、「桜田門外の変」の日でもありますよね。だから三島です。4月から「都民カレッジ」で「三島由紀夫を読む」をやるんで、少々予習しなくっちゃと思って三島を少しずつ読み返している。昔読んだが、きれいさっぱり忘れていた。この本は昭和42年1月20日初版だ。単行本はもう2、3年早いのだろう。とすると、今からおよそ40年前だ。ずいぶん昔だ。そして67版も重ねている。凄い。そんなに読まれているのか。本を読むと、当時の状況、風俗が分かって面白い。チンピラの太陽族の代表として石原慎太郎が出てくる。「口カビリー喫茶」なんてのも出てくる。又、逆説的・偽悪的に〈不道德〉をすすめているが、今じゃちっとも〈不道德〉じゃないことが多くて、そこがおもしろい。ちょっと目次を見てみよう。「知らない男とでも酒場に行くべし」「教師は内心バカにすべし」「大いにウソをつくべし」「処女・非処女を問題にすべからず」（注：当時は「処女」はもの凄く大事なことであったし、問題だったんでしょうな）「童貞は一刻も早く捨てるべし」（注：処女と同じように童貞も大切な価値だったんでしょうな。童貞のまま、清い身体で男は結婚の日を迎えたんでしょうな。乾くんがやってたどっかの宗教みたいだ）。あとはですな、「友人を裏切るべし」「弱いものをいじめるべし」・・・と、「不道德」なことをいっぱい並べている。その中で、ドキッとするのは「人に迷惑をかけて死ぬべし」だ。これは冗談としては読めない。ある青年から手紙をもらったという。心中願望の青年からだ。「心中高田馬場」なのか。「死ぬ前に三島由紀夫君に逢いに行こうか」で手紙は終わっている、という。しかし、本当にこんな手紙が来たのだろうか。他の章でも「読者からの手紙」が何通も紹介されてるが、みな文がうまい。三島がつくった「手紙」じゃないのかと思ってしまう。心中願望の青年の手紙もそんな気がするが、HP読者の皆様はどう思われるでしょうか。この章を読むだけでも620円（定価）の価値はある。自殺や心中をするなら、できるだけ大きくやる。どうせ死ぬのなら大金をとって、大勢を道づれにして…。そう考えたらいいと言う。そして言う。「自殺というのはもともと一種の自己目的のはずだから、自殺の意義がだんだんうすれて来て、それが途方もない大きな対社会的行為になってきて、考えるだけでオックウになってしまう」。最後にこう言う。「だから、どうせ死ぬことを考えるなら威勢のいい死に方を考えなさい。できるだけ人に迷惑をかけて派手にやるつもりになりなさい。これが私の自殺防止法であります」ちっとも

「防止法」にならなかった。三島は自殺したんだから。そこが皮肉ですね。三島の逆説かもしれません。「対社会的行為になってきて、考えるだけでオックウになってしまう」というけど、そのオックウなことをあえて考えつづけて、自決したんですよね。やはり普通の人じゃないよ。この本の「解説」で奥野健男は書いてます。

「三十年前の文章なのに少しも古びていません。それどころか、この文章を通じて自分の死を、その先の遠い未来までを見つめている三島の視線を感じ、思わず慄然とせざるをえません」　〈慄然〉としたのは多分この「人に迷惑をかけて死ぬべし」の章だろうね。ところで、これは40年前だろうとアバウトに言ったけど、正確には43年前なんですな。「解説」に書いてたが、昭和33年（1958年）に「週刊明星」に連載されたんだと。翌34年4月、中央公論社から単行本で刊行された。三島はまだ34才だった。43年前というと僕は中学三年生だった。三島のことなんて知らなかった。日本に天皇がいることも知らなかった。田舎のアホな中学生だった。その時、三島はもう大作家だった。この本は西鶴の「本朝二十不孝」式の現代倫理・道徳のパロディを狙ったものだ。中国に「二十四孝」というお話がある。24人の親孝行な子供の話だ。冬に鯉が食べたいと親が言え、氷の張った川に裸で横たわって、体の熱で氷を溶かし鯉をとってくる。自分が酒をあびて蚊をひきつけて、親が蚊に食われないようにした…とか。他に、とれる季節でもないのに筍を食いたいという親のために必死に探しにいったら、神様が不憫に思って筍を出したとか。ともかく、もの凄い話が24もある。これが親孝行の極みだといわれてもなあと思っちゃう。これ自体がパロディのように思えるな。日本の落語で「二十四孝」というのがあって、これを徹底的にからかう。「親孝行をしろ」といって叱る大家さんはこの中国の話を紹介するが、聞いた奴は、「もろこし（中国）の親は食い意地がはってるね」と馬鹿にする。そうだよな。理不尽な親たちだよ。歌舞伎では「本朝二十四孝」というのがあって、よく上演される。親孝行の話をちょっと使いながら全く別な壮大なドラマに仕立てあげている。さらには西鶴は中国の話をもっと徹底的に笑いものにしてやろうと『本朝二十不孝』を書いた。「そうかい、そうかい。中国じゃそんなに親孝行の子供たちがおるんか。日本は、とても中国には及ばんよ。こんな親不孝な奴らしかおらへんのじゃよ」と、「自虐的」「反日的」に書いたパロディなんよ。本当をいうと「二十四孝」に対抗するんだから、「二十四不孝」なんだろうが、それじゃゴロが悪いので「ええい面倒だ、『二十不孝』にしちゃえ」と切っちゃったんよ。儒教の国・中国にはとても及びませんと、どこまでも自虐的になったんよ。話も面白いよ。力自慢の息子がいて、いつも威張って親に迷惑をかけていた。ある日、お江戸から相撲取りがきた。この息子は挑戦したが、土俵に叩きつけられ背骨を折られる。寝たきりになり、下の世話まで親にさせ、一生、親不孝のままに死んだ。あとは女や金で失敗し、親不孝のかぎりをつくした息子や娘たちのお話だ。文庫本でも出てるから、読んでみなせえ（神楽坂注・さらに太宰治はこの西鶴の作品を題材にとって小説に書いてますね。その名も『新釈諸国噺』）。こうしてみると、中国じゃ真面目に親孝行の本として「二十四孝」は書かれたのに、日本に伝わるやいなや、歌舞伎にされ、落語にされ、西鶴のパロディ本にされ…と、さんざんだ。日本で馬鹿にされるため

に書かれたようなもんじゃないか。これに対して中国は怒ってないんだろうか。日本の教科書検定については激怒し、抗議してるのに。「二十四孝」についても抗議したらいい。「わが国の古典をチャカシ、パロディにするとは何事か。許せん。落語家は謝れ、西鶴は自己批判せよ！」と。そうしたら日本政府もキチンと謝罪してやったらいい。何なら、謝罪なれしているおいらが、謝罪文を書いてもいいよ。それに最近、近くの本屋で、松本遥尋『だれにも聞けない。詫び状・始末書実例集』（大泉書房）を買ってきた。これを読んで全てのケースの詫び状をマスターした。そうだ、おいらも「手紙の書き方」を出そうかな。題して『だれも読んでも読めない手紙の書き方』だ。「まず字はハッキリと分かりやすく書きましょう。決して見沢知廉さんのように書いてはいけません」といって、実物を「悪い見本」として写真入りで出す。「いい見本」はおいらの文章。これも写真つきで。でも、見る目のないアホな読者が「どこが違うの。まるで同じじゃん」なんて言ったらかなわんな。こんなに違うのに（神楽坂注・すいません。私も極度の近眼につき、あまり違いが判別できません。自己批判します）。その次には、「評論は立ち技格闘技であり、謝罪は寝技格闘技である」という有名な定説（神楽坂注・誰が言ったの？）について書く。そして今までの謝罪文の名文のかずかずを紹介する。「噂の真相」の岡留編集長の文。「写真時代」の末井さんの文。「SPA!」の誰かさんの文。いいですね、これは。と、ここで話を戻す。三島の『不道德教育講座』の話だ。43年前の三島が、もし生きていたとしたら、この本を読んでどう思うかな。「よし、続編を書こう」と思うかもしれないな。「援助交際は大いにすべし」「淫行も大いにすべし」（神楽坂注・それ、誰のことですか？）「生意気な女はすぐ殺すべし」（赤坂注・それ、あたしの事でしょ！ムカツ）「殺したらちゃんと埋めるべし」「銀行強盗をして革命資金を作るべし」「海外旅行はハイジャックで行くべし」「逃げた女は街宣車で拉致すべし」…。こりゃーいい。ぜひ書いてもらおう。そうだ、時々、霊界から三島が電話をかけてよこすから、今度その話をしよう。「こういうテーマでお願いしますよ」といって、一章ずつテープにとってリライトする。よし、「都民カレッジ」も、三島本人にやってもらおう。毎日、おいらはテープを持って行って聞かせるだけ。こりゃ楽でいい。受講生もおいらの話なんかよりもそのほうが喜ぶだろう。そしてまとめて本にする。『新・不道德教育講座（霊界通信篇）』とする。でも印税はどうするんだろう。三島の遺族に払うのかな。あるいは、霊媒おばさんに払うのかな。考え始めたらオックウだからやめた。都民カレッジの予習、真面目にしなくっちゃ。よし、箇条書きにメモしよう。こんな章立てにすっか。「第一章・三島と格闘技」（打撃系だけで組み技系をやってない。それが三島の思想や決起に大きな影響を与えた）。「第二章・三島とプロレス」（不真面目なプロレスは嫌いだったが、心の中では好きだった。なんせ憧れの力道山と対談している）。「第三章・三島と落語」（漱石は「落語好きの歌舞伎嫌い」。三島は逆に「歌舞伎好きの落語嫌い」。これが、『吾輩は猫である』と『奔馬』の違いになる）。「第四章・三島と女性」（三島はあまり、というより殆ど女性を知らない。だから三島の女性論は全て映画や小説の女を題材にしている）。「第五章・三島と右翼」（これは書けない。都民カレッジの密室で喋る）。

講座は10回だから、あと5つか。急いで考えなくっちゃ。最後にお知らせ。3月23日（金）は歌舞伎町のロフトプラスワンで佐川一政さん（作家）のトークがある。「聞きに来てくれ」と本人から電話があったので行ってみようと思う。マンガ本を書いたんだ、あのパリでの人食い事件を中心に。その出版記念をかねたトークだという。僕も読んだけど、すごい。文章よりも迫力がある。ぜひ皆さんもロフトに行きませう。

[HOME](#) [BACK](#)

## 今週の主張 3月19日

### 無念でしょうね、村上さん

3月3日（土）。お昼に近くの「パーゴラ」でご飯を食べました。「パーゴラ」はスパゲッティ屋さんです。僕はイタリア人じゃないからスパゲッティは余り好きくありません。でもここは家から近いし、すいてるし、ゆっくりできるからいいのです。

……。とここで、ピーピーと警告音。パソコンが止まった。管理人の神楽坂が、あわてて割り込んできた。

「大変だ。鈴木さんが壊れた！ これは先週の原稿じゃないですか。しっかりして下さいよ」。

エッ、そうだった。と、ボケたふりをした。チェ、ユーモアの分からん奴だ。ちょっと世間を騒がせてやろうとしただけなのに（神楽坂注・世間を騒がせるのは我々一同、大いに期待してるんですけれども。もっと別のやり方は無いんですか?）。

本当のことを言うと、先週はスパゲッティから三島に行って、そして床屋へ行った話を書こうと思った。床屋でアッと驚くことがあった。それをメインに書こうと思ったんだよ。ところが、三島で止まってしまった。今週はその続きだが、やはり、スパゲッティ屋の話から始めた方がいいかなと思って親切心で、先週の復習をかねて書いたのに。それを何だい、神楽坂の奴は。ボケたの、壊れたの、アルツハイマーだのって。失敬な奴だ。だったら本当に壊れてやるぞ（何か、脅しになってないな）。

では再びスパゲッティ屋の話。そこで三島の『不道德教育講座』を読んで、そのあと、床屋に行ったと思いねえ。いや、本当に行ったんだ。入るなり、床屋のおやじがアッと叫んだ。そして朝日新聞を持ってきた。「で、でてますよ」と言う。何か大事件でも起こったのか。「鈴木さんが出てますよ」。何のことか分からない。ポカンとしてた。ヤベー、指名手配になったのかな。「アンブレイカブル鈴木」といわれてたのに……。じゃ、まごまごしてはもらねえ。ここから高飛びしなくっちゃ。

でも念の為に朝日を見た。赤報隊事件のことじゃない。ホッとした。「ここですよ。鈴木さんのコメントが出てるでしょう」と指し示す。KSD汚職で逮捕された村上正邦前議員の話だ。あれ、朝日に取材なんかされてねえよ。変だなと思った。それに「コメントを載せましたよ」という連絡もない。狐につままれたようだ。ともかく読んでみた。アッそうだったのかとやっと分かった。

村上前議員について追跡特集をやっていた。「進軍の果てに・逮捕された参院の首領（ドン）」という特集だ。上・中・下と三日で、3月3日は（中）だった。この日の見出しは「教団てこに政界へ」「蜜月続かず後ろ盾確保に焦り」とある。これが全てを語っている。「生長の家」が全面的にバックアップして村上さんを当選させた。1980年だ。しかし、生長の家に入ってからそこに行くまでには実に

18年もかかった（1962年に、玉置さんに言われて村上さんも入信した）。18年もかかって、やっと国会議員になったのに、その3年後の1983年、「生長の家」は政治の世界から撤退した。「生長の家」もひどい仕打ちをしたもんだ。それまでは「生長の家」が人も金も、選挙ボランティアも、〈全て〉を引き受けていた。それが今度は、その〈全て〉が無くなるのだ。だから「後ろ盾確保に焦り」を持ったのだ。そしてKSDに近づくことになる。「生長の家」が政治から手を引いたのが悪かったんだ。

朝日新聞には、村上さんが「生長の家」に入った頃の話を中心に書かれている。1962年夏、村上さんは玉置さんにすすめられて、「生長の家」に入信する。が……。

〈狙いは「票」だった、と当時の秘書は語る。当時、教団の組織票はざっと百万。参院選全国区での当選を約束する力を持っていた。そして教団も、政治活動に乗り出そうとしていた。両者の思惑が一致した〉。

この時、なぜ教団が政治に進出しようとしたか。それは1962年という時代を考える必要がある。あの60年安保の2年後だ。60年はまさに「革命前夜」だった。安保反対のデモが連日国会を取り囲み、樺美智子さんがその中で死んだ。社会党の浅沼稻次郎委員長が愛国党の山口二矢に刺殺された。翌年、中央公論社社長宅が、やはり愛国党の小森一孝に襲われ、お手伝いさんが死亡、奥さんが重傷を負った。日本中が騒然としていた。「60年安保」は乗り切ったが、それで済んだのではない。次は「70年安保だ」という声が全国に満ちていた。「70年こそ決戦だ」と左翼も意気込んでいた。

「生長の家」も、この日本を救わなくてはならないと思った。さらに、諸悪の元凶は現憲法だと思った。そして、墮胎を公認する優生保護法もいけないと思った。これが〈生命〉を軽視する風潮をつくっている。そのために街で訴えたり、デモをしたりした。僕らもデモに出た。「墮胎を許すな！」「赤ちゃんの命を守れ！」とシュプレヒコールをした。何か恥ずかしかった。しかし、全信徒を動員しても世論は変わらない。国会で法律を変えるしかないと思ったんだ。玉置、村上さんも「そうです。私たちが国会に出て、必ずや変える」と言った。だから教団も全力をあげて応援した。

この「両者の思惑が一致した」の文章の後に僕のコメントが続いている。

〈当時の村上を、新右翼団体「一水会」顧問の鈴木邦男は覚えている。早大生だった鈴木は、信者として玉置のポスター張りなどをした。集会で会うと、村上は手を合わせて「私は教団に救われた」「信仰を持った人が政治を変えないといけない」と話した。しかし鈴木は、「いずれ教団の票を足場に政界に出るだろう」と感じた〉。1962年だから、今からもう40年も前になる。この時、村上さんと会ったんだ。今でもはっきりと覚えている。京王線の飛田給という所に生長の家の練成道場がある。毎月、10日間の練成があり、村上さんはそこに来ていた。僕は生学連（生長の家の学生部）の会合や練成で行ったから、よく会った。合掌し、大きな声で「ありがとうございます」と言っていた。元気な人だなと思った。玉置さんの秘書だということは知っていた。じゃ、いつか国会に出るのか。そのために

「生長の家」の票が必要なんだろう。それにしても10日間も寝泊りして修行するなんて大変だな。偉いな、と思った。僕ら学生にもよく話しかけていた。「生長の家」の教えをもって国会に入り、政治を変えたいと言っていた。

僕は乃木坂にある「生長の家学生道場」にいた。30人の学生が共に修行していた。だから機動力があるということで、よく選挙運動にも動員された。メガホンで「玉置和郎をよろしくお願いします」と声がかかるほど連呼した。又、毎日毎日、ポスターを張って回った。そして忘れられないのは、ポスターを少しでも早く全国に届けるため、車で運んだ時だ。東京から山のように積み込み、僕は東海道線の汽車に乗った。駅で停車するたびに待機している信徒にあわただしく手渡す。そして次駅へ……。

張り切っていたし、燃えていた。楽しかった。ボランティアだが、それよりも、汽車に乗せてもらえるだけで嬉しかった。貧しかったんだ。

ところで、この朝日新聞に載ったコメントだ。床屋で見た時、「あれっ、コメントなんかしてないのに」と思った。でも確かに僕の言ったことだ。しかし、村上さんが逮捕されてから取材されてない。では、どうして?とお思いでしょうが、実は、かなり前に会って喋っていたのだ。「じゃ、村上逮捕を見越して〈予定稿〉で喋ったのか」と言われるかもしれないが、これも違う。僕はそんなに人が悪くない。まア、落ち着いて聞いて下せえまし。

この「主張」を読んでも人なら分かるでしょうが、小山孝雄さん（前参院議員）が逮捕された直後、「SPA!」に僕は小山さんのことを書いた。同じ年で、一緒に「生長の家」の学生運動をしていた。とても信仰的な人だったと。小山さんの学生時代、本部職員時代のことはどこも書いてなかったので新鮮に思われたようだ。朝日新聞、東京新聞をはじめ何社かが「もっと詳しく話を聞かせて下さい」といつてきた。「パーゴラ」や「ジョナサン」で会って話をした。それが2月9日（金）だ。そして、その取材が終わってあわただしく東京駅に駆けつけ、新幹線に乗って静岡に行ったんだ。元連合赤軍兵士・植垣康博さんのスナック「バロン」開店前夜祭に行ったのだ（これは「SPA!」に書いた）。

その2月9日の「小山さんについての取材」の際、「じゃ、村上さんも知り合いだったんでしょ」と聞かれた。だから話した。そして3月3日の朝日にそれが載ったというわけだ。なんだ、そんなことかと思うだろうが、僕としては、あの時〈悪者〉視されていた小山さんの本当の姿、信仰的で真面目な姿を知ってもらおうと必死で、いろんな人に喋ったんだ。「でも、取材する側としては小山さんはもうどうでもよかったんですよ。次に村上が逮捕されるその時に備えて、鈴木さんのコメントを欲しかったんですよ」と「編集猫」さんに言われた。あれ、「編集犬」さんだったかな。まア、どちらでもいいや。それに、小山さんだって村上さんだって、どちらのコメントだっていいや。二人とも同志だったんだし。その頃のことはキチンと話しておく義務があるだろう。村上さんは僕より11歳も上だから、同志じゃないな。先輩だ。その村上先輩のことも又、「SPA!」に詳しく書いてみようと思っている。当時は〈世直し〉プランがあったんだ。近々、「SPA!」に書くので読んで下せえ。

お知らせ。植垣康博さんの2冊目の本が出ました。『連合赤軍27年目の証言』（彩流社。1800円）「創」で僕がやったインタビューも載っている。その他、「甲府刑務所だより」や、出てきてからの発言も載っている。「解説」は宮崎学さんだ。ぜひ読んでみて下さい。

[HOME](#) [BACK](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張3月26日 「日米メール戦争」勃発か

森総理は絶体絶命ですね。辞めたくないと言っていてダダをこねてだけど、ダメでしょう。僕も絶体絶命ですね。今度はちょっとヤバイです。何せ現職の国会議員から「SPA!」に強硬な抗議が来たんですから。編集長には速達で抗議文が来たし、担当者は議員会館に呼び出されるし。僕は裁判の被告になるか、あるいは国会に証人喚問されるか。今まで随分と抗議が来たが、それらとは根本的に違う。「なんせ現職の国会議員からの抗議なんて「SPA!」始まって以来ですよ。今回は覚悟を決めてもらわなくては」と担当者に言われました。シュンとなりました。僕も覚悟を決めました。6年間も続いた「夕刻のコペルニクス」でしたが、連載もこれで終わりでしょう。世間ではこれから桜が咲くと浮かれておりますが、僕だけが既に、「サクラ散る」です。長い間のご愛顧ありがとうございました。

まあ、もう2週か3週は続くでしょうが、国会議員との対応もありますから。それで最後の報告をして終わりでしょうな。あーあ、他にもいっぱい書きたいことがあったのにな。先立つ不幸をお許し下さい。「こいつは過去にも筆禍事件をしょっちゅう起こしている。執筆者として問題があるんじゃないか」と国会議員に怒鳴られました。そうかもしれません。でも、そんな執筆者の一人くらいいてもいいんじゃないですかね、日本の言論界に。

それに基本的には全ての人に〈愛情〉と〈思いやり〉を持って書いてきたつもりだったのに。それを理解してくれないなんて。悲しい。でも、いつまでもグチを言っても仕方ない。生板ショーの鯉です（ショーはいらなかったか。これじゃ、乃木坂くんになっちゃう）。僕の処分、進退は「SPA!」に任せてます。クビか、謹慎か、あるいは？

では、「今週の主張」です。森総理は絶体絶命ですね。辞めたくないと言っていてダダをこねてたけど、ダメでしょう。ここで神楽坂が突然現れる。「ダ、ダメなのは鈴木さんですよ。又、はじめに戻ってますよ」

あっ、いけない。パソコンが覚えていて勝手に前のを打ち出しちゃうんだよ。直さなくっちゃ。マックだとかいうことがよくある。

しかし、森さんの後継は誰になるんでしょうかね。野中は「200%ない」というし。小泉、扇もなしか。田中真紀子？ いや野田聖子の方がいいな。かわいいから。松田聖子の方がもっといい。いや、外国には実力のある政治家が余っているから、かりてくればいい。サッチャー、ゴルバチョフ、カーターと。その点、日本には人材がない。こうなりゃ、誰がなっても同じ。じゃ、森さんでいい。となるかな。

こんな時、加藤紘一がいたら〈次期総理〉候補のNO.1だったのにな。加藤は死んだわけじゃないけど、政治家としては死んだわな。あれはいつだっけ。3ヶ月前？ 半年前？ もうずっと前のような気がする。「加藤の乱」も腰くだけに終わり、国民の失望を買ったんでしたよ

ね。それもインターネットなんかを信じて。「国民はこれだけ俺に期待し、信じてる」と思った。見誤ったんだな。そんなものを全面的に信じちゃダメだよ。インターネットの効用・利点は確かにあるが、それだけに頼ったら、墓穴を掘る。そのいい例だった。「励まし」はいっぱいあったろうよ。でも、敗れたあとは「励まし」はないし、「それでも支持する」というメールはない。ましてや、匿名のメールばかりだから〈責任〉もとらない。

メールも、もっともっと〈質的向上〉する必要があるよな。それに、たとえ匿名・ハンドルネームでも、もっと責任を持って〈参加〉しなくてはいけない。そう思うよ。ほら見ない。俺らだって文体が変わったよ。文がブツ切りになり、投げやりな文章になってる。だから、時にはモンブランを食べながらモンブランで原稿用紙に書くようにしている。計算だって時々はソロバンを使って、頭をアナログにして、スキムアップをはかっている（自分で何を言ってるのか分かんない）。税金の申告も2日間かかって、ソロバンでやった。何せソロバン5級だから。でも今年は単純な引き算を間違っ直された。ヤダナ。きちんと「ためし算」をしたのにな。

ともかく、「便利な機械」にだけ頼っちゃダメということだ。「でも正確ならいいんじゃないの。アナログのソロバンで間違ってるよりは」と神楽坂に言われた。まア、批判はあるけど、「便利さ」「手軽さ」だけを追い求めちゃイカンと思うだよ。インターネットの「掲示板」などはまだまだ玉石混交だ。このHPはおかげ様で、「勉強になる」「質的には高い」と皆に言われてるけど、他にはひどいものが多いね。福田和也は「便利なガラクタだ」といつてたし、誰かは「便所の落書きだ」といつてたけどそんなものも多い。

米原潜に衝突された「えひめ丸」の事件でもそう思ったね。宇和島水産高校の掲示板には、「お見舞い申し上げます」「アメリカはひどい」「一日も早く引き上げを」といつた、真面目な、おくやみの投稿が多かった。ところが、匿名だと、「いたずらしてやろう」といつた不心得者が出るんでしょな。「ザマーミロ」「殺されて当然だ」といつた投稿も多くなった。高校側はあわてた。でも削除の仕方が分からない。次に来るメールのどれを載せ、どれを削るかも出来なくなった。それで掲示板を閉鎖してしまった。これは高校側が悪い。勿論、悪質なメールや、人の不幸を面白がってメールする奴が悪い。と同時に、HPはこんな弊害があるということ認識してない高校も悪い。又、手軽にメールで「おくやみ」を送ったり、もらったりする心の〈軽さ〉がいやだ。おくやみを言うのならば、きちんと手で書いて、封筒に入れて、自分の名前、住所を書いて投函すべきだ。そんな手間が面倒だからというんでは、「おくやみ」を言う資格はない。早く、手軽にポンポンと「おくやみ」を（それも匿名、ハンドルネームで）打つのなら、その逆の悪意のメールだって手軽に打てるのだ。そのことを考えないんだな。

ある新聞社の記者と話していたら、こんなことを言っていた。「インターネットで質問や問い合わせがあっても、こわくて答えられない」と。こっちは真面目に答えても、相手は匿名だし、どう悪意に利用されるかも知れない……と。うん、これはあるよな。自分の都合のいいとこだけをとって、「ほら見る、〇〇新聞の記者はこういつてるぞ」と書かれる。それに対し記者は抗議も出せない。「だから封書で来た質問や問い合わせにだけは返事を書くようにしてるんです」と。多分、ほとんどの新聞社がこういう対応をしてると思う。「インターネット社会だ」とどこの新聞も書きながら、でも内心では信じてない。少なくとも、インターネットの〈毒〉をきちんと認識してるんだ。

「えひめ丸」事件についてもう一つ。たとえば「週刊文春」（3月1日号）にはこんな記事が出ている。「吐き気もよおす米国ヤフー掲示板。『原潜事故』の書き込み」。たしかに下らん書き込みはある。しかし、と思う。そんなものにカッカしても仕方ないだろう。「いや、これはひどい。日本はなぜ抗議しないんだ」と煽る。たとえばこんなのがある……と。「日本人は何てことをするんだ。第二次世界大戦をもう一度味わいたいのか」「本当の被害者って、日本側の操縦ミスで役職を奪われた艦長だろう」「アメリカの納税者が多額の救出活動費を払わなきゃならないのか」……と。たまりかねた日本人から多数の反論があったという。しかし、そんなのは放っておけばいい。これが良識あるアメリカ人の意見じゃない。そう思われてはアメリカ人も迷惑だろう。便所の落書きだ。それに日本人が参加して、反論したら同じ次元に落ちるよ。「週刊文春」ではこう怒っていた。

〈アメリカ人（多分）の中には、「真珠湾攻撃は卑怯な騙し討ちだった。そのお返しだ」という信じ難い理屈を振り回す者さえいる。だが、実名を名乗らず中傷を繰り広げる者と、卑怯なのはどちらだろう。まして、乗組員の家族の心情を考えれば、まさに人間の所業とは思えない〉。

でも、日本人にも「卑怯な奴」はいっぱいいいて、宇和島水産高校の掲示板にいやがらせを書き込む奴もいる。匿名を前提にしたインターネット社会ではこういうことは初めから予想されたことだ。「こんなことになったらおわりだ。匿名だからこうなる」と思ったら、それを反省材料にして、新聞、週刊誌などの活字メディアは〈責任ある言論〉を展開すればいいのだ。つまり次元が違うのだ。それなのに、新聞や週刊誌が、その次元まで下りて勝負することはないだろう。

「産経新聞」（2月17日付）でも同じような記事があった。「実習船沈没。米ネット掲示板“暴論”相次ぐ」。「ジャップへの復讐だ」「真珠湾攻撃への仕返しだ」といったものが多いという。勝手に言わせておけばいい。これに対し、「メール攻撃を行おう」と呼びかけているグループもあるという。これは「愛国者」なのかな。ほっときゃいいよ。それに、本当に抗議するなら一水会のように米大使館にデモをしたらいい。匿名ではなく、顔もさらし、警察にいやがらせされながらも抗議したんだ。「噂の真相」の「一行情報」にも、「反対行動をしたのは一水会だけ」と書かれていた（神楽坂注・その後、革マル派も抗議活動をやったそうですね）。

つまり、インターネットに頼り、それにふり回されちゃダメだということだ。「おくやみ」にしる、「米国への抗議」にしる、体を動かし、行動しろということだ。ポンポンと打ちこんで、「おれは愛国的行動をした」なんて思っちゃダメだということだよ。おわり。

（追伸）「女性セブン」で〈国家論〉特集があって、僕のコメントも載ってるんだって？ 掲示板に書いてたよな。確かに取材されたけど、出たのは知らなかった。送ってこないんだもんな。塩見孝也さんも紹介したから載ってたはずだ。一水会フォーラムに来た人にも、「見ましたよ。でも名前間違っていましたよ」と言われた。いいよ、間違っても。あんなもの記号だから。まア、買った人いたらFAXでも、メールでもいいから送って下さいよ。「女性セブン」に直接言えばいいじゃないかって？ 気が弱いから言えんよ。それに取材されたところには何を書かれようと、送ってこなくても、TELしないようにしている。「抗議された」なんて思われちゃ嫌だから。自虐的なポリシーなんよ。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張4月2日 巨乳の道も〈原理〉から

NHK教育テレビの「人間講座」見てますか。これは勉強になりますから是非、見て下さい。ダメですよ、下らないドラマばかり見ていちゃ。ましてや、「新婚さんいらっしゃい」や「キスイヤ」なんか見てちゃ。「人間講座」は、3ヶ月ごとに変わる。今年は1～3月期が、「女歌の百年」（道浦母都子）、「宇宙からの贈りもの」（毛利衛）、「養生訓の世界」（立川昭二）、「日本人の法と正義」（中坊公平）だ。月～木の夜11:00～11:30だ。4月からは又、変わる（神楽坂注・個人的には昨年10月～12月にやった、嵐山光三郎の「追悼もまた文学なり」が良かったですね。最終回は三島由紀夫が取り上げられてました）。たまに見れない時はあるが、テキスト（560円。コーヒー代だよ）だけは必ず買って読んでいる。今期は、「女歌」と「養生訓」が特に面白かった。恋と健康だ。人間にとって一番大事なものだ。「女歌」の講師、道浦母都子は歌人で1947年生まれ。早大卒だ。53才か。でも写真は若い。学生運動もやったという話だ。与謝野晶子の『みだれ髪』から俵万智の『サラダ記念日』までの女性の愛の歌の100年を語っている。与謝野晶子は美人かどうか迷うが、九條武子、柳原白蓮は本当にきれいだ。同じ歌人でも美人歌人は得だ。歌と共に写真も後世まで残る。ところで、晶子の一番有名な歌はこれですね。

〈やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君〉

いいですね。「生長の家」の運動をしていた時の僕のようなですね。小山孝雄さんほどではないけど僕も信仰的な学生で、毎朝4時50分に起きてお祈りしてましたからね。若くて、やせてたし、女の子に〈付け文〉をもらったりしたんですよ（信じられないでしょうが）。その時、この晶子の歌も添えられてましたよ。それに、佐賀の女の子からは、「今はまだ蕾ですが、そのうちもっと……」という手紙をもらってドキッとしました。「道を説く君」で損をしたと思いますね。蕾でも何でも、もぎとっておくべきでした。と、今になって後悔してます。

晶子の歌で僕が好きなのは、これですね。

〈むねの清水あふれてつひに濁りけり君も罪の子我も罪の子〉

いいですね。どうせ「罪の子」だ、何をやってもいいんだという居直りがありますね。恋も奔放に出来ますよね。「生長の家」では「神の子」と教えられてたから、悪いことは出来なかったし（神楽坂注・あれで？）、だから「あつき血汐」も

「蕾」も触れられなかった。（でも、河出文庫の『私のキタ・セクスアリスII』を読むかぎりでは、十分に「罪の子」っぷりを発揮しているように思うんですが……）残念だ。もう一つ、晶子の歌。

〈いさめますか道ときますかさとしますか宿世のよそに血を召しませな〉

畳みかけるとこがいいですね。何やら、石川さゆりの「天城越え」を思い出しますね。いや、「天城越え」が晶子のこの歌からヒントを得たんでしょう。「明星」の与謝野鉄幹・晶子、そして山川登美子の三人の愛もすごいですね（神楽坂注・さっきから鈴木さんの語り口、なんだか淀川長治みたい）。

〈それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ〉

これは登美子の歌です。鉄幹を晶子にゆずって、自分は身を引いた時の心境を歌ってますね。

ここで管理人の神楽坂から電話だ。「そういえば、『君もロリコン、我もロリコン』って本がありましたよね」。ねえよ、そんな本。それに俺はロリコンじゃねえよ。赤坂みたいな成熟した女の方が好きだよ。蕾はつまなかつたんだから。ロリコンは前管理人の乃木坂くんのことだろ。でも、神楽坂はしつこく「変ですね、渡辺淳一が書いてたんですが」。あっ、あれかと思ひ当たった。ロリコンじゃない「雛罌粟（コクリコ）」だよ。本の題名は『君も雛罌粟、われも雛罌粟』（文芸春秋刊）だ。「与謝野鉄幹・晶子夫妻の生涯」とサブタイトルがついている。「じゃ、コクリコって何ですか。食べるやつですか？」と管理人。あれは、カタクリコ。コクリコっていうのはね、「ひなげしの花」のことだよ。「丘の上にひなげしの花が……」と昔、アグネス・チャンが歌ってたじゃないか。「そうですか。でも、どうして雛罌粟と書いてコクリコと読むんですか？」ウルセーな。読まないよ。雛は雛人形の「ヒナ」じゃねえか。これは「ひなげし」としか読まんよ。フランス語で「ひなげし」のことを「コクリコ」っていうから、しゃれてルビを振っただけだよ。「誰が？」誰がって、渡辺淳一がじゃないよ。少し説明してやろう。鉄幹がフランスに行き、それを追って晶子も行き、ひなげし島を二人で歩いてた時に晶子はよんだんだよ、この歌を。

〈ああ皐月（さつき）仏蘭西の野は火の色す君も雛罌粟われも雛罌粟〉

この時、晶子が「こくりこ」と仮名を振ったんだよ。そうだ、渡辺淳一の本の帯にはこう書かれている。「妻の才能に負けた。名声が逆転しながら、なお妻の才を認める鉄幹。葛藤の末、夫婦がたどり着いた晩年の愛の形」。そうだよね、結婚して晶子は花開いたけど、鉄幹は食いつくされて、残骸になってしまった。まるで、カマキリのオスだよ。結婚するまでは「明星」主宰者として君臨し、妻と、あまたの愛人、門人に囲まれていたのに。かわいそうに。この二人を扱った映画があって、吉永小百合が晶子を、緒形拳が鉄幹をやっていた。なんて映画だったかな。さらに有島武郎と晶子の恋愛があったりして（これは「事実ではない」と有島家の遺

族から抗議された)。この映画では、結婚した後、急に精彩をなくした鉄幹が家でボーっとしている。庭に出て、一日中、アリの行列を見ている。これは本当だったらしい。淋しかったろうね。鉄幹にとっちゃマイナスでしたよ、結婚は。本当は、もっともっといい仕事をやれた人なのにね。鉄幹の歌で僕が一番好きなのはこれですね。

〈われ男（お）の子 意気の子 名の子 つるぎの子 詩の子 恋の子 あゝもだえの子〉

いいですね。国を憂えて、もだえてるんですよ。学生時代の僕と同じだ。昔、奥浩平の『青春の墓標』という本がベストセラーになった。奥は中核派の活動家だが革マル派の女を愛し、「学生運動版・ロメオとジュリエット」とよばれた。その本の中で奥はこう書いている。「私はプロレタリア革命の子であり、エロスの子ではないのです」。そう、彼も「男の子」、「意気の子」「もだえの子」なんだ。奥もきっと鉄幹のこの歌が好きだったんだろう。だから、「革命の子」なんて表現が口をついて出たんだよ。

NHK「人間講座」の「女歌の百年」には歌集『乳房喪失』の中城ふみ子も出てくる。有名な歌ではこんなものがある。

〈冬の皺（しわ）よせぬる海よ今少し生きて己れの無惨を見むか〉

〈失ひしわれの乳房に似し丘あり冬は枯れたる花が飾らむ〉

ふみ子は1953年（昭和28年）に31才の若さで亡くなったんです。乳癌で左の乳房を、そして次には右の乳房を切断します。死の寸前、『乳房喪失』という短歌集を出す。新人なのに川端康成の序文つきだった。ふみ子が入院していた当時、札幌医科大学の医学生だったのが渡辺淳一です。その縁もあって彼はふみ子をモデルにした小説『冬の花火』を書いている。タイトルは次の歌からとられている。

〈音たかく夜空に花火うち開きわれは隈なく奪はれてゐる〉

他にも凄い歌がある。

〈勝気なるひとり暮しのわが夜に産むは無精卵の如き歌いくつ〉

〈われに似しひとりの女不倫にて乳削ぎの刑に遭はざりしや古代に〉

こんな絶望的な状況の中で、古代の「乳削ぎの刑」を思い出し、自分を客観視できるなんて、大した歌人ですよ。両方の乳をとることになるが、『冬の花火』では渡辺はこう書いている。

「両方の胸に傷がつけば、左の惨めさも目立たない。もしかすると、左の胸はそうなるのを待ち望んでいるのかもしれない」

作家というものは残酷なものだと思った。だって、これはふみ子が思ったわけ

じゃない。渡辺淳一がふみ子になり切って、思っているのだ。さらに奇妙な描写がある。病院でふみ子のひげが濃くなる。これは治療のために「男性ホルモン」を入れたからだという。乳ガンの治療のために「男性ホルモン」が要るのならば、直接、男からとった方がいいだろう。そう思い、次々と男と肉体関係をもつ。ホントかよ、と思っちゃった。どこまで本当か分からないが、ふみ子は恋多き女だったようだ。短歌の先生、新聞記者、学生……、と、次々と恋をし、交わる。この点は、渡辺が天才少女画家・時任純子を主人公にした『阿寒に果つ』（中公文庫）でも似ている。純子は架空の人物だが、それらしいモデルはいた。女子高生だが、したたかで、奔放な女だ。大人たちを次々と誘惑し、まどわせる。学生、画家、新聞記者、左翼活動家などが彼女の掌の上で踊る。彼女は水晶だ。六面体の水晶で、6人の男を通して純子の姿が語られる（本当は姉もいるけど、これは余計）。

恋多く、奔放な女という点では、ふみ子も純子も似ている。

ところで、話変わるが、日本でブラジャーが初めて作られたのは昭和26年5月だという（神楽坂注・本当に話が変わりますねー）。つい50年前だ。その前はしてなかったんですな。サラシで巻いてたんでしょう。いや、不十分だが似たようなものはあったようだ。「ワコール」の前身の「和江商事」が、それ以前は、胸にあてるものとして「ブラ・パット」といって針金を円錐形に巻いたものに綿をかぶせたものを下着の下におしこんでいただけだった。当時、これを「にせおっぱい」と呼んだ。これは「ワコール社史」を渡辺が読んで書いたんだから本当だ（神楽坂注・本で調べたところ、大正15年の婦人雑誌に、「乳おさえ」なる下着の広告が出ていますね。これがブラジャーの前身にあたるものみたいです。しかしこれはブラジャーとは違って、胸の大きさをおさえるといふものなので、今のブラジャーとは違いますね）。

で、昭和26年にブラジャーが初めて作られるが、それをいち早く買ったのがふみ子だった。一組が300円だった。今の金で一万円位なのか。サイズは皆、同じだった。一応、S、M、Lとあったが、それは脇紐の長さによる分類だった。つまり「ヤセてる。中。デブ」という違いで、乳の大きさじゃない。何も知らないふみ子の友達たちに、「あら、おっぱいが大きくなったわね」といわれたという。本当に「にせおっぱい」だ。

ところで又もや話変わって、元統一教会の犬井君（特に仮名にする）だ。犬井君と元彼女A子と、その友人B子と、そして僕。この4人である日、カラオケに行っただと思ひねえ。女性同士で話がはずんでる。「あら、あんた急にオッパイが大きくなったわね」とB子。「太っただけですよ」とA子。でも赤坂のように腹は出てない。胸だけが「太った」。BカップからEカップ(!)になったという。「いいわね巨乳は」とB子はムギュッと乳を驚づかみ。「僕も」といったら、「鈴木さんはダメ!」とピシャリと手を叩かれた。その痛さで気がついた。太ったのではない。元彼がよく揉んでたからだろう。「原理パワー」だ。統一教会は昔は「原理研究会」といった。早大でも40年前からいた。僕らも「反左翼」で共闘した。「バリケードを撤去させよう」という話になると、「じゃ、原理パワーで撤去してもらおう」と言う奴がいた。「集会やろう。人を集めなくちゃ」というと、「〈原理〉

で人を集めるよ！」と言う。知らない人がいると、「バカヤロー、〈原理〉で当ててみるよ」といわれた。まるで〈原理〉は黒魔術のように思われていた。

僕もその時、〈原理〉を馬鹿にした一人だったけど。でも間違っていました。お許し下さい、お父さま。〈原理パワー〉は実在したのです。その証拠に、ほれ、こうして、あわれな小羊の胸をBカップからEカップにして下さったんです。私は神の奇蹟を信じます。「胸が大きくなっただけじゃないの。乳汁も出たの」とA子。そりゃ処女懐胎じゃないか。君はマリア様だよ。あわててA子は医者に行ったら、現代医学は非情ですな。「それはうつ病の薬の副作用です。よくあるんです」（神楽坂注・間脳の内分泌機能調節異常に由来すると推定される乳汁分泌、女性化乳房などがあらわれることがあるそうです。この副作用は男性でも起きるとか。見沢知廉さんは大丈夫なのか）。いやいや、違う。これも〈原理パワー〉ですよ。

ここで、神奈川のチチンパイパイさんからメール。貧乳で悩んでいる人だ。ブントの荒岱介さんにすぎり、「貧乳保護法」「反巨乳法」を作ってもらおうと働きかけている人だ。ちょうどよかった。「『反巨乳法』なんてネガティブに考えちゃダメだ。ポジティブ・シンキングで行かなくっちゃ。レッツビギンや。統一教会に入れ。そうしたら一夜にしてEカップになる。ソウルの合同結婚式に出る」と勧めた。それは怖いと言うので犬井のメールアドレスを教えてやった。少しお布施をして、ハンドパワーに身をゆだねたら、たちどころに巨乳になるよ。「巨乳の道も〈原理〉から」の巻でした。

#### <お知らせ>

① 「ロック画報」（01年4月号）は「ビートルズ特集」で、僕も原稿を頼まれて〈ビートルズ体験〉を書きました。ちょっと変わった原稿になったと思います。読んだ人は誰か感想をカキコしてください。「ロック画報」は大きな書店にはありますが、TELは03（3460）8611です。1200円です。

② 21世紀研究会編の『ラスト・センチュリー』（インターメディア出版）が出版しました。「今世紀で日本は滅びる！ 115人の識者が送る提言」と帯には書かれています。僕も識者（本当は非常識者）の一人として書いている。1600円で、TELは03（5366）1851。

③ 『木野評論 32』は特集が「犯罪をめぐる思考」。僕も書いた。この本は発行が京都精華大学情報館。発売が青幻舎。1200円だ。

④ 作品社の『思想読本② マルクス』に原稿を頼まれて書いた。もうすぐ出るだろう。僕のマルクス初体験を書いた。大学の時にはこれでも結構、読んだもんですよ。でも、僕にこういう原稿を依頼するなんて。感激しましたね。

⑤ 『ザ・ゴルゴ学』（小学館）が、10万部を突破した。僕もラストのインタビューを担当したので嬉しい。これでゴルゴのことは全て分かる。いや、国際政治も、人間の生き方、生きがいも分かる。千年後にも残る本だ。

**1999年 2000年 2001年**



## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張4月9日

## 日本弱体化の「スリーエス政策」だよ、これは

驚いた。偶然の一致なんだろうか。あるいは示しあわせたのか。はたまた、スパイが相手の情報をキャッチして、潰しに出たのか。謎が謎を呼ぶ「赤軍デイ」でした。エイプリル・フールの次の日、4月2日（月）のことですよ。テレビ朝日の「ニュースステーション」に、あの重信房子の娘が登場した。大スクープだ。ところが、その直後、日本テレビの

「NEWS 23」では、「よど号」の娘3人が登場。期せずして「赤軍派の娘」特集になった。誰かが週刊誌に「21世紀は赤軍派の時代になる」と書いてたけど、本当だ。なんと先見の明のある人なんだろう。

4月2日は赤軍派ファンにとってはこたえられない一日になった。歴史的な日になった。こんな凄い特集がかち合うなんて、偶然か、あるいは神の見えざる手が働いたのか。いやいや、「21世紀は赤軍派の時代になる」という神の言葉を実現するために人々が無意識のうちに動いたんですよ。

まずは「ニュースステーション」の方からだ。新聞のテレビ欄を見てビックリした。こう書かれていた。「スクープ・重信房子被告長女28歳が初めて身元を明かし語った母・生活・将来」。テレビ局も、よく見つけたもんだ。よく説得したもんだと思った。若松孝二監督の線なんだろうか。監督の言うように、やはり美人だ。「日本に連れてきて女優にしたい」と言ってたが、その気持ちも分かる。「若い時の重信よりも美人だ」と言ってたが、そうだろう。パレスチナゲリラ幹部との間に生まれた。ハーフだ。日本語よりも英語の方が流暢だ。

名前も初めて明かした。重信メイ。アラブでも呼びやすい名前をつけたんだろうと思ったら、違う。メイさんが言うんだな。「メイは命のメイ。革命のメイ」。凄い、「革命の子」なのか。生まれながらにして世界革命の子、プロレタリア革命の子なんだ。やりましたね、お母さんも。いつの日かこんな形でスクープされることを予期して付けたんでしょうな。メイさんはバイロートの大学院で学んでいる。将来は政治学者かジャーナリストになりたいという。日本国籍も取得したし、母の国、日本に帰りたいという。そしたら文字通り「凱旋帰国」だ。頭がよくって美人で、知名度があって。どこから出ても国会議員に当選するよ。あるいは、「ニュースステーション」のコメンテーターにしたらいい。いや、久米宏の後釜をやらせてもいい。

それにしても重信メイさんは親孝行な娘さんですね。母親を信じ、尊敬し切っている。涙をうかべながら母親の話をする。感動してもらい泣きをしてしまった。

では、「筑紫哲也NEWS 23」の方ですね。「北朝鮮発・よど号事件の家族たちが単独会見で語ったこと」。又もや、「仲よし三人娘」が出ていた。本当なら去年の11月に帰国するはずだったのに。遅れに遅れている。「早ければ5月上旬にも帰国か」と言っていたが、本当

に実現してほしい。田中さんの娘、小西さんの娘、田宮さんの娘の3人だ。それに母親が2人の計5人が帰国する予定なんだ。外務省との交渉の様子も説明されるが、何ととっても驚いたのは三人娘の未公開映像だった。和服を着て踊っている。カルタをしている。福笑いをしている。「日本に帰る日に備えて」練習してるらしい。でも、日本じゃカルタや福笑いなんてやってる家庭はないよ。僕だって50年か60年以上前に一度やった記憶があるだけだ。前世の記憶みたいだよ。きっと、あやとり、竹馬、おてだま……なんかもやってんだらうな。そうだ、むしろ、日本に帰ってきたら昔なつかしい遊びを三人娘が日本人に教えたらいい。「電髪（パーマ）、茶髪はやめませう。ゲームもやめませう。日本にはこんな素晴らしい遊びがあるんです」と言って広めるんですよ。文部科学省も後援したらいい。

ついでに、メンコ、フラフープもはやらせたらいい（神楽坂注・歳がバレますねー。と言いたいところですが、邦男さんの時代にはまだフラフープもなかったんじゃないの？）。お父さん達（「よど号」ハイジャッカー）は31年前に北朝鮮に行った時、毎日毎日、「主体（チュチェ）思想」の学習ばかりだった。「勉強ばかりでは体をこわすから週に一回は<遊び>をやるう」と田宮高磨は動議を提案した。「イギなし！」と皆に可決された。ただ、サボるか、勝手に遊べばいいのに、「遊びをやる」という発想が凄いですね。これも主体（チュチェ）思想なんのでしょうか。でも困った。「遊びをやる」ことに決まったが、「遊び」を知らない。もの心ついたら革命運動に飛び込んでいた9人だから、マージャンも、花札も、トランプも知らない。「そうだ、子供の時、“かくれんぼ”という遊びがあった。あれをやるう」「江戸や猫八がジェスチャーゲームをやってたぞ。あれもいいんじゃないか」。『イギなし！』と拍手。可決された。でも彼らの周りには常に従業員がいる。監視の方々ですな。この人たちが驚いた。9人の男たちが、ものまねをして、議論している。こいつらは発狂したのかと思った。さらには、いきなり逃げ出し、物かげに隠れたりしている。それを必死になって探している男もいる。「これは仲間割れだ。内ゲバだ！」と、あわてて労働党幹部に報告した。ともかく大変だったらしい。

ところで、「仲よし三人娘」だ。何か昔の森昌子、桜田淳子、山口百恵のフレッシュ三人娘を思い出しますね。じゃ、「よど号」三人娘も歌手になればいいのに。浜崎あゆみやミスターチルドレンが好きで歌っているというし。「美しい日本の歌」を中心に歌ったらいい。安田、由紀さおり姉妹のように（おいらも中野サンプラザに一度聞きにいて、涙ぐんじゃった）。うん、これは案外いいかもしれないな。童謡や、学校で教えない日本の美しい歌（神楽坂注・まさか、軍歌とか言うんじゃないでしょうね？邦男さん？）をうたい、カルタ、福笑いを教え、踊りを教える。外国人になっている日本の子供たちを再び「日本人に戻す」。それを三人娘がやるんですよ。

これで「赤軍派の子供たち」は終わり。続いて、もう一つ、「日本を取り戻せ」シリーズ。皆さんはもう「ハンニバル体験」をしましたか。もう、社会現象ですね、これは。僕もさっそく行きましたよ。4月7日（土）の朝一番に並んで並んで見ましたよ（神楽坂注・あれっ、入稿した今日は4月4日ですよ。見ないで書いてんのかな。あるいは未来を予見できるのか。はたまた特別試写会に招待されたか。アメリカにわざわざ見に行ってきたのか。謎ですね、この人は。ヨコハマ姉妹は「クーちゃん、先行オールナイトにでも行ってきたのかしら？相変わらず笑えるね」と言ってました）。

前作、「羊たちの沈黙」も今回の「ハンニバル」も面白いですね。よく出来た作品ですね。

これに比べたら日本映画なんてチャチで見てらんねえよ。「ハンニバル」が1800円なら日本映画なんて18円か、1円80銭でいいよ。だって内容も制作費もケタ違いなんだもん。エッ、お前には愛国心がないのかって。ねえよ、そんなもの（あ、いけない。つい本音が出ちゃった）。まア、「愛国者」のおいらを「売国奴」「アメリカ崇拜」にしちゃうんだから、映画の力は大きいやね。もしかしたら、反日・自虐史観を押しつける為に日本映画は、わざと下らない映画を量産しているのかもしれない。きっとCIAかフリーメーソンから金をもらって「日本弱体化」の為に下らない、つまらない日本映画を作ってるんだ。だったら、マイナスかけるマイナスがプラスになるという原理で、おいらは本当は一番の愛国者じゃないか（神楽坂注・自分で言ってる意味わかってるんでしょーか？）。

で、「ハンニバル」だ。すごい人だったね。やっと座れたけど、立ち見の人でびっしり。こんなに映画館が混んだのって、「君の名は」以来だね（皆、知らねえか）。この「ハンニバル」、話は面白いし、スリリングだけど、個々の描写が怖い。やたら怖い。夢にうなされるほどだ。とても精子できない。あれ、「正視」と書くつもりが、漢字変換キーを押すと、何度やっても精子になる。変だ。パソコンを一日中やってるから目が疲れて乱視になりそうだと書いたら、これも「卵子」になる。そうか、これもアメリカの謀略か。日本弱体化の陰謀だ。マックだけがそうかと思ったら、ウィンドウズもそうだった。ウィンドウズユーザーの赤坂に聞いたら、「漢字変換すると、すぐにエッチな、いやらしい漢字ばかりが出る」そう。それに慣らして、日本人をセックスづけのアホな民族にしようとしてるんだ。テレクラをはやらせたのもアメリカだし、携帯電話やチャット、出会い系サイトを作ったのもアメリカだ（その手先になってるのが統一教会だ）。自分の国では「健全な家庭」「健全な性モラル」を強調するのに、日本だけはどんどん堕落させようとしている。そのことに日本人は誰一人として気がつかない。気がついてるのは俺だけだ。「国難が来るぞ！」と道で絶叫してる日蓮じゃないか、俺は（神楽坂注・どちらかというより日蓮というより、奥崎健三系ですね、鈴木さんは）。でも、バカな国民は気がつかずに石を投げつける。アッ痛い！ほら、おらの額からも血が流れているよ。と思ったら本当に血が出たよ！まるで「聖痕」じゃないか。マリア像が実際に涙を流す。あるいは生身の人間が本当に手足から血を流す。イエスが釘うたれた所から、（何もしないのに）血が出るのだ。おらも日蓮のことを思いうかべていたら本当に額から血が出てきた（神楽坂注・このあいだまで渡辺淳一にハマっていたと思ったら、鈴木さん、最近ではトンドモ本にハマっているんでしょーか？）。

話を戻す。アメリカの「日本弱体化政策」のことだ。思い出した。高校の時に習ったぞ。アメリカはこの「日本弱体化政策」のために「5D政策」と「3S政策」をやったという。5Dは何だったかな。デモクラシーはDだった。あと、非軍国主義化、非集中化、それにもう二つは何か思い出せない。ともかく、こんなことをして日本という国、日本人という民族を骨抜きにし、弱くしようとしたんだ。「3S政策」の方は、はっきりおぼえている。「スクリーン、スポーツ、セックス」だ。これを日本人にドッと与えて、骨抜きにしようとした（確かにこのおかげで俺たちは骨抜きになったよな）。「そんなことをミッションスクールで教えたのか？」って？ そんなわきゃねえだろう。高校の時に習ったけど、別に学校で習ったんじゃない。「生長の家」で習ったんだ。当時は「生長の家」は愛国宗教だったから、<日本の危機>を説きまくっていた。日本は敗戦後、いかにアメリカから弱体化されたのかという話を毎日のように聞いていた。我々を弱体化するためにアメリカ映画をドッと入れ、スポーツを見せ、セッ

クス記事を氾濫させている。卑怯な国だ。許せない奴だ。よし、一生、アメリカ映画なんか見ないぞ！スポーツも相撲以外は見ないぞ。セックスは一生しないぞ！と信仰的な高校生だった僕は決心したもんでした。

でも、今、こんなことは左右ともに運動のスローガンにならないよね。「アメリカに押し付けられた3S政策反対！」なんて言ったら誰も人が集まらないよ。

それにしても奇妙だった。「5D政策反対！」「3S政策反対！」「アメリカに押し付けられた憲法を廃棄し、自主憲法の制定を！」と反米的なことを言いながら、（左翼に反対して革命から国を守るために）「日米安保を守れ！」と言ってたんだからな。おいらも高校生だからそんな矛盾にも気がつかなかった。頭が悪かったし、それだけ純心だったんでしょな。

では又、来週。

……と思ったら、又もや衝撃のニュース。テレビに重信メイさんが出た翌日（4月3日）、もう日本に帰ってきた。用意周到だ。すごい。これから日本で何をやるのか。ますます面白くなってきた。4月14日（土）は2時から文京区民センターで「重信房子歓迎集会」がある（本人は獄中だけど）。又、4月23日には重信裁判がある。どっちかに娘は出るのだろうか。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張4月16日 二人の天才詩人について

4月ですね。新学期ですね。火・水・木は僕も学校の先生です。金・土・日・月は原稿を書いたり、図書館で勉強したり、つまり、学生ですな（神楽坂注・鈴木さんの場合、夏目漱石言うところの「高等遊民」に近くてうらやましいぞ）。週三日は先生、週四日は学生。アウトプットが三日、インプットが四日。精神のバランスとしてはいいでしょう。

火曜はジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）で朝の9:00～10:30に「現代史」の授業。水曜は1:00～2:30に「都民カレッジ」（神楽坂注・東京都がもうけてる生涯学習の講座）で、「三島由紀夫を読む」の授業。木曜は河合塾コスモで3:10～4:40までが「現代文」、5:00～6:30が「基礎総合（読書ゼミ）」の授業です。喋るのが下手だし、人間がシャイだから大変ですよ。でも、頑張ってるやんなきゃ。

さて、今週はジャナ専の卒業式と入学式の話をしてします。両方とも共通テーマは〈天才詩人〉でした。ジャナ専と詩とどう関係があるのと思うあなた、まあ、焦らずに聞いてくんまし。卒業式は3月15日（土）10:00amから新宿の京王プラザホテルで行われました。「朱雀の間」という一番大きな部屋で。千名ほどの卒業生と先生方が出席。この時、「卒業証書」授与と共に、「ジャナ専大賞」の発表と表彰がありました。小説、詩、写真の部門に分かれて賞状と賞金が渡されました。詩の部門では鈴木敏春という生徒の『風流夢譚』が大賞になりました。このことは前にも書きましたよね。とにかく名誉なこと。本にもなったんだし。「第二の見沢知廉」といわれ、次は殺人、死体遺棄、じゃなかった、小説にも挑戦してみたいと言っていました。

次に入学式です。4月5日（土）10:00amから中野ZEROホールで行われました。ここは昔は中野公会堂だったんですね。いやですね、変な名前に変えちゃって。アメリカの陰謀ですよ。いや、アメリカに対して、アホな日本人がコンプレックスを持ってるからですね。健康保険会館も、郵便貯金会館も、わけの分かんない英語にしちゃうし。このZEROホールの隣りは中野図書館です。僕は毎日のように来て、ここで勉強しています。でもZEROホールは初めてでした。なかなかきれいで大きなホールでした。

10:00amジャストに入学式は始まりました。まず校歌（谷川俊太郎作詞）が流れる。「ことばの化粧をはぎとって 裸の事実にもむかいあうとき……」という格調高い歌だ。次に細島泉校長の式辞。この方は以前、読売新聞の編集局長をしておられたという。続いて理事長・小林光俊さんの祝辞。この理事長があのだ。天才詩人・金子みすゞの話をしたのだ。実はジャナ専は福祉関係など、他にもいろんな専門学校を持ってるし、関連の出版社を持っている。JURA出版局

もそうだ。小林さんはそこにいる。そして意外な話をしてくれた。

「17年前、ある人が詩集を出してくれともってきた。どうせ売れないだろうから300部刷ってくれればいい。私どもで必死に売りますから」という。それが金子みすゞの詩だった。金子は明治36年（1903年）生まれで昭和5年（1930年）に26才の若さで世を去った。全くの無名だった。ところが矢崎節夫が遺稿を発見し、世に出した。17年前に持ち込まれた時は、出版社は、売れると思わなかった。「300部なら出してみます」となって、いろいろ新聞社にも通知した。そしたら朝日新聞社の記者が、「これはいい」と言って大きく取り上げた。それで詩集は売れた。又、レナウンだったかのCMに彼女の詩がとり上げられた。「星とたんぽぽ」という詩だ。鈴木保奈美が出た。こんな詩だから覚えている人もいるだろう。

青いお空のそこふかく、  
海の小石のそのように、  
夜がくるまでしずんでる。  
昼のお星はめにみえぬ。  
見えぬけれどもあるんだよ。  
見えぬものでもあるんだよ。

これで、金子の詩集は売れた。又、「知ってるつもり」などにも取り上げられた。子供の時から感受性の鋭い子供だったという。雨の上がってまだ道がぬかるる時、荷馬車か何かを通ったんだろう、みすゞは「お母さん、道を船が通ったよ」と言った。彼女の感性が分からない母親は、「なんだねこの子は。嘘ばかりついて」と相手にしなかったそうな。でも彼女が死んだ後は、その感性が皆に分かったんだ。斉藤由貴が主演で芝居にもなり、あれよあれよという間に、何と200万部も売れた。凄い！ 17年前は「300部でいいから」といつてきたのに……。 「だから皆さんも、今は芽が出なくてもがんばって下さい。いつか200万部のベストセラー詩人になります」と理事長先生はおっしゃっておられた。

そうだ、ジャナ専大賞をとった天才詩人、鈴木敏春君も、いつかは200万部も売れるようになるだろう。「小さなことでも努力すれば大きくなる」と理事長は言っとった。「でも、死んだ後に有名になってもなー」と近くで生徒が言っていた。いやいや、死んでからでもいいじゃないか。200万部の天才詩人として永遠に生きるのだ。金子は中学校や高校の教科書にも取り上げられたというし。敏春も頑張れ。ジャナ専大賞から新日本文学賞、そして教科書だ。

理事長先生はこんな話もしていたな。今度、松たか子主演でTV化されるんだそうな、松たか子じゃ、ちょっときれいすぎるよな。もうちょっと普通っぽい、貧乏っぽい女優にすればいいのにね。まア、それはいい。そしたらお父さんから電話がきて、「ついては私も娘の仕事を理解したいので金子みすゞの本をひとそろい送って下さい」と。お父さんて松本幸四郎だ。感動的な話というよりも、こりゃタダの親バカだなと私は思いましたね。いやだね。そういえば息子の染五郎とも、よく現代芝居をしたりしている。やっぱ親バカだ。その点、吉右衛門なんか、娘は三人いるけど、みな普通の女の人だ。とりわけ美しいわけでもない。だから女優になるうなんて野心をおこさない。息子はいないから、自分の後を継がせようということもない。自分一人だけだと思っから芸にも一生懸命になる。幸四郎よりも、気の持ち方が違う。姿勢が

違う。とオラは思うね。テレビでは吉右衛門の「鬼平犯科帳」が又、はじまるという。こっちの方が楽しみだ。「鬼平」は全巻読破したけんね。人生にとって大切なことは全て鬼平から学んだよ。「この前は『ゴルゴ13』から学んだって言ってたでしょうが。節操のない人だ」と管理人の神楽坂に言われた。

そんで、金子みすゞの詩だ。僕の一番好きなのはこれだね。「大漁」という題だ。

朝やけ小やけだ  
大漁だ  
大ばいわしの大漁だ  
はまは祭りの ようだけど  
海のなかでは 何万の  
いわしのとむらい するだろう

これはジーンときますよね。すごい発想ですよ。お魚になりきって詩をつくってますね。天才お魚詩人ですね。これを読んでからあたしゃ、いわしを食べるのをやめました。

あと、「つもった雪」も好きですね。

上の雪 さむかるな。  
つめたい月がさえていて。  
下の雪 重かるな  
何百人ものせていて  
中の雪 さみしかるな。  
空も地面もみえないで

……と紹介してたら切りがないね。ともかく、全部いいね。JURA出版局では金子みすゞ詩集（全集）だけでなく、実にいっぱいみすゞ関連本を出している。それが皆、売れている。『金子みすゞの世界』『金子みすゞの詩を生きる』そして、『みすゞさんへの手紙』とか。読者の手紙だけを集めて本にしちゃうんだ。すごいやね。僕も買ったけど。いつか、『敏春君への手紙』なんて本も出るのかね、死後に（神楽坂注・連赤事件の『永田洋子さんへの手紙』みたいですね）。

そうだ、少し前に、面白い短歌をのせていた高校生がいたね。酒井徹君か。名前をキチンと名乗るところが気に入った。プイプイとか、ブヨブヨとか、赤坂タップタップなんてハンドルネームを使わないところがいい。「SPA!」なんかを読んでつくったのもあったね。こういうふうに短歌にしちゃうというのはすごい才能だよ。石川啄木は喋る言葉が全て短歌になったというが、そんな感じだね。いいですよ、これからもどんどん作って下さい。

僕の好きなのは、

右翼とか左翼とかってimidazにもう載ってない中翼（なかよく）やろう  
「カネよりもこころが大事」と説く彼の講演料は五十万円  
十七という年齢が武器になる期間もわずかあと三ヶ月  
僕はまだ神戸事件の挑戦状より胸を打つ詩に出会えない

すごいね。ジャナ専大賞の天才詩人もウカウカしてらんねえぞ。がんばらなくっちゃ。一度対談してみれば。

<ではお知らせ>

①見沢知廉『蒼白の馬上』（青林堂。1500円）が発売中です。獄中12年の原因となったあの「スパイ粛清事件」についてついに沈黙を破って発表。当然、木村氏や僕も出てくる。こわいですよ。「ハンニバル」とどっちがコワイか、読み比べてみませう。

②一水会代表・木村三浩氏の初の政治論集が出た。『右翼はおわってねえぞ！=新民族派宣言=』（雷韻出版。1800円）。「左右両翼ラジカリズムに息吹を吹き込む一書」だ。「維新か革命かを問う再生の書」と福田和也も絶賛している。前田日明との異色対談も載っている。買うべし！

③『まとりた』vol.09は特集が何と、「絶滅寸前！日本の“左翼族”」ページも厚くなって、意欲的だ。海江田万里、高橋幸春、福島瑞穂、そして僕も載っている。ぜひ買って見て下さい。高田馬場の芳林堂などでは平積みされていた。評判がいいので近いうちに月刊化する予定だという。発行元は（有）モジカンパニー（03-5815-6881）です。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張4月23日

## 「堕ちた革命家」と「堕ちた原理パワー」

どうして、ペンテル・サインペンの青はないんだ！ と怒りにかられている。黒や赤はあるのに、青だけがない。東中野も高田馬場も赤坂も、文房具屋は全て探したけど、ない。サインペンはペンテルが一番使いやすいんだ。原稿用紙は「KOKUYO ケー35」と決まっているし。とにかく、青がないので、ノートの整理が出来ない。そうか、これは陰謀だ。謀略だ。俺に原稿を書かせない為の……。それに最近は原稿依頼はグッと減ったし。連載は次々となくなるし。それもこれも「幸せの青いペン」がないからだ。おーい、犬井よ、原理パワーで探してくれよ！手帳だって探してくれたじゃないか。「乳出し」ばっかりしてないで、もっと有意義なことに〈原理パワー〉を使えよ。

「でも、原理パワーも怪しいもんだ」というメールも続々と来ている。チチンパイパイさん、セバスチャンさんだ。犬井に霊的モンデールしてもらったけど、効果がなかったらしい。そんなこと俺の知ったことか。こっちは紹介しただけだ。トラブルは当人同士で解決してくれよ。

そうだ。「原理パワーはニセモノだ。その現場を見た！」という告発のメールもあったな。なんでも、4月13日（金）に渋谷でネット仲間の飲み会があったそうだ。俺は現場にいなかったから分からんけど、その時、座興で腕相撲になったそう。どっかの専門学校の女の子は結構強くて、男の子も何人か負けた。「じゃ、わたしがやりましょう」と犬井が出た。体重だけでもその子の3倍はあるし、何せ〈原理パワー〉だ。腕を組まなくても倒せるはずだ。由美かおるのお師匠さんの西野さんは合気道の達人で、相手に触れないで人間を吹っ飛ばすことが出来る。あれと同じことを出来るはずだ。だから皆、固唾を飲んで見守っていた。（以下次号）

なんて遊んでちゃいけない。二人はガッチリと腕を組み、「ハイッ」という行司の声で勝負は始まったと思ったら数秒もしない間にコテンと犬井は負けた。皆、啞然としていた。「何が原理パワーだ、馬鹿野郎」「詐欺師め！ 金返せ！」とさんざんだったらしい。チチンパイパイさんも、セバスチャンさんもその場にいたのならインチキは分かったはずなのにね。そうだ、「SPA!」に載せようかな。「堕ちた“超能力者”、犬井太一（ふといち）の偽“原理パワー”」とタイトルをつけて。

あれっ、最近、似たような原稿を書いたな。思い出した。先々週号に載ったやつだ。「堕ちた“革命家”、外山恒一のストーカー裁判」だ。情けないというか、面白い裁判だよ。しかし、ストーカーで訴えられてんだからね、天下の革命家も。外山は以前は「SPA!」の「中森文化新聞」によく登場した。「オレは革命家だ。だから女が必要だ。世界革命戦争の従軍慰安婦を求

む！」とやった。おいおい、天下の公器だよ。こんなことかいていいのかよ、と思った。要は「セックスやりたい！ 誰かタダでやらせてくれ！」ということじゃないか。SPA!も、よくこんな記事を載せたもんだ。フェミニスト団体は抗議しなかったんだろうか。あるいは、「従軍慰安婦」はいなかったといってる保守オヤジたちも抗議しなかったんだろうか。

でも、こんなものに「志願」する女はいないだろうと思った。ただ、気になって電話した。はじめは、「まだ一人もいません」という。ホッと安心した。ザマーミ口と思った。「ただ、変なオヤジから抗議電話がありましたよ」という。当然だ。抗議もするわな、と思った。そして、「まてよ」と思った。それは「抗議」じゃなくて「応募」だったんじゃないのか。男の「慰安夫」だよ、きっと。いいじゃないか、ホモだって。やってやれよ、と言ったら、「そうですかね」と言って真剣に悩んでいた。

でも、それから一週間経って、「とうとう本物の女が応募してきましたよ」と言う。「それで？」と聞いたら、「当然、しましたよ。相手は慰安婦なんだから」と言う。自分のアパートで、タダでしたんだと。その後は、何人応募があったのか知らない。全く何を考えているんだ、日本の女どもは。許せん。そう憤慨していたら、その相手はなんとあの（若き日の）赤坂嬢だったという噂だ。（神楽坂からの情報だから、真偽の程は分からんが）じゃー、「35歳・聖処女」という肩書きは嘘だったのか。チクショー。

まア、そういう「怒り」と「妬み」があったんで、今回の「ストーカー裁判」については徹底的に書いてやった。そしたら「抗議」が来た。ウルセー奴だ、こんな細かいこと、どうでもいいじゃねえかと思った。「SPA!」で「抗議」を載せようと思ったが、やめた。だって……。

だから、ここでその「抗議」を紹介してやろう。しかし、人のことを「文章がヘタクソだ」なんて、よく言うよな。こんなことを面と向かって言ってきたのは、赤坂と神楽坂ぐらいだよ。まア、これを読んで、再び「SPA!」に目を通してくれよん。以下、外山恒一からの〈抗議文〉だ。

「メチャクチャに書かれてるよ」などという電話を、東京の友人からもらったが、九州での発売日16日に現物を入手して読むと、まあ、想像の範囲内の“鈴木さんらしい”文章である。表面的にはぼくを“罵倒”しているが、読む人が読めば、事件の“真相”がおぼろげに浮かんでくるように、工夫して書いてくれていると感じた。そもそも鈴木邦男は、友人で「反天皇制右翼つまりファシスト」でもある青狼会総統・佐藤悟志がかつて評したとおり、“推敲の足りないライター”である。事実誤認や“書き飛ばし”がやたらと多い。はっきり言って、文章もヘタクソである。鈴木邦男に電話して、今日の裁判について「ぜひ書きたいと思います」という返事もらった時点で、今回のような、多少不本意な記事が出ることはある程度覚悟していたので、わざわざ訂正など求める気はないが、一応、事実誤認をこの場で指摘しておく。

①法廷で「職業」を問われて「革命家」と名乗ったのは、「重信房子に次いで2人目ですよ」などとぼくが言ったという箇所、完全に間違いではないが、ぼくは「今年2人目」と云っている。この書き方では、まるでぼくが無知に感じられる。

②ぼくが「(かつて)『反管理教育運動』などを闘い、今は『日本破壊党』を率いる」という箇所。ぼくが破壊党を主宰していたのは93年から95年にかけてであり、その後ぼくが主宰したのが「革命結社・ユルサン」、「自由民権運動・ラジカル九州」、「無職青年社」、「だめ連・福岡」などであるが、現在はとくに何もグループを持っていない。ちなみに今回の

裁判にもっとも関係の深いグループは、98年から99年にかけて主宰した「ラジカル九州」である。

- ③「A女」を殴ったことについて、ぼくが「その点は謝罪しました」と云ったという箇所、「答弁書」を読めば分かるように、ぼくはそんなこと一度も「謝罪」などしていない。
- ④「A女、B男とも同じ革命党派の同志だった」とぼくが云っているという箇所。「A女」は上記「ラジカル九州」のメンバーであり、つまり「同志」だったが、「B男」はその周辺人物、つまり「シンパ」程度の存在にすぎなかった。
- ⑤「人民内部の矛盾だから権力が介入するのはおかしい」とぼくが云っているという箇所。ぼくは現在、毛沢東主義ではないので、こういうコトバ遣いはしない。たぶんぼくが吉本用語で云っている「『対幻想』の領域に『共同幻想』の領域のルールを持ち込むべきではない」という原則を、鈴木邦男なりに“翻訳”したものであろう。

以上が外山の文だ。うーん、これが「事実誤認の指摘」かね、と思ったよ。こまかい奴だ。短い文章だから、端折ったり、簡略化するのは仕方ないじゃないか。それを「間違い」といわれてもなー。実は、「SPA!」はもっと面白い話も聞いたし、「答弁書」にも面白いことが書かれていたが、それを載せられなくて、残念だった。実は、「なぜ、そのA子に執着したのか」を聞いた。そんなに美人なのか。肉体がいいのか。話が合うのか……と。「誰が見ても美人だというでしょう」と言う。タレントで言えば本上まなみのようだという。そしてこう言っている。

〈A子はもともと優柔不断で主体性がなく、周囲の意見にすぐ影響され、左右されるタイプの女性です。私と活動を共にしていた頃は私の方針に付和雷同し、私との関係が切れた後は、元従軍慰安婦たちの裁判支援運動への参加を足掛かりに、私が敵対する従来型の左翼市民運動、とりわけフェミニストたちのグループに深く関与するようになりました。例えるならば、かつてアナキスト・大杉栄の愛人でありながらこれを刺して訣別し、後に悪質な女性「解放」運動を展開した神近市子のようなタイプといえましょう〉。

じゃー、そんな思想的な同志であり、思想的な闘いなのか。さしずめ、外山は大杉栄なんだな。「自由恋愛」を大杉にならって実行しようとして、刺され（訴えられ）たわけなのか。そして、今回の裁判はこんな深い意味があり、深い陰謀があると言うんですよ。

〈今回の裁判は、表面的にはありふれた傷害事件、ストーカー事件ですが、かねてより、ある意味「裏切者」であり「鬼っ子」的存在である私の活動を継続不能に追い込みたい福岡の左翼市民運動と、そのような運動とは一線を画しながら福岡の若い潜在的不満分子をわけのわからない作風で次々と魅了し糾合し左傾化させる私の存在を苦々しく思っていた福岡県警との利害が、「外山を潰せ」の一点で一致したために成立した本質的に政治的な裁判であるというのが私の見解です。私はフェミニズムを現代のスターリニズムであると考えていますが、ですから今回の裁判を私は、国家権力とスターリニストとに同時に対峙する、古い言葉で云うところの、「反帝反スタ闘争」と位置づけて行動してゆく決意です〉

凄いですよね、「反帝反スタ闘争」だなんて。これは「SPA!」でぜひ書きたかった。でも紙面が足りなくて、涙をのんで割愛したんですよ。機会があったら、もう一回やってみたくけど、ダメでしょうね。しかし、外山も、いろんな連中からいじめられ、陰謀、謀略で潰されようとしとるんだね。大変だ。俺も青のサインペンを取り上げられ、謀略で潰されようとしてい

る。

「SPA!」では外山事件のあとは、「朝日新聞立てこもり事件」の話を書いている。これを3回やって、その後は、アッと驚く展開になる。

<お知らせ>

4月25日（水）の19:00から、新宿のロフトプラスワン（03-3205-6864）で、木村三浩氏（一水会代表）の「右翼は終わってねえぞ!」があります。ここには何と、「ロス疑惑事件」で無罪になった三浦和義さん、謎の怪物プロデューサーこと、康芳夫さん、そしておいら、鈴木邦男がゲスト出演します。ぜひ聞きに行きましょう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張4月30日 はじめに「聖書」ありき

「祈りを捧げていれば、守護霊様や宇宙人がアイデアを授けてくれます」と言われた時にはビックリしましたな。ジョークだと思ったけど彼女は真面目な、思いつめた顔で言う。本気かもしれないと思った。

こんな衝撃的な発言をした人は漫画家の辛酸なめ子さんだ。それにしても凄い名前ですよ。今、「ガロ」や「サイゾー」に連載している売れっ子漫画家です。僕は今、「裏BUBKA」（コアマガジン）で、「クリエイター養成特別講座」を連載している。第一回は「カリスマ編集者」末井昭さんで、第二回がこの辛酸さんだ。

僕は昔から疑問に思っていた。漫画家はいつ、どこで、どうやって、ヒントを得るんだろう。アイデアを得るんだろう……と。これは、「クリエイター養成講座」としては、ぜひ聞いておきたいことだ。漫画家に全く付き合いがない時は僕はこう考えた。彼らは我々普通人とは全く違う、「いっちゃった人」だ。朝から酒、タバコ、クスリを飲み、ラリっていて、それで新宿、赤坂と遊び回り、セックスしまくり、その中で幻覚も生まれ、とんでもないヒントも得られるのだろう。破滅型の生活をしてるから破滅型のヒントやアイデアが生まれるのだろう……と。

だが何人かの漫画家と知り合うようになると、この考えが間違っていることに気付いた。竹中労さんのパーティで、あの巨匠・手塚治虫さんに会った。立食ではなく、丸いテーブルに座る、座席指定制の会だった。何と手塚さんの隣りに僕の席があった。竹中さんの計らいなのか。狂喜して、いろいろとお話を聞いた。真面目な人だなあと考えた。そのずっと後、「伝染（うつ）るんです」の吉田戦車さんに会った。プロレス会場で佐山聡さんが紹介してくれた。大人しくて、暗くて、ボソボソと喋る。「いつ、あんな突飛なことを考えるんですか」と聞いたなら、「机に向かって必死で考えるんです」と言う。毎日、決まった時間に〈仕事〉として机に向かう。何かサラリーマンじゃないか。そんなんで、いいアイデアが沸くのか、と思ったけど、沸くんだね。不思議だったよ。

あのエッチで天真爛漫な漫画「まんだら屋の良太」を描いている畑中純さんも、真面目な人だ。女と見たら力づくで押さえつけてやりまくってると思ったのに、「いや、そういうシーンばかり描きまくってるから、それで発散しちゃって、もう性の欲望はないんですよ」という。「ケンペーくん」のならやたかしさんも同じことを言う。でも、若くてデブの女が好きだと言ってた。「やせたら別れる」と言ってる。その女性から聞いても、「マンガで発散するから、いやらしいことはしない。プラトニックな関係だ」と言う。

ウン、漫画で性欲を発散するなんて、そんなことがあるのかな。こっちがシロウトだと思って嘘をついてんじゃないのかな。だって腹がへってる時、いくら食べ物の漫画を描き、食ってるシーンを描いたって空腹は満たされないじゃないか。又、トイレに行きたい時、オ

シッコしてる漫画を描いたら、それでスッキリするわけじゃないだろう。食欲、排泄欲はダメだけど性欲だけは昇華されるなんて。それは誤魔化しだ、言い逃れだ、と思うんだけど……。

あと、「赤色エレジー」の林静一さん、「ゴルゴ13」のさいとう・たかをさん、「リスベクター」の松田洋子さんなどを知ってるが、皆、真面目だ。赤坂みたいに酒を飲んで乱れることもない。見沢みたいにクスリもやってない。乃木坂じいやみたいに乱れた恋愛関係もない。皆、家族を大切にしている。もっとも松田さんは夫に逃げられたんで、大切にしようがない。それでも刃傷沙汰にはならない。漫画家なんだからその位やってみて、それを漫画にすりゃいいのに、しない。真面目な人ばかりだ。そして、仕事の時間はキチンと机に向かい、机の上でアイデアを考え、漫画を描く。と皆、一様に言う。でも、でも、そんなことで、あんなに面白い漫画が描けるんだらうか。不思議だ。

だから、辛酸なめ子さんに会った時は、そこだけを集中的に、しつこく聞いた。そしたら、この冒頭で書いた言葉が出てきたんだよ。ヒントは自分で「考えつく」ものではなく、外から「与えられるもの」だという。よく、インスピレーションていうが、これは〈神〉から与えられるからだ……と。「こんなことばかり言ってるから私って〈電波系〉って言われるのね」と言う。電波系っていうよりもむしろ、危ない宗教系じゃないのか。もしかしたら統一教会？そこで、「あの一、犬井でぶいちって知りませんか？」と聞いたら、「知りません。猫田めぐみなら知ってます」。誰なんだ、そりゃ。

そうだ、前から聞こうと思っていた。辛酸さんの単行本は『ニガヨモギ』（三オブックス。857円）という。「で、ニガヨモギって何ですか？」「聖書からとった言葉です」。やっぱりそうか、宗教だよ、この人は。この本の中に該当する箇所が引用されていた。

〈私の悩みとさすらいの思い出は、ニガヨモギと苦味だけ〉 （旧約聖書 哀歌 3章19節）

この人、どこの出身だろうと思って、本の裏を見た。「本名・池松江美。1974年生まれ、彩の国在住。東京学院高校を経て、武蔵野美術大学短期大学部グラフィックデザイン専攻出身。……」ここで、「東京学院高校」って、もしやと思った。青山学院、明治学院、東北学院……と「学院」のつくのはミッションに多い（全部がそうかもしれない）。聞いたらそうだという。それも中学、高校と6年もミッションにいたそうだ。毎朝、聖書を読み、讃美歌を歌い、「聖書」の試験もある。だから『ニガヨモギ』だったのか。それで、「実は僕もミッションなんですよ」と話に花が咲いた。

そうだ、「聖書」は、箴言、警告、教訓など、いい言葉の宝庫だ。さいとう・たかをの「ゴルゴ13」の単行本のはじめにも必ず「聖書」の言葉が出てくる。ゴルゴは今まで何百冊も出てるが、全部違う言葉が書かれている。それだけ、ことばの宝庫なんだ。最新刊にはこんな言葉が引かれている。

〈恵みの御業は神の山々のよう  
あなたの裁きは大いなる深淵〉 （旧約聖書 詩篇36節7章）

もしかしたら、ゴルゴはミッション出身かもしれない。それはないか。やってる仕事は「ミッション・インポシブル」やけど。じゃ、さいとう・たかをがミッション出身かな。でも

余り学校は行ってなかったというし。

僕なんかは、サインを求められるとよく聖書の言葉を書きますよ。昔、桂文珍さんと「サンデー毎日」で対談した時、「生きてる上でモットーとされてる言葉を書いて下さい」と色紙を渡された。だから新約聖書の中のこんな言葉を書いた。

〈義のために迫害されてきた人たちは幸いだ。天国は彼らのものだから。ミッションスクール出身の民族派、鈴木邦男〉

文珍さんは、「ヒャー、最後がキマってますね」と言っていた。落語家にほめてもらってうれしかった。「鈴木さんはいちばん左っぽい右翼ですね」とも言っていた。

話を戻す。どうして「辛酸なめ子」なの。そんなに辛いことばかりあったのか。「おしん」のように。じゃ、俺だって「辛酸なめ男」だ。

「いえ、そんな辛いことはありません。高校の国語で、“辛酸”という字を習い、“これはいい”と思ってペンネームにしたんです」

エッ、それだけの話なの。なーんだ、ちょっと拍子抜けだ。いや、母親に漫画を全部燃やされたことがあったそうだ。やっぱり辛酸をなめてたんじゃないか。

「それも違うんです。漫画を燃やすとその煙が天上に届き、漫画の神様が読んで有名にしてくれるんです。だからやったんです。そろそろもう一回、やろうかな」。

再度、燃やさなくとも十分に有名だよ。

ともかく、まだ読んでない人は、本屋で買って読んでくんなまし。たとえば、どんな漫画かって？ 字で説明するのは難しいな。たとえば「宇宙連載計画」。こんな小さな日本で勝負したくない。私の目標は宇宙だ。そして宇宙から依頼があった日に備えて、セッセと描きまくる。「無重力マンガ」とか。星の明るさに合わせて漫画も明るくなるとか。他にはですな、「男っち」と「おふくろの味」が好きですよ。凄いなーと唸ってしまった。前者は、「たまごっち」からヒントを得て、「男っち」をつくる。男の子をゲーム機かパソコンの中で飼う。メシをやったり、オフ口に入れたり、ねかしたり。

でも、すぐ大人になる、さらに、すぐ中年になり、老年になる。「あっ、もう死んじゃったわ」「じゃ又、別の男を育てなくちゃ」と、次々と男を育て、死なせ、新しい男を育てる。楽しそうですね。僕も「女っち」がほしい。これさえあれば友達がいなくても、もう大丈夫だ。

「おふくろの味」はですね、大衆食堂で思いついたんだそう。嫁姑が喧嘩している家がある。よくあるよね。嫁は憎たらしい姑を殺してしまい、埋める。いや、違った。料理する。そして夕食の時に夫に食べさせる。何も知らない夫は食べて大感激。「うん、これこそオフ口の味だ!」。こわいですね。「ハンニバル」みたいですね。

そうそう、この「裏BUBKA」には辛酸さんと僕の写真が出ている（当然だが）。でも、あら不思議。僕は眼鏡をかけている。それも変な眼鏡だ。実はこれ、辛酸さんにももらったお手製の「印象派メガネ」なのだ。このメガネをかけると世の中の全てが印象派の絵画のように美しく見えるのだ（神楽坂注・ただの老眼鏡じゃないんですか?）。「これは子々孫々、家宝にいたします」とお礼を言った。その他、赤い糸が相手に届く「運命の赤い糸指輪」とか、いろいろなを作って売っている。中野の「タコシェ」で本当に売っている。又、あこがれのサーヤ姫に扮した絵葉書まで作っている。あら、そういえばお顔も似てらっしゃる。

辛酸さんはミッションを出て、その後ムサビ（武蔵野美大）に入ったんですね。優秀ですね。そうそう、僕が「生長の家学生道場」にいた時、今を去ること35年ほど前のことだ。同

じ部屋に渡辺啓伍という男がいた。こいつもムサビだった。こんな昔からあったんだ。でもこいつは美大のくせに、掃除はしない、風呂には行かない、きたない。「ムサ苦しいからムサ美というのか」を皆に言われていた。「キタナ・エルゴ・スムス」（われ汚い、故にわれ住む）とも言われていた。それ以来、てっきりムサ美というのは、汚い大学だと思っていた。でも辛酸なめ子さんのように、小ぎれいで、かわいらしい人もいるんだ。「35年間の誤解」が解けてよかったね、ムサビ君。啓伍一人で、どれだけ悪いイメージを当時の人民に与えたことか。ああ！

というわけで、今週は「聖書」のお話でした。アーメン。

お知らせ。あの衝撃の映画「腹腹時計」（渡辺文樹監督）の追加上映が決まりました。5月10日（木）、7時から豊島公会堂です。見逃した人、これが最後のチャンスです。

追加・お知らせ。5月3日は、赤報隊事件から14年目です。来年で15年になり時効です。それで、朝日新聞は総力を結集し、この事件の謎の解明の為に特集をするそうです。5月1日（火）の朝刊でやる予定です。この事件では〈容疑者〉として僕もガサ入れ、別件逮捕を何度もされました。その意味では〈被害者〉でもあります。僕も取材されたので総力をあげて考え、推理しています。なっちゃんのじにかけて（神楽坂注・朝日新聞の宣伝キャラクター、田中麗奈のことか？）、この事件の謎は解いてやる。と心にかたく誓っています。一水会代表の木村三浩氏のコメントも載るそうです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張5月7日

### 狼少女を巡る戸川幸夫の推理

エッ、まさか。本当かよ。と思った。でも、そんな馬鹿なことはない。これは嘘だと思った。しかし、待てよ。ひょっとしたら、彼の言ってる方が本当かもしれないと思った。「勿体つけてねえで早く言えよ、バカヤロー！」と背後霊の赤坂が怒鳴る。こっちもカーっとなって言い返してやった。「“狼オバサン”の赤坂め。お前の事を書こうとしたんだよ！」。

赤坂は嘘ばかりついて、皆にデマを振り撒いている。そんな嘘つきのガキのことを「狼少年」というが、こいつは少年でも少女でもねえから、「狼オバサン」だ。（神楽坂注・冒頭から随分と興奮してますねー。何か、ヤなことでもあったんですか？）

さて、今回は「狼オバサン」の話だ。昔々、あるところに、太って年をとった、くたびれた狼がおりましたとな。そこに赤ズキンちゃんが訪ねてきて……。あれっ、違うな。こんな話をするつもりじゃなかった。そうだ、赤坂が出たからミスリードされたんだ。「狼オバサン」ではなく、もっともっと若い「狼少女」の話だ。といっても、「狼少年」の少女版ではない。「狼少年」といえば、「狼が来るぞ！」と嘘をついていた少年だ。（神楽坂注・鈴木さんのことだから、「東アジア反日武装戦線」ネタかと期待したのに……）本当に狼が来た時も信用してもらえず、あはれ狼に食われちゃった少年の話だ。「だから、嘘をついちゃいけんよ」という教訓になっている。「狼少女」はインドで発見された「狼に育てられた二人の少女」のことをいう。狼に食べられたのではなく、狼に育てられたのだ。ゴリラや狼、ヤマイヌに育てられた、という話は世界中にあるが、ほとんどは〈物語〉で信用は出来ない。ところが、インドの狼少女、アマラとカマラの話だけは、詳しいデータが残っているので他のヨタ話とは根本的に違う。動物作家として有名な戸川幸夫も『どうぶつ白話』（毎日新聞社）の中で紹介している。

アマラとカマラの物語は、昭和30年にわが国で翻訳出版された。アーノルド・ゲゼル著、生月雅子訳『狼にそだてられた子』（新教育協会出版）だ。この話は余りに有名で、僕らも学校で何度も何度も教わった。「だから家庭や学校での教育が必要なんだ。でないと、インドの狼少女のようになるよ」と。〈教育〉〈学習〉がなければ人間は人間に育たないのだ。そのことをこれ以上雄弁に語っている話はない。今さらと思うかもしれないが一応、この話を紹介しよう。

1912年（大正元年）、インドのカルカッタの西南70マイルのところにゴダムリという村があった。ここは未開のコーラ族の村でその春に一人の女兒が生まれた。しかし、母親がこの赤ん坊を窓辺に寝かして仕事している間に狼が来てさらっていった。それから7年経って、別の村でまた女の赤ん坊がやはり狼にさらわれた。親たちも村人も、もう狼に食われたものと諦めた。ところが次の年、この二人の女の子が狼の穴で、狼の仔として育てていることが発見され、ミドナポール教区のJ・A・L・シング牧師が狼を射殺して、二児を救出した。だが、こ

の女の子たちは自分のことを狼とっており、四つん這いで歩きまわり、昼間は暗いところに隠れ、夜になると出てきて腐肉をあさり、遠吠えをする。オオカミそっくりの習性になっていたのだ。

シング牧師の奥さんは、ミドナポールで孤児院を経営していたので、「自分が二児を人間の世界に引き戻してみせましょう」と決意し、孤児院にひきとった。そして上の子にアマラ、下の子にカマラと命名した。夫人はまず退化したり、獸的に妙に発達した手足や首の筋肉をもみほぐして、人間らしい肉づきにすることから始めた。皿から物を食べることに立ち上がることなど獣に芸を教える以上の苦労が続いた。この間のシング夫人の観察日記が貴重な記録になり、これを基にデンバー大学のロバート・M・ジング教授が心理学者としての見地から研究した。そしてこの話は世界中に伝えられた。そして〈教育〉〈学習〉がいかに大切で必要かと僕らも知らされた。

アマラは17才で、カマラはそれよりもずっと早く病死したが、アマラが死ぬ頃にはもう服を着て、他の孤児たちを仲良く遊び、言葉をかたり喋るようになっていた。だが人間としての最も大切な教育期間を狼と共に暮らしていたので、普通の子供並みには知能の回復はできなかったという。だからやっぱり〈教育〉は必要なんだ、となる。ここまでは、いわば世界中の人が知っている話だ。いや〈実話〉だし〈歴史〉だ。日本では教科書にも載っている。

でも、ここで終わったら、ただの〈実話〉を紹介するだけの話だ。何も戸川幸夫の本でなくてもいい。読者も、「そんなことは学校で習ったよ」というだろう。ところが、ここからがアッと驚く展開になる。先走って言えば、〈南京大虐殺〉〈従軍慰安婦〉をめぐる教科書論争のような話になる。というのは、戸川は、この〈狼少女〉の話をさらに詳しく知ろうと思い、インドを訪ねるのだ。カルカッタに着き、インドの旅行社の人を動員してミドナポールとゴダムリ村のことを調べさせた。ミドナポールという市は存在していたが、ゴダムリという村は現在はもちろん過去にも存在しなかった。知り合いのグンデイ王の秘書に手紙を出して確かめた。「いや、インドには狼に育てられた子供の話はざらにある。だから確かだろう」という返事だけだ。子供がさらわれた村はない。特定できない。でも、〈話〉はいっぱいある。奇妙ではないか。

それで今度は、『狼にそだてられた子』の訳者の生月雅子さんに面会を求め、著者ゲゼルのこと、この本の内容について質問した。生月さんも驚いたろう。だって、この話は〈実話〉として誰も疑ってない。完全な「歴史」になっている。それに対し、「ちょっと待ってくれ」と疑問を呈してきた人がいたのだ。戸惑ったし、怒ったろう。でも、確信を持って戸川に対して、「本の内容は児童心理学からいっても極めて正確で、精密であるから、間違っていない」と言った。生月氏も心理学者だ。それにしても訳者のプライドを傷つけられたと、ムツとしただろう。戸川はそれでも納得しない。もっと確かな証拠がほしかった。さらに調べる。でも、ゴダムリという村や、そこで起こった有名な（はずの）事件が現地では全然知られていないのは謎だった。戸川はずっと考えつづける。〈狼少女〉の話はよく聞く。インド全土に、その話はある。しかし具体的なことを調べてゆくと、スーッと、スーッと消えていく。もしかしたら「幻の狼少女」事件かもしれない。一体、どうしたことだ、これは。

何度目かにインドを訪れた戸川は、そこで世界的に有名なインドの動物学者のカイラッシュ・サンカラ博士の家に招かれた。そこで永年疑問に思っていたアマラとカマラの話の真実性について質問した。博士の答えは、余りにも衝撃的だった。博士はこう言ったのだ。

〈アマラとカマラが実在した人間であったことは、彼女らが孤児院に収容されて以来、たくさんの写真に写されていることでわかります。しかし、オオカミに育てられたという点は私は信じません。なぜならば人間の赤ん坊は動物の赤ん坊のように自分から乳房を捜し求めるという能力に欠けているからです。ゴリラやチンパンジーのような類人猿と人間だけが、母親が自分の乳房を持って赤ん坊の口にあてがい哺乳します。ほかの哺乳類は赤ん坊の方から母の乳房に這い寄って乳房に吸いつくのです。母親は自分から乳房を与えません。仮にオオカミが人間の赤ん坊をさらって育てようと考えたとしても人間の赤ん坊は乳が飲めないから死ぬはずで、おそらくアマラとカマラは未開人の村に生まれた精神薄弱児だったのではないのでしょうか。インドには多い話なのです〉

アッと声を出してしまった。これを読んだ瞬間、これが本当だろうと僕は直感的に思った。戸川は一応、謙虚にこう書いている。「私にはどちらが正しいという判断はできない。ただ心理学者と動物学者の見解の相違を面白いと思った」

でも本心では、動物学者の方が正しいと思ってるんだろう。つまり〈狼少女〉の話は〈実話〉でもなく、ましてや〈歴史〉でもない。嘘だったのだ。その嘘を世界中の人々は信じ、教科書にまで書いた。そして、「だから学校にいけ」と子供たちはムリに学校に行かされたのだ。大体、人間の赤ん坊は自分から乳をのみにいかない、だから狼の乳で育つはずがない。こんな基本的なことを見落として、話をデッチ上げたのだ。「心理学者」はいい加減な奴らが多いという見本だ。フロイト、ユング以来、「心理学」は「科学」というよりも「文学」に近いと僕などは思ってきた。読み物としては面白いが、「科学」というには無理があるだろう。動物学の方がまだ科学的だ。(神楽坂注・実際、精神医療の現場でも今や「精神分析」は殆ど省みられてませんからねー。やってる医師もいるにはいますが、異端視扱いを受けている模様。フロイトなどの心理学について知識のない精神科医なんてザラ。心理学は「仮説」の世界で、実証的な学問じゃないというのが医療現場一般の認識。)

では、「幻の狼少女」の話は誰が作ったのか。意図的にか、あるいは伝聞ミスか。インドの〈誇り〉を取り戻そうとして作った話か。逆にインドを誹謗するために作られた、自虐的・反インド的謀略なのか。いや、違う。多分、こうだ。精神的な病気の子供がいた。四つん這いで歩き、狼のように吠える。親は思い余って山に捨てた。赤ん坊の臭いをかいで狼が来た。まさに食わんとした瞬間、通りかかった人によって狼は撃たれ、子供は助けられた。狼と子供が一緒にいたんだから、「狼がさらってきたに違いない」と思った。その〈証拠〉に、子供は狼のように歩き、吠えている。そして孤児院で育てられ、本が書かれた。こんなところが真実ではないのか。

あるいは、孤児院に入れるために誰かが話をつくり、いつか話は本当にされたのかもしれない。いや、〈狼に育てられた話〉はインドにはザラにあるというだろうが、ザラにあるのは〈狼にさらわれた話〉だけだ。そして(残酷なことを言うようだが)、その子供たちは全て狼に食われたのだろう。狼は乳をやる方法を知らないし、子供は自分で乳を飲むことを知らないのだから。

『狼にそだてられた子』は、だから途中から(つまり孤児院に入ってから生活)は本当だとしても、その前半は嘘なんだ。又、タイトルにある「狼にそだてられた」というのが嘘ならば、この本は基本的に「偽書」だと言わざるをえない。偽書たることを知らずに生月雅子は訳し、又、それを僕らは学校で〈実話〉として教わった。

前にこの「主張」で、幸田露伴の『運命・二人の皇帝』を取り上げたことがある。中国の歴史書をもとにして露伴が書いた小説だ。しかし、その歴史書は嘘だった。露伴は地団太踏んで悔しがった。でも、これは小説なんだ。完全なフィクションといえよよかったんだ。話としては本当に面白いのだから。生月氏も露伴と同じ〈運命〉におちた、『運命・二人の翻訳者』だ。一人は中国の偽書をつかまされ、一人はインドの偽書をつかまされた。「唐・天竺」と昔は日本人の憧れの的だったのに。そんな崇拜者の日本人をだましていいのかよ、と思った。いやいや、だまされたのは日本人が悪いんだろう。露伴は小説だからいい。しかし、〈狼少女〉は子供の教育にかかわる、大事な話だ。

もしかしたら、戸川の推理も、僕の推理も間違っているのかもしれない。しかし、ぼくは、これは〈幻の狼少女〉事件だと思う。ではこのことから我々は一体どんな教訓を得たらいいのか。歴史を疑え。教科書を疑え。統一した正しい歴史なんかないんだ。そう思うのも自由。やはり教科書を書き換える必要がある。「南京大虐殺」も「従軍慰安婦」も「狼少女」も全て幻だったじゃないか。教科書を見直し、日本人のプライドを守れ、という教訓を得るのも自由。中国やインドの言うことを信じたのが悪いんだ。中国・インドの干渉的文化侵略を許すな！と思うのも自由。狼少女を使い〈教育〉が必要だと「管理教育」を押しつけたのが悪いんだ、学校なんか行かなくていいんだ。登校拒否しよう。引きこもろう！と思うのも自由。だから、教科書はいろんなものがある、いろんな価値観があってもいい。そう思うのも自由。ともかく、〈一つの疑問〉と僕の推理を提供した。あとは皆が考えたらいい。そして悩んだらいい。

(追伸) 今、必要があって石原慎太郎の昔の対談やエッセイを読んでいる。戸塚ヨットスクールの戸塚宏さんと対談している。『教育は愛か、体罰か』というタイトルで、「文芸春秋」(1983年8月号)だ。石原はこの時、衆議院議員だ。〈体罰〉は必要だと意気投合している。その昔、『スパルタ教育』という本も石原は出していたと記憶している。この対談の中で石原はこんなことを言っている。厳しい教育が子供には必要だ。体罰だって必要だ、と。そして言う。「しついで性格が後天的に変わるのは人間だけなんだね。狼少年がそのいい例だ」。

おいおい、言うのなら「狼少年」じゃなく「狼少女」だろうが。「狼少年」では、ただの嘘つき少年になってしまう。それに、「狼少女」は本当はいなかったし、〈幻の事件〉だ。そんなことを真に受けて、喋ってちゃいけないよな。

というわけで次週へ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張5月14日

## 君も僕もロビンソン・クルーソーだ

今週水曜発売のSPA!は是非、読んで下さい。信じられないかもしれませんが、そういうことなんです。前にもちょっと書きましたが。さて、これからどうなるんでしょうか。

それと、「朝日に出てなかったじゃないか。嘘つき！狼ジジイ！」と何人かから抗議されました。すみません。わざわざ阪神支局の記者が取材に来て、僕には「5月2日にコメントを載せませう」と言った。木村三浩氏（一水会代表）には「5月1日に載せませう」と言った。ところが、5月1日には何も載ってない。5月2日は、「宛先は前もって印刷されていた」という「スクープ」が載っていた。5月3日には大々的に「赤報隊特集」が載ってたが、木村氏のコメントも僕のも見事に落とされていた。「次は6月に再度、特集をします」と書いてたから、その時に載るのかもしれない。あるいは〈新事実〉や〈新発見〉はないし、二人とも、今までと同じことしか言っていないからとボツになったのかもしれないね。まあ、どちらでもいいですよ（神楽坂注・相変わらず自虐的ですな）。

ところで皆さん、連休はいかがお過ごしでしたか。僕は勉強、勉強でしたよ。まるで受験生のように、本を読み、資料を読んでました。そんな時、ぺんてるのサインペンがあったので本当にたすかりました。ファルコンさんが青を6本送ってくれ、そのあとOLさんが6本送ってくれました。これで5年間は大丈夫でしょう。しかし、各社のサインペンを全部使って比較研究してみたけど、ぺんてるは群を抜いてますね。他は全くダメ。企業努力なし。まるでハリウッド映画と日本映画みたい。面白くもない日本映画なんていらんよ。それと同じように、他のサインペンはダメだ。ぺんてるのいい点。①デザインがシンプルできれい。②手にしっとりと収まる。手触りがいい。③うすく油が乗ってるような光沢が何ともいえん。④だから色っぽいい。⑤書き味がいい。

だから、つつい見とれて、頬擦りしたり、なめまわしたりしてます。もうこれは〈愛〉ですよ（神楽坂注・それを言うなら「フェティシズム」では？）。梶井基次郎に『檸檬』という小説があるけど、じゃ、おいらは『サインペン』という小説でも書くか。

と、ここでメールだ。セバスチャンさんからだ。「なんで慎太郎の本なんか読んでたんですか」「読んでねーよ」「先週、読んでたって書いてたでしょう。もう忘れたんですか。ポケ！」。あっ、そうか。「狼少女」の話を書いたんだ。思い出した。慎太郎の本を出すんで取材されたんだよ。それで予習してたんだ。「狼少女の話は衝撃的でした。『今週の主張』は5年前から欠かさず読んでますが、今回のが一番よかったです」。そりゃどうも。欠かさず読んでくれてたのか、5年間も。エッ、そんな前からやってたっけ。いや、おいらが忘れただけで、やっていたんだらう。その頃、何を書いてたか読んでみたい（神楽坂注・いよいよこりゃー本当のポケですな。いい病院紹介しますよ）。「狼少女の話は学校の教科書に載ってました。嘘ばかり教わってたんですな。青春を返せ！と言いたいです。それに教会に通ってた

んですが、そこの牧師さんも言ってました」。そうか、アマラとカマラは牧師に助けられたことになってるんだ。それにキリスト教の孤児院で育てられたんだ。だから、この話はキリスト教のCMにもなっていたんだ。「でも嘘だったんですね。悔しいです」。

ここでハッと気がついた。「セバスチャン」というハンドルネームは聖セバスチャンからつけたのか。キリスト教徒だから。体に矢が刺さって苦悶の表情を浮かべている殉教者・聖セバスチャンの絵はよくいろんな画家が描いている。三島由紀夫はセバスチャンになりきって写真まで撮っている（神楽坂注・この写真は現在、新潮文庫から出ている『写真集 三島由紀夫 '25～'70』で見ることが出来ますね。撮影は篠山紀信です）。石原慎太郎は「悪趣味だ」と嘲笑してたけど。ともかく、そのセバスチャンからつけたんだ。もしかしたら本人が霊界からメールを送ってるのかもしれない。そうだ。霊媒オバサンがいるんだから、霊媒メールがあってもいいはずだよな。パソコンや携帯が神がかりになって、突然、霊界通信をやりだす。すごいよな。最近、映画であったよな、「オーロラの彼方に」ってのが。オーロラで時間・空間がゆがんでしまい、30年前の自分と電話できるんだよ。だったら、霊界メールも出来るはずだ。最近落ち目の「原理パワー」の犬井でぶいち君、やってみるよ。名誉挽回だ。失地回復だ！

ところで、セバスチャンさんだ。おいらの「この世」からの質問に対し、「無知！」と一喝。エッ、そりゃないだろう。「あなたは『飛ぶ教室』を読んだことがないの？」だって。なんだ、そりゃ。豊島園に年増と行った時（これギャグ。笑うように）、「魔法のジュウタン」に乗ったことがあるけど、あれのこと？ こわかったな。違うって？でも、教室が飛んでどうすんだよ。竜巻か台風で飛ばされる。あるいは川が氾濫して流されて、流れついたのが未来の世界だったとか。そんな話かな。樫原かずおのマンガに「漂流教室」ってあったよな。あれみたいな話かな。そしたら再び「無知！」と罵られた。「エーリッヒ・ケストナーの小説です」。ふーん。それでメールは終わりだ。さっそく高田馬場の芳林堂に行って、カウンターで聞いた。「岩波文庫か新潮文庫にあるはずですけど……」「ないですね。あ、講談社からハードカバーで出てます」。で、買ったなら、なんだ子供用の本じゃないか。「少年少女世界文学館⑮」にケストナーの『飛ぶ教室』がある。家に帰るのももどかしく、同じビルの喫茶店「ジャンナイ」でコーヒーを飲みながら読んだ。2時間半かかって読破してやった。ザマーミロ。ふーん、こんな話だったのか。学校じゃ習ってねえや。この本は活字も大きいし、挿絵もいっぱいあるし、注釈もあるし、本当に読みやすい。「読みたい」という気を起こさせる。読んでいても、もっともっと読んでいたいという気持ちになる。岩波文庫とか新潮文庫なんて、そんな企業努力が何もないもんな。「別に読まなくてもいいよ」とツンとすまして、本棚に並んでいる。生意気だ。我々を馬鹿にしているよ。「内容があるんだから外見を飾る必要なんてないのよ、フン！」と言ってるようだ（神楽坂注・岩波文庫発刊の辞にもそう書いてありますね）。頭にくる。岩波文庫なんて昔の活字のままで全く変えてないし、活字は小さいし、読みにくくてしかたない（神楽坂注・おまけにすぐに絶版になる。だらしのねー出版社だ）。頭にきたから、持ってたレモンを本棚の上に置いてきた。実はあれは時限爆弾で、今頃は本屋が吹っ飛んでいるだろう。という話なんだよ、梶井基次郎の『檸檬』のラストは。

そうそう、『飛ぶ教室』だ。ここにセバスチャン・フランクという少年が出てくる。頭がよくて読書家で、科学者志望の少年だ。よくメールをくれる人は、この少年にあこがれて、ハンドルネームにしたわけか。

子供向けの本なんて馬鹿に出来ないね。読みやすいし、楽しいし、勉強になる。ついでにそばにあった「世界の冒険文学」（講談社）を3冊買って来た。これは、全24冊で、前から少しずつ読んでた。もう少しで全巻読破だよ。この日は、D・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』とR・L・スティーブンソンの『宝島』、それにコナン・ドイルの『失われた世界』を買った。

ロビンソン・クルーソーの話は誰でも知ってるようで、本当はよく知らないよね。たとえば子供向けでも、一冊きちんと読んだことのある人なんてあまりいないよ。最近映画になった「キャスト・アウェイ」だけ、あれも現代のロビンソン・クルーソーものだよ。やっと帰ってきたら奥さんは再婚してたんだ。夫はもう死んだと思って。夫のほうは妻に会うことだけを願い、それだけを思って生き抜いてきたのに。かわいそうやね。じゃ、今の夫と別れるか、さあ、どうする、どうする……と悩む。そこの所が現代版の「ロビンソン・クルーソー」なんだよ。

それで、本物の『ロビンソン・クルーソー』を読んでみた。驚いたね。いろんな発見があった。意志の強い、ストイックな人間かと思ってたら、それだけじゃない。かなり残酷だし、人種差別主義者だし、結構ずるいんだ。それに、たった一人で島の生活を耐え抜いたのは実は「聖書」があったからなんだ。「聖書」があったから、励まされ、生きることができたのだ。今のおいらと同じだ。聖書があるから、ハゲまされ、生きている。僕らが子供の頃は、そんなことは全く教えられなかった。「基督教の宣伝」になってはまずいと日本の教師たち（文部省）は思ったんだろう。根性の狭い奴らだ。事実は事実としてキチンと正しく教えなくっちゃダメじゃないか。

クルーソーは元々は基督教徒ではない。たまたま「聖書」を手にする。そして「聖書」に救われる。その方が物語としても説得力がある。難破船にあった船員用のトランクを開けてみたら、「からだと魂の良薬が入っていた。魂の薬とは聖書のことだ。もちろん、このときまだわたしは聖書を開こうなどと考えたこともなかった」。でも、落ち込んだ時、絶望的になり死のうと思った時、手にしてみると、必ずピッタリと合う言葉に出会うのだ。まさに「魂の良薬」だ。たとえば、「なやみの日にはわれをよべ。われなんじを援（たす）けん。而してなんじわれをあがむべし」（旧約聖書 「詩篇」第50編 第15節）。

又、気持ちが晴れない時に何となくページをめくったら、「われなんじをはなれず、なんじを捨てじ」（旧約聖書 「ヨシュア記」第1章 第5節）に出会う。こういう感動的な話があると同時に、殺伐とした話もある。食人の習慣のある原住民が出てくる（召使のフライデーもそうだ）。しかし、そんな人間でもむやみに鉄砲で殺すのはいけないとクルーソーは思う。だが、白人が食われそうになると、躊躇なく大勢の原住民を鉄砲で撃ち殺す。そしてそれを全く反省していない。殺人をするクルーソーなんて初めて知った。こんなことも子供の時の本には出ていなかった。

ところで、小池滋（東京女子大学教授）は「解説」で面白いことを書いている。作者のデフォーは、イギリスの政治が国王や貴族から民衆の代表に移ろうとした17世紀から18世紀の初めに活躍した。政治のお偉方は御用記者・作家をやとい自分たちの主義・主張を宣伝し、敵をスパイしたりする。その中で筆力のあるデフォーは両方の敵同士から金をもらって働いたこともあったという。したたかというか、今なら「ブラック・ジャーナリスト」と言われたでしょうな。その世界で大もうけしたが、それも嫌になり、文章そのものの力で世の中に認めら

れたいと思う。そんな時、スコットランドの船乗り、アレクザンダー・セルカークという人が、南太平洋の無人島でたった一人で4年以上を過ごし、救い出されるという事件があった。デフォーはそれに飛びついた。でも小説として書いたのでは読者は驚いてくれないと思い、自分の名は隠し、ロビンソン・クルーソーという人が自分の体験を書いたという嘘について書いた。それが大当たりをとった。どこまでもこのデフォーという人はしたたかですよ。

というわけで興味のある人は読んでみなせえ。最後にお知らせ。今村仁司編『知の攻略・思想読本2』（作品社。2000円）が出ました。マルクスについての入門書であり、解決書であり、未来を占う本になってます。三浦雅士と今村仁司の「20世紀現象としてのマルクス主義」がいいですね。それと、「マルクスを語る」というエッセイがあって、僕も右翼学生運動をやってた時の「マルクスとの出会い」について書いてます。題して、「マルクスはステータスだった」。他には上野千鶴子（「他人の再生産」の衝撃）、鎌田慧（「共産党宣言」事始）、藤本義一（マルクス理論を信奉する）、三木卓（おっかない巨人）、久間十義（忘却の岸辺から）……など。面白いし、とても勉強になりますよ。ちなみに管理人の神楽坂は、「作品社は河出書房新社と並んで好きな出版社です」と言っていた。「狼オバサン」の赤坂も読めよ！

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張5月21日

### 新天地を求め俳人か。廃人か。

NHK教育テレビの「人間講座」見てますか。ダメじゃないですか、ゲームやメール、携帯ばかりやってちゃ。ちゃんと勉強し、ものを考えなくちゃ。でも、そんな社会の状況を反映してんでしょか、「人間講座」の科目が少なくなった。前は月～金と週5回あったのに、今は月～水の3回だけ。それに今までは一期が3～4ヶ月あったのに今は2ヶ月ごとになる。教育テレビなんだから視聴率なんか関係なくやってるはずなのに……。 「誰も見なくてもいいから教育番組をやるんだ」という覚悟がなくっちゃ。民放は視聴率を気にするから、アホな若者に迎合したアホなバラエティしかないんだ。日本の危機だ。歴史教科書よりこっちのほうが大問題だ。NHKは頑張れ。そうだ、歴史教科書が論争になってるのなら、こんなことはどうだろう。月曜は「今までの歴史」。火曜は「誇りを持った新しい歴史」。水曜は「反日・自虐の歴史」。木曜は「韓国が考える日本歴史」（つまり、日本人はこういうことを学んでほしいと、韓国政府に「日本の歴史」を作ってもら）。金曜日は「中国政府のつくった日本歴史」。土曜日は、「皇国史観」。日本人は戦前・戦中、どういう歴史を教わったかを知るためにも必要だ。日曜日は「過激派が考える歴史」。左右両翼、宗教、あぶない人々が交替で「日本歴史」をやる。たとえば、ブントの荒岱介が首相になったら、こんな教科書を作るとか……。やっぱり、マルクスから始まるのかな。

まあ僕もいつか「日本の歴史」を書きたいね。思い切り自虐的・自閉的なやつを。日本なんて、ほとんど「コンプレックスの歴史」だからね。そこからいかにして脱却し、苦闘し、〈日本〉を作ってきたか。その涙ぐましい愛と感動の物語だよ。月刊「創」（6月号）には「立てこもりの日本史」を書いている。それは「鈴木史観」（大きく出ましたね）の序論だよ。

そうそう、4月25日にロフトプラスワンの木村三浩氏（一水会代表）のトークライブで三浦和義さん、康芳夫さんに会った。その時、康さんに言われた。「前に一水会フォーラムに行った時、鈴木君が言ってたね。『赤尾敏さんの本を書きたい』って。ぜひやんなさいよ。君のライフワークにしたらいいい」。エッ、そんなこと言ったっけ。話の流れで口走ったのかな。と反省したけど、でも、よく考えてみたらこれもいいな。赤尾敏さん（大日本愛国党の創設者ですよ。日本で最も有名な右翼だ）が生きていたら、こんな「日本史」を書くだろうという本だ。「赤尾敏が見た日本史」か。たとえば、「大東亜戦争は間違っていた。あんな戦争をすべきじゃなかった」とか。衝撃的な内容が満載だ。赤尾さんは当時、国会議員だったが、日米戦争に反対して議会で東条を批判し、懲罰を食っているんだ。別に反戦主義者だからじゃない。

「アメリカは反共の仲間だ。戦争をやるならソ連とやれ！」と言ったんだ。北進論だった。戦後日本はこの赤尾さんの言葉通りになった。だったらあの戦争は必要なかったのだ。それに、若い時は武者小路実篤にかぶれ、自分で三宅島に「新しき村」を作ったこともあるし、社会主

義運動をやったこともある。右翼になってからも、〈革新的〉なことを言ってるのは、この時の体験があるからだろう。「君が代」は子供に強制する前に大人が歌え。国会の開会式で歌え。国会議員はローマの元老院のように白い服を着て、自分の仕事をキチンと自覚しろ。公営バクちに「天皇賞」「高松宮杯」などを出すのはおかしい。やめさせる！……と。

こう並べたら、すごいね。反骨、憂国の人だ。「憂国のドンキホーテ」だ。そういう本もあったな（神楽坂注・たしか、猪野健治さんの本でしたっけ？この辺のことは去年の「創」の10月号の「鈴木邦男主義」に詳しく書いてありますね）。「憂国のコペルニクス」といわれた人もいたな、昔（そう、もう昔なんですよ）。そんな赤尾さんの闘いを書いてみたいね。

ではNHK「人間講座」に戻る。4～5月は、月曜が「言葉の力・詩の力」（ねじめ正一）、火曜が「“きれい社会”の落とし穴」（藤田紘一郎）、水曜が「朝鮮通信使」（神尾宏）だ。特に、「言葉の力・詩の力」がいい。10人ほどの日本の代表的詩人を取り上げながら話してゆく。そして、5月14日（月）だ。アッと叫んでしまった。この日は第7回だが、テーマは「捨て身のコトバ。正津勉と甲本ヒロト」だ。まさかと思った。だって正津勉（しょうづ・べん）さんはよく知っている人なんだ。同僚というか、先輩というか。でも、右翼業界の先輩ではない。ジャーナ専（ジャーナリスト専門学校）の講師なんだ。それも同じ文芸創作科だ。学校でもよく会う。「詩」を教えているということは知っていた。生徒には絶大な人気がある。飲み会でも女子学生が「勉ちゃん！」といいながら群がっている。悔しい。詩を教えるだけでなく、生徒にも作らせている。「自分のセックス体験を書いた女子の詩がよくあって閉口するよ」と言っていた。勉さんの授業は「現代詩」で、僕の授業は「現代史」だ。よく間違われるが、勉さんの方は人気があって、満員。僕の方は「窓ぎわ講師」だから、人気もない。そのかわりに赤坂や神楽坂みたいな奴がたまに紛れ込んでくる。グチを言っても仕方ないな。ともかく驚いた。勉さんが詩人だとは知っていたが、こんなに有名な、実力のある詩人だとは知らなかった。何せ、ねじめが10人の詩人の中に入れてるんだ。テキストには勉さんの写真が4枚も入っている（一番多い！）。

こんな偉い、凄い人だなんて。認識不足で申しわけありませんでした。今度、ちゃんと詩集を買って読んでみなくっちゃ（神楽坂注・今、手に入りやすいものとしては『現代詩文庫77 正津勉詩集』がありますね。思潮社から出てます。代表的な作品のほかに、エッセイや解説なども充実してます）。勉さんは昭和20年生まれだから僕より2才若い。第一詩集『惨事』でデビューした。「瘦身で、カッコよくて、女性にモテて、武勇伝も数々ある。そんな絵に描いたような詩人だったのです」とねじめは言っている。じゃ、今度会ったら痩せる方法、じゃなかった、「武勇伝」を聞いてみよう。

「惨事Ⅲ」にはこんな部分がある。

（……）

嗚いうごめき金冠齒歪め  
髪逆立て爪立ち猪首伸ばし  
あなたのむねをくびを  
ふかぶか絞っていた放していた  
父さん馬鹿な！ そんな！  
わたしはまぶたくちびる

鼻孔肛門をギャッと  
あけていた

怖い詩ですね。「捨て身」の詩だと、ねじめは言います。又、こうも言います。

「捨て身になることで初めて肉体が浮上ってきて、肉体の中で生きる人間の悲惨さが露わになるのです。それは悲惨ではあっても荒廃はしていません。切実なことばは荒廃のしようがないのです」。ではもう一つ、勉さんの詩。「BANG! II」から。

(……)

雨降ってました。  
ぼく鴨居に寝巻の紐一本  
首縊り天井のうえみてました。  
天井のうえ襖斜め斜めに倒して  
父さん母さん髪に陰に塵屑つけ  
むくむく背瘤つくってました。  
げげよげげよげげ  
げげよげげ!

これも怖い詩ですね。今日は正津勉さんの話をして終わりではありません。この「現代詩の天才」が育てた「二人の〈弟子〉」の話をしよと思うのです。前にこのコーナーで「第2の見沢知廉」と言われている鈴木敏春君（ジャナ専2年生）のことを紹介しましたよね。彼は勉さんの愛弟子なんです。授業を受け、詩を創り、指導を受け、そして「ジャナ専大賞」に詩を応募する。そして見事、「ジャナ専大賞」をとったんです。審査委員長は勉さんでした。

敏春君のは「風流夢譚」という詩だった。政治テロや、天皇、腹腹時計、ストリッパー、右翼……なども出てきて過激で怖い話だった。多分、自分の若い頃の「捨て身」の怖さを見たんでしょうな。「ジャナ専大賞にした理由はなんですか」と直に勉さんに聞いた。そしたらこう言った。「タイトルがいいね。今時、こんなタイトルをつける奴はいない。だからそれがまず気に入った」。

よかったね、敏春君。今から必死に勉強し、詩を書きまくり、女で苦勞し、武勇伝を作っていけば、勉さんのような大詩人になれるでしょう。そして、いつの日か、NHKの「人間講座」にも載ることです。

彼にこのタイトルをつけた理由を聞いてみた。するとこういう答えが返ってきた。「昔、作家の深沢七郎が、『風流夢譚』という小説を書いて右翼に脅迫されたでしょう。その時、深沢七郎に右翼から“なんたる無礼者ぞ いさぎよく自決して 大罪を天下に謝せ 一家抹殺を期す 天誅を受けよ”という一通の脅迫状が届いたんですよ。それを讀んだ深沢は“名文だね”とすまして言っていた。そのエピソードを聞いて、『これだ!』と思ったんですよ」。ヒャー、凄いいね。「鈴木先生が昔書いた犯行声明文も名文だと思いますよ」。エッ、なんのこと。身に覚えがないぞ。冗談はやめろよ!

では勉さんのもう一人の教え子。実はこれは天才じゃないが、まあ、「教え子」だ。都立九段高校の生徒たちが「平成の万葉集」ともいべき『マンヨーシュー2000』を編集し、発行した。キャスター、前知事、教師、主婦ら100人の詩が入っている。これは大きな話題に

なり2000年3月30日付の「毎日新聞」でも大々的に取り上げられた。そして、こんなふう

に書いている。  
〈昨年の都知事選に立候補して落選した政治家は「戦破れ無官となりしこの冬も 窓辺に近く寒櫻咲く」と短歌に心境を託した。

一水会代表の鈴木邦男さんは「顔の黒い（「ガングロ」の意）女子高生」を宇宙人に見たてて、「まぶたの裏では、さっきの宇宙人を斬りすてていた」。さらに「日本人はどこへ行った。サムライは、どこへ行った。こんな日本、滅んでしまえ」と、今の社会へのいら立ちをストレートに表した〉

そうです。「もう一人の弟子」とは僕なんです。といっても勉さんに詩を見てもらったわけじゃない。そうじゃなくて、勉さんの授業をとっている女の子に見てもらい、少し直してもらったんだ。だから、間接的に僕は勉さんの「弟子」でもある。と、まあそういうことよ。

毎日新聞でほめられたから、僕も詩人になろうかな。小説はとても難しくて面倒だから。詩人か、俳人か。これを目指そう。その時、カラカラと天上から笑い声が。ハッとと思ったら、背後霊の赤坂だ。「やめときな。今さら、あがいて何をやってもダメだよ。詩人か俳人どころか、死人か廃人だよ！」。ガックリ。全く、赤坂は人を落ち込ませる天才だよ。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張5月28日 作家の世襲は是か非か

前に、幸田露伴の『運命・二人の皇帝』を取り上げたよね。露伴は大文豪で、『五重塔』『風流仏』『連環記』など多数の作品を残している。1867年（慶応2年）～1947年（昭和22年）。本名、成行（しげゆき）。電信修技学校卒。電信技手として北海道に赴任したが、文学を志して職を辞して東京に戻る。その時、お金がなくて野宿しながら上京したという。つまり、夜霧を供にしながら歩いた。というわけで「露伴」だ。

漱石、鷗外、芥川……と並び称せられる文豪だが、今は余り読まれない。管理人の神楽坂も「岩波文庫で何冊か持ってますが、ぜんぜん読んでません」と言っている。高校の文学史でも、「『五重塔』を露伴は書いた」と教えるが、教える先生だって『五重塔』など読んじやいない。こんなもの読む必要はないと思っているんだ。生徒に対しても、「読む必要はありません。それよりも娘の幸田文（あや）は大学受験によく出ますから読みなさい」と教える。そうなんだ。幸田文の作品は入試によく出るし、文庫本も一杯出ている。『おとうと』という小説なんて、一つの小説から5校くらいに出題されている。受験生にとっては幸田文は必読書だ。かわいそうに、お父さんは「幸田文（あや）をうんだ人」。いや男だから、「文を（あや）をしこんだ人」として知られているだけだ。吉本隆明みたいだね。今や「ばななのお父さん」としか知られていない（神楽坂注・音楽家と言えば、カルロス・クライバーの父、エーリッヒ・クライバーみたいなもんですな。って、マニアックすぎるか）。

『民間学辞典・人名編』（三省堂）の「幸田露伴」を見ると、やはり、「文（あや）の父」の側面を強調している。

〈露伴は文学博士であり、文化勲章も授与された著名な作家であるが、それ以前に家庭における父親として、わが子に家事を伝え、暮らしの細部にまで目を向けることのできた生活者として、大きな仕事をのこした人物である。（……）彼の日常を伝える正確な記述としては、娘の幸田文がのこした一連の作品があり、文を育てたという点において、彼の仕事は完結している〉（熊谷真菜）。

たとえば、「雑巾がけ」は「水は恐ろしいものだから、根性のぬるいやつには水はつかえない」という一言からはじまる。はたきのかけ方、障子張り、庭仕事、野菜づくり、料理……など家事一切を露伴は娘に教えた。普通なら母親が教えるのだが、母は亡くなっていた。その後義母がくる。この人は「変な危ない宗教」（なんのことはない、キリスト教なんだが、当時はそう思われていた）にはまっている。娘をいじめる、ヒステリーを起こし、ひきこもる。弟はグれる。父は小言ばかりでうるさい。そんな中、娘の「私」一人がけなげに働き、必死になって一家を支えている。というお話が『おとうと』だ。読んだ時は感動したし、こんなうまい文章はないと思った（だから入試にもよく出る）。でも今、考えると「自己中」な奴だよね。まるで赤坂のようだ。自分だけが正しくて、けなげで、思いやりがあって……と、自分で書いて

るんだもん。「文章を書ける人はいい。私なんか永遠に悪者だ」と義母のつぶやきが聞こえるような気がする。

そうか、だから露伴は文に文章を書くことを禁じたんだろう。大文豪の目には娘など、とてもモノにならんとした。だから書いてちゃだめだ。恥をかくだけだ。と禁じた。その話を信じていたが、どうもそれだけじゃない。娘の性格が分かっていたんだ。文は「偉大な父親が生きてる時はとても作品を書けない」とあきらめていた。だから、じっと待った。そして、父の死後、書き出した。そして父を凌ぐ作家になった。

実は『民間学辞典』を作る時は僕も頼まれて、執筆者の一人になった。「人名編」「事項編」と、合計40位を書いた。その時、「参考資料」として「幸田文」の紹介記事があった。僕は右翼の北一輝、大川周明などを書いたのだが、「人物編を書く上での一つの参考にして下さい」ともらったのだ。たしか「朝日人名辞典」に載ったものだと思う。そこにこんな記述があった。

「露伴の死後、文は待ってましたとばかり文章を書きはじめ……」。ウツと思った。本当に「待って」ただよ、こいつは。幸田文の作品を読むと、「何も書いたことはないのに、家に入ったりしてた編集者の人に“お父さんの思い出を”と無理に頼まれ、断わりつづけていたんだが……」と謙虚に書いている。文章修行など一切してないが、父の思い出を書いたら、すばらしい出来だ。「門前の小僧、習わぬ経を読み」という諺があるが、「やっぱり露伴先生のおそばにいたからだ」「いや、DNAのせいだ（当時はそんな言葉はないか）」……と、編集者はみな、ほめたたえた。そして父をはるかに凌いで作家になった。

でも、本当は「待ってた」んだ。父が活着ている限り私は作家になれない。早く死ね、何なら殺したろうか、とまでは思わなかったが、待ってたんだ。父に隠れてメモをとり、下書きをためてたんだ。だから死後、ドツと作品を出せたんだ。でも、幸田文の文章は本当にうまい。ジャナ専でもよくテキストに使っている。書き写して文章修行をしている人もいるくらいだ。

「木」などは代表的なものだ。他に「流れる」「葬送の記」「崩れ」「黒い裾」「闘」などがある。僕は全集を読破したが、どれも名文だ。

幸田文は一度は結婚するが、30才で離婚し、娘の玉子（青木玉）をつれて実家に戻り、父の晩年をみとる。文、40才の時（昭和22年）、露伴がなくなる。

〈露伴の死をきっかけに、もとめられて書いた「雑記」「終焉」「葬送の記」で注目をあつめ、文壇に登場する〉（熊谷真菜）。

でも、周りの編集者が「もとめる」ようにさせたんだ。いや、文豪の晩年をみとった娘には、だまっけていても、「書いてくれ」と注文はくる。それが一作で終わらなかつた。それは才能があつたからだし、じっと待っていたからだろう。

文は父にされたように、娘（青木玉）には厳しくしつける。はたき、雑巾の使い方から何から何まで。いや、それを口で言うだけでなく作品にも書いた。口でいう時は、まどろっこしくて、つい手が出たという。書きぞめをしてた時など、「だめじゃないの。背中が曲がっているわよ！」と怒号が飛び、思い切り後ろからど突かれたという。それで着物は墨だらけになったという。これは青木玉が書いていた。ひでえ母さんだ。

エッ、幸田文の娘も本を書いているの？ っ。そうなんです、作家なんです。それも、第一作は「母（幸田文）の死」から始まっている。「お母さんの思い出を書いて下さい」と頼まれ、「とても、とても……」と固辞していたのに。文とまったく同じケースだ。僕は青木玉は

何冊か読んだが、もういいやと思った。国会議員の世襲じゃあるまいし、作家も世襲されたらたまらない。露伴、文は偉大ですよ。でも、あとはもういいよ。それなのに、バカな編集者がおだてて書かせる。能のない奴らだよ。

ところで、もっと怖い話がある。幸田文が死んだ時から青木玉は作家としてスタートするが、その玉の作品の中で、「おばあちゃん（幸田文）が亡くなったので、ウィーンに留学している娘を急ぎ帰らせた」という記述がある。嫌な予感がした。そしたら、この娘も今や作家になっていた。おいおい、こんなことありかよと思った。

それが青木奈緒だ。昭和38年生まれ。じゃ、37才か。学習院を出て、ウィーンに留学。その後、通訳、翻訳の仕事をしてドイツ滞在（ずっとそこにいればいいのに）。平成10年、帰国し、『ハリネズミの道』でデビューした。産経新聞（01年3月11日）には新著『くすみ街道』（講談社）が大々的に紹介されていた。写真も出ている。ひいおじいちゃん（露伴）になぜか似ている。かつては「書かない」とっていた「文芸一家四代目」なのに……。でも、「日本とドイツ。揺れ動く心」をどうしても書きたくて書いたという。そして、産経の記事のラストにはこう結ばれている。

く「最終的にはどこで自分と折り合いをつけ、満足を見いだすか。否応なく変化していく内面をよく観察していれば、生きやすくなるんじゃないかなと思います」。優しかった祖母（幸田文）の写真を背に、「書く」ことを選んだ今、真っすぐに話す（神山幸子）。

というわけで今週はモロ、文学史のお話でしたね。「日本のドストエフスキー」といわれる見沢知廉先生も、娘が作家になり、そのまた娘が作家になるのでせうか。そして、危険なあのDNAを受け継いでいくのでせうか。

ではお知らせ。掲示板にも書きましたが、渡辺文樹監督の映画「腹腹時計」の追加上映が決まりました。5月28日（月）午後7時から、日本橋公会堂です。最寄駅は地下鉄半蔵門線の水天宮前駅です。「鈴木邦男のタコペでみました」と言うと、監督に喜ばれます。

追加。

5月20日のデモ、おつかれさまでした。「FOCUS」にのってましたね。皆、たのしそうですね。ジグザグデモをしたりして、僕も行きたかったです。残念です。当日は京都で全有連大会に出ました。その帰りの新幹線で、女子プロレスラーの神取忍さんとバッタリ会いました。この話は又、いつか。

掲示板では、いろいろ、励ましのおことば、メール、ありがとうございました。ヒマになったら、「引きこもり」をやって本ばかり読んでよと思っていましたが、「ヒマならやってくれ」と単発の仕事をいっぱい頼まれて、かえって忙しくなりました。だから「立てこもり」じゃなかった、「引きこもり」は夏以降にやります。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張6月4日

## 高校は全部、ミッションにしる！

エッ、どうしてこの人がキリスト教のことを書くのかと驚いた。不思議に思った。それでつい買ってしまった。井上章一『キリスト教と日本人』（講談社現代新書）だ。井上さんのことは前にも書いた。91年に出した『美人論』（リプロポート）が大ベストセラーになった。その後、『美人研究—女にとって容貌とは何か』（河出書房新社）、『おんな学事始』（文藝春秋）を出している。『美人論』出版の翌年（92年）に僕は「月刊タイムス」で対談した。その時のタイトルは「美人はかくも遠きもの—それでも僕たちは美人が好きだ」。これは僕の対談集『右であれ左であれ』（エスエル出版会）に入っている。なかなか楽しい対談だったし、教えられることが多かった。

実は、井上さんとの対談は、『闘うことの意味。—プロレス・格闘技・人生』（エスエル出版会）の中にも収められている。井上さんは熱烈なプロレスファンなのだ。この時は、「プロレスという快樂」というテーマで語っている。この本には他に、佐山サトル、景山民夫、夢枕獏、河内家菊水丸さんとの対談が入っている。プロレスや格闘技に興味がない人でも読める。右翼や左翼も〈格闘技〉だし、生きていくこと自体が〈格闘技〉なんだから。

井上章一さんは、美人研究家で有名で、その実、プロレスファンでもある。そう思われているが、本当の顔（というか本職）は建築学の学者なんです。1955年、京都生まれ。ということは今、46才か。四捨五入して50才だ（別にすることはないが）。京都大学工学部建築学科修士課程修了。現在、国際日本文化研究センター助教授。専攻は、建築史。だから専門分野の本もある。『つくられた桂離宮神話』（弘文堂）、『法隆寺への精神史』（弘文堂）など。

これで井上さんの三つの顔が明らかにされましたね。美人論研究家、プロレスファン、建築学の先生。「七つの顔の男だぜ」という映画が昔あったな。片岡千恵蔵の。七つの顔といえ、七色仮面もあったな。子供時代、夢中で見てたよ（神楽坂注・その映画、40年以上も前ですよ。このHPの読者でそんなのわかる人いるんですか?）。でも、もう四つ足りない。井上さん、そこで欠けた残りの四つを埋めるべく、最近努力している。たとえば、『霊柩車の研究』という本も出していた。これで四つ目、そして今回、「五つ目の顔」として出したのが『キリスト教と日本人』だ。

でも、無理があるんじゃないの。手を広げすぎじゃないの。キリスト教徒でもなくせに、と思った。まあ、僕のようにミッションスクール出身だというのなら、少しは関係があるけど……と思った。そして読んだ。ギョツ、詳しい。面白い。それに何と、「おわりに」を読んでアッと叫んだ。井上さんはミッションスクール出身だ。それも、中・高と六年も。僕よりも長い。うわー、申し訳ありません。知らないこととは言え、本当に失礼しました。「おわりに」ではこう書かれていた。

〈中学と高校は、カトリック系のミッション・スクールへかよっていた。京都のヴィアートル学園・洛星である〉

授業には「宗教」の時間もあったが、信仰心はめばえず、ただ知識が漫然とふえていった。

〈それでも、六年間のすりこみはあなどれない。キリスト教についての知的好奇心は、その後もずっとたもたれた〉。

その好奇心でこの本一冊を書いたわけだ。凄い。それにしても、ミッション・スクールを出た人間って、皆、「下らない。バカバカしい。キリスト教の知識が増えただけだ。何も役に立たない」と言う。中学・高校でキリスト教に感動し、洗礼を受けた奴なんて、まずいない（女の子はムードに酔って洗礼を受ける人が、ほんのわずかいるかもしれないが）。僕も高校はミッションだったから、これは断言できる。あの狼オバサンの赤坂嬢も、二年間、ミッションだった。とすると、日本のミッションスクールは果たして存在価値があるのか。そういう問題になる。毎朝、聖書を読む。讃美歌を歌う。聖書の授業があり、試験がある。だから聖書の目次を暗記する。「マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝、使徒行伝……」と憶える。しかし、全く意味がない。知識は増えるが、本来の目的の「信仰」に触れる人はいない。いや、ほとんどが、キリスト教を信じない。井上さんも言う。〈だが、信仰心はまったくめばえなかった。聖書も、信じる気になれない。ばかばかしいという感想のほうが、どうしてもさきにつた〉。

そうなんだよな。「処女マリアがキリストを産んだ」とか、「キリストは奇蹟を起こした」「死後三日目に復活した」と言われてもなあ、と思った。科学を超えた世界にどっぷり漬かっている、こういう科学を超えた話を聞かされるのならいい。しかし、一方では科学的な授業はある。物理・化学・生物……と。ダーウィンの進化論だって、ちゃんと習った。それでいて、こういう超科学、反進化論の「信仰」の話を押し付けられる。さらに暗記させられる。「三位一体とは何か」なんて憶えさせられる。こりゃ矛盾だよ。

では、日本のミッションスクールは存在意義が全くないのか。まあ、そう先走ってはいけない。その時においては（つまり中学・高校生の時は）、意味はないし、バカバカしい。ただし、30年たってから、「あっよかった」と思う。じわじわと効いてくるのだ。それにしても「30年後」に効くとは長すぎるか。井上さんも、バカバカしいと思いながら、30年後にはこの本を出した。キリスト教と日本について考えた。もし、ミッションを出てなかったらこんなことは考えもしなかったろう。僕だってそうだ。高校の時は、「そんなアホなことを」と反発してたのに、30年たってから、やっぱりミッションを出てよかったと思う。たとえば、ドストエフスキーやトルストイをはじめ世界の文学を読む。キリスト教の知識がないと分からない。又、世界の音楽、絵画を理解する上にも、キリスト教は絶対に必要だ。又、西洋を理解し、日本を理解するためにも必要だ。たとえ信仰抜きの「知識」だけであっても、教わっていてよかったと思う。

僕は、県立の仙台二高を受けて落ちた。くやしかった。それで仕方なくミッションに行った。しかし、今から考えるとミッションに行っていなかったら今の僕はない。見えざる手が働いてたのかもしれない。だから日本の高校は全てミッションにしたらいい。日の丸・君が代なんていらぬ。

亡くなった景山民夫さん（作家）もミッションを出た。その体験は作家になる上で大変役立ったと言っていた。「カラオケに行っても賛美歌がないからつまらないね。思い切り賛美歌

をうたいたい」と言っていた。僕も同感だった（神楽坂注・いつもはカラオケで「インター」を歌いたいと言ってるくせに）。

31年前に、三島由紀夫と共に死んだ森田必勝もミッション出身だった。中学・高校と六年間もカソリックの学校に通っていた。だから彼の日記を読むと、聖書の言葉がよく出てくるし、映画「ベン・ハー」、「クオ・ヴァディス」を見て感動した、といった話も出てくる。1970年の決起にあたってでもキリスト教の「愛と自己犠牲」の精神があったような気がする。そのことについては昔、「忘れられた『三島事件』の主役」という題で、「新潮45」（93年2月号）に詳しく書いた。いつか〈三島事件〉について本をまとめることがあったら入れたい。

さて、ここで井上さんの本に戻る。この本の表紙にはこんな謳い文句が書かれている。

〈由比正雪も大塩平八郎もキリシタン？ 仏教はキリスト教起源かその逆か？ 歴史に投影された珍説奇説を通して描く、受容の精神史〉。

実は、この謳い文句にひかれて買ったのだ（神楽坂注・謳い文句だけ読むと、まるでトンデモ本ですね）。それにしても由比正雪や大塩平八郎がキリシタンだという「珍説奇説」があったなんて、その存在すら知らなかった。当時はそんな噂が流れ、又、幕府が積極的に噂を流したんだ。「キリシタン・バテレン」は、妖術を使うし、いかがわしいし、お上に逆らう奴らだ。そいつらは皆、つるんでるんだらう。そういう決めつけだ。源義経が大陸に渡り、ジンギスカンになったとか、西郷隆盛は城山で死なずにロシアに渡ったとか。そういう「珍説奇説」は高校の先生も冗談半分で教えてくれたのに。なぜ、由比、大塩の話は教えてくれなかったのかと思った。でも当然だ。こっちはキリスト教を侮辱する「珍説奇説」だ。ミッションスクールでは冗談半分で教えるわけではないな。

江戸時代、キリシタンは幕府にとっては勿論、庶民にとっても結構怖かったんでしょ。芥川龍之介の小説にも、あやしげなキリシタンがよく出てくるし、日本人の精神風土と相容れないさまがよく出ている。たとえば、入信した日本人娘が、「あなたは天国に行ける」と祝福される。入信しない人は地獄に落ちると。だったら入信しないで死んだ父母とは、死後会うことは出来ない。そう思って、キリスト教を捨てる。他にも、武士道、日本人の道德、風土に合わなくて入信をやめる人間の話が随分と出てくる。

さらに、明治、大正、昭和になってもまだ「あやしげな宗教」と見られていた。先週紹介した幸田文の『おとうと』に出てくる母（義母だけど）はヒステリーで、よく怒鳴り、そして自分の部屋に引きこもる。そして変なお祈りをしている。同級生からも、「お前の母ちゃんは狐憑きだ」と馬鹿にされる。でも、変な宗教ではない。れっきとしたキリスト教なのだ。当時はまだ、それだけキリスト教への偏見があったんだ。

妹尾河童の『少年H』（講談社）は50年前のあの大战前後の話だが、「好奇心と正義感が人一倍旺盛な少年H（妹尾河童本人）」が主人公だ。このHのお母さんがクリスチャンだ。そして、まわりからは胡散臭い目で見られていた。あの頃でも偏見があったんだ。

しかし、こんな話は小説の背景としてはなかなかいいよね。父は厳格、母は変な宗教にはまりこんでる。主人公はそんな中でも正義感が強く、けなげに生きていく。あっ、俺の知ってる人でもいるぞ。父は税務署長。母は生長の家。そして「少年K」は好奇心強く、正義感あふれ、誰にもやさしく、すくすくと育ち、やがて……。エッ、お前のことだろうって？ いえいえ、ちゃいまんがな。でも、いつか書いてみたいですね。

では又、来週。

〈お知らせ〉自閉症で、対人恐怖症だから人と会う仕事はヤダとってんのに、5月は4つもインタビューの仕事をさせられました。

まず、アントニオ猪木に会った。これは今、発売中の「ATHRA (アスラ)」7月号(毎日コミュニケーションズ)に載っている。又、高田延彦に会った。これは今出てる「ゴング格闘技」(7月増刊号)に載ってる。今出てる7月号には「格闘家としての三島由紀夫と石原慎太郎」について書いている。さらに「死体写真家」の釣崎清隆さんに会った。これは「裏BUBKA」(第3号)に載ってる。

最後に、石原慎太郎の本をつくるとのことで、インタビューされた。それも来月出るだろう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張6月11日 まだ残る、三島事件の謎

『まとりた』の次の原稿をやっと書き上げて送った。×切を6日もオーバーしちゃった。だらしがない。このままじゃ見沢になっちゃうよ。気をつけよう。週刊で書くのがなくなったから、時間的・精神的にグンと楽になったはずなのに、仕事の張りがなくなったのか、どうも集中力が無い。いけない。気を引き締めてやろう。『まとりた』の編集長は、「『SPA!』やめたなら、『まとりた』に専念して下さいよ。月刊にしますから」と言ってくれた。ありがたかった。ホロリとした。

『まとりた』は今のところ季刊だが、なかなか意欲的な編集をしている。面白いし、志が高い。最近の号では「日本の恥問題」「愛国心のサジ加減」「日本の左翼族」と、力の入った編集をしている。

ちょっと話が変わるが5月29日(火)、「個人情報保護法」反対集会に参加した。勿論、「言論の自由」は大切だし、国家の介入には反対だ。しかし今のマスコミ、ミニコミが全て立派な訳じゃない。余りにも下らないものがあふれている。志の低いものばかりだ。でも、そんな下らないものでも国家権力からの介入からは守るべきだ、と言った。同時に、日本のマスコミ、ミニコミはこれでいいという保守的な考えを捨て、自浄作用を持つべきだ、ということを発表した。そしたら皆に反対された。後ろからは「憂国!」と野次が飛ぶし、パネラーからは、「じゃ、お前には志があるのか」とからかわれるし。そんな中、唯一、川田悦子さん(国会議員、薬害エイズ裁判の川田龍平さんのお母さん)だけが弁護してくれた。エイズ騒ぎの時だって、マスコミは何を報道したんだ、それを全く反省もしてない。これも大問題ではないか……と。

会がおわってお礼を言った。僕なんて「右翼だから」と毛嫌いされると思ったのに。「いえ、いつも『まとりた』で読んでますから、鈴木さんの考えは分かってましたし……」と言われた。うれしかった。川田さんも『まとりた』には何度も書いていた。ありがたかった。『まとりた』は大きな書店ではおいてあるので是非買って読んで欲しい(『まとりた』は発行・モジカンパニー、発売・星雲社、03(3815)6881)。次の号は「朝鮮問題」特集だ。その次は「三島事件」特集をやるそうだ。

三島由紀夫といえば、都民カレッジで「三島由紀夫を読む」をやっている。全10回の講義だから、もうすぐ終わりだ。何より自分の勉強になる。昔読んだ三島の本を再び読み直したり、又、三島について書かれた本も随分と読んだ。その中で、ちょっと奇妙な本があった。送ってもらっていたが、読んでなかったんだ。そして、この機会に読んだんだ。

萩原雄一の『もうひとつの憂国』(夏目書房。1800円)だ。ずっと気になってはいたが、読まずに本箱に並べられていた。本の帯にはこう書かれていた。「1970年、11月25日。三島由紀夫の首を刎ねたのは誰か? 没後30年目にして明かされる驚愕のフィクション!」。

アレツと思っていたんだ。三島を介錯したのは森田必勝だ。しかし、うまくいなくて古賀浩靖に代わってもらった。〈謎〉は何もない。それなのに……とってきた。今、「明かされる」といわれても、そんな大層な〈真相〉などがあるのか。それに、「驚愕のフィクション！」という点も気になった。つまり〈小説〉の形でしか明らかにされないということなのか。

それに、「もうひとつ」というのが分からない。1960年に三島が『憂国』を書き、映画化し、自分で監督し、主演した。自分で血まみれの切腹シーンをとった。それなのに10年後に、もう一回、実地にやってみた。だから「もうひとつの憂国」だ。と、とれる。それとも僕の国語力が足りなくて、本当は別のことを意図した題か。実際には70年に三島の自決があり、その10年前に（リハーサルとして、あるいは予行演習として）、映画「憂国」の切腹があったんじゃないか。どっちにしろ、分かりにくい、ミステリアスな題だと思った。著者の萩原雄一氏は現在、名古屋芸術大学助教授。小説に『魂極る』（オレンジポコ）や『鷗外の恋・永遠の今』（立風書房）、『北京のスカート』（高文堂出版社）などがある。

さて、この萩原氏の本だが、二つの作品が入っている。一つは表題になってる「もうひとつの憂国」。そしてもう一つは「英霊の声、異聞」。特に前者が力作だ。三島について小説を書くことと主人公が考えている。三島の最後を考え、悩んでいると芥川龍之介が現われる。そんな奇妙なシーンから始まる。三島の自決（正確には介錯）の謎を知ろうとするなら、オレの『藪の中』を読んでみると芥川は言う。『藪の中』はもう慣用句になってる位、有名な作品だ。事件は一つだが、当事者の証言をいくら集めてもなかなか〈真相〉はつかめない。そんなことを表している。小説『藪の中』では、殺した人間の証言、見ていた人間の証言、さらには殺された人間の証言も出てくる。死んだ人間の〈証言〉が出てくるところなぞ、まるで『英霊の声』のようじゃないか。じゃ、おいらも、「赤報隊事件」が時効になったら、「フィクション」として書いてやるかな、殺した人間の証言、殺しを指令した人間の証言、目撃した人間の証言、殺された人間の「証言」……と出して。題も『新・藪の中』にするか。ついでにもう一つ、「SPA!」で書けなかった「あの事件」についても「フィクション」として書く。面倒だからこっちは『新々・藪の中』にする。著者も、面倒だから芥川龍之介にしちゃう。こりゃ、まずいか。では、萩原氏の小説に話を戻す。ここに出てきた芥川はこう言う。

「きみ、『藪の中』方式を用いれば、三人の証言で立体的になって、作品に奥行きが生じるんだよ。

いいかい、まずは〈検察官調書から起こしたる古賀被告の物語〉だ。世間一般では三島くんを介錯したと思われている。楯の会の古賀君の言い分だ。最初にこれを載せることによって、三島事件を知らない読者にも、一定量の知識を与えられる」

なるほど、これは使えると主人公は思う。気をよくした芥川はさらに続ける。

「そうだろ。で、次に〈証言台における東部方面総監の内面告白〉を書こう。これは、きみが調べて、世間にスッパ抜こうと、さっきまで書いていた小説が中心だ」

「でも、二つの話を並列すると、三島由紀夫の首を刎ねたのは誰なのか、読者が解からなくなってしまうのでは……」

そこで芥川が決定的なことを言う。

「なに、心配無用だ。三つ目は、ぼくが三島くんの魂をここに連れて来るから、〈芥川に連れて来られたる三島由紀夫の死霊の物語〉を書き足せばいい」

ほんとですか、これは凄いぞ。僕は芥川さんに抱きつきたくなった。

「よし給え、ぼくは三島くんではない。男に興味はない」

エッと思った。芥川さんも、ひどい冗談を言うんだ。そして、この小説のタイトルを『新・藪の中』とつけなさいと芥川は言う。あっ、まずい。じゃ、赤報隊事件を『新・藪の中』にしちゃいけないんだ。しかたない。『新々・藪の中』にしよう。もう一つの事件は『新々々・藪の中』と順送りになるな（神楽坂注・尾崎紅葉の『金色夜叉』みたいですね）。

ともかく、芥川の忠告で、この『もうひとつの憂国』は書かれたんですよ。これ以上書いたら、全部紹介しちゃうことになるから、やめる。あとは本を買って読んでくれ。

それと、三島の介錯の謎に迫るなら、もう一つこの一冊は欠かせないという本がある。網淵鎌錠の『斬（ざん）』（文春文庫）だ。この人の作品には『殺（さつ）』とか、『刑（けい）』のように一字の題が多い。網淵さんは、幕末の赤報隊についても書いている。『苔（たい）』（中央公論社）だ。それを読んで朝日新聞阪神支局を襲ったグループは自らを「赤報隊」と名付けた。又、この本を読んで、名古屋で「赤報隊」と名乗るグループも出来た。さらにもっと因縁がある。幕末赤報隊の顕彰碑が作られたが、その碑銘を書いたのが網淵さんなんだ。この時、「賛同人」を集めたが、僕もなっていたし、カンパも送っていた。実は全く知らなかった。というよりコロリと忘れていた。朝日の記者に訊問され、「じゃ、この“東京の鈴木邦男”というのは同姓同名の別人ですか、それとも他の人が名前を騙ったんですか」といわれて、渋々認めた。全く忘れていたか、友人に頼まれて「賛同人」になったんだろう。しかし、こんな大問題になるとは思わなかった。これで、ますます警察にも睨まれた。

ところで、網淵の『斬』だ。これは首斬り役人・山田浅右衛門のことを書いた本だ。その小説の中に、唐突に三島の切腹の話が出てくる。そして、一般の世評に反駁する。一般の世評はこうだ。三島は完璧に腹を切ったが介錯の森田が気が動転し、二度、三度と介錯に失敗し、しかたなく古賀に代わってもらった。そして次に森田が切腹し、古賀が介錯した……と。「三島は完璧だったが、森田は未熟で失敗した」と言われた。しかしこれは違う。逆なのだ、と言う。

武士の正式な切腹の作法は浅く腹を切り、介錯人が首を斬りやすくする。（神楽坂注・江戸時代の切腹では、実際には腹を切らず、腹に突き立てると同時に介錯人が首を斬る、というのが普通だったようですね。そのため、切腹をする者は真剣の短刀を使わず、木刀や扇子を使ってそれを腹に突き立てる、という形式的なものも多かったとか）森田は完璧にこれをやった。作法にのっとり、実に見事だった。ところが三島は前に映画『憂国』を作って、切腹シーンを撮ったこともあり、力が入りすぎた。つまり映画のように深く突き、そして大きく引いた。そのため、上半身がガクッと前のめりになった。これではプロの山田浅右衛門でも斬れない。森田が介錯に失敗するのも当然だ。こんな時、首斬り浅右衛門は助手に囚人を両側から支えさせて斬った。又、囚人が暴れたり、錯乱して上半身を立てられない時は、仕方なく、地面に横たえて「すえ斬り」をしたという。浅右衛門でもそんなことがあったのだ。三島の上半身がガクッと前に傾いては森田でもいかんともしがたい。ただ、三島は最後の気力を振りしぼって、上体を立て直し、介錯をしやすいようにした。その時に古賀が代わったのだろう。あるいは、もっと残酷な推理をすると……。というところまで書いている。……の部分は僕も書けない。でも万が一、……だとしても、二人の自決の意味は何らそがれるものではない。三島裁判の本の中でも、ここまでは踏み込んでない。

又、三島は本当は自衛隊に撃ち殺されることを望んでいたのではないか、という説もある。それ（発砲、射殺）をやったこそ、「本当の軍隊」になると思っていた……と。その証拠に、「五人全員が撃ち殺されるかも知れないので」と、古賀、小賀、小川の三人にも辞世の歌をかかせていた。昔、右翼のある先生が、この三島の〈希望〉にそって、「三島を殺すべきだった」と言い、波紋を呼んだことがある。圧倒的に批判的な声が多かったが……。ともかく、31年経って、まだまだ〈謎〉が多いのだ。

今日、本屋に行ったら、山本舜勝の『自衛隊「影の軍隊」＝三島由紀夫を殺した真実の告白』（講談社）が出ていたので買って来た。これから読んでみよう。帯の文句が凄いよね。

「『自衛隊クーデター計画』衝撃の内幕！ 三島が傾倒した元将官が書く慟哭の手記。『これで三島の魂は初めて自由になった』」。

それと、保阪正康『三島由紀夫と楯の会事件』（角川文庫）、そして宮崎正弘『三島由紀夫はいかにして日本回帰したのか』（清流出版）は今、出ている。いい本だから読んでみたらいい。宮崎氏の本は『三島由紀夫「以後」』につづく三島事件に関する二冊目の本だ。保阪さんのは単行本のときも評判が高かったが、文庫化に当たって大幅な加筆をしている。それも実に興味深い。勿論、「三島論」だけじゃなく、三島の作品も、もっともっと読まなくっちゃならないが。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張6月18日

## オーケンと格闘論議をしたでえ

3年前のことだ。格闘技の試合を観に行ったら、「鈴木さん！」と声をかけられた。ジーンズに野球帽のアンちゃんだ。知らない奴だ。これでもおいらは格闘技評論家で、プロレスの本を5冊も出している。だから、知ってる人は知ってる。「握手して下さい」とか、「サインして下さい」なんて奴がたまにはいる。こいつもその手の青年かと思った。だから、「どうも、どうも」と挨拶だけして通り過ぎた。

そしたら、その「普通のアンちゃん」が、「ヤダなー、鈴木さん、僕ですよ」と言う。まじまじと顔を見た。でも分かんない。「分かんねえよ。誰？」って言ったら、「オオツキですよ」という。エッ、民族学者の大月隆寛か。どうしたの、急に痩せちゃって。50キロ位、ダイエットしたのかな。「ちがいますよ」。じゃ、早大教授の「ゴースト・バスター」の大槻先生かな。でも違う。若いアンちゃんだ。変だな。そしたら「大槻ケンヂですよ」と言う。

「ゲッ、あのオーケンなの。筋肉少年隊の？」「少女帯ですけど」。でも、分かんないね。いつもメイクしてるから（神楽坂注・オーケンと対談した某漫画家は、「対談の時には顔にヒビが入ってませんでした」と形容したそうです）。素颜だと、全然わかんねえよ。「格闘技はよく見に来てるけど、誰も気付きませんよ」と言う。いいなー、聖鬼魔IIのデーモン小暮もメイク落したら、やっぱり誰も気付かないだろう。ソープやヘルスに行っても大丈夫だ（神楽坂注・デーモン小暮さんは、とっくの昔に結婚して今は子供もいますよ。もう6、7年くらい前じゃなかったかな？）。

オーケンにはそれ以来、よく会う。今度会ったら、「大槻ケンヂさん！」と大声で呼んでやるかな。ところで、オーケンに初めて会ったのは今を去ること30年前。二人が共に学生運動をしてた頃だ。エッ、「30年前はオーケンは6歳だ」って？ じゃ、仕方がない。10年前だ。北野誠のライブが大阪であって、それにちょっと出た（神楽坂注・どんなライブ？ そっちのほうが関心あるなあ）。その時、オーケンも来て、知り合った。そこはそれ、二人とも格闘技ファンだから、すぐに話が盛り上がったんだよ。それからのお付き合い。彼の本の中に、おいらのこともちょっと出てくる。なんでもオーケンは、最近では極真空手を習っているとのこと。凄い。これで黒帯なんかとられたら、とてもおいらはかなわない。柔道2段、合気道3段のおいらでも〈極真初段〉には負ける。極真の茶帯でも負けるだろう。極真空手はともかく強い。

今度会った時、「初段です」なんて言われたら困るな。うっかり冗談もいえない。蹴り一発で殺されちゃうよ。でも、最近では会ってないな。格闘技の試合会場でも見ないし……。どうしてるのか、久しぶりに会いたいな、と思っていた。そしたら、風見愛（web赤坂の親友の踊り子さん）から電話があった。「友達が、大槻ケンヂの大ファンやから紹介してんか」という。だけど最近では会うこともないからダメだよ、と言ったら、6月10日にロフトプラスワンでオー

ケンのライブがあるという。「ヤダよ。急ぎの原稿があるし。ロフトの店長に紹介してもらえばいいじゃんか。小倉あやまれのデモに出たんだから」と言ったが、結局、押し切られてしまった。自慢じゃないが、おいらは「論争」には弱い。すぐに負けちゃう。「じゃー、10分だけ、ロフトに行く。紹介したら、すぐに帰るよ」と言った。午後7時から始まるというので6時半に行く。そしたら張り紙がしてあって、近くの公園で並んで、整理券をもらってからここに並べという。ヒャー、ロフトにはこんなシステムもあったのか。

おいらも公園に並ぶのかと思ったら、ロフトの店員が入れてくれた。風見愛とその友達の「ヘソ出し主婦」が来ていた。主婦だけど、風見愛と同年らしい。ヘソ出しの服を着ている。小学生の時から大槻ケンヂのファンだと言う。そのころと言えば、筋肉少女帯が「日本をインドにしてみえ！」などと歌って、一水会から抗議を受けていた時代だ（神楽坂注・ウソです）。そんで控え室に行った。「あ、鈴木さん。どうしたんですか？」とオーケン。「熱烈なファンが紹介してくれていうんで連れてきたよ」と言って、二人の女性を紹介した。ヘソ出し主婦は感極まって泣いている。写真をパチパチ写した（おいらが、彼女のデジカメで写してやった）。そのあとも、マニアックな濃い話をしている。ついでだから、おいらの使い捨てカメラでも2、3枚撮った（実はこれが後で大きな意味を持つ）。

「そうだ。大槻さん、空手やってんだって？」と聞いた。「そうですよ。もう初段です。スパリングやりますか」と言われるのかと思ったら、「もうやめました。痛いから」。ガクツとした。「でも、『痛いから』っていうのがいいでしょう」。何とも答えようがなくて黙ってしまった僕でした。

「じゃ、今度は組打ち格闘技にしたらいいのに」と教えてあげた。空手などの打撃系格闘技は10代、20代でやっておかないと難しい。40代、50代から初めてやるというのは、ちょっと無理だ。ところが、柔道、柔術などは60、70からでも始められる。

僕が講道館に入門した時、80歳の人が入門した。それも、生まれて一度も格闘技をやったことがなくて、80歳になった記念に講道館に入門したという。毎日、熱心に通ってくる。でも誰も組みたくない。「思い切り投げて下さい」と言うが、それで死んだら大変だと思い、皆、こわごわやっている。「じゃ、今度はわしが投げます」というのでホツとしてると、足腰が弱いから、自分からつぶれる。これじゃ二人とも怪我するおそれがある。そんなこんなで大変だったが、この80歳の青年は真面目に一年間通いつづけ、見事、初段をとった。偉いと思った。

柔道には「柔道年齢」というのがある。70歳でも80歳でも、そこから強くなり、技も覚えるのだ。「年だから体力維持を」なんてネガティブなことを考えて、スポーツジムで「動かない自転車」をこいだり、マラソンをしたり……なんてのは暗い。逆に、いくつになっても「強くなってやる」「ガキには負けん」という気力を持たにゃいかん。「シニア料金で映画なんか見ないぞ」「都バスのシニアパスなんか使わんぞ」という気概をもたなくっちゃいかん。

あ、そうそう。話が横道に外れたけど、オーケンともそんな話をしたんよ。「次はぜひ、柔道か柔術をやりなせえ」とすすめた。「分かりました。そうします」と言っていた。「でも、リングスはどうなるんでしょうね」とオーケン。そうだよな、前田日明もどうするんだろう。いっそ、右翼団体をつくればいいのに。思想家なんだから、とも思うね。前田は過激で、デンジャラスな男だったんで、昔、新日本プロレスを解雇された。でも仲間が集まって、（第二次）UWFをつくった。ものすごいブームになった。ところが、それも分裂。前田一人が取り残

された。またもやゼロから再出発し、リングスをつくった。そして10年目の今、三たび、危機が襲った。主力選手の田村、山本、成瀬がやめちゃったんだ。危うし前田。どうする、どうなる、前田！ だ。

前田は選手としては過激で凄かったが、現役を引退し、今は社長業だ。この経営者としては苦闘している。本当は一人で思い切り闘いたいのだろうが……。そもいかに苦しんでいる。それに「悩めるハムレット」だ。余りに勉強家だし、思想家だ。彼を本当に理解する人は少ない。また、思想的なことを話し合う人が格闘技界にはいない。だからつい、イライラする。今、「武道通信」で編集長をつとめ、あまたの学者・思想家と対談している。西尾幹二、小林よしのり、松本健一、呉智英、木村三浩……と。また、三島由紀夫、太宰治、シュタイナーが好きだという。日本経済新聞では「読書日記」を連載していたこともある。

第二次UWFの発足の時は、後楽園ホールで、満員の観客に向かって彼はこう言った。

「撰（えら）ばれてあることの恍惚と不安と、

二つわれにあり」

これはヴェルレエルの言葉だが、太宰治の『晩年』に載っている。これを前田は言ったのだ。凄いなーと思った。実は、「ゴング格闘技」という雑誌で前田と太宰治について対談したことがある。あの時は楽しかった。「格闘技雑誌がこんな文学的企画をやっていいのかな」といながら編集部はやってくれた。でも、好評だった。なぜ太宰が好きか、どうして読むようになったのかを聞いた。これは長くなるからまた、次回にでも紹介しよう。ともかく、太宰の「トカトントン」「斜陽」「人間失格」「二十世紀旗手」をはじめ、全部読んでという。すごいね。

ここでまたもや、オーケンに戻る。当日、二人の女たちを紹介してすぐ帰ろうと思ったら、出られない。超満員だ。立ったら立ったまま動けない。立錐の余地もないとはこのことだ。あんな狭い所に500人も入った（そんなに入んないかな。じゃ、300人だ）。客も興奮している、凄い熱気だ。オーケンも大活躍。歌ったり、しゃべったり、つぶやきシローと対談したり……。大サービス。面白かった。僕は9時の休憩の時にやっと脱出できた。それでも、朝の満員の埼京線より混雑しているところから必死の思いで外に出た。フーッ。

そして次の日、ヘソ出し主婦からTEL。オーケンに紹介してもらい、もう思い残すことはない喜んでいた。じゃ、インドに行って死ぬか。それに、握手して一緒に写真とってたし。それだけじゃない。「もう始まるから出ようよ」と控え室から引きずり出そうとしたら、「お願いがあるんですけど……」と言ってる。まだあんのかよ。何かと思ったら、「だっこして下さい！」。そして、オーケンの許可も得ないで抱きついていった。いいな、オーケンは。こんなこと一杯あるんだろうな、チクショー。「じゃ、接吻もしてやんなよ」とオーケンに言ったけど、さすがにそこまではしなかった。

ところで、オーケンファンのその主婦だ。「会えたのは嬉しいんだけど、写真が消えちゃった」と泣いている。エッ、ちゃんと撮ってやったじゃないか。口フトでも、ずっと見てニタニタしてたじゃないか。「そうなんです。でも何百回も見て思い出してるうちに、頭が真っ白になって、変なボタン押しちゃって写真を全部消しちゃったんです」。バツカだなー。アホだよ、お前は！と怒鳴りつけた。それにしても「最新メカ」はかえって不便だ。パソコンに入力した住所録や原稿を、間違っただけで消したという奴もいるし（神楽坂注・それ、鈴木さんのことでは？）。機械にばかり頼ってちゃダメだよ。おいらのように、たまには手書きで書くとか。大

事なものはちゃんとプリントアウトして保存するとかしなくちゃ。仕方がないんで、泣いてる  
ヘソ出し主婦には、おいらがローテクの使い捨てカメラで撮った写真を送ってやった。

では、おわり。押忍！

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張6月25日 やっぱ、日本人は太宰治だよ

死のうと思っていた。

あっ、誤解のないように言っておくけど、これは僕のことではない。仕事にあぶれ、収入もなく、かといって自殺する勇気もない。だから、どっかに立て籠もって暴れたら警察官が射殺してくれるんじゃないか。……と、そんなことを考えてるわけでもない。三島由紀夫や野村秋介さんだから自決しても社会に衝撃を与え、大きな〈言葉〉を発したんですよ。そして人々が「戦後日本」を考え直すキッカケになった。僕じゃ、「食いつめた右翼、ヤケで自殺」で一行で片づけられちゃう。

「かわいそうだね。励ます会をやってやろうか」とweb赤坂（元管理人）からメールが来た。ペツ、よく言うよ。お前だって失業者のくせに。接客態度が悪くて本屋のバイトをクビになったの知ってるぞ。そりゃそうだよな。客が田口ランディや柳美里の本を買おうとすると、「こんな本買うな、バカ！」と怒鳴りつけるし。「新しい歴史教科書」なんか店におくなくと店長に抗議するし。香水をつけてる客には、「臭えババアだ。帰れ！」と言うし。小学生8人殺しの宅間容疑者みたいだ。

「でも、同じ失業者同士、なぐさめてやるわよ」と言う。「ウルセー、同情するなら金をくれ。仕事をくれ！」と叫んじゃった。「私の方こそもらいたい位よ。でも、お肉ならあるわ」と訳の分からんことを言う。「いらねえよ、そんなもの。すき焼きやってんじゃねえ！」と言ってやった。

「死のうと思っていた」

これは実は、太宰治の『晩年』の中入ってる「葉」という小説の冒頭に出てくる言葉だ。前田日明さん（格闘技団体リングス代表）と以前、「ゴング格闘技」で〈太宰治論〉をやった時、前田さんは、この部分を暗誦してみせたんだ。

「死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であった。鼠色のこまかい縞目が織りこめられていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生きていようと思った」

高校の時、前田さんはこの3行（文庫本では3行）を読んで、「ああカッコいいなと思った」。それから太宰にのめり込んだという。はかないもの、自殺、夭折……そういったものにあこがれる年頃だったからという。それに、ケンカばかりしてるのに、ある時、突然考え込んだ。なぜ俺はこの国に生まれ、この時代に生きているのか。徳川時代でもなく、明治時代でもなく、この時代に……。その意味は何かと。そして、空手道場の先輩に聞いたら、「それは学校では教えてくれへん。文学を読め」といわれた。「どれが日本文学なんですか」と聞いた

ら、「太宰や」と言われて読んだのが『晩年』だという。

太宰を読んでみると全部自分（前田さん）のことを言っているように思えた。父親はほとんど家にいない。『ヴィヨンの妻』を読んだら、「家庭の幸福は諸悪の元」とあって、「そやそや」と思った。『斜陽』には、「人間は革命と恋をするために生まれてきたんです」とある。これも、そやそや。『トカトントン』を読むと、俺にもそういうことがあるなと思った。第三者的な自分がいて、必ず自分の熱を消すようなところがある。又、『親友交歓』には、わけの分からんおっさんが出てくる。憎たらしい親父そっくりやと思った。読みながら一喜一憂し、自分のこととして読んだ。

……というふうには太宰論が続いたんですよ。驚いたね。「勝手な読み方だけど……」といってたけど、読みが深いよ。いつか前田さんと二人で「太宰治読本」を作ろうかな。前田さんは太宰と共に三島由紀夫にも詳しい。休みの時は神田の古本屋を回って、三島の古い本を探して歩いている。「これ知ってますか？」「これ読んでますか？」と聞かれるけど、僕は読んでない。三島については僕よりもずーっと詳しい。都民カレッジの「三島由紀夫を読む」も前田さんにやってもらったらよかったな。

さて、その前田さんのリングスが今、大変だ。ということ先週書いた。心配になって会いに行った。6月15日（金）の夜、横浜文化体育館でリングスの試合を見に行き、終わって控え室に行った。ちょうど記者会見をしてるところだった。この日はブラジルの選手が大活躍で、「彼らはすごい。あの前に前にという敢闘精神はハンパじゃない。昔の日本の陸軍のようだ」と言っている。やっぱ、愛国者だ。「リングスはこれからどうなるんですか。大丈夫ですか」という記者の質問には、「そんなことより、この日本が心配だ。こんな日本でいいのか！ 小学校に乱入して8人も子供を殺す奴がいる。どうしようもない。何とかして下さいよ、鈴木さん！」。記者たちは皆、キョトンとしている。記者会見なのに、突然、「鈴木さん！」なんていわれても困るよな。「そりゃ、前田さんが国会に出て、日本を救って下さいよ」と言った。「ウーン、実は、ある政党からも参院選に出るって話があったんだけど、断っちゃったんですよ」と言う。公の記者会見なのに、二人だけの話になっちゃった。

前田さんは一水会の現代表・木村三浩氏と「朝まで生テレビ」に共演し、それからの友人だ。木村氏が最近出した『右翼は終わってねえぞ！』（雷韻出版。1800円）でも巻頭で対談している。「いまこそナショナリズムの良心を求めて」という題だ。なかなかいい。左翼批判は勿論、最近のインチキな保守派批判もしている。胸のすく対談だ。この対談だけでも1800円出して読む価値がある。

とにかく、前田さんは意気軒昂だった。安心して帰ってきた。帰る時、つのだひろさん（歌手）に会った。よく、リングスで会うんだ。「うしろの百太郎」「恐怖新聞」の漫画家のつのだひろさんの弟さんだ（神楽坂注・中学生の頃、ラジオで初めてそのことを聞いて、冗談だと思ってゲラゲラ笑ってました。失礼！）。ひろさんが、「これ新しく出したCDです。鈴木さんと付き合ってるうちに、思想的に僕もだんだん近くなってきました」という。「その証拠にこれを見て下さい」。

「ありがとう」という歌だ。歌詞を読んでもみる。

「あなたがいたから こうして僕は どうにか暮らしていける。  
あなた達が僕らの住む 日本の国 守ってくれたから」

「あなたがいたから こうして僕は 胸を張って生きている。  
あなた達が僕らの住む 日本の心 残してくれたから」

ひゃー、本当に愛国的、民族主義的だよ。この「ありがとう」の他には、「砂山」「故郷」「この道」など童謡も入っている。CDのタイトルは「和魂洋才」。へエー、やるもんだね。7月15日（金）6：30から渋谷公会堂で、コンサートをやるそうだ。「じゃー、行きますよ」といった。だから、皆も行こうぜ。「メリージェーン」30周年を記念したコンサートで、テーマは「温故知新」だ。いいね。おいらも今度本を出す時は、『和魂洋才』か『温故知新』にしよう。いや、いま思いついたけど、『右魂左才』ってのもいいんじゃないかな。『右脳左腕』でもいいか。

では今週はこれで終わりだ。そうそう、掲示板で誰かさんが言ってたな。いつかの「主張」は改行が少なかったって。このパソコンはどうも改行については甘いんだよ。注意しておくけんね。他の点ではやたら厳しくせに。「他の点って？」と聞くのかえ。そうだな、たとえば、先週の「主張」だ。風見愛と「ヘソ出し主婦」を連れてロフトに行った時の話だ。オーケンのライブだったが、300人も人がいて超満員。二人をオーケンに紹介して帰ろうと思ったけど、「出れない」。そう書いた。ところが、使ってるのが「ATOK（エートック）」だから、「ら抜き言葉はダメだ！」と警告が出て、勝手に「出られない」に変えてしまった。機械のクセに生意気だ。人間様に意見し、批判し、文章を変えてしまう。こんなことありかよと思ったね。それに、「二重否定は使うな」と、これも文章を変えちゃう。さらには、「僕の小学校の友人のお父さんの……」と書いたら、「『の』の連続はダメだ！ 二回以上使うな！」と叱られて、直された。機械のくせに俺を叱るのかよ。全くひどい奴だ。だから頭に来て、燃えないゴミの日に捨てるようにしたら、「捨てるな！ 呪い殺してやる！」と脅す。化け猫みたいな奴だ。そんで、捨てるに捨てられんで使っている。だから改行が少ないのも、「ヘソ出し主婦」の年齢を間違っただのも、文章の乱れてんのも、全てはATOKのせいなんよ。あしからず。というところで今週は終わり。

と思ったら、管理人の神楽坂から電話だ。今回で、この「今週の主張」は連載第100回をむかえるという。毎回、少なくとも原稿用紙10枚分は書いたから、2年弱で1000枚書いたことになる。凄いね。この場をお借りして、赤坂、乃木坂くんや、読者のみなさんにお礼を言いたい。

今後ともどうぞよろしくお願いします。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張7月2日 心はアメリカ人かもしれない

「おめでとうございます」。電話を取った瞬間、管理人の神楽坂やよいが、いきなり言う。しかし、この女みtainなコードネーム（ハンドルネームだっけ）は、何とかならんのか。

「20才・女」みたいじゃないか。サギだ。本当は「42才・男」なのに。えっ、年齢が違う？ 少しくらいいいだろう。地球の年齢48億年に比べたら、そんな違いなど、限りなくゼロに近い（神楽坂注・少しどころじゃないですよ。2倍も違うじゃないですか）。

それにだよ。「おめでとう」と言われてもな。見沢知廉と違って、芥川賞や三島賞を待っているわけじゃないし。あっ、そうか。誕生日か。「しかし、嫌だな。もう85才か。四捨五入したら100歳だよ。めでたくねーよ」。「なに言ってんですか。58でしょうが」。そうだっけ。それだって四捨五入したら100だ。うっとうしい。もう年のことを言うのはやめてくれよ。「40過ぎたら左右はない。50過ぎたら左右は逆転する」って言われてんだから。だから、塩見孝也さん（元赤軍派議長）も、田中義三さん（元「よど号」ハイジャッカー）も、皆、今や僕よりも強烈な民族主義者だ。重信房子さんの裁判の傍聴に行ったら、「日本赤軍は解散する。これからは民族主義に基づいた<世直し>だ！」と言っていた。一水会代表の木村三浩氏と同じことを言っている。

「誕生日の話と、どう関係があるんですか」と神楽坂が言う。だから、40で左右はない。50になったら左右は逆転する。60になったら年齢もないんだよ。昔から60は還暦といって、ゼロに戻るんだ。これが日本文化だ。警察や敵に殺されず、味方からも「スパイだろう」と疑われて粛清されず、よく60まで頑張ってきてきたね。という感謝とねぎらいの意味で60に辿りついた人は、これまでの年齢をリセットにしてくれるんだ。だから、60才はゼロ才だ。61才は1才、62才は2才……となる。

でも、よく考えてみたら、これってわざとらしいよね。だから本当に還暦の思想を生かすなら、僕ならこうする。「僕なら」ってことは、僕が首相になったらだ。国旗・国歌と同じように「還暦法」を制定する。ついでに禁煙法、禁携帯法、禁カップリング法も作っちゃうけど。高齢化社会を迎え、老人を「保護」するのではなく、老人の「自立」をたすけ、「強い老人」に生まれかわるように国が援助する。映画のシニア料金、バスの老人無料パスを廃止する。そして、池波正太郎の『剣客商売』の主人公・秋山小兵衛のような「強い老人」になってもらう。秋山は60才で20才の嫁をもらっている。それで剣はめっぽう強い。こんな老人に皆がなればいい。

三浦和義さんはまだ五十代半ばだけど、この前JRで若者三人をどやしつけたとってた。おばあさんが立っているのに、足を広げて、ベチャベチャ喋ってる高校生が三人いた。「立って席をゆずれ！」と一喝したんだそう。勇気あるよね。「三人組はどうしましたか」と聞いた。「かかってくるかと思ったら、スゴスゴ立って隣の車輦に行きました」。ウヒョー、す

ごい。「良枝（奥さん）に言ったら、“やめなさいよ、そんなことして刺されたら大変よ”と  
言ってたけど」。そうだろうな。奥さんにしたら、心配するよ。

でも三浦さんは、背は183センチあるし、サングラスかけてるし、いきなり大声で怒鳴ら  
れたから高校生もビビったんだろうな。「こりゃ、よっぽど腕におぼえのある奴だろう。だか  
ら自信をもってオレたちを怒鳴りつけたんだろう」と思ったんだね。だから、注意するならオ  
ドオドしてちゃダメだ。「あの一、ちょっとつめて下さい」とか、「あの一、携帯の音が大き  
いのぢやないでせうか」と言ってちゃダメだ。自信をもって、いきなり怒鳴りつける。携帯を  
ひったくって、足で踏んづけて、壊す。そこまでやれば、ガキたちもあっけにとられてビビ  
る。それでも向かってきたら？ そんな時は闘えばいいよ。

僕なんておとなしいけど、この前、コンビニでコピーしてたら、高校生にからまれた。口喧  
嘩になったら、いきなり胸ぐらをつかむ。カーっとなって合気道で手首の関節をきめてやっ  
た。折れやしないけど、捻挫ぐらいしたろう。「まだやるんならいくらでも相手してやるぞ」  
といったら、スゴスゴ逃げていった。

あっ、話が横道に外れた。「還暦法制化」の話だ。60才になったら、「一挙にゼロに戻  
る」というから不自然なんだ。僕はこうやる。

60を過ぎたら1才ずつ戻ってゆくんだ。つまり、61才でなく59才と呼ぶ。70才では  
なく50才と呼ぶ。法律上、キチンと皆、そう呼ぶようにする。公文書もそう書く。「じゃ、  
本当の50才と、（70才の）50才とはどう区別するんだ」と質問する人がいるだろう。は  
い、区別する必要はありません。全く同じにするんです。それでこそ、生き生きとした高齢化  
社会になる。もっとも60才が最高年齢で、一番上だから、それ以上の「高齢者」はいない。  
だから「高齢化問題」もない。それで全て問題は解決じゃないのか。

「これで万事、めでたしめでたし、だ」と言ったら、「“おめでとうございます”と言ったの  
は誕生日のことじゃないですよ。そもそも鈴木さんの誕生日は8月2日でしょう。自分で忘れ  
てんですか。やだな。そんなんだから女子高生にまで“クソジジイ、ボケジジイ”とか言われてな  
められるんですよ」。いや、いかんいかん。少々、アルツッてる。誕生日は8・2だった。  
じゃ、他に何がめでたいんだよ。頭が？ 失礼な奴だ。「いや、このホームページが始まって  
から先週でちょうど100回だったんですよ。それで祝辞を述べたのに」。

一年だと50回か、じゃ、2年つづいて100回なんだ。一回、400字詰め原稿用紙にし  
て10枚分以上書いてるから、だったら一千枚以上書いたことになる。雑誌に頼まれた原稿な  
ら一枚5000円として、500万円以上だ。すごい。あっ、いかんいかん。とらぬ狸の皮算用だ  
（神楽坂注・さっきから自分で自分にツッコミばかり入れてますねー。私のつつこむ余地がな  
いじゃないですか）。

ともかく、100回目か。もうそんなになるのかと感慨深いね。これからもよろしくお願  
いしますよ。僕もテーマを絞って、もっと深いものをやってみようかな。だから皆も頑張っ  
てよ。管理人もカナを漢字に変換ばかりしてないで、新しい連載をやればいいじゃないか。そ  
んで、まとめて本にするとか。「一水会第3の男」といわれていた脚本家志望の関口君も連載  
をやれよ。でない、と、どんどん後輩に追い抜かれるよ。前に書いた三島由紀夫に関する脚本を  
発表してもいいんじゃないの。元市民運動家の赤坂嬢の連載も中断したままだね。エッ、も  
とと無かったの？ それと、乾太一の「巨乳の道も原理から」はどうしたよ。「原理の道も一

歩から」だけ。ホントに一步だけで終わっちゃったね。二歩、三歩とやってみるよ。「出会い系サイト」ばっかやってんじゃねえよ。携帯を捨てよ、本を読み、ものを書け！ と言いたいね。

それで掲示板ももっともっとレベルアップしようよ。映画「スターリングラード」じゃ、ロシア兵が英語喋ってたって話は面白かったね。「そういえばこの映画では……」と話が広がって、いろいろ教えられたよ。映画や本や、いろんな情報・感想・提言・意見を出し合ってくれよ。「風見愛の旅日記」もやれよ（神楽坂注・本人のサイトでやってるじゃないですか。またアルツですか？）。

あっそうだ。モンデール乾の巨乳話で思い出した。6月26日（火）、パンクラスを見に行った。後楽園だ。「電撃ネットワーク」の南部虎弾さんに会った。「いつも外国ばかり回ってんでしょ。今、日本にいるんですか」と聞いたら、「10月に香港に行くけど、それまでは日本にいますよ」と言っていた。格闘技は好きで、パンクラスもリングスも見に行ってるという。「前田日明さんも大変だよ」と言ったら、「鈴木さんと前田さんの対談<太宰治論>読みましたよ。よかったですね」と言ってくれた。「HPも見てますよ」と言う。それに、前田さんとは最近よく飲んでるそうだ。「この前は知り合いのAV嬢を連れて行ったんですよ。前田さんはえらく気に入ってくれて……」。そりゃそうだ。前田さんは愛国者だし、憂国の士だもん。「それとどう関係あんの？」「巨乳は日本文化だし、前田さんは愛国者だからだよ」「？」「その証拠に、貧乳保護法をつくらうとしてるのは左翼ばかりじゃないか」

「？？？」……という形而上学的な会話が交わされたんですよ。（神楽坂注・日本語は正確に！ そういうのは形而上学的会話などとは言いません。「コンニャク問答」と言うのです）

実は南部虎弾さんも前田さんに劣らずインテリだ。高崎経済大学の出身だ。そこの学長で、熱烈な愛国者の三瀧信吾先生にかわいがられていた。その先生は何と「現憲法無効・明治憲法復元論者」だ。

アメリカの押しつけ憲法は無効だ。だから明治憲法は今も生きている。「改正」するなら明治憲法を元にして改正しろ！」と言っているんだ。その先生の薫陶を受けて南部さんも愛国者になったんだ。

あれっ、三瀧先生がらみで誰か、他にもあったな。あっ、そうだ。6月24日（日）、レナちゃん（東京芸大生）の結婚式で、三瀧先生の甥っ子さんに会ったんだ。今、青山で画廊をやっている。そうだ、そのレナちゃんの結婚式で三浦和義さんにも会った。三浦さんは7月に新しい店をオープンするそうだが、そこにレナちゃんの絵を飾るといふ。二人を紹介したのは僕だ。その時に、三浦さんが「電車の中で高校生を怒鳴りつけた話」をしたのだ。

このパーティには秋山祐徳太子さんも来ていた。元、新左翼過激派で、その後、都知事選に2回立候補したんだ。今は、アーティストだね。「ブリキの太鼓」（神楽坂注・ドイツのノーベル賞作家、ギュンター・グラスの代表作）じゃないや、ブリキの仏像をつくったり、ポルノ映画に出たりしている。破天荒でよく分からん人だ。破天荒といえば、『破天荒伝』を書いたブントの荒岱介さんの主宰する「グランワークショップ」に今年も出る。この前、電話で頼まれたので、快諾した。8月5日（日）午後1時から、又、社会文化会館だ。昔の社会党本部ですよ。

それと、お知らせをもう一つ。7月4日発表の「ダカーポ」に映画評を書いた。今、話題の超大作映画「パール・ハーバー」だ。いやー、感動しましたね。反日映画だという人もいるけ

ど、そんなことはないよ。アメリカ軍パイロットの愛と勇気と死には涙しちゃったよ。高倉健主演の特攻隊生き残りの映画「ホタル」には感動しなかったけど……。どうも、おいらは心の中はアメリカ人なんだろうか。昔は<反米愛国>だったのに。急に暑くなったので、パニックになり、思想的バランスも崩れたのかも知れない。「フン、なに言ってやがる。ただの老人ボケじゃないか」という背後霊の赤坂の声が聞こえてくるよ。では又。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張7月9日 僕が野球少年だった頃

缶ビールを飲みながら、ナイター（巨人×広島戦）を見ていた。今年の巨人はダメだなーと思いつつ。そして、ハッと気がついた。試合の展開とは無関係に、これは思いついたのだ。もしかしたら俺は、スイッチ・ヒッターかもしれない。そう思ったんだ。えっ、スイッチ・ヒッターって知らないの。右でも左でも打てる打者のことだよ。そんなことくらい、国民の常識だよ。何せ、野球は日本の国技なんだし。

「デタラメ言うな。国技は相撲じゃないか！」と、「さすらいの踊り子」風見愛から抗議のメールが来た。リアルタイムでこの「主張」を読んでいるようだ。チャットをやっているわけじゃないのに、変だ。盗聴してるのかな。まあいいや。そうだ、国技の話だ。相撲は国技ではないよ。大体、「相撲は国技だ」なんて誰が決めたんだ。今や、観客動員数でもテレビの視聴率でも圧倒的に野球の方が上だ。ダントツに上だ。だから<国技>というなら野球こそ<国技>だ。

「でも、国技の技は格闘技のことを言うんじゃないかと？」と風見のメールは博多弁で反論してくる。無知な奴め。<技>はスポーツ一般でいいんだよ。野球やサッカー、バスケなどは<球技>と呼ぶじゃろが。立派な<国技>だ。

「でも、相撲は伝統があるし、野球は外国から来たものだから。それに相撲は国技だっけのは誰か偉い人が決めたんでしょ」。しつこい奴じゃ。誰も決めてない。なんなら、国歌・国旗のようにキチンと法制化したらいい。その前に国民投票をして。そしたら一発で、野球は国技になるよ。もう一つ。外国から来たものだからイカン？ 排外主義者め。いいじゃないか、外国。相撲だっけどっから来たか分からん。日本のオリジナルなものなんてないよ。あっ、また反日的になっちゃった。いかな。

「じゃ、なんでお前がスイッチ・ヒッターなんだよ」と、まだ食い下がる。うるせーな。さっきも言ったように、右でも左でも打てるからだだよ。分からなかったら、今月の「コスモ通信」を読んでくれよ。と言っても、一般の人は読めんか。毎週木曜日に河合塾コスモ（大検予備校）に行っていたんだよ。「えっ、大検受けるの？」面倒なメールだな。「そうだよ。高校（ミッションスクール）中退だから、これから大検受けて、それから早稲田でも行くんだよ。そして、学生運動をやるんだよ」。

あーあ、迷惑メールのおかげで話が進まないよ。ともかく、河合塾コスモで毎月、「コスモ通信」を出していて、講師も順番に書くんだよ。そこに、「最近僕は左傾化し、思想も顔も左翼的になっちゃった」という話を書いた。書き終わってから、あっ、こういうのをスイッチ・ヒッターというんだな、と思ったんだよ。何せ、7月19日（木）の田中義三さんの「よど号ハイジャック裁判」では僕が「証人」で出る。さらに、7月末に出る田中さんの本の「解説」を頼まれて書いた。8月5日（日）にはブントの集会のパネラーで出る。今までは一水会顧問だけだったが、これからは「よど号」グループ顧問、ブント顧問を名乗ろうかな。ある時は

右、ある時は左と使い分けて打つんですよ。だから「スイッチ・ヒッター」だ。分かったか。

プロ野球界ではスイッチ・ヒッターは何人もいるけど、思想界ではおいらだけだね。いやいや、プロ野球界でも余りいないか。アメリカの大リーガーにはちょっといるけど、日本じゃ昔、巨人にいた緒方くらいだね。では投げる方はどうか。実は、右でも左でも投げることのできる投手がいるんだよ。風見は野球のことは全く知らないから教えてやるけどそんな投手をスイッチ・ピッチャーというんだよ。これは、もっと少ないよ。日本じゃない。過去にもいなかった。大リーグではいた。ただ、珍しがられただけで、大した実績は残してない。たしかに便利だし、バッターは嫌だろう。右バッターの時は左で投げて、左バッターの時は右で投げて……。でも肩の消耗度が二倍だから長くは続かない。

僕は中学、高校では野球ばかりやってたから、このスイッチ・ピッチャーに憧れたけど、余りに大変なのでやめた。大学の時も、早大のキャンパスで、森田必勝くんらとよくキャッチボールをしていた。大学を出て、サンケイ新聞に入社した時、北区興野の販売店に預けられた。研修をかねて、泊り込みで新聞を配り、集金をし、勧誘をした。その時、新聞少年同士（他の販売店との）の野球大会がよくあった。

荒川の土手にグラウンドがあって、そこでやった。「鈴木さんはやっぱり、ライトでしょう」と言われた。右翼だから守備はライトなのか。ホームランは打たなかったが、よくヒットを打って点をかせいだもんだよ。

いつまでも僕の「野球人生」の話をしてても切りがないな。ではここで、「日本人の質問」です。「野球」という名称は誰が付けたんでしょう。野球音痴の風見は分からんやろ。「ヘソ出し主婦」も分からんやろ。おっ、ジャナ専の鈴木君の手が上がってるな。えっ、正岡子規だって？ スゴイ！ピンポン。正解です。さすが、ジャナ専大賞をとるだけはある。もしかしたら司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読んでもるな。そうなんです。歌人の正岡子規が野球と名付けたんだ。それは司馬もいろんな所で書いている。

産経新聞取材班『「坂の上の雲」をゆく』（産経新聞社）には、このことが再び詳しく書かれている。産経新聞にずっと連載されていて、単行本になったのだ。愛媛県松山市駅のすぐそばに、子規の旧宅を復元した「子規堂」がある。「子規は、ベースボールを野球と名付けた人で、一高時代はキャッチャーで四番、意外にスポーツマンやったんよ」とガイドが教えてくれる。そこには「子規と野球の碑」がある。子規の次のような歌も書かれている。

恋知らぬ猫のふりや球あそび

球受ける極秘は風の柳かな

肩に力を入れないでやると球は取れると知っている。当時は、身体を動かすことといえば労働か武道しかなかった。だから、スポーツという遊びは新鮮なものに映った。「東京の学生さんはハイカラやね」と思われた。ともかく、日本野球界の父だわね、子規は。

ところが、厳密に言うと、これはちょっと違うらしい。産経の本によると、野球の本当の名付け親は一高で子規の三年後輩、中馬庚（かのえ）のようだという。中馬が「野球」と名付ける明治28年まで、子規は「ベースボール」「弄球」などの表現を使っている。そして、中馬が「野球」と名付けてからは、子規もさかんに使い、広めた。俳句の署名にも使った。子規は幼名を升（のぼる）という。それで署名に「能球」「野球」と使い、「のぼうる」と読ませている。

た。だったら、やっぱり<野球>という言葉を広め、定着させたのは子規なんだから、「子規が野球と名付けた」といってもいいんじゃないか、と僕は思うね。

では、「日本人の質問」第二問だ。「だったら野球という名称が出来る前は何と呼ばれていたんでしょう」。「弄球？」それは子規だけが言ったんだよ。じゃ何？ 一番初めは「打球鬼ごっこ」と訳されたんですよ。本当ですよ。今、NHK人間講座でやってるけど、「日本人とスポーツ」の中で玉木正之（スポーツライター）が言ってる。スポーツという言葉も、「遊獵」「釣漁」「遊戯」と訳され、やがて、「運動」「競技」「体育」という言葉に変化していく。

そして野球は一大ブームになる。今や、「国技」といわれるまでになった。いろんな球技が入ってきたが、何故に、野球だけが人気を博したのか。玉木はこう書いている。

「というのは、団体戦に対する理解が欠けていた日本人にとって、個人対個人（投手対打者）という闘いの形式が、川中島の一騎打ちや小次郎と武蔵の決闘に似ており、フットボールのような終始団体で闘う野球よりも理解しやすかったためと考えられます」

なるほどね。そうだったのか。でも、明治時代の終わりになると大学野球フィーバーに批判の声が上がる。勉学を本分とする学生が野球に熱狂するのはけしからん！……と。特に朝日新聞は「野球と其害毒」というキャンペーンを展開する。今じゃ、高校野球を主催してんのにね。とても考えられない。この野球の「害毒」キャンペーンにはあの乃木希典（この時は学習院院長）も起用された。乃木さんはこんなことを言う。

「野球という遊戯は悪く言えば巾着切（注・スリ）の遊戯。相手（あいて）をペテンに掛けよう、計略に陥れよう、塁（ベース）を盗もうなどと眼を四方八方に配り、神経を鋭くしてやる遊びである」

すごいね、野球は人のふところを狙うスリのようなもんで、卑怯だ、下品だというんだ。また、こうも言う。

「野球は賤技なり。剛勇の気無し」

「掌（てのひら）へ強い球を受けるがためにその振動が腕より脳に伝わって柔らかい学生の脳を刺激して脳的作用を遅鈍ならしめ……」

だから野球をやってる奴は皆、バカばかりだ、と乃木さんは言うんだ。ひどい話だ。さらに、学生の大切な時間を浪費させるし、終わって慰労会などの名目で牛肉屋などに上がり、飲み、かつ騒ぐ。だから人間が墮落する。これもけしからんという。さらに、こういう。「体育としても野球は不完全なもので、主に右手で球を投げ、右手に力を入れて球を打つが故に右手のみ発達する」

フーン、そんなことあんのかな。一度、キチンと計ってみたらいい。本当に右手だけが発達し、右手の方が長いのか。だったら、時々、スイッチ・ヒッター、スイッチ・ピッチャーになって、補正したらいい。

今日は、打球鬼ごっこの話だった。そうそう、31年前に北朝鮮に渡った「よど号」グループの9人は、向こうで「主体（チュチュ）思想」を学び、勉強に次ぐ勉強の毎日だった。「これじゃ身体に悪い。たまには息抜きに遊びをしよう」とリーダーの田宮高磨が提起した。「イギなし！」と8人が賛成した。しかし、何の遊びをやったらいいか分からない。学生運動ばかりやって何も遊んでないからだ。マージャンもトランプも花札も知らない。野球はやりたいが、北朝鮮は「反米」だから出来ない。そこで、仕方ないから「ジェスチャーゲーム」と

「鬼ごっこ」をやった。でも、「打球鬼ごっこ」ではない。「打球」なしの、ただの「鬼ごっこ」だ。大の大人がこんなことやって何が面白いのかね。きっと「鬼はアメリカ帝国主義だ」と言いながら、キャッキヤと騒いで遊んだんでせう。それで誰いうともなく「革命的鬼ごっこ」と呼ばれるようになったそうです。

ということで、また来週。と思ったら、そうそう、思い出した。昨日（7月8日）は赤坂の試験日だったな。本人いわく、「試験に受かって、晴れて「先生」と呼ばれる身になったら結婚する」んだそうな。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張7月16日

## 鳥肌実との尽忠報国対談は必読・必修だ

「先生！これはひどすぎます。許せません！」とジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の授業で女子学生にきつく抗議された。別にセクハラしたわけじゃない。「ダカーポ」に僕が書いた「パール・ハーバー」の映画評について抗議されたんだ。「パール・ハーバー」のような凄い映画の入場料が1800円なら、その辺の日本映画なんて1円80銭でいいと、自虐的・反日的なことを書いたからだ。「日本にもいい映画はいっぱいあります。いい監督もいて頑張っています。それなのに、1円80銭だなんて（グスン！）。先生には愛国心がないんですか！」と叱られた（神楽坂注・あーあ、女の子泣かしちゃって。また鈴木さんてば……）。

まいったなー、愛国心なんかねーよ、俺には。映画についちゃ、「親米反日」だって言うるじゃないか。ファルコンさんだって、子供の頃からそう思ったたと掲示板に書いてたぞ。ある右翼の街宣を聞いてたら、「私は思想的に反米だから、アメリカ映画は絶対に見ません」と言っていた。すごい「愛国心」だよ。その辺の下らない日本映画ばかり見てるんだろうな。これじゃ、まるで拷問じゃないか。僕にはそんな偏屈な愛国心はない。（神楽坂注・でも、アメリカ映画は「面白い」けど「下らない」映画が大半じゃないですか。ペーパーバック文化のなれの果てって感じですよ。）

えーと、酒井君も読んでくれたのか、「ダカーポ」。ありがとう。「創」も読んでくれたんだね。「鳥肌実さんとの対談、ご苦労様でした」と書いてたけど、対談そのものは楽しかったんだよ。はじめ、6月18日（月）にやる予定だった。昼は「パールハーバー」のマスコミ試写会があるし、これを見て、「ダカーポ」に原稿を書いたんだ。ともかく、試写会が終わって、その後、「ダカーポ」の人と打ち合わせをして、6時ごろから鳥肌さんとの対談をしようということになっていた。「新宿あたりでやりたいんですが、場所はどこがいいでしょうか」と「創」の編集部が言う。「どこでもいいですよ。談話室『滝沢』の会議室でも、『ルノワール』の会議室でも、上野の同伴喫茶でも」「いや、食事をしながらやりましょう」「だったら中村屋はどうですか。前にも使ったでせう」という話になった。カレーの中村屋は、インド革命の志士、ビハリ・ボースをかくまった店でもある。その時、中村屋の娘とボースは恋におち、結婚する。だから、中村屋のカレーには「恋と革命の味」と書いてある。これは本当だ。太宰治は『斜陽』の中で、「人間は恋と革命のために生まれてきたんです」と言っている。これは中村屋のカレーを食べたからだ。

さて、鳥肌さんとは中村屋で対談の予定だったが、「創」からまた電話。「中村屋は月曜は休みなので、対談は火曜にしましょう」「エッ、中村屋にあわせて対談日を変えんの？ 場所なんかどこでもいいのに」と思ったが、気が弱いから言えない。「創」の人達も中村屋が好きなんだろう。なんせ、「つくる」という位だから（神楽坂注・読者の皆さん、エッ？ と考え込まないで下さいよ。まったく意味がないんだから）。

そんなことで、6月19日（火）の6時から中村屋で対談をやった。この日は午前中はジャナ専の授業だった。あの若手人気作家・見沢知廉を授業に呼んで喋ってもらった。あ、つい「若手人気作家」って書いたけど、ちくま文庫で僕が『言論の不自由?!』を出した時、彼に「解説」を書いてもらった。それで、「若手人気作家の見沢氏に解説を書いてもらいました。ありがとうございました」と「あとがき」に書いた。そしたら、ちくまの校正の人からクレームがついた。厳格な校正なんだ。「42才にもなって『若手』はないだろう。これは削ります」と言う。エッ、そうなのとビックリしたが、校正の人に従った。「『人気』も不正確ですね。だからこれも……」と言う。「いや、それくらいは残して下さいよ。それに、人気はありますよ」と頑張っ、その一点だけは死守した。

話があっちこちに飛ぶな。6月19日（火）のジャナ専の授業は凄かったよ。普段、いない生徒もドツと混む。だったし。他のクラスの人も来たし。ジャナ専生のメル友で福岡から来たファンもいたし。いつも寝ている生徒も、お目目をパッチリあけて聞いている。「寝たら殺される」と思ったのかもしれない。「見沢先生のためなら命も惜しくありません」という男子生徒もいた。「やめとけ。穴を掘られて、埋められるだけだぞ!」と冷やかしてた人もいた。「大先生と、そのファンに対し失礼なことを言うな!」と僕は叱り付けた。

見沢先生の講演、質疑応答が終わってから、その場でサイン会。本だけじゃなく、「Tシャツにサインして下さい」「お腹にして」「ブラにして」という生徒もいて、なかなか終わらない。終わってから、近所のファミレス「華屋与兵衛」に行き、食事会。次の授業があるのに、サボって、ゾロゾロと生徒がついてくる。「ミス・ジャナ専」と「準ミス・ジャナ専」を見沢先生の左右に座らせた。ふー、俺も気を使う。

この後、見沢先生は病院に。まだ足が治らないのかな。それとも、頭を治しに行ったのかな。僕はそこで皆と別れて、新宿へ。中村屋の5階の個室で、鳥肌実さんとの対談は始まったのでした。楽しかったですよ。中華料理のフルコースをご馳走になりながら、話はずんだ（注・5階は個室で、中華かフランス料理になってる。カレーのフルコースというのはないかな）。そうさな、2時間くらい話したんじゃないかな。「もしかしたら鳥肌実は三島由紀夫になるかもしれないね」といった話もした。核心をつく話が出来たと思う。「今日はどうも。あと、ゲラが出来たらチェックして下さい」と「創」編集部の人に言われた。

一週間ぐらいして、ゲラが出たので、チェック。僕のところはほとんど直しが無い。鳥肌さんの発言は面白いし、これは話題になるだろうと思った。ところが、ところが……。あとは「創」8月号を読んでください。まあ、結論を言えば、鳥肌さんの「ゲラ直し」が半端じゃなかった。遅れに遅れて、校了日になって、またその「直し」が。それも、電話で喋るんだと言う。印刷所からは「もうダメだ」といわれるし。「今月はボツか」「いや、雑誌そのものが出せるのか……」と大変な騒ぎだったらしい。「対談」の後のページに篠田編集長がその「苦談」を書いている。これはぜひ読んでみて下さい。まア、なかなかない「騒ぎ」でしたよ。歴史に残る対談になったでしょう。

掲示板で酒井くんが、「いろいろ大変だったみたいで……」と書いてましたが、この篠田さんの手記を読んだからですよ。それに、酒井君はうれしいね。こんなことを書いてくれた。なになに、「鈴木先生って『対談の名人』ですよ。いやー、そんなこつ、なかとよ。博多もんはおうどうもん。青竹踏んでへーをこく（博多のメル友の影響で、最近、無意識に博多弁が出るんですけど）。

もう少し紹介しよう。「鈴木先生と対談しているのを見ると、『あっ、この人の言いたいことって、こういうことなんだ』と、おぼろげながら見えてくるような気がします。鈴木先生とお話しているだけで、対談相手もどこか『マイルドな感じ』になって、口当たりがよくなるのがすごいですよね」

うれしいですね。余り誉められたことがないから、特に感激ですね。本当のことを言うと、僕も酒井君が言っていることを「目標」とし、「理想」としている。しかし、現実はとてとても……と思ってます。だって、鳥肌さんとの対談だって、僕は緊張し、圧倒されて、ろくに喋れなかった。自分の言いたいことをキチンと言わなくちゃダメだと思いながら、喋れない。東北人の悲しさか。無知、未熟のせいかな。それで、対等な「対談」にならなかった。仕方がないので、「対談じゃなくて、インタビューにして下さい」と編集部に頼んだ。それで、中をとって、「鈴木邦男が迫る！」になった。

だから、「対談の名人」どころか、「対談の失格者」「対談の廃人」なんですよ。ここだけの話だけど、最近もある大手週刊誌で、あの有名な〇〇〇さんと対談した。その人の著書を8冊も読んで、勉強し、準備して対談に臨んだのに、全く喋れなかった。圧倒されたんだ。だらしのない話だ。だからきっとこの対談はボツになるだろう。ダメだな俺も。勉強不足だ。力不足だ。未熟だと反省し、自虐的になり、家に帰って赤坂の胸でメソメソと泣いた。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張7月23日

## これは、「ロフトの奇跡」と呼ばれるだろう

ロフト・プラスワンで、「実りのある討論が出来た」と思ったのは初めてだった。ロフトでは〈討論〉が成り立たないと思っていた。ロフトは、「罵詈雑言酒場」「乱闘酒場」「テロ酒場」「警察官導入酒場」etc.と呼ばれている。壇上ではゲストが喧嘩腰で罵倒し合うし、客席からは酔っ払いが喚く、からむ、野次る。こんなところに〈討論〉はないと思っていた。だから行きたくなかった。まあ、純粋に客としてなら行ってもいいけど（現に、自主映画の会とか、ストリップの会とか、漫画おたくの会に出ている。業界が違うので誰も僕のことを知らない）。

そんな、引っ込み思案の僕なのに、7月11日（水）にロフトに行く気になったのは、高森明勅氏の人柄のせいだ。高森氏は「新しい歴史教科書をつくる会」の事務局長だ。よくテレビに出てるし、歴史教科書を実際に書いてもいる。昔からの知り合いだ。若いけど、勉強家で、何でも知っている。人間も謙虚だし、僕は尊敬している。考えが少々違って、冷静に話し合える人だ。それに、ここが大事なことだが、話し合っただけで自分が得ることが多い。また、前向きな、建設的なものが生まれる。実に、生産的な討論ができる。

日本人はバカだから、皆、「討論」といえば、お互いの立場に固執して、相手をどれだけ罵倒し、やっつけられるか、そのバトルだと思って誤解している。愚かな人々だ。まだ日本には民主主義が根差していないのだ。もし、お互いの主張を声を張り上げて、怒鳴り合うだけなら、何も会う必要はない。その両者の書いたものを読めばいい。それだけのことではないか。

「いや、過激に闘う姿を見たい」という人もいるだろう。愚かだ。そんな人はプロレスかPRIDEでも見に行ったらいい。〈討論〉は面白くなくてもいいんだ。地味に、淡々とやればいい。そして、どこに、一致点があるか探ればいい。また、「なるほど、そういう選択肢もあるのか」と相手に教えられたらいい。つまり、「学ぶべき相手」とだけ論争したらいいのだ。「こいつは100%間違っている。徹底的に論破しなくてはならない」と思ったら、そんな奴とは会って、論争する必要はない。何も生まれない。〈バトル〉を期待する愚かな民衆の期待に応えるだけの論争なんて、空しい。僕らは闘犬や闘牛じゃないんだ。人間だ。相手の立場を尊重し合っただけで、話し合うべきだ。人間には「右や左」があるのではない。それ以前に、「話し合える人」と「話し合えない人」がいるんだ。

高森氏は何度もいうように、冷静に話し合いの出来る人だ。また、そこから教えられることの多い人だ。いろんなことで勉強になる。たとえば思想的には反対でも、遠藤誠弁護士はいい人だ。「天皇制打倒」といってるが、僕は尊敬してるし、好きだ。東大教授の姜尚中さんも好きな人だ。「朝生」では「新しい歴史教科書をつくる会」の人を向こうにまわして闘っていたが、でも、尊敬してるし、話し合える人だ。僕は「つくる会」の人は考えは似てるし、評価してるが、ちょっと話し合いが出来ない人もいる。やっぱり「人間」なんだよ。

ところで、ロフトの話だ。「ベストセラー市販本、『新しい歴史教科書』の逆襲?!」というテーマだった。「日本の救世主?世界の敵?前代未聞の教科書ベストセラーを実現させてしまった『つくる会』。本音トークでどんな失言・妄言が飛び出すか」と書かれていた。高森氏がメインで、ゲストが2人だ。1人はKBS (韓国放送公共日本局次長)の林炳杰さん。もう1人は僕だ。勿論、高森さんvs林さんの討論が中心だし、この豪華対決が実現したんで、このイベントが開かれることになった。僕は当然ながら<附録>だ。2人のホットな討論が終わり、ホッと一息ついた時に僕が出て、30分ほど高森氏と話すことになっていた。

僕は高森氏にはいろいろ聞いてみたいことがあった。高森氏は「新潮45」「諸君!」「正論」などで幅広く執筆活動をしている。教科書問題に限らない。〈女帝論〉を主張し、女性の天皇を認めるべきだという。これは、「つくる会」でも意見が割れている問題だ。また、大正天皇に対する誤ったイメージを粉砕した論文もある。特に漢文の才があり、優れた詩心をもつ天皇だったという。そうした点を聞いてみようと思った。また、今回は中学の歴史教科書だが、次は高校の歴史教科書をやるのか。それとも世界史か。あるいは、小林よしのりさんが「SAPIO」で、「国語もおかしい!」と叫んでいたが、では「新しい国語教科書」を作るのか。さらには「音楽」や「家庭科」「保健」だっておかしいし……。と期待して当日を迎えた。

ところが、直前になって、中心ゲストの林さんが来れないことになった。参加を承諾しておきながら韓国・ソウルの本社の命令で「出てはダメ」となったらしい。本人からは、このようなFAXがあった。「討論会への参加を大変栄光に思っていたが……」。

「しかし、ご存知のように私は今、個人として日本にいるものではなく、自分独自の判断で参加を決める事案ではありませんでした。ですから、局長からのファクスと討論会の内容を整理し、ソウルの本社に参席許容を問いました。ソウルの本社は教科書問題の敏感性を勘案し、公営放送の特派員が討論者になるのは適合でないということで不許可の回答がありました」。

じゃ、本社に聞かないで勝手に「参加」を了承してたのか。また、日本に抗議はするが、話し合いや質問はいやだというのか。と思ったが、仕方がない。ロフトに来た人達も、「なーんだ」とガックリしていた。それで、急遽、「高森vs鈴木」討論になった。「KBSと『つくる会』の激論だというからきたのに……。鈴木じゃ面白くねえよ。もう終わった人間じゃねえか」と皆、つぶやいている。高森氏もそれを心配して、季刊『まとりた』の編集長・松本麻子さんに声をかけた。そして、3人のトークになった。

当日、7時半に行ったら、もう2人とも来ていた。「これ新しい『まとりた』です。合併号にしました」と松本さん。ウワー、厚い!ビックリした。336ページである。2冊分だ。こんなに厚くて定価は1000円だ。安い。質・量ともに凄い。「今回は鈴木さんが巻頭です」。本当だ。何か、はずかしい。北朝鮮、「よど号」、「ジャーナリズム」……について書いた。韓国・北朝鮮特集と共に、もう一つ、「教科書バトル・“つくる会”vsアンチ派」の特集もやっている。ここに高森氏も書いている。他に、穀田恵二(衆議院議員)、岡田克也(衆議院議員)、なども書いている。これはぜひ買わなくちゃ。紀伊国屋や芳林堂などの大きな書店で出ている。本屋になかったら直接、電話して申し込んだらいいだろう。『まとりた』Vol10&11合併号だ。発行は有限会社モジカンパニーだ。03(5815)6881。FAX 03(5815)6882だ。

では、ロフトの話だ。高森氏は「日本人の誇りを取り戻そう」というし、松本さんは昔、左翼の学生運動をしてた(らしい)。だから、今でも左翼的だ。「左翼は終わった」と僕が言った

ら、「終わってない！」と叱られた。だから、「右派」「左派」「いいかげん派」の三人トークになった。なかなか、実りのあるトークになったと思う。韓国の人が出来なかったのは残念だが、でも、その分、高森氏、松本さんと、生産的な話が出来たと思う。前に書いたが、「次はどの分野の教科書をつくるのか」といった話も面白かった。「家庭科なんかも酷いらしいですよ」と高森氏は言う。昔のように、雷おやじもいない、友達親子のようなのばかり。奥さんも仕事するし、結婚しない人も増えた。「結婚なんか必要ないといったニュアンスの記述もあるらしいですよ。それじゃ家庭が成り立ちませんよ。歴史よりも家庭科の方がもっと重要かもしれませんね」と高森氏。「結婚なんかいらないでしょう」と僕が言ったら、「あっ、鈴木さんはそうでしょうか……」。

きっと高森氏の家庭は円満で、日本人としての誇りを持ってるところだろうな。中学生の息子を連れて、映画「ホテル」を見にいったら、むすこがワンワン泣いていたという。勿論、お父さんも泣いていた。特攻隊の生き残りの人(高倉健主演)の話だ。それを見て、親子で泣けるなんて、うらやましいと思った。僕は息子がいないから(神楽坂注・(ド)ル? どっかで「実は子供が2人……とか言ってませんでしたっけ?」)、そういった情感に欠陥があるのかもしれない。「ホテル」を見ても、全然、涙が出なかった。むしろ、「パールハーバー」の方に感動し、アメリカ兵の会いと死に涙した。これは前にも書いたよね。

いかなー。日本に誇りを持たなくちゃダメかな。でも、そんなに立派な日本人ばかりじゃなかったし。それでも、日本は健気にがんばってきた。そんな「自虐的歴史」を僕もいつか書いてみたいな、と言った。また、新しい時代における「家庭科」の教科書も書きたいな。

そうだ、結婚や家庭はこれからはなくなる。子供も一人一人です立したらいい。学校もいらん。江戸時代のように、7才位から働けばいいんだ。そんで、年とって、本当に学問したくなったら、する。それでいい。大体、世の中のしくみや、男女関係のこと、SEXのこと、パソコンのこと、なんかは子供たちの方がずっと詳しい。彼らの方が〈先生〉だよ。おいらなんて、男女問題に行きづまったら、いつも生徒に相談している。ある生徒が言っとった。「あの先生は鎌倉時代のことは詳しいけど現代の人間のことは知らない」「女の気持ちは全く分からない」。うーん、そういうもんだよね。だから、そうした恋愛、SEX、出産などの問題では、生徒に教壇に立ってもらって、先生方に授業したらいい。

ともかく、新しい倫理も含めて、「家庭科」の教科書を書いてみよう。「じゃ、僕は音楽の教科書を書きますよ」と、つのだ☆ひろさんが言っていた。7月13日(金)に渋谷公会堂で「メリー・ジェーン」30周年のひろさんのライブがあった。「ぜひ聴きにきて下さいよ」と電話があったので行ってきた。このことは前にも書いた。他に、童謡をいっぱいやっていた。ひろさん流のアレンジで。その中に、「たとえば『ふるさと』なんかは、外国にもっていっても世界的なゴスペルとして通用するのに、日本の教科書からは削られた。いい歌はどんどんなくなって、変なフォークソングが入っている。日本の音楽はこれでいいのか！」とステージから獅子吼していた。憂国のライブだった。

終わって楽屋に行ったら漫画家の根本敬さんに会った。そんで、「この渋谷公会堂は30年前に『大演説会』をやった所ですよ」と教えてやった。竹中労、羽仁五郎、中山千夏ほか、すごい面々ばかりで、僕も出た、「左右激突」のハシリだった。なつかしかった。それにしてもこの公会堂は一体いつからあるのか。40年前?50年前?もっと昔かな。大体、トイレに行くと古さが分かる。小使用の便器がやたら低い。平均身長がずっと低かったからだ。今なら、新し

い学校など、かなり高い。そのことを松本さんらに教えてやった。そして二人で連れションをした。そこを「スタジオ・ボイス」のカメラマンに撮られた。松本さんの連載で使うんだという。しまらない。トホホな写真だ。では又、来週。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張7月30日

### 生まれて初めて裁判の証人に……

7月25日（木）、久しぶりに田中義三さんに会って話をした。「接見禁止」が解けたので小菅の東京拘置所に行ったのだ。「19日は証言ありがとうございました」。「いやいや、僕なんかで役立ったのかどうか不安ですよ」と話が始まった。考えてみたら不思議だ。1970年のよど号ハイジャック事件には僕は全く関係がない。むしろ、当時は右翼学生だから、田中さんの敵だった。それなのに裁判の証人になった。酒井君が、「なぜ鈴木さんが？」と思うのも、もっともだ。

証人には検察側証人と弁護側証人がある。たとえば、人質になったり、被害を受けた人が、「犯人はこんな悪い奴だ。極刑にしてくれ」と言うのが検察側証人だ。それに対し、「いや、被告人のやった事は正しかった。いい人だ」と言うのが弁護側証人だ。塩見孝也さん（元赤軍派議長）や柴田泰弘さん（よど号ハイジャッカー）も前に、弁護側証人で出た。ただし31年も前の事だから記憶があやふやだ。田中義三さんも、だから「事実関係は争わない」と言っている。前の柴田さんの裁判でハイジャックの「事実関係」は調べたので、それ以上の「新事実」は出ないし、どんどん記憶も曖昧になるからだ。

柴田さんの時は人質になった乗客も検察側証人で出た。あるいは書面で証言した。「どんなに恐かったか。こんな非道な事は許せない。厳罰に処してほしい」と証言した。でも、これは全てが本心ではない。正直な気持ちではない。そう言わされてるのだ。飛行機の中では、奇妙な〈一体感〉も生まれ、別れる時には、民謡大会をやって、リーダーの田宮さんは詩吟をうなり、人質乗客もうたい、「がんばれ！」と励ました。そして、記念撮影までしてたのだ。「おれも一緒につれてってくれ」といった人もいたという。たしかに苦しい体験だが、「エリート

の大学生さんたちだし、ひどいことはしないだろう」という安心感があった。しかし、そんな〈連帯〉〈安心感〉は、証人としては言えない。たとえ言ったとしても、「調書」には書かれない。だったら、31年たって、今度は人質を「弁護側証人」として呼んだらいいのに。「犯人の9人はとってもいい人でした。命の危険はありませんでした。やさしく取り扱ってくれたし、本もくれました。自分の主義のため、あそこまでやるなんて偉いと思いました。今時、あんな青年たちはいません。私達も、『北朝鮮でもがんばって下さい！ 身体に気をつけて！』と言って励ましたんです。ですから私達も共犯です」……と。

そこまでは言ってくれないかな。でも僕が「人質」だったらそのくらい「証言」してやるよ。でも今日の僕の証言は、そんなドラマチックな証言ではない。「仲間の活動家だけではダメだ。鈴木さんにも証言してもらえ」と田中さんからのたつての希望なんだ。弁護士も困った。支援者だって反対した。「でも、面白いかもしれませんよ」と僕は言った。

かつては〈敵〉だった。でも、5年前に知り合って意気投合した。それでタイで裁判を受けていた田中さんに会いに5回も行った。田中さんたちは今や僕よりも強固な民族主義者だ。か

えって教えられてる。僕は40年、右翼運動をやり、右翼だけでなく左翼の人も何千人と見てきた。しかし、田中さんほどの人物を見たことはない。今回の裁判で〈支援〉に関わってる人の間にも分裂、対立が何回もあった。しかし、田中さんが好きだから、支援運動をやってきた。いや、我々の方がむしろ田中さんに〈支援〉されてきたのだ。これだけの体験をし、これだけ国のことを思ってる人はいない。長期間、刑務所に閉じ込めておくのは「国の損失」だ。かつて吉田松蔭は罪人として処刑された。しかし今、彼を罪人と思う人はいない。時代の先覚者だ。田中さんもそうだ。早く社会に復帰し、その体験と反省を活かし、教育者になる。あるいは政治家になる。そして、国のために働いてもらいたい。

と、そんなことを証言しますと聞いた。弁護士も、「じゃあお願いします」といい、7月19日（木）の証言にたったわけだ。当日は、午前中が田中さんの証言だった。話してるうちにタイでの屈辱的な過酷な刑務所生活を思い出したのか、涙を流していた。午後から「証人」が出る。千葉さんという人（支援運動をした人）と、田中さんの娘さん（この前帰ってきた「よど号」三人娘の一人）、そして僕だ。なんせ生まれて初めての証人だから緊張した。「掲示板」で正狩炎さんは、ほめてくれたが、本当はドキドキしていた。小心だから、思ったことの半分も言えなかった。

それに、「これでかえって刑が重くなったら大変だ」という気もあった。だから裁判所や検察官を批判したり、挑発したりすることはやめようと思った。ただし、最後には田中さんとガッチリ握手してやろうと思った。止められるだろうし、下手したら、捕まるかもしれないが、覚悟の上だ。本当は抱き合っ、「がんばれ！」と言ひ、傍聴人の前で〈勝利〉をアピールするということも考えたが、田中さんの前には机があるし、それはちょっと無理そうだ。それでも握手だけは敢行した。刑務官もあわてて阻止したが、こっちの方が早かったのだ。

「あの時は驚きました。さすが鈴木さんですね」と田中さんも言っていた。「それに、鈴木さんの証言を聞いていて感動して、涙が出ました」と言う。「タイでも、いろんな人が来た。でも、やっぱり運動をやった志のある人と話すのがうれしかった」と言う。そういうものなのか。

娘さんに聞いたら、「お父さんはイカの缶詰が好きだ」といったので、面会前に差し入れた。あと、サバとカニも。「あっ、そのカニは三千円で高いんです。下のは千円です」と差し入れ屋の人が言う。それで迷わず千円のにした。本も入るので、見たら、何と「サンデー毎日」（8月5日号）もある。ウォルフレンさんと僕の対談が載ってる号だ。ちょうどいいからとそれも差し入れした。あと、「文芸春秋」などを入れた。

「ウォルフレンさんも、日本を愛し、憂えているんですよ。『サンデー毎日』でも『憂国対談』と銘打ってますから。読んで下さい」と言ったら、「それは楽しみです」と言っていた。

「鈴木さんには選挙に出るといいましたが今回の選挙を見ると、出ないでよかったですね」と言う。「まア、気長にやりましょう。田中さんが娑婆に出てきたら二人で新党を作って出ましようや」と言った。この日は、僕一人で面会に行く予定だったが、月刊「創」の編集長も行きたいからと、同行した。「創」は知られているので、「取材じゃないですよ。これを記事にするんじゃないですよ」と職員に念を押され、さらに「誓約書」を書かされる。僕も一緒に書かされた。面会が終わってから、田中さんともう一人、女の人に差し入れしていた。

「誰ですか」と聞いたら、「不倫放火事件」の被告の人だという。放火して子供二人が死んだ。じゃ、死刑なのかと思ったら、無期懲役だという。「被告人にも同情すべき点があるんで

すよ」という。男も煮え切らなくて、奥さんと別れてくれない。思い余って男の家に火をつけた。ところが、夫妻は外出中で、子供二人だけがいて、焼け死んだ。あっ、あの事件かと思いついた。そんなことがあったんでは、夫婦は別れたんだろうと思った。ところが、子供を死なせたという〈罪〉と〈供養〉で、一層かたく結びついたのでという。夫は放火殺人犯の愛人にも面会に来てるといふ。残酷なドラマのようだ。子供が殺され、その心の〈氷点〉を共有して生きるなんて。

三浦綾子の小説『氷点』（角川文庫）のようじゃないか。テレビでは「氷点2001」が始まったし。誰かが言ってたが、今年は「三浦綾子と山本有三の年」だそう。山本有三の『米百俵』（新潮文庫）は小泉首相が紹介したおかげで、大ブレイク。絶版になってた本は出ると、「知ってるつもり」では取り上げられるし、9月には歌舞伎にもなる。すごい人気だ。知らなかったが、中村嘉津雄主演で映画にもなったのだ。図書館から借りてきて観た。そうそう、山本有三人気で『心に太陽を持って』（新潮文庫）も復刊された。この中にある「くちびるに歌を持って」は懐かしかった。船が難破し、海に投げ出された人々が、歌を歌いながら励まし合い、救助を待つ話だ。実はこの話は、小学校の「国語」の教科書に載っていたのだ。他の話は全て忘れたのに、これだけは鮮明に覚えている。本当にいい話だ。45年ぶりに読み返したわけだ。山本有三は他にも、『真実一路』『路傍の石』などいい本がある。一度、読んでみせえ。

三浦綾子は、『氷点』『続・氷点』の他、『天北原野』（朝日文庫）、『海嶺』（角川文庫）、『水なき雲』（中公文庫）『母』（角川文庫）などがいい。『母』はあの小林多喜二の母に取材して書いたもので、感動的な本だ。涙なしには読めない。プロレタリア作家・小林多喜二は警察に虐殺される。多喜二は人民の皆が幸せになることを祈って小説を書き、そのことで殺された。母・セキは言う。昔、仁徳天皇という情け深い天皇さんがいて、山の上から見たら民のかまどの煙が細々としか出てない。それで数年間、税金をとることを中止した。何年かたち、どこの家からも煙が出るようになり、天皇さんは喜んだ。国民が豊かになったのは、わしが豊かになったのと同じことだ、と。この話を紹介した後で、母・セキは言う。

「この天皇さんと、多喜二の気持ちと、わたしにはおなじ気持ちに思えるどもね。天皇さんとおなじことを、多喜二も考えたっちゃうことにならんべか。ねえ、そういう理屈にならんべか。天皇さんば喜ばず事をして、なんで多喜二は殺されてしまったんか。そこんところがわだしには、どうしてもよくわかんない。学問のある人にはわかることだべか」

この部分を読んで、不覚にも涙がこぼれたよ。セキさんの言う通りだよ。日本の警察はやはり酷かったんだよ。とても正当化できないし、こんな歴史に〈誇り〉なんか持てるかよ、バカヤローと思った。ウォルフレンさんも、間違ったことは間違ったこととキチンと認めてこそ本当の愛国心が生まれると言っていた。そうだよな。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張8月6日

## 流血のロフトと、「サンデー毎日」の衝撃

ロフトプラスワンは、まさに戦場だった。壇上にいた男が突然キレた。ドドドーっと客席に雪崩れ込み乱闘。コップを投げつける、マイクを投げつける。テレビは倒れ、机は倒れ、客は逃げまどう。額から血をダラダラと流してうずくまる男。足から血を流して女の子に介抱されている男。何も誇張して書いているのではない。全て本当だ。自然主義で書いている。嘘だと思ったら、ロフトに問い合わせたらいい。あるいは、その日の参加者に聞いたらいい。

僕もロフトには何十年（何年かな）行ってるが、あんな流血シーンは初めてだった。それにしても、聞きしに勝る男だ。「人間凶器」だよ、この男は。奥崎謙三といい勝負だな。いや、奥崎は怒鳴り、わめくけど、暴力は振るわない。いや、少しは振るうか。でも、長年の刑務所暮らしで体力がない。その点、この男は体力はあり余っている。金もあるし、いいもの食って、いい酒飲んで、いい女を抱いている。それでも、激情が、狂気が、あり余っている（神楽坂注・まるで邦男さんみたい）。なんせ昔は全共闘の過激派だったんだ。「丸太を抱えて防衛庁の門をぶち破ったんだ」と豪語している。「おれを“脱がし屋”だと馬鹿にしていると承知しねえぞ。昔も今も反体制の過激派だ！」と吠えている。そして暴れる。その荒れ狂う現場を初めて目撃した。

この「人間凶器」「リーサル・ウェポン」とは、あの高須基仁だ。モッツ出版の社長で、有名女優を口説いては脱がせて、ヘアヌード写真集を出している男だ。高部知子や、いろんな女優の写真集を出している。「でも、そいつらとは寝てない。俺が寝た女優は○田○子だけだ」と言っていた。この高須は、今は“脱がし屋”だが、元は過激派。そして、あの高須クリニックの弟だ。だからどうしたといわれても困るが、ともかく危ない人だ。何でそんな人のライブに行ったかという、三浦和義さんに会いに行ったのだ。高須基仁プロデュースで、「変態性欲ナイト」というのをやっている。AV嬢や、ヌード写真家、芸能人などを呼んでやっている。ところが7月27日は、『あの三浦和義・三浦良枝夫婦同時出版記念イベント』だった。だから僕は三浦さんに会いに行ったんだ。第一部は、僕も壇上に上げられて、にこやかに、平和的に進んだ。僕は、三浦さんとの交友、三浦さんの精神的な強さ、愛国者だということ……などを喋った。「日刊ゲンダイ」の二木さんも喋った。「僕の事を“人殺し”と昔、週刊誌で書いたでしょう。謝罪しろ！」と二木さんがからんできた。何いってんだ、本当の事じゃないか。告訴するならしてみろ、と言った。この人も昔過激派で、三里塚で集団で警察官を襲った。あとでニュースで知ったが、その警察官はあはれ、亡くなったという。やっぱり、人殺し集団の中にいたんだ。でも今は、日刊ゲンダイの社会部長さんだ。偉い人だ。

当日は、ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の女子生徒も3人来てた。流浪のストリップパー・風見愛も来ていた。赤坂もちょっと来ていた。芸大生画家で妊婦の増山レナ嬢も来ていた。あっ、脚本家志望の関口君もいた。「電撃ネットワーク」の南部虎弾さんもいた。さ

かに質問していた。そして休憩をはさんで第二部が始まった。よく知らないが、タレントのそっくりさんのAV嬢とか、タレントの父親とかが出て、まったく別の話をしてる。僕は控え室で、三浦さんと話していた。

その時、惨劇は起こった。控え室にはテレビがあって、壇上の様子が写しだされている。と、「キャー！」という声上がる。客が逃げまどい、将棋倒しになっている。壇上で、「ふざけんな、馬鹿野郎！」と怒鳴りながら高須が鬼のような形相で怒鳴り、コップ、マイクなどを手当たり次第客席に投げている。それも、思いっきり力をこめて投げるもんだから、あちらでもこちらでも流血の惨事だ。血を流してうずくまっている人が、あっちにもこっちにもいる。僕はといえば、ただ、呆然と見ていた。いやあ、凄い男だな、と思って……。妊婦も逃げ惑っていた。胎教に良くないよな、こりゃ。

「先生、こんな時こそ止めなくっちゃ」とジャナ専の生徒に言われた。それで渋々、止めに入った。こんな現場はなかなか見れない。だから、もうちょっと見たい、という気もあったんだよな。やっぱ、江戸っ子だから。火事と喧嘩は江戸の花っていうし。もう少しやらせときゃいいのに（神楽坂注・どこが江戸っ子ですか。ただ単に格闘技ファンとして、「リアルファイト」が見たかっただけなんでしょう）。と、野次馬根性を丸出しにしていたから、どうしても止めるタイミングが遅くなる。

その点、三浦さんは凄かったね。パーッと飛んで行って、高須の胸ぐらをつかんで、「この野郎。俺を呼んだ席で何するんだ。許さねえぞ！」。恐いね。さすがの「人間兇器」も、「すみません」とあやまっていた。すごい迫力でしたね。三浦さん、きっと秘密の格闘技をやっているんでしょう。前にも紹介しましたが、電車の中で足を放り投げてる高校生三人組を怒鳴りつけて、前にいるおばあさんに席を譲らせたというし。この迫力じゃ高校生も言うことを聞かぬ。

ところで、「人間兇器」に襲われ怪我をした人達はどうするんでしょう。「医者について診断書をとる！」と言ってたし、告訴をするんでしょうか。

では、風見愛の話です。「大発見したわよ。知ってる？」と言う。「サンデー毎日」（8月2日号）の、ウォルフレンさんとの対談で、驚くべき事実を発見したという。赤坂も同じことを言っていた。「掲示板でも皆、書いてるよ」と言う。なんだ、あのことか。大層な言い方をするから、何か「秘密のメッセージ」か「暗号」でも書き込まれているのかと思ったのに……。

そもそも、対談の話があったのは6月の中旬だ。「サンデー毎日」から一枚のファックスがきた。「愛国心について、ぜひ鈴木さんと話したいとウォルフレンさんが言ってます。7月上旬に日本に来ますので対談しませんか」という内容だった。驚いた。あの有名なウォルフレンさんからの指名だなんて。僕は仕事にあふれていて、「鈴木はもう終わった」と皆に言われていたのに。「僕の事なんか知っているんですか」と思わず聞いた。「知ってますよ。愛国心について冷静に話せる人は他にないと言ってますから」。

僕なんかじゃ力不足、役不足だと思ったが、せっかくのご指名だ。お受けした。そして、7月5日（水）の午後1時から、ホテル・オークラで対談は行なわれた。行く道すがら思った。前にもこのホテルで「サンデー毎日」の対談をしたな、と。落語家の桂文珍さんとだった。もう10年近く前かな。この時も愛国心や右翼の話をした。僕の対談集、『右であれ左であれ』（エスエル出版会）に収められている。その話を「サンデー毎日」の編集部の人にしたら、「そんな昔のことは分かりませんよ」と言われた。

「1時間対談をしてもらう予定ですが、ウォルフレンさんは日本語を話せません」「だったら二人で英語で話しますよ」「それじゃ速記の人が書けませんから通訳を入れます。そうすると時間が二倍かかりますから、対談の時間は2時間みて下さい」と言われた。はい、分かりましたと言った。ところが何と、通訳の人は同時通訳をする。ウォルフレンさんが話すと同時にウワーッと日本語で話す。こっちが日本語で喋ると同時進行で英語で喋る。凄い！ 大した能力だ。舌を巻いた。この三人を囲んで、「サンデー毎日」の人々が見守り、カメラマンがひっきりなしにバシャバシャと写真をとる。

いやー、面食らいましたね。国際的な政治学者にしてジャーナリストのウォルフレンさんを前にして圧倒された。でも何とか、喋らなくては……と思い必死だった。そして2時間が経った。同時通訳で2時間だから、かなりある。でも、ウォルフレンさんに教えられるばかりで僕なんて何も喋ってないような気がした。こりゃー、対談にはならないな、と思った。「せっかく呼んで下さったのに力不足で申し訳ありませんでした」と謝罪した。自分の未熟さを思い知らされた。恥ずかしかったし、悔しかった。「大丈夫ですよ、面白かったですよ」と編集部の人はなぐさめてくれた。「今まで政治家をはじめ、日本のトップの人達が対談してますが、みな圧倒されてますよ」と言う。ウーン、僕だけじゃないのか。「2週ほどは予定が決まっていますから、その後ですね」という。「その後」はないんじゃないかと思ってたら、7月23日発売の8月5日号に載っていた。

勿論、その前にグラが来たんだが、見てビックリした。2時間だからかなり話した。その10分の1くらいだろう。でも、まとめ方がうまい。僕なんて全く話せなかったのに、キチンと対談の体をなしている。苦労してまとめ、編集したんだろう。それに、校正をしようと思ったが、一字の直しもない。完璧な原稿だ。さすが、優秀な人たちだと思った。ウォルフレンさんもそうだが、「サンデー毎日」の編集部も凄いと思った。プロの力と技を見せつけられた。俺は未熟だし、ダメだと思った。あんなに予習していったのに……。ウォルフレンさんの本はどれも素晴らしく、日本について教えられる事が多かった。9冊も読んだ。それなのに当人を前にすると圧倒されて、口々に話せなかった。

ところで、風見愛が言った「衝撃の事実」だ。「サンデー毎日」は4ページの対談だが、最後のページに広告が入ってる。余ったから広告を入れているのではなく、はじめに、レイアウトが決まっていて、ココは広告、ここは写真……となっているんだろう。その広告だが、何と「インポテンツ」と大きな活字が踊っている。「性的機能がもともと弱い男性」「性的に全く機能しない男性」は「今すぐお電話下さい！」とある。「A S Sカウンセリング」の広告だ。

これには笑った。そして、ドキリとした。「何だ、世界がどうした、愛国心がどうしたと偉そうに喋っているけど、二人はインポじゃないか」と言われているようで……。勿論、「サンデー毎日」にはそんな意図はない。偶然だ。でも憂国の政治的な対談に、こんな性事的広告が入ってるなんて。苦笑いしましたよ。

おっと、ウォルフレンさんの名誉のためにいっておくけど、この人はインポではない。今年61歳だが、去年、結婚した。相手は20歳の女性だ。となると、まるで池波正太郎の『剣客商売』だが、お相手は40歳くらいらしい。「じゃ、お前は？」と言われても困るな。仕方ない。意図的に女性とのスキャンダルでも流すか。「鈴木邦男、女子中学生と淫行！」とか、「タイで少女買春の噂！」とか。でも、田中義三さんが帰国したんで、もうタイに行くことはないしな。あっ、今出てる「裏BUBKA」では女子中学生にインタビューしてたな。でも、これは

やたらと健全なインタビューだよ。じゃー、「鈴木邦男、赤坂と婚約！」かな。  
ではまた、次回に！

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張8月13日

## 今年もブントのバトル・トークに出た！

8月2日でこのHPも3年目だ。果たして、いつまで続くかと思われていたが、皆様のおかげでここまでやってこれた。歴代の管理人をはじめ、書き込んでくださったたり、見てくださったたり、多くの人たちのおかげです。

「3年目を迎えての決意を書け！」と現管理人の飯田橋くんが言う。エッ、名前が違う？ 九段下くん、竹橋くん、大手町くん。皆、違うか。神楽坂くんだったけ？ 「だーれ、この人？」と田中真紀子のように聞きたいよね。でもこれは選挙妨害にはならん。ハンドルネームなんて勝手に自分で遊びでつけてんだ。ふざけてる。だから、こっちが間違っただって、忘れたっていいだろうよ（神楽坂注・ひどいなー。これはいわゆる「捨てハン」とかじゃなくて、そもそもれっきとした私のペンネームですよ。このペンネームでHPでも書き、「レコンキスタ」でも執筆してるんですから。それで、このHPを見た人がレコンに興味を持って買ってくれたり、また邦男さんの本にも関心を持ってくれるように、と考えてやってるのに）。ともかく、東西線沿線の名前のついた男だよ。この東西線少年が、「抱負を」という。そんなの一周年の時も、連載100回目の時も、200回の時も、300回を迎えた時も書いてるじゃないか。もういいだろうよ。「ともかく、レベルの高い、知的刺激になるHPにしよう」ということだ。それで全てだ、文句あつか、と言った。

そしたら、「じゃ、僕がインタビューしますから、会って下さい」と言う。「赤坂さんに命令されたんですが、ぜひ邦男さんのお宅でインタビューしろと……」「バカヤロー、何考えてるんだ。家になんか誰も入れねーよ。夜中に男のストーカーが襲って来ても、中には入れずに近くのファミレスで会ってんだ。家は俺の神聖な仕事場だ。それに、命より大事なセーラー服やスクール水着も飾ってあるんだ、誰にもものぞかせない！」と言った。「じゃ、どこかで30分だけでも」と言う。仕方ないから、行きつけの民族派ファミレス「華屋与兵衛」で会ってやった。福岡から来た読者の女性と二人で会ってる時に、特別にインタビューさせてやった。すると会うなり、「天皇制はなぜ必要なんですか」という質問を吹っかけてくる。ビールを飲んでほろ酔い気分だったのに、いきなり重いテーマをぶつけてくる。失礼な奴だ。「HP3年目の決意」と、何の関係もないじゃないか。普段は温和で「仏のクニ君」といわれてるおいらもこれにはキレたね。「酔っ払ってる時にそんな神聖な話が出るか、バカヤロー！」と怒鳴った。そしたらこの「東西線少年」は、謝るところか「わかりました。じゃ、帰ります！」と立ち上がり、スタスタ出口に向かう。酔いもいっぺんにふっ飛んだ。後から追いかけて、「悪かった、戻ってくれ。ちゃんと話をするから。HPを見てる10万人の読者にも悪いだろ」と必死になだめて席に戻ってもらった。なんで悪くもない俺が謝り、話したりしなくっちゃならんだ。あーあ、俺はみじめだ。毎週10枚も「主張」を書いているだけで大変なのに、「それだけじゃダメだ。もっと面白いことを書け」「掲示板にも全て返事をかけ」「赤報隊事件のことも

正直に白状しろ！」とせめられる。大変だよ。苦しいよ。

メールにはできるだけ返事を書くようにしてるけど、どうしても早急に聞くのなら僕の家に電話下さいよ。03(3364)0109 だから。それで答えますよ。かけた人の電話番号は表示されないし、名前なんか名乗らなくてもいいから。そうだ。「田中義三さんがなぜ民族派になったのか教えて下さい」という質問があったな。ドツと疲れが出たな。「SPA!」や「創」の連載、レコン、『がんばれ！新左翼』、そしてこのHP……と、今まで48回も同じことを書いてきたのに、と思った。でも、まだ僕の努力が足りなかったんでしょ。説明しますよ。31年前に「よど号」をハイジャックして北朝鮮に行った時は「民族主義なんて嫌だ。遅れている」と思っていた。共産主義だったし、インターナショナリズムだったんだ。ところが北朝鮮へ行って、人々の生活、思想を見ると、祖国を愛し、民族主義に基づいた革命でなくてはダメだと思った。それで、10年ほど前から、僕らとも接触し出した。「民族主義」については共闘できるといつてくれた。 そうだ。田中さんの本が出たんだ。それに詳しく書いている。これは読んで欲しい。田中義三『よど号、朝鮮・タイ そして日本へ』（現代書館。1800円）だ。タイトルは長いが、実にいい本だ。芳林堂（高田馬場、池袋）や紀伊国屋書店（新宿）などにあるが、念のため、現代書館のTELは03（3221）1321だ。本の帯には、こう書かれていた。「日本初のハイジャック事件の当事者として、北朝鮮での生活、タイでの偽ドル疑惑、日本への帰還……。全ての念（おも）いを今、読者に！」

田中さんのおもいが、ひしひしと伝わってくる。第1章から第4章までが田中さんの文章。第4章は「友より。待ってるぜ！義三」と題し、三人の同志が田中さんへの熱い思いを語っている。三人の同志とは、一緒に赤軍派の運動をやっていた田崎さん、吉永さん、そして、赤軍派ではないが「最近、同志になった」僕ですよ。なぜ田中さんに魅了されたか。なぜ、田中支援で5回もタイに行ったのか。詳しく書いている。読んで欲しい。

また、「あとがきに代えて」では北朝鮮の「よど号」グループの小西隆裕さんが書いている。この中で興味深いエピソードがいくつか紹介されていた。田中さんは左翼というよりは元々、右翼的であった。いや、いなせなヤクザのお兄さんの的だった。だから田宮高麿が「民族主義だ」といった時に、真っ先に賛成した……という。だから僕とも初対面で気が合ったのか。

また、田中さんには娘が三人いる。目に入れても痛くないほど可愛がっていた。あまりに家族を大切にするので、「田中家を見習ってよ」と、他の仲間の奥さんから不満が出るほどだったという。田中さんの長女は、今、日本に帰ってきて働いている。その長女を含め、次女、三女の子供の頃の写真もこの本には沢山入っている。それだけでも楽しいし、ほのぼのとした気分になる。

実は、この本は8月5日（日）の午前中に出版社から届いた。5日といえば、ブント（戦旗派）の集会の日だ。僕もパネラーを頼まれて、家を出るときに、本が届いた。持って行って電車の中で読み、会場で出番待ちの時に読み、バトルトークに出席してる時に読み、二次会の飲み会の席で読み……。それで読破した。面白い。皆も読もう。

さて、ブントの集会だ。ブントは、早大出身の活動家・荒岱介さんが代表をしている。早大の時は社学同といった。その後戦旗派といい、今はブントとっている。新左翼だが、「内ゲバ否定」で、開かれた唯一の新左翼だ。何せ、僕を呼んでいるくらいだし（神楽坂注・邦男さんてばキツすぎ）。去年も出たが、今年も呼ばれた。会場は社民党会館の5階の三宅坂ホールだ。ここは元は社会党会館。世が世なら、僕など入れないところだ。正面には故・浅沼稻次郎

さんの胸像が置かれている。60年安保の当時、社会党委員長で、元愛国党の少年、山口二矢に刺殺された人だ。

当日は、その会場の周りは、おびただしい数の公安がいた。税金の無駄遣いもはなはだし。誰が来てるか一人一人チェックし、写真を撮る。「新左翼の集会になぜ鈴木が来るんだ」という目で見ています。

この集会は、「2001 サマー。グラン・ワークショップ」という。テーマは「本当に必要な改革は何？開かれた議論をしよう」。当日の朝日新聞、毎日新聞にも案内が出てたという。12時半から会は始まった。まず、アイリーン・美緒子・スミスさん（環境ジャーナリスト）の原発についての講演。そして、フ・ウェイティンさん（新潟大学研究員）と鷲見一夫さん（新潟大学教授）のトーク。中国・三峡ダムについてスライド解説を交えて話す。そこで第一部は終了し、休憩をはさんで、いよいよ第二部。「社会運動に未来はあるか」と題したバトルトーク。パネラーは四人。主催者の荒岱介さん（肩書きは社会思想研究者となっていた）、作家の宮崎学さん、河合塾カリスマ講師の牧野剛さん。そして僕だ。

まず選挙の話から入った。宮崎さんは選挙に出て、10キロも体重が減ったとってた。ハードな闘いだっただ。牧野さんも数ヶ月前に名古屋市長選に出て、やっぱり10キロやせたという。「『選挙ダイエット』という題で本つくろうか」と話が盛り上がる。今の選挙のどこがダメか、どうしたら勝てるか……が、話し合われる。二人とも、これからもまだまだやる気だ。「荒さんもぜひ、出るべきですよ」と僕は言った。でも、ブントは荒さんの理論・人徳でもっている組織だ。荒さんがいなくなったら、やっていけない。「よし、その時は僕がブントの代表になってやる。だから安心して国会に出てくれ！」と言ってやったら、会場の皆から拍手を浴びた。

その後、教科書問題、靖国問題、グローバリゼーションなどの問題について討議した。終わってから、銀座に場所を移して二次会。永田町から銀座までだから、皆、地下鉄に乗って移動。二次会の会場としては遠いし、会費も高い。でも、大勢がつめかけて盛況だった。社民党会館だって、千人以上入る会場が超満員。通路にまで人が座っている。それも若い人ばかりだ。タオルで覆面をしたり、サングラスをかけてる人はいない（神楽坂注・そういう人たちは、鈴木さんを見たくて来てた一般人じゃないでせうか）。公然活動で、反公害、反原発、生協活動など地道な運動をしている人が多い。これは大いに見習う必要があると思った。それに皆、明るい。これはいいことだ。

二次会では、酒を飲み、食べながら、フラメンコ、沖縄民謡があり、最後は皆で、ゴーゴー・パーティだ（神楽坂注・ゴーゴー・パーティって何ですか？）。すごい熱気だった。それにつれられ、三次会にまで行っちゃった。

そうそう、ブント代表の荒岱介さんの本は一杯出てるが、『破天荒伝』（大田出版、1600円）が、一番面白いし、分かりやすい。ぜひ、読んでみなせえ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張8月20日

## よど号、連赤、テルアビブが漫画になっただ！

「鈴木さんのことが出てましたよ」と五味田くんがコピーをくれた。7月27日（金）、ロフトプラスワンに行った時だ。三浦和義さん夫妻の出版記念会があった日だ。そして第二部で高須さんが荒れ狂い、暴れまくった日だ。その流血の第二部が始まる前の休憩の時だった。五味田君にコピーと、一冊のマンガ本を手渡された。

この五味田くんは、よくロフトや一水会フォーラムで会う。実は10年前に講道館で知り合ったのだ。お互い初段の時に知り合い、よく練習をした。思想関係にも興味があるらしく、いろんな所へ出入りするようになった。高校の時は古林尚さんに習ったという。古林さんは三島由紀夫が死の一週間前（だから最後だ）に対談した人だ。そんなこともあって、五味田君は三島にも特別な関心があるようだ。

この五味田君からもらったコピーから紹介しよう。「BUBKA」の8月号らしい。エスエル出版会の松岡利康氏が「人間コク宝探訪」という連載をやっている。この号では、あの有名なオカマの東郷健にインタビューしている。ザーッと読んでたら、「鈴木邦男の暴力は許せない！」という見出しがあった。あれまあ、まだあのことにこだわってんのか、と思った。詳しくは『夕刻のコペルニクス』にも書いたから、知ってる人は知ってるだろう。暴力は悪いかもしれないが、東郷だって悪いんだ。ところが東郷はその経過にも一切触れずに、暴力だけを糾弾している。それも、あんな昔の話なのに、何を今さら……と思った。でも、「鈴木邦男は今も軟弱だけど、昔は硬派で武闘派だった」という証明になるし、ありがたい。いい話なので紹介してみよう。

（松岡）東郷さんは鈴木邦男に襲われたんですよね？

（東郷）ろっ骨6本も折られたわ。鈴木っていうのはオカマじゃないのお。

（松岡）やっぱり彼が独身なのはそうなんだね。

（東郷）あの手下、名前何やったっけ？ かわいい子がきてるわー。どこのバーテンかしらって思うてたらボコボコにやられて。遠藤誠（弁護士）さんのパーティーに行っても鈴木さんはいつも偉そうにしてて、わたしは大嫌い！ 許せないわ！

（松岡）鈴木さんもひどいことするなあ。そりゃあ、ろっ骨6本も折られたら許せないでしょう。これは書いちゃっていいんですか？

（東郷）それはもう書いちゃってちょうだい。

（本誌編集者）鈴木さんも我社に出入りしているんで、目に触れると思うんですけど……。

（東郷）右翼の手先みたいなもんやない彼。暴力なんて絶対許せないもの。鈴木さんなんて大嫌い！ でもこの雑誌ではちょっと難しいんじゃないの？ 彼の話は。

（本誌編集者）ありのままを書かせていただきますよ。

読んで笑っちゃった。楽しませてもらった。それに「甘い」と思った。「鈴木さん」なんて言っちゃダメだよ。「鈴木が悪党は」とか、「鈴木野郎は」と言わなくっちゃ。「暴力右翼・鈴木」をもっともっと批判し、罵倒しなくっちゃ。こんなじゃダメだよ。インタビューも大甘だよ。俺だったら、もっともっと厳しく突っ込んで、<鈴木糾弾>をやってやるよ。今度は俺に替われよ。「鈴木はオカマじゃないの」には笑った。東郷よ、お前はオカマに誇りを持ってんだらう。だったらオカマを悪口に使うなよ。それに昔は、「ろっ骨2本折られた」といったぞ。それがいつしか「3本」になり、今や「6本」だ。

それに「BUBKA」の編集部も水くさいね。「鈴木さんのことを出しましたよ」と送ってくれりゃいいじゃないか。僕は何を書かれたって怒らないよ。こんなインタビューじゃ生ぬるくってイライラしたほどだよ（神楽坂注・邦男さんてば、自分がインタビューされるのは嫌がるくせに……）。もっとどんどん「鈴木批判」をやってくれよ（神楽坂注・じゃー、このHPの掲示板でやりませう）。

まあ、それよりももう一冊の本だ。五味田君は、このコピーと共に、一冊のマンガ本をくれた。これは別に僕は出ていない。ただ、驚くべき本だった。赤軍派もとうとう<歴史>になったのかと思った。よど号、あさま山荘、テルアビブ事件……。あれから30年だ。歴史だよ。そして、何とマンガ雑誌で「赤軍特集号」が出たんだ。「コンバットコミック」（6月号）だ。発行は（株）日本出版社（新宿区矢来町111 TEL 03-5261-1811）だ。僕は知らなかったが、このマンガは月刊で出ているのだろう。通巻137号となっている。「戦場バトル&ドラマチックWARコミック誌」と銘打っている。

この「コンバットコミック」6月号が、「特集・赤軍（RED ARMY）・革命の時代」なのだ。凄いね。表紙には、赤軍と書いたヘルメットをかぶった精悍な男が銃を構えている。その後ろには、色っぽい女コマンドが。いいねえ。ドキドキする。管理人の神楽坂が喜びそうな本だ。そして皆がよく知っている血わき肉おどるお話が四つも載っている。紹介しようか。

①爆弾にすべてを賭けた青春『暁に消えた狼煙』（志村裕次+伊賀和洋）。赤軍派のカリスマ爆弾犯のお話だ。デモで警官に頭を割られた主人公が「権力の犬め、殺してやる！」と絶叫し、大量殺戮爆弾を仕上げるまでの血と汗と涙の物語だ。感動的だ。泣ける。100年後、日本に革命が起こったら、これは教科書に載るだろう。

これを読むと30年前のことがよく分かる。なぜ赤軍派が出来たのかも分かる。

「国家権力を打倒するにはゲバ棒や火炎瓶ではもはや勝てないのは明らかである。我々に必要なのは国家権力に対抗しうる強力な武器である。武装闘争だけが革命に勝利を導くのだ」という。そして赤軍派が結成される。でも、このマンガでは赤軍派ではなく「赤色軍事同盟」となっている。その結成大会で、議長の塩田孝夫（勿論、塩見孝也のことだよ）はこうアジテーションする。「ブルジョワジー諸君！我々は君達を革命戦争の場に叩き込んで一掃するためにここに公然と宣戦を布告するものである」。カッコイイですね。顔もカッコイイ。いかにも過激派の頭目ようだし。多分、本人も見えてないだろうから、誰か教えてやれよ。そのために出版社の住所も書いたんだから。きっと「日本のレーニン」塩見さんも感動するだろう。

「ウツ、オレは生きながらにして歴史になり、人間国宝になったのか！」と感涙にむせぶであります。そうだ、「人間コク宝探訪」をオレにやらせるよ。

マンガに戻る。この「赤色軍事同盟」の結成大会では「局長・宮田育麿」もアジっている。

勿論、田宮高麿のことだよ。それにしても「局長」って何か、新撰組みたいだね。じゃー、その下の副長が田中義三さんなのかね。あるいは柴田泰弘か。柴田さんは元妻の八尾めぐみさんにまたもや暴露・糾弾されたよね。「週刊新潮」で。連載だからまだまだ続くんだろう。かわいそうに。週刊「SPA!」の連載があったら、柴田さんの反論も載せたいところだよ。ところで、「局長・宮田育麿」はこう絶叫する。「万国のプロレタリア諸君、決起せよ！ 世界革命戦争に勝利すべし！」。腕を突き上げて演説している。顔はちょっと似ている。そうだ、田宮さんの娘は日本に帰ってきたんだ。誰か、買ってあげて下さいよ。「ほら、あなたのお父さんは、もうマンガにまでなってますよ。伝説の人になったんですよ」と。

この「赤色軍事同盟」のために爆弾をつくるのが、「福島医歯大の白井俊夫」だ。そう、いまだに逃亡している梅内恒夫がモデルだ。『都市ゲリラ教程』や『腹腹時計』も出てくる。白井の恋人も出てきて必死に止める。しかし、日本革命のために女の忠告なんか聞いていられない。塩田も宮田も、「大阪戦争」「東京戦争」を計画し、爆弾の仕上がりをせかす。そのために大菩薩峠の山小屋「大ちゃん荘」（本当の歴史では「福ちゃん荘」）に結集する。あとのストーリーは本誌を見てくれや。

②史上空前の山荘銃撃戦『突入』（真行寺たつや）。あの、あさま山荘事件ですよ。単なる銃撃、突入ではない。警官の兄と、赤軍派の弟という、運命に弄ばれる兄弟の話がメインになっていて、泣ける。

③若者を凶行に走らせたものは！？『たどりついた死』（もりやてつみ）。テルアビブ空港襲撃事件のお話だ。「革命への決意。世界を変えるためこの命捧げるは我らが本望！」と巻頭に書かれている。気合が入っている。「静かにしろ、我々は一般市民には危害を加えない！」

「我が日本赤色同盟の敵はシオニストと帝国主義者どもである。目標は空港警備兵だ！」と三兵士は叫ぶ。あれは一般人を無差別に殺したという「嘘の歴史」に対し、反論しているのだ。赤軍派か日本赤軍に詳しい人が資料提供したのだろう。「この事件で平林武と中田一之が射殺され、岡山公二が逮捕された」となっている。岡本公三は、その後釈放されて、最近もテレビに出てたよね。元気らしい。平林は奥平剛士。中田は安田安之のことだよ。

④アラブに渡った異端日本人コマンド『オリーブの誓い』（松田大秀）。勿論、重信房子のことだよ。若い時は本当に美人だったよな。今はオバサンになって、日本で裁判を受けてるけど。重信は今年の四月、獄中から本を出した。『りんごの木の下であなたを産もうと決めた』（幻冬社。1500円）。この「りんごの木」を、マンガでは「オリーブの木」に変えたんだろう。重信といえば、数年前に彼女をモデルにしたマンガがあったな。かわぐちかいじの「メデューサ」だ。あれにはシビれたね。

でも、いいよね、赤軍派は。苦勞もしたんだろうけど、ちゃんとマンガ本になって。そして、いつかは教科書にも載るだろう（神楽坂注・邦男さんもあっちこちで小説のネタにされてるじゃないですか）。そうだ、この『コンバットコミック』も、今度は「特集・右翼」をやったらいい。何なら俺が原作を書いてもいい。いや、マンガも描いてやるよ。「特集・赤軍」が4話だから、右翼も4話かな。①三島事件、②経団連事件、③「ミンボーの女」スクリーン切り裂き事件。そして④が「東郷健襲撃事件」だ。マンガだから実名じゃなくて、

ちょっと変えるのかな。じゃ、オカマの「南郷病（なんごう・やまい）」が、天皇不敬イラスト事件に激怒した右翼青年「本村一浩」に襲われる。パンチ・キックの雨あられ。正義の鉄拳制裁だ。ろっ骨30本も折って南郷は新大久保の路上で気絶。と、突然、ここに現われたのがムショ帰りの味沢恥連。「このまま逃したら後で何を喋られるか分かりませんよ。だから、いっそ……。そうしたらあとくされなくてスッキリします」と。それで、白いワゴン車に南郷を連れ込み、中央高速で首を絞めて殺し、遺体は富士の樹海に埋めた。味沢は何でも、これで殺人は二度目だという。恐るべし恥連！

という話ですよ。面白くないかな。じゃ、ストーリーをもっと複雑にするか。殺された南郷が夜な夜な化けて出て、味沢はノイローゼからヤク中になってしまうとか……。

おっ、そうだ。よど号をハイジャックして北朝鮮に行った赤軍派の9人は、「我々は“あしたのジョー”である」と言ったんだ。だったら、コミックの「特集・赤軍」だって、これを入れなくっちゃダメじゃないか。たとえばですよ。ジョーは燃え尽きて白い灰になっちゃったけど、奇蹟的に命はたすかる。それでもパンチドランカーになっちゃったから、「左右」の平衡感覚がない。そんな時に「赤色軍事同盟」の塩田孝夫議長と新宿の風俗店で出会い、オルグされる。そんな所でオルグされるかって？ されるんだよ。ブント代表の荒岱介さんは塩見さんに24時間つけ回され、オルグされ、トイレでウンコしてる時もオルグされた。隣の個室に入り、オルグを続ける。「ウン、コーしてはいられない。革命だ！ 武装蜂起だ！」と。「こんなことがいつまでも続くのか！ あー、いやだ、いやだ」と思い、ついに落ちてしまった。これは本当の話だ。荒さんの『破天荒伝』（太田出版）に出ている。ウソだと思ったら、読んでみなせえ。だから、ジョーも塩田議長に風俗店でオルグられる。武装蜂起だ、武装勃起だとオルグされ、上下ともエレクトし、ハイになったところで、そのままハイジャック。そして地上の楽園・北朝鮮に渡ったジョーは……。 (以下次号)

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張8月27日

### 愛国者になった。昔の日本映画を見て……

「あっ、鈴木さん」「おっ、鈴木君」と会話が交わされて、これも変だなーと思った。「鈴木君」は早大を出て2年めだ。就職がなくてどっかでバイトしてるらしい。一方、「鈴木さん」と呼ばれた男は早大を出て35年。やはり仕事がなく、ブラブラしてるらしい。本人は仕事をやりたいのだが、最近、週刊誌の連載が打ち切りになってから、あまり仕事もない。お金もなく、図書館で本を読んだり、フテ寝をしてるようだ。

二人の「鈴木」だが、年齢差が35もあるから、その一点だけで、若い方は老いた方を「鈴木さん」と呼び、老いた方は若い方を「鈴木君」と呼ぶ。そうだ、他にも早大を出てジャナ専に入った「鈴木君」もいる。彼はなぜか「鈴木先生」と呼ぶ。だったら、いっそ“鈴木”は共通なんだから、括弧に括って「さん」「君」「先生」と呼べばいい。ところが、「先生」は通用するが、「さん」「君」だけでは通用しない。困ったものだ。でも、三人の「鈴木」の中で年齢差があるから使い分けられるのだ。同じ年齢同士だったら、「鈴木さん」「あっ、鈴木さん」という会話が交わされる。変だ。学校だと皆、「先生」を付けて呼び合うから、こうなる。

「あ、鈴木先生。お早いですね」「いやー、鈴木先生、今日も暑いですね」……と。これも奇妙だ。若者ならば、「おっ鈴木」「なんだ鈴木」となるだろう。鏡に向かって喋ってるようで嫌じゃないのかな。

では、話を戻す。「あっ、鈴木さん」と彼は言った。「おっ、鈴木君、どうして？」と僕は聞いた。「僕は成瀬巳喜男の『コタンの口笛』を観に来たんですよ。鈴木さんこそどうして来てるんですか？『日本映画なんか観る価値がない。外国映画が1800円なら日本映画は1円80銭でいい』なんて、思いっきり反日的、自虐的なことを書いてたじゃないですか」「……」。

ここは、ラピュタ阿佐ヶ谷という映画館だ。最近、集中的に日本映画の名画を上映している。それも朝から晩まで。それも週替わりや日替わりで。だから僕はひっそりと隠れて観に来ていたのに、鈴木君に見つかってしまったんだ。

「『コタンの口笛』はいいよね。アイヌ差別をテーマにした映画で……。泣けるよね。本当にいい映画だ」

「そんなことより、どうして来てるんですか？ 日本映画は観る価値がないんでしょう」

「……」

「言行不一致ですよ、鈴木さんは」

「まあまあ、そう責めないで……。<今の日本映画>は観る価値がないと言ったんだよ。昔のものにはいい映画が一杯あるよ」

「そうですか」

実はだね、本当のことを言うと、昔も今も日本映画なんて下らないと思っていた。日本人な

んで大体、映画に向いてねえやと思っていた。背は低いし、足は短いし、顔は平べったいし。格好いい欧米人がやってこそ映画になるんだと思っていた。

ところが、「ラピュタ阿佐ヶ谷」で今年の1月31日から3月30日まで、「活動大写真・チャンバラ大会。五大スター夢の競演！」というのをやっていた。この映画館の館主は雑誌「コミック・ボックス」の社長だ。昔、この雑誌に漫画評を連載していたことがあって、それ以来の知り合いだ。2月頃、ロシアの映画監督ソクーロフ氏が日本に来た時、「ぜひ会ってくれ」と頼まれて会った。この監督はヒトラーを主人公にした映画「モレク神」や、ムッソリーニの映画を撮っている。次は「天皇」を撮りたいと言う。「いいんじゃないですか。がんばって下さい」と言った。しかし、次に会ったら「鈴木さん以外は皆、反対した。危なすぎる、やれっこないと言う。だから、考えているところです」という。

この監督と会った時に、社長が「チャンバラ映画は面白いですよ。どうです」と勧めてくれたのだ。フーンと思ったが、心が動かなかった。子供の頃に見たからいいやと思った。でも懐かしいから一本位、試しに見てみようかと思った。そう思ってるうちに、「五大スター夢の競演」のうちの阪東妻三郎は終わった。片岡千恵蔵も終わった。嵐寛寿郎の最後だけ、やっと見た。「鞍馬天狗・鞍馬の火祭り」（1951）と「剣光桜吹雪」（1941）だった。60年も前の映画だが、面白かった。驚いた。小学校の頃に見たのは、ほんの一部に過ぎなかった。その前にも面白い映画は膨大にあるし、当時はビデオがないから、全く知らなかったんだ。「俺は日本映画を全く知らなかった！」とガーンとなった。よし、観てみよう！ と決心した。それで、次の大河内伝次郎を観た。「大河内乱斗集」（1921）、「丹下左膳」（1953）、「御誂次郎吉格子」（1931、これは特に素晴らしい映画だった。感動した！）、「丹下左膳・こけ猿の壺」（1954）、「ごろつき船」（1950）、「大菩薩峠第一編・甲源一刀流」（1935）。

それから市川右太衛門を観た。「錦絵江戸姿」（1939）、「殴られたお殿様」（1946）、「旗本退屈男・江戸城罷り通る」（1952。今、テレビで息子の北大路欣也がやっている）、「大江戸五人男」（1951）、「東海水滸伝 東海二十八人衆」（1945）、「忠臣蔵・天の巻、地の巻」（1938）。

この「チャンバラ映画」が終わったら、4月1日から「モーニングショー」として、「小林信彦が選ぴラピュタが贈る『二十世紀の日本映画』100本」が始まった。今までに観たものを列記しよう。「無法松の一生」「王将」「大曾根家の朝」「青い山脈」「暴力の街」（これは反動勢力と闘う新聞記者の話で、面白かった）。「西鶴一代女」「本日休診」「にぎりえ」「ひめゆりの塔」「晩菊」「野菊の如き君なりき」「次郎長三国志」「夫婦善哉」。

このモーニングショーの後に、12時から「京マチ子特集」（3月31日～5月5日）があった。これは全部見た。「痴人の愛」「鍵」「あなたと私の合言葉 さようなら今日は」「馬喰一代」「赤線地帯」「あにいうと」「瀧の白糸」「偽れる盛装」「雨月物語」「地獄門」。

ここで驚いた事がある。原作のあるものが多いが、必ずしも原作に忠実ではない。かなり変えている。谷崎潤一郎の「痴人の愛」「鍵」も大きく変えている。「鍵」なんて、映画のほうがストーリー的には優れていると思った。また、泉鏡花の「瀧の白糸」は、原作のラストは悲劇だが、この映画では大きく変えて、ハッピーエンドにしている。多くの人に映画を観てもらおうとして、変えたのだらうが、なかなか意欲的だ。上田秋成の「雨月物語」も、他の作品を入れて、大きく変えている。映画としてはこの方が面白いと思った。

京マチ子が終わると次は長谷川一夫だ。これも全部見た。面白いし、よく出来ている。昔の

映画は脚本もしっかりしてるし、いい。「物語はこういうふうにつくるのか」と、自分の勉強にもなった。長谷川一夫のは次の8本だ。「源氏物語」「日蓮と蒙古大襲来」「桜田門」「銭形平次捕物控・まだら蛇」「近松物語」「大仏開眼」「新平家物語・義仲をめぐる三人の女」「歌麿をめぐる五人の女」。

どれも面白かった。歴史の勉強にもなった。「桜田門」は暗殺された伊井直弼を主人公にした映画だ。直弼の側から見ると、歴史もまた、別に見えてくる。これは貴重な映画だ（船橋聖一の『花の生涯』も直弼を主人公にした、いい小説だ）。

そして、5月26日～8月4日まで、成瀬巳喜男監督の特集だった。それも、午後の2時から10時ごろまで、毎日4本ずつやる。それを四日交替ぐらいで替える。これは半分以上見た。全部見るつもりだったが、全部は見切れなかった。

このように、ラピュタ阿佐ヶ谷は朝から晩まで、毎日、日本映画をやったわけだ。朝10時から「小林信彦が選ぶ日本映画100本」、12時からは京マチ子・長谷川一夫特集。そして2時から成瀬巳喜男が4本だ。。だから多い時は僕も一日中、この映画館にいて、1日に6本も見た。頭もボーっとなった。でも、それだけ面白かったし、考えさせられた。昔の日本映画って凄かったんだと思い知らされた。日本への愛情を取り戻したし、愛国者になった。

特に、成瀬の映画はビデオ屋にもあまり置いてない。こういう機会でないで見れない。成瀬巳喜男（なるせ・みきお）は「やるせなきおと呼ばれた名匠」なんだそう。みんな、いい映画だし、やるせない。大文豪の原作もあるが、いずれも成瀬的な味付けがなされていて、引き込まれる。今までに見たのは……。「流れる」「女の座」「コタンの口笛」（鈴木君も見たやつだ）「乱れる」「放浪記」「夜の流れ」「乱れ雲」「女の歴史」「杏っ子」「舞姫」「芝居道」「お国と五平」「妻」「はたらく一家」「乙女ごころ三人姉妹」「秀子の車掌さん」「妻の心」「夫婦」「晩菊」「あにいもうと」（この二つは京マチ子特集でも見た）「浮雲」。

「お国と五平」は谷崎潤一郎原作で、よく歌舞伎でもやる。この映画は、それをさらに変えて成瀬ワールドの作品にしてる。こっちの方が面白い。「秀子の車掌さん」は高峰秀子が主演だから「秀子の…」になってるが、原作は井伏鱒二の「おこまさん」だ。「流れる」は幸田文だ。幸田文は幸田露伴の娘で、今では父以上に読まれている。「杏（あんず）っ子」はいわば、「幸田文になりそこねた娘」の話だ。これは室生犀星の小説で、いわば自伝だ。杏子というのは犀星の娘だ。作家志望の亮吉と結婚するが、これが失敗。才能のない男で、酒におぼれ、職を転々とし、杏子に暴力をふるう。犀星に嫉妬し、敵意を抱くのだ。だったらいっそ、こんな無能亭主とは離婚して杏子が作家になればいいのだ。だから、「幸田文になりそこねた女」なんだよ杏子は。小説（新潮文庫『杏っ子』）では杏子が生まれる前から書いてるが、映画では杏子が結婚して、苦労してる主婦の話になってる。だから「杏っ子」ではなく、「あんずおばさん」の話になっている。

成瀬監督は林芙美子の小説も随分と映画化している。「浮雲」「晩菊」がそうだし、「妻」も原作は林の『茶色の眼』だ。そして、「放浪記」は余りにも有名だ。この「放浪記」は芝居では森光子が長年やっていて、僕も見た。林の若い頃からずっと演じるから、かなり無理があるが、力演だ。映画では林は高峰秀子だ。林芙美子はこんなにきれいじゃないぞと思いついてた。貧乏で、職を転々とし、男も転々と渡り歩き、デカダンでアナーキーな生涯だ。ボーっと見ていたら、「そのシーン」でアッと声を上げてしまった。（以下次号）

(追伸) 何と、「発見・成瀬巳喜男の煌めき。アンコール上映」が決定し、8月22日(水)、台風の中、見に行った。この日は「娘・妻・母」「めし」「君と別れて」「腰弁頑張れ」の4本を見た。そのあと「大島渚特集」があって、「愛と希望の街」を見た。朝10時から夜10時まで、映画館にいた。成瀬、大島が終わると、「20世紀の日本映画100本」がまた開始される。楽しみだ。

成瀬の「君と別れて」「腰弁頑張れ」はサイレントだった。1930年の映画だという。71年前だ。凄い。「めし」は林芙美子原作だが、原作よりもずっとドラマチックに仕上がっている。やっぱり、テレビが出る前の日本映画はいいのが多いね。脚本もしっかりしてるし、映画俳優・女優は「スタア」だった。テレビのバラエティ番組に出てキャラキャラしてるのとは違う。神秘性があったし、確かな存在感があった。大文豪の傑作だって、大胆に直して、より面白いものに変えている。脚本家、監督にポリシーがあったんだよな。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張9月3日

### 「放浪記」と「萬世一系の天皇」

映画を観ていた。林芙美子原作「放浪記」だ。監督は成瀬巳喜男だ。成瀬は林の原作を何本も映画化している。「晩菊」「めし」「浮雲」、そして「放浪記」だ。はっきり言って、映画のほうが小説よりずっといい。普通は原作のほうが素晴らしくて、「なぜ映画にしたんだ」と思う事が多い。島尾敏雄の「死の棘」や円地文子の「食卓のない家」などは特にそう思った。原作者や遺族が、そんなに金に困っているのかとすら思った。円地についてはまた、近いうちに書く。ともかく、谷崎であれ、川端であれ、三島であれ、映画が原作を超える事は、まずない。

ところが成瀬に限っては映画のほうが良い。この映画「放浪記」は1962年9月29日に公開されている。1960年が安保の年で、浅沼稻次郎（神楽坂注・当時の社会党の委員長）や樺美智子さん（神楽坂注・国会議事堂の前でデモ隊と機動隊が乱闘となり、その時機動隊に殺された女子大生）が死んだ年だ。それから2年後だ。日本はまだまだ激動の時代だった。「全学連の時代」が終わり、「全共闘の時代」が始まるという時だ。学生運動にとっては<戦前>だった。僕はやっと早大に入った年だ。しかし成瀬なんて知らなかった。田舎から出てきたアホ学生だから林芙美子の名前すらも知らなかった。それまで小説なんて読んだことはなかったんだ。

さて、「放浪記」は林の自伝だ。林は小説家・詩人。1903～1951年。下関市生まれ。尾道高女卒。自伝的小説『放浪記』で文壇に登場、庶民的ヒューマニズムを基調にした抒情的作風で知られた。後年、客観的作風に転じ、小説『牡蠣』『晩菊』『浮雲』『めし』を残す……と、三省堂の『辞林21』には出ている。映画では林芙美子を高峰秀子がやっている。母、きしを田代絹代、詩人で林と結婚し、捨てられる福地に宝田明。林に片思いし、金だけ取られる安岡に加藤大介。それに小林桂樹らが出ている。音楽は古岡裕而と、豪華だ。粗筋は……。芙美子は母きしと行商をして暮らす日々を過ごしていた。やがて住み込みでカフェの女給となる。芙美子が新聞に投稿した詩を読んで「太平洋詩人」の同人、福地らが彼女を誘いにやってくる。それをキッカケに「詩人・芙美子」が生まれるのだが、これ以前もこれ以後も、貧乏と男の苦労ばかりだ。でも、男に苛められてるだけじゃない。時には男を騙して金を巻き上げ、汚い手を使ってライバルを蹴落としながら、「作家」への道を一段一段と登ってゆく。まるで敏春君のようだ。その泥まみれの生き様がいい。そして、どんな時でも、失意の中でも、本だけは必死に読み、書いている。偉い。

さて、カフェの女給になる前に、林はセルロイド工場に勤めていた。女工さんだ。セルロイドのキューピー人形に彩色するなどの単調な、生き甲斐のない仕事だ。こんなことをしているのかと悩む。焦る。『放浪記』ではこうかかっている。

<なぜ？ なぜ？ 私達はいつまでもこんな馬鹿な生き方をしなければならないのだろうか？ いつまでたっても、セルロイドの匂いにセルロイドの生活だ。朝も晩も、ペタペタ三原

色を塗りたくって、地虫のように、太陽から隔離された歪んだ工場の中で、コソコソ無限に近い時間と青春と健康を搾取されている。若い女達の顔を見ていると、私はジンと悲しくなってしまう。>

ちょっと長い引用だったかな。でも、大作家の文章を書き写す事は、文章の勉強になる。だからこれは自分のためにやっていることだ。失意の時にあっても本を読み、いい文章は写して勉強する。その覚悟なんですよ。実は、この文章は角川書店の『女性作家シリーズ』と銘打った全24巻のうちの2巻目「平林たい子・林芙美子」から引用した。今、この全集を中野図書館から借りて読んでいる。今の『放浪記』にも「搾取」なんて左翼的・プロレタリア的用語が出てくるが、平林たい子はモロ典型的なプロレタリア作家だ。この本の中に、『嘲る』という小説が載っている。まさしくプロレタリア作家達の生態が書かれていて驚いた。多分、事実だろう。ブルジョア的一夫一妻制を否定したわけではないが、既成の価値観に反発し、それと皆、根は好きだったんだろう。だから、男女関係も乱れに乱れていた。男は金に困ると女房を「昔の男」のもとに行かせて金を借りて来させる。「休憩」だけでなく「泊まり」も可だ。女房の体で金を得るのだ。プロレタリア運動の為に(?)。(神楽坂注・それと似たような事って、文学の世界だけじゃなくって写真の世界でもあったみたいですね。金に困ると、奥さんのヌード写真を売って金に換えてたとか……そういうのを「コメビツヌード」と呼んでたそうす)だが、時には「タダ乗り」されることもある。主人公の女(平林だろう)は、「昔の男」にこう手紙を書く。

<貴方の要求どおりにしたではありませんか。約束の十五円の金を貸して下さい。こういう世の中で、プロレタリアの女性が、自分の生存を救うために、唯一のものを投げるのは、やむを得ない事です>

凄いですよね。今なら「援助交際」とでもいうのでしょうか。「プロレタリア的援交」なんて……。今の女子高生達も、どうせやるんならその位の思想性を持ってほしいですね(神楽坂注・そういえば、若松孝二監督が30年前に撮った映画に「マル秘女子高生・恍惚のアルバイト」というのがありましたね。売春をして蓄えた資金でハイジャックをする女子高生の話です)。さらに平林の『嘲る』にはこんな箇所もある。<xx会社では金をゆすりにあるく、反動やアナキストの為に、特にその日を寄付デーにして玄関脇に机をおいて受付けていたのである>

これも驚きだ。「会社回り」をして寄付金や賛助金をもらって歩くのは右翼や総会屋ばかりと思っていたら、アナキストもプロレタリア活動家もやっていたんですね。『嘲る』の主人公も会社に並び、寄付金をもらう。「たったこれだけ?こんなに並んで」と文句を言い、倍にしてもらう。他の人からは、「女は特だね」とひやかされる。

こう見てくると、プロレタリア小説は今読んでも実に面白い。荒俣宏が『プロレタリア文学はものすごい』(平凡社新書)を書いているが、全くその通りだ。

さて、話を戻そう。林芙美子の「放浪記」だ。セルロイド工場で彩色してるだけじゃラチが開かない。これじゃダメだ、搾取されるばかりだ。落ちついて詩を書きたい、小説を書きたい、と思う。そのためには、もう少し余裕があり、金のいい職場に移らなくちゃと思う。でも、工場ではどこでも同じだ。その時、一緒に帰った同僚が、「私、カフェの女給になるうと思うの。あなたもどう?」と誘ってくる。うーん、どうしようかなと思ながら街を歩いてくると、本屋さんがある。スーッと入ってしまう。「あなたは本屋さんという素通りできない

んだから」と笑われる。そこで本を手にとって見る。漱石や芥川の本などがある。棚には文学だけじゃなく政治的な本もある。しかし左翼的な本は発禁だから置けない。どんな本があるのかなと僕も食い入るようにスクリーンを見ていた。そして、アッと叫んだ。里見岸雄『萬世一系の天皇』という本が置かれていた。見間違いではない。そうか、当時、里見はそんなに有名だったのか、と思った。

「里見岸雄って誰？」とお思いの方に説明しよう。この人は、<天皇論>に革命を起こした人だ。三島由紀夫の『文化防衛論』は里見の『天皇とプロレタリア』を下敷きにしたのだ。これは竹中労が言っていた。また、僕の処女作は『腹腹時計と<狼>』（三一書房）だが、これも里見の本に影響されて書いたものだ。つまり、三島事件の遠因も里見ならば、「新右翼」を作ったのも里見だと言える。もう少し詳しく説明しよう。人名辞典で里見を引いてみた。

<里見岸雄 1897（明治30）～1974（昭和49）。右翼思想家。東京生まれ。田中智学の三男。早大哲学科卒。1922年（大正11）欧州に留学し、帰国後24年に里見日本文化研究所を設立。36年（昭和11）、日本国体学会を設立。41年、立命館大学に国体学会を設置。敗戦後は日本国憲法の改正を主張。55年、立正教団を創立し、機関紙『国体文化』『立正文化』を発行。天皇・国体が体制側、資本家側のものになり、労働者を反天皇に追いやっている状況を憂え、天皇は一般国民、プロレタリアにこそ必要な理念だと説いた。『天皇とプロレタリア』『国体に対する疑惑』という著書の挑発的題名からも里見の意気ごみはわかるだろう。これらの本はベストセラーになった。マルクス流にいうならば、「空想的天皇主義」に対し、里見は「科学的天皇主義」を提唱したというべきか。左右両翼の国体論はもちろん、政府官憲の「思想善導」的国体論をも痛烈に批判した。国体学会は現在も続いており、月刊機関紙「立正」を発行している。>

これも引用が長くなったが、『民間学辞典・人名編』（三省堂。7600円）から紹介した。実は里見の所は僕が書いた。他にも北一輝、大川周明など25人ほどを書いている。里見の設立した「国体学会」（TEL 0422(51)4403）は今も活躍し、里見の著書を扱っている。「放浪記」に出ていた『萬世一系の天皇』もある。また、『国体に対する疑惑』は去年の4月、展転社から復刊された。展転社はTEL 03(3815)0721だ。2000円だ。これは是非、読んで欲しい。初版は昭和3年に刊行され、100版突破のベストセラーになった。

この本はタイトルからして挑発的で凄い。目次はもっと凄い。「天皇陛下の御真影に敬礼するは要するに偶像崇拜にあらずや」「天皇は何故神聖なりや」「忠君愛国は資本階級特権階級が自己の保存の為にする宣伝道徳にはあらざるや」「天孫降臨信ずべきや」……といった「国体に対する疑惑」が50も並んでいる。これだけでも発禁ものだ。しかし、「それらの疑問がある。その辺の右翼じゃ答えられないなら俺が答えてやる」と書いて書いたのがこの本なのだ。だから警察も発禁にできない。そして100版を重ねた。きっと左翼も買ったんだろう。この<手法>は三島も使っているし、僕も使っている。

もう少し里見について書くが、「田中智学の三男」とあったよね。田中智学は宗教者にして革命家だった。「国柱会」をつくり、実に多くの人に影響を与えた。鎌倉時代に、国難を救い給えと祈り、神風を吹かせて蒙古の襲来を撃退したと言われているのが日蓮だ。日蓮は「我れ日本の柱とならん」「眼目とならん」「大船とならん」と言った。田中智学はここからとって「国柱会」と名付けた。血盟団の井上日召も、満州事変の石原莞爾も、そして詩人の宮沢賢治も国柱会に入っていた。凄い影響力を持っていたのだ。この国柱会は今もある。その青年部が

「良識復活国民運動」というのをやっていた。左翼運動に対抗していたのだ。笹井兄弟を中心に活躍していた。一水会と共闘し、弟のほうは「レコンキスタ」の編集長をやった。今はブラジルにいる。兄のほうは「展転社」の前身の会社をおこし、今は他の宗教出版社をつくっている。

本当は今回は、田中智学・里見岸雄について、そして、僕らがいかにその影響を受けてきたかを書きたかったが、長くなったのでこの辺でやめる。「放浪記」を見ていて、ついつい昔のことを思い出したのだ。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張9月10日

### 真夏の決闘 in 日比谷野音

暑かった。熱かった。燃えましたね。9月2日は凄い集会だった。午後2時から8時まで6時間。時間も長い、集会の名前も長い。エーと何だっけ。パンフを見ないと書けない。「9・2日比谷野音・個人情報保護法案をぶっ飛ばせ！2001人集会」。

日比谷野外音楽堂は新左翼運動のかつてのメッカだ。60年～70年前半にかけて、よくここで集会をやっていた。竹ざおを武器に内ゲバもやっていた。全国全共闘結成大会もここでやったんじゃないかな。右翼だって「反ソデー」などの集会ではよく使っている。2000人も収容できるから、動員も大変だ。ところが、ちょうど一ヶ月前の8月3日に同じ野音で、あの「右翼パフォーマンス」の鳥肌実がライブをやった。出演者は鳥肌一人だけ。時間も一時間半ぐらい。しかし、会場は超満員。通路にまで人が座って聞いている。凄いと思った。

こんな「お笑い芸人」一人で超満員になるんだ。だったら「9・2集会」は超超超満員になるだろう。だって、これは「お笑い」じゃないし、「ひやかし」じゃない。真剣に悪法を阻止しようという命をかけた集会だ。それに出演する人が凄い。日本の主だったジャーナリストが出る。鳥肌一人に負けるわけではない。そんなに弱いのが日本のジャーナリズムじゃない。だって当日の出演者を聞いたら驚くぞ。

田原総一郎、大橋巨泉、福島瑞穂、崔洋一、田中康夫、大谷明宏、佐野眞一、梁石日、渡辺文樹、若松孝二、島田雅彦、澤地久枝、吉岡忍、井上ひさし、江川紹子、有田芳生、宮台真司……

まだまだいる。とても書き切れない。「ブロック1」から「ブロック6」まで分かれて、5、6人ずつトークをやるんだ。これは大変なことになる。その合間にパンタの歌や、沖縄の踊りなどがある。これらのそうそうたる人々の中にまざって、何と僕も入っている。「前の集会の時、変なことを言ってたから、こいつも入れてやろう」とお情けで入れてくれたようだ。

集会は午後2時から始まる。「ブロック1」は、いろんな雑誌の編集長の対談。そして2:55～3:40までが「ブロック2」で、僕はここに出るように言われた。テーマが刺激的だ。「きれいなメディア・きたないメディア」。「きたないメディア」って何だろう。最近の、一部のインターネットの事か、あるいはエロ雑誌か。前回の集会の時、僕は「国家権力の介入には反対だ。しかし、守る価値のあるマスコミ、ミニコミがどれほどあるか。志のないマスコミばかりじゃないか」と言った。そしたら宮崎学さんに、「じゃ、鈴木さんの書いてるものは志があるのか」と批判された。勿論、僕にも志なんかないよ。だから連載を打ち切られるんだ。そんな僕から見てさえ、ひどいものばかりだ。そして、自分は責任を負わないで他人を批判したい、あわよくば国家を批判したいと思っている。はじめから腰が引けている。根性がない、という話をした。それを踏まえて主催者は、その問題、さらにはインターネットの問題をやるうとしてたんだろう。となるとまた宮崎さんと正面からの闘いになるのか。しんどいなを思ってい

た。

「ブロック2」はその宮崎さんが司会だ。問題提起をし、進行をする。このバトルを仕切るのだ。他の発言者は、佐高信（評論家）、日名子暁（フリーライター）、森達也（映画監督）、ひろゆき（2ちゃんねる主催）、辛淑玉（評論家）、そして僕だ。みんな手強い人ばかりで、僕なんて喋れないだろうなと戦意喪失しかけていた。宮崎、辛さんにはいつも論破されてるし……。気が重かった。

「当日は2時5分に来て下さい」と言われていた。打ち合わせをして、それからトークだ。言われた通りに言った。ところが控え室が妙だ。変にザワザワしている。いつまでたっても司会・進行の宮崎さんが来ない。「どうしたの？」と聞いたら、「宮崎さんは来ないんです」と言う。エッと思った。「実は……」とビラを見せられた。革マル派のビラだ。会場の入り口で配られていたという。僕は出演者用の入り口から入ったから分からなかったが、一般入場者用の所では革マルをはじめ、いろんなセクト、市民団体がビラを配っていたんだそうだ。その中に、「宮崎批判」のビラがいくつかあった。特に革マルのが凄い。「スパイの巣窟と化した断末魔にあえぐ走狗集団・ブクロ＝中核派を弾劾せよ！」と題したビラだ（神楽坂注・「ブクロ」とは革マル派が中核派を指す時の呼称。昔、中核派の本拠地が池袋にあったため）。宮崎学と関係ないじゃないかと思ったら、「権力のスパイであることを平然と居直る宮崎学」と出ていた。

よく分からないが、「宮崎学は権力（公安調査庁）のスパイである事が判明した」という。そんなスパイが中心になって、この集会をやっているのか。主催者は何を考えているのか。許せん！ ということらしい。実は、「宮崎スパイ説」はインターネットでも書かれているらしい。しかし、詳しく読んだ事はない。革マルのビラではこう書かれていた。

<宮崎学が、公安調査庁のスパイ工作に積極的に応じてきたレッキとしたスパイであることが、もろもろの暴露本（『公安アンダーワールド』とか『公安調査庁スパイ工作集』など）において明らかにされ、しかも当の宮崎じしんがこのことを事実と認め、「自分は清く正しく生きていくつもりはまったくない」と平然と居直っている。だがにもかかわらず、宮崎の大学時代の「同級生」である荒岱介ひきいる「ブント」（日向派）は8月5日の集会に宮崎を呼んで「デッチあげだ」と発言させ……>

そして革マルは、こんな人間を中心メンバーにして9・2集会がやられるのは、「きわめてゆゆしきことではないか」と言うのだ。今や、「『宮崎を追放しよう』という声が大きくまきおこっている」ともいう。

「宮崎スパイ説」はそれこそ「謀略」で、誰かのイヤガラセだと僕は思っていたのに、こんな大事件になっていたのか。革マルが触れている「8・5ブント集会」は僕も呼ばれて喋っている。司会の人が、「スパイ説が出てますが……」と聞くと、「これは嘘だ。謀略だ」といいながら、どうも歯切れが悪い。「公安に会ったのは事実だ。だが、日時は違う」とか言ってる。何か大きな策を仕掛けて公安に会い、公安を利用しようとしたのかと思った。しかし、危ないやり方だなと思った。

この日のブントの集会での詳しいやりとりはブントの機関紙「SENKI」（9月5日号）に（上）が載っている。次回にも載るのだろう。興味のある人は申し込んでみたらいい。一部300円だ。せんき社は048(445)2921だ。新宿の模索舎にも置いてある。また、現在発売中の月刊「創」（10月号）に、僕がこの集会のことをかいた。また、「宮崎スパイ事件」については

編集部が書いている。読んでみたらいい。「スパイ事件」については革マル派の機関紙「解放」(9月3日号)と中核派の機関紙「前進」(9月3日号)に「宮崎批判」の論文が載っていた。だが、もっと詳しいのは『公安調査庁スパイ工作集』(社会批評社。1500円)だ。この出版社の社長は元「反戦自衛官」の小西誠だ。この本には公安のレポートがそのまま載っていて生々しい。宮崎学と三島浩司弁護士は「スパイだ」とハッキリ断言している。これは衝撃的な本だった。これらの本によると、宮崎さんは中核派と仲がよく、かなりの金を毎月カンパしていた。また、一千万円以上の金を貸していた。そして秘密のアジトも提供していた。ところが、知り合いのオウム信者を助けるために公安と会い、そこで「取り引き」をした。その時に「中核派にカンパした。アジトを提供した」と公安に洩らした。……と書かれている。中核は宮崎を呼んで「査問」し、「自己批判」を要求した。革マルは、「そらみろ、中核も宮崎も同じだ。権力のスパイだ」と批判した。まあ、こんなところが概略らしい。僕のまとめ方がまずいかもしれないが、「創」や他の本を読んでほしい。ここで「9・2」集会の会場に話を戻す。「そんな疑惑があるなら、この場で宮崎さんに喋ってもらったらいいいじゃないですか」と僕は言った。「もし反対派が来るなら、壇上で公開討論をさせたらいい。僕が司会しますよ」と言った。「でも宮崎さんは来ません」という。バカな。こんな事で逃げる人ではない。以前、「いたずらビラ」におびえてロフトプラスワンに来なかった塩見孝也のことをあれほど批判していた人だ。革マルや中核のおどしに負けてこんな大事な集会を逃げ出す人ではない。「スパイ疑惑」もウソだろう。「いや、本当に来ないんです」と言う。

分からなくなった。皆、口が重い。どうもこうらしい。宮崎本人は「あくまで行く」と言い張った。しかし、「主催者の一部」が、そうしたら集会は大混乱になる。せっかくの集会を宮崎一人のためにつぶしていいのか……ということなり、無理に宮崎を降ろした。ということらしい。「そういえば昨日、『この集会に出るな!』という電話が何回もあった」と出演者は言う。「俺のともも」「僕のとももだ」と言う。そうか、わかった。僕の家にも一日中、無言電話、いやがらせ電話があった。このことだったのか。

「まあ、くよくよしててもしょうがない。予定通りやりましょうや」と「ブロック2」は始まった。ところが客席前方に陣取っていたヘルメット、覆面、サングラスの奴らが騒ぎ出した「スパイ宮崎を出せ!」「宮崎はどうした!」とわめく。大混乱だ。トークどころではない。それでも主催者はやろうとする。佐高さんが話し始めるが、「お前も宮崎の仲間だ、馬鹿野郎!」と罵声で、佐高さんの声が全く聞こえない。「こりゃダメだ。もうやめよう」と出演者は言う。たまりかねて、僕が発言した。

「宮崎さんが来ていたら、反対派の代表一人を壇上に上げて、一対一で公開討論をしておうと思った。僕が司会をする。しかし、宮崎さんは来ていない。それに対する主催者の説明もない。さわぐのも分かる。だから、反対派の一人に上がってもらって短く喋ってもらう。そのかわり、ヘルメットの連中は静かに聞け!」そうやって年輩の一番大声でわめいてる人を壇上に上げて喋らせた。「それは困る」と主催者が言うが、無視して強行した。彼は中核なのか革マルなのかしらないが、ともかく、「宮崎糾弾」演説をした。よし、あとは、本人がいないんだから、次はロフトプラスワンか、月刊「創」で宮崎本人と対決したらいい。僕が司会をする。反対派も言うだけ言って一般人民にアピールしたんだから、今日の目的は達しただろう。じゃ、本来の「9・2」集会をやらせてくれと言った。

ところが、ヘルメット集団をはじめ、前に陣取った連中はまだわめきつづけている。中には

「右翼のクセになんだ」とか、「お前も宮崎の仲間だろう」といってる奴がいる。卑劣なスパイをかばうのか！」と言う奴もいる。僕もカーツとなった。「お前らの意見を取り上げて、発言させてるじゃないか。それなのになんで俺に喰ってかかるんだ！ 宮崎は卑怯だと言うが、お前らも卑怯だ、そんなヘルメットやタオルで覆面して顔を隠して。そんなの取れよ。素颜じゃ何も出来ないんだろう。こうして集団で騒ぐ事しか出来ないんだろう、弱虫め！ やる気があるなら一人で壇上に上がって俺と勝負しろ！」と挑発してやった。「鈴木さん、マズイですよ。騒ぎを大きくしないで下さいよ」と主催者に止められた。

まあ、そんなわけで、やたらとエキサイトした集会だった。しかし、この「ブロック2」は司会・進行の宮崎学さんが来ないだけではない。出演者の辛淑玉も、「2ちゃんねる」のひろゆきもなぜか来なかった。まさかビビったわけじゃないだろう。二人とも根性のある人だし、きっと緊急の用事があったんだらう。

このあとも集会は混乱の中にも進み、8時までやりました。どれもこれも豪華なゲストばかりで、これで入場料900円は安い。どっかのテレビ局で、全6時間を生中継すればよかったのに。くだらないバラエティよりずっと面白いし、ためになる。でもそんなことは出来ないんだ。日本のメディアもだらしがないんだ。そうだ、あの兇器の映画監督・渡辺文樹が吠えていた。いいですね、この人は。「天皇暗殺映画の次は創価学会批判の映画を撮る」とぶち上げていた。「そんなのやったら殺されますよ」と佐野真一に言われ、「それはどういうことだ、いってみろ！」と噛み付いていた。むしろこいつとヘルメット軍団とを闘わせたほうがよかったよ。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張9月17日 猫の復讐が始まった

「今昔物語」などを読んでみると、坊さんが子供達に「動物を殺してはいけないよ」とさす場面がよく出てくる。子供達がカエルを虐めていたり、猫を虐めていたりすると通りかかった坊さんが言う。「動物を殺してはいけないよ。このカエルは坊やのお母さんの生まれかわりかも知れないよ」。母親を亡くしたばかりの子供はギクツとする。生まれかわりが信じられていたのだ。こういわれちゃ、もう動物を虐める事は出来ない。昔はこうやって、「全ての生命を大切にみなさい」と教えてくれる人がいた。もっと積極的に、「動物を助けるといいことがあるよ」と教える「物語」もあった。虐められている亀を助けると竜宮城へ連れて行ってもらえるよ。傷ついた鶴を助けると、あとで嫁さんに来てくれて着物を織ってくれるよ。行き倒れの雪女を助けると、これも嫁さんに来てくれるよ・・・と。だから、弱いものを助け、生きものは全て大切にしなければいけないよ・・・と。旅のお坊さんや家のおじいさん、おばあさんはそう教えてくれたんだ。「本当かな」と思いながらも、「もしかしたら、あるかもしれないな」と思い、信じたんだろう。それが「やさしい日本人」「謙虚な日本人」を作ったのだ。

ところが近代になって、宗教や説話の力も衰え、子供も信じなくなった。いや、いや、老人たち、大人たち、坊さんたちも信じないから、子供にも話さなくなった。そして動物虐待が急激に多くなった。また、食生活・性生活が欧米化されて肉食がやたらと増えた。牛や豚だって殺して食ってるんだ。犬や猫を殺したって当然だろう、と子供たちは考えた。さらに、戦後、理科の授業で小中学生にカエルの解剖をさせた。これも「動物なんか殺していいんだ」という風潮に拍車をかけた。

これではたまらないと動物たちは思った。でも自衛の手段はないし、復讐の方法もない。昔は坊さんが、いろんな話をして自分たちを守ってくれた。でも、そんな話を今時のガキは信じない。誰も鶴や亀を助けないから恩返しもしようもない。だが彼らは黙って殺されているだけではない。「生長の家」では「肉食をするとガンになるのは、殺された動物たちの怨みが体内に蓄積するからだ」と教えている。そんなバカなという人が多いだろう。しかし、何千年という日本人の食生活をここ30年くらいで急に変えたのだ。おかしくなるのは当然だ。もしかしたら、無実の罪で殺され、食われた動物たちの怨みがあるのかもしれない。

本当の事をいうと、牛や豚やカエルや亀や犬や、そういった動物よりも重要なのは猫なんだ。人間に一番近いのは猫だし、ペットの中で猫が一番人間になじまない。気ままだ。「もう一人の人間」だ。猫だって自分の事を猫と思ってない。だから、理不尽に殺されたりすると怨みは長く残る。よく新聞にでてるでしょうが。神戸の少年Aも宮崎勤も、その他の少年犯罪者の殆どは猫や犬やカエルを殺していた……と。小さい頃から動物を殺し、生命を大切にしない

人間は、人の生命を平気で奪うようになるんだといわれている。もっともらしいけど、違うんだ。「犬や猫やカエル」じゃなくて、問題は「猫」なんだ。キーワードは猫だ。

考えてみたらいい。なぜ猫にまつわる怪談が多いのか。犬やカエルは化けて復讐したりしない。みな、猫なのだ。昔の人は知っていたのだ。人間に最も近いのが猫で、それ故、猫には<霊性>があるんだ。肉体は滅んでも、<霊>は生きるのだ。そして殺した人間にとりつく。その人間を殺す、あるいはその人間を「殺人者」にして社会的に葬るのだ。

大正時代のアナキストに大杉栄という人がいる。「自伝」を読んでたら、こんな話が出ていた。子供の頃、遊び半分に猫を殺した。そしたら夜中にうなされて「ニャオー、ニャオー」と鳴いた。隣で寝ていたお母さんがゾーッとして、揺り起こした。そして「猫殺し」の話を聞いた。大杉少年は涙を流して懺悔した。しかし、時すでに遅く、後に憲兵隊に捕まり虐殺され、井戸に投げ込まれてしまう。

宮崎勤の『夢のなか 連続少女殺人事件被告の告白』（創出版）は少女殺人事件について最も詳しい本だ。「創」の編集者が宮崎被告と面会し、手紙のやりとりをしてまとめた第一級の資料だ。この中には猫殺しについても詳細に書かれていた。

昭和63年夏ごろ、つまり、慕っていた祖父が死去し、最初の少女殺害事件が起きる頃だが、その時に<猫殺し>があった。一審の判決文ではこう書かれている。

「昭和63年夏ごろには、自宅台所に入ってきた猫を見つけて冷蔵庫の後ろに追い込み、魔法ビンの中の熱湯を掛け、冷蔵庫の下で苦しんでいる猫の首に鎌の刃を引っかけて引きずり出そうとし、その首を切って殺した事もあった。猫の口の中に棒きれを突っ込んで殺した事もあった」

残忍な殺し方だ。なぜそんなことをしたのか。「創」編集部は宮崎被告はこう答えている。

<私が台所へ行ったら、猫が入って来ていた。そしたら、どこからともなく得体の知れない力を持つ者が私に声で「おじいさんに捧げるものを捧げる！」と命令してきたので、言うことを聞かないと殺されるかリンチにあうので私は命令に従った>

猫は冷蔵庫の後ろに逃げた。

<その時私は、子供の頃おじいさんが自宅の屋根裏に猫が生んだ子猫を橋の上から川（液体）に落としたのを思い出し、猫に液体をかけることにした。水道から水を得るのは面倒くさいので、近くに置かれていたポットだかジャーだかを手に取り、冷蔵庫の上のほうからそのポットだかジャーだかにたまっていた液体を流した。この時私は単純に「猫に液体をかける」ということしか頭になかった。その液体が何であるかといったことは何も頭になかった>

そうなのか。たまたま熱湯が入っただけなのか。ジャーの熱湯をジャーっと猫にかけたんだ。実は、僕も猫に「液体をかける！」と命令されてやったことがある。二ヶ月ほど前、中野図書館に行った時だ。のどがかわいたので、コンビニからペットボトルの水を買って歩きながら飲んでた。そしたら道端に猫が悠々と昼寝していた（猫はいつも寝ている。だから「寝る子」がなまって「ネコ」になったんだ。これは本当だ）。傍らを通ったら眼を開けて、ニヤリと笑った。「また図書館か。かわいそうに。いくら勉強したって仕事はないのに」とネコは言った。ムカーツとして、口に含んでいた水をそのまま吐き出してかけてやった。「ペットだからペットボトルの水をかけてやれ！」と天から「声」が聞こえた。それでやったのだ。逆らったらリンチされ樹海に埋められたら。ネコは「ギャーッ」と叫んで逃げ走った。ところが図書館の入り口に來たら、また、そこで寝ている。バカな奴だ。僕が図書館に来るのを

知っているくせに、入り口のところで寝ている。だからまた、口に一杯、水を含んでかけてやった。ギャーッと叫んで、図書館の中に逃げ込んでしまった。

ところが奇妙な事に、次の日から熱が出て、眩暈がして立ち上がれなくなった。三日間、寝たきりだ。きつと猫のたたりだ。なんだよ、水をかけたぐらいで……。でも、フラフラして立てない。「生長の家」のお経を読み、お祈りして、猫に謝罪をしたら、やっと少しはよくなった。その夜、赤坂が主催するオフ会があった。やっとの事で会場の焼肉屋へ行ったら、赤坂に言われた。「どうしたの、青い顔をして。猫にでもたたられたの？」ギクツとした。靈感の鋭い女だ。体は太いが靈感は鋭い。もしかしたら、こいつは猫の生まれかわりかもしれない。そういえば、『不思議の国のアリス』に出てくる不気味な猫に似ている。

そうだ、昔、僕の同級生でこんな奴がいた。女に振られ、そのウップン晴らしのために、猫を殺して死体を女のアパートに送りつけた。映画「ゴッドファーザー」に、自分の言うことを聞かない映画監督に馬の首を送りつけるシーンがあった。あれを真似たらしい。その残忍な同級生はその後、どうなったんだろう。猫のたたりで、海でおぼれて死んだという。いや、殺人犯で捕まり、今も刑務所にいるという人もいる。ともかく、猫を殺すのは止ませう。

と、ここまで書いたらもう朝になっていた。朝刊を読んでから一眠りしようとしてパラパラと新聞をめくった。またもやアツと叫んだ。俺の思ったことが新聞に載っている。＜思い＞が新聞に出たのか。新聞の内容を＜予知＞したのか。どっちにしる俺には靈感がある。猫と同じだ。前世は猫だったから猫の気持ちが分かるのだ。

さて新聞だ。「産経新聞」（8月27日）の社会面だ。この日から「少年犯罪はなぜ起きたのか」の「第三部・見逃すなサイン」が始まった。その第一回で、「イヌ・ネコ殺害。凶悪犯の78%が経験」と出ていた。やっぱりそうなんだ。続いて、「欲望満たすための動物虐待？」という見出しが。

「78%」という具体的な数字が初めて出た。今までは、「犯罪者は皆そうだよ」「きっとそうに違いない」と言われてただけで、ハッキリした数字はなかった。それが今年春、ロシアで開かれた国際犯罪学会で、実証的・科学的データが発表されたのだ。発表したのは米国の犯罪心理学者、アラン・R・フェルトゥース氏。343人の凶悪犯に聞き取り調査をした結果、78%が少年期にネコやイヌを殺した経験があったというのだ。じゃ、「羊たちの沈黙」のハンニバル博士もそうだったのか。それにこれは日本のデータではない。世界的なデータだ。日本では犯罪者に学者が「聞き取り調査」をすることはできない。だから研究が遅れている。せいぜい、新聞に発表された「少年A」や「宮崎被告」の調書から分かるだけだ。

それにしても「78%」は異常に多い。もっと調査・研究が進んだら、数字はもっと多くなるだろう。それに、犬よりも問題は猫なんだ。この報告によると……。 「米国の連続強盗犯は自身が覚えているだけでも10匹、英国の連続少女殺人犯も44匹のネコを殺したという」。ほら、やっぱり猫なんだよ。これは少年犯罪者ではない。大人の凶悪犯を調査したのだ。だったら犯罪予防は簡単だ。猫を殺した奴は見つけ次第、逮捕して一生刑務所に入れておく。「お前は猫を殺したんだ。だから将来、必ず人殺しになる。だからそうならないためにお前を保護してやるのだ」と言って。でも、これは無理かな。

じゃ、「おとり捜査」をする。猫を放し飼いにして（ほとんどは放し飼いか）、猫一匹ごとに警官を一人ずつ張り込ませる。猫を殺しに来た人間を事前に逮捕し、施設に入れる。そこで、猫ののろいの恐ろしさを教え、また、殺人者にならないための教育をする。

そんなに警察官はいないって？ウーン、これもダメか。

再び、産経新聞に戻る。平成9年におきた神戸児童連続殺傷事件の「少年A」（当時14歳）が捜査線上に浮かんだのは、事件直前にネコやハトを殺害する姿が目撃されたからだ。宮崎被告（当時26歳）もネコを解剖したり、車でひき殺したりしていた。新潟少女監禁事件の佐藤宣行被告（当時37歳）や、大阪教育大付属池田小学校で校内児童殺傷事件を起こした宅間守容疑者（37歳）にも、幼少年期にネコを殺していたという目撃証言があった。

ここには書いていないが、「バスジャック事件」の少年もやはりネコを殺していたという。産経にちょっと興味を引かれる箇所があった。神戸の「少年A」は小学6年のときに、ネコを解剖して性的興奮を覚えたという。「中学生になった彼は部活動などが忙しくなり、思うようにネコの解剖ができなくなった。対象はすでに人に移っており、人間の腹を切り裂く情景を思い浮かべては性的興奮に浸っていた。悪友たちに見せられたアダルトビデオには、何の興味もわかなかったという」

これを読むと、「思うようにネコの解剖ができなくなった」ことが犯罪の原因だと読める。「ネコの解剖ぐらい好きにやらせてやれよ。そうしたら人を殺す事もなかったのに」と。勿論、僕の誤読だし、猫を殺したのが一番悪いんだ。だったら、「お前は外科医になれ」と教師はキチンと進路指導してやるべきだった。彼は頭がいいんだし、必ずなれただろう。そうしたら日本のベン・ケーシーになれたのに。おいしい。あるいは警察の監察医になるとか。趣味と実益が一致し、国のためにもなったのに。

そうだ。アラン氏のデータでも「78%」のほとんどはイヌではなくネコだったという。やっぱりちゃんと出てたんじゃないか。精神科医の町沢静夫立教大教授は言う。

「一番身近で弱い動物であり、目が合ったり、見つめたりするなど、人の心を見透かしたような表情がある。殺す側は、そこに人間に近い何かを感じているのではないか。イヌも身近だが、ひ弱さのようなものは感じられない」

いやー、心理学は「科学」というよりも「文学」ですね、前から思っていたけど。ネコはきっと「殺人者」が分かるんだ。これから殺人する奴もわかる。だから焦って凶悪犯は殺すんだ。そういえば『猫は知っていた』という推理小説があったな。本当は、全ての猫は知っているんだ。新聞の中で、ある動物学者は言っている。

「猫は人類と数千年の付き合いがあり、ペットとして人になつくという行為が遺伝子レベルで組み込まれている。分類的にも近いサルよりも、その存在は人間に近い」

だから「人間に近い」猫を殺す事は、すぐに、人間そのものを殺す行為へ結びつくのだろう。「少年Aの残虐な行動に向かったキッカケは祖母の死だったという。『（生き物に）魂なんてないじゃないか……』。彼は、ナメクジの腹を切り裂きながらそうつぶやいたという。身内の『死』から動物虐待に走る異常行動は、宮崎被告にも共通していた」。

だから結論。学校では日本の歴史なんか教えなくていい。日本に誇りなんかもたなくていい。愛国者にならなくていい。ただひとつ、「生き物を殺さない子供」に教育すべきだ。それだけでいいよ。教育に多くは望まない。いっそ、「生類憐みの令」を復活させるか。ヒャー、今回はいつもの1.5倍の分量になってしまった。故なく殺されている猫の怨みの念が憑依して書かせたんだ。これは憑依文字だ。だから猫文字になってしまった。ニャオー。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)



## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張9月24日

## 極限の中で、人間の勇気が試される

まさに映画のワンシーンだ。いや、映画を超えた<現実>の恐怖と迫力だった。9月11日（火）の米国での同時多発テロだ。皆、徹夜でテレビを見ていた事だろう。新聞、週刊誌も飛ぶように売れている。何とも残忍なテロだ。日本の<特攻>と同じように言われるが違う。旅客機をハイジャックし、乗客もろとも突っ込んだのだ。まず一機が世界貿易センタービルに突っ込み、世界中のテレビが見守っているところに次の一機が突っ込んだ。さらにペンタゴンに突入。犠牲者はどのくらいに上るのか分からない。

突如、招集された軍事評論家たちも何やら「嬉々として」発言していた。「恐るべきテロです」と言いながら、「でも、突っ込んだパイロットの腕は凄いですね。天才的ですよ」「一万メートルから三百メートルに急降下して、斜めに入ってます。これはもう三次元の操縦法ですよ。驚異的な腕前です」と絶賛している。「日本のカミカゼ以上です」と言う人もいる。

「パールハーバーだって死者は二千人程度ですからね。今回はそれ以上にってます。倍の四千人はいきます」「いや、一万人は行くでしょう」と、犠牲者の数の増えるのを喜んでいるようだ。

街に出ても、電車に乗っても、みな食い入るように新聞を読んでいる。やっぱ、戦争は人間を興奮させるのだ。日本でも西南戦争の時に新聞が出来、日露戦争の時に新聞が急に売れ出し、この時から<宅配>が始まった。だから日露戦争をやめる時は新聞は皆、反対したという。新聞は戦争と共に歩み、戦争と共に大きく伸びてきたんだ。通信社が出来たのはナポレオン戦争の時だというし…。

他人のことは言えないな。僕だってテレビばかり見ていた。貿易センタービルに旅客機が突入するシーンは何度見たか分からない。百回も見てるんじゃないか。残忍なテロなのに、なんか慣れてしまう。恐ろしい事だ。

もう一つ恐ろしいと思ったことがある。世界中の人々が犠牲者を悼み、弔意を表明しているのに、喜んでいる人がいたことだ。イギリス、フランス、ロシアの首相、大統領はもとより、アラファト議長までが「テロは許さない。犠牲者に哀悼の意を表します」といつていたのに、レバノンのパレスチナ人たちはテロのニュースに歓喜し、外に出て、叫び、踊っているのだ。これにはゾーッとした。子供たちまでが大声で、体一杯に喜びを表している。「アメリカ憎し」の気持ちは分からないでもないが、これはないだろうと思った。ペンタゴンや米軍基地だけを狙うのなら分かるが、ハイジャックした旅客機で貿易センタービルに突っ込んでいるのだ。旅客機には乗客が100人近くいる。乗客もろとも<武器>にされたわけだ。非戦闘員であり、一般の人である。テロリストはそうした人々を大量虐殺し、その上で乗客もろとも自爆したのだ。

だから、テロ事件で喜んでいるパレスチナ人を見て、異様に思ったし、怖いと思った。「し

かし、パレスチナ人は事件直後に示した『歓喜』に、これから高い代償を払わねばならないだろう」と防衛大学校教授の立山良司は「アエラ」（9月24日号）で書いていた。そうなるんだろう。アメリカやイスラエルは「テロとの正義の闘い」を強調し、殺し合いはエスカレートするだろう。立山は言う。「数千の命を奪った無差別テロの狂気は、ほんのわずかしか残っていなかった中東和平プロセスの基盤すら崩壊させようとしている」

一方、日本でもアホな国会議員がいた。今回のテロに対し、「ざまーみる」と言って批判されたのだ。新聞や週刊誌上でも、「何という心無い事を」「正気なのか!」と叩かれていた。社民党の原陽子・衆院議員だ。全くバカなやつだ（神楽坂注・ちなみに彼女、当選当時は25歳と、日本で一番若い議員でした）。ただ、正確に言うちょっと違う。

原議員は自分のホームページでこう書いた。

「今回のテロだってアメリカの外交政策の失敗？ なのでは……。だって『さまーみる』と思っている国だってきっとある。と思いませんか」。

これだって酷い話だが、彼女自らが「ざまーみる」と発言したわけじゃない。好意的に解釈すれば、狂喜乱舞するパレスチナ人の映像を見て言ったのかもしれない。しかし、国会議員として、犠牲者を悼む言葉もなく、「ざまーみる」じゃ……。やはり、心無いHPだと思われても仕方はない。事実、批判のメールが殺到した。「不適切だ」「意見は分かるが国会議員の意見ということの重みを考えて」という批判が相次いだという。それで、「思いやりに欠けた」とお詫びを掲載したという。

しかし、それにしても恐ろしい時代になったものだ。うかうか飛行機には乗れないし、ハイジャックに会ったら、その時点でもう終わりだ。前は、ハイジャックといえば「持久戦」だった。犯人は乗客を楯にして「要求」を出す。たとえば、獄中の仲間を釈放しろとか、金を出せとか。えんえんと、ハイジャッカーと当事国との交渉は続いた。当事国の政府は要求を呑むか、武力突入するか、どちらかだ。でも人質になった乗客の安全を第一に考えてくれる。

31年前の「よど号」ハイジャック事件なんて、今回に比べたら、まことに牧歌的だった。犯人たちは金も仲間の釈放も要求しない。ただ、「理想の共和国」北朝鮮に行きたいだけだ。けなげな話じゃないか。乗客は怖かっただろうけど、でも「学生さんが我々を殺すはずはない」と信じていた。今と比べ、大学生はエリートで、信頼も大きかった。学生運動だって、「学生さんがあれだけ騒ぐんだから、政府が間違っているのでは……」と思った人が多かった。機動隊に追われて商店に学生が逃げ込むと、かばってやった（今じゃ、すぐ110番するよな）。街でカンパを求めると、一万円札がどんどん入った。

ともかく、「ハイジャック」の概念を根本的に変えたのが今回のテロだ。ハイジャックして乗客を楯にアメリカ政府に要求を出すわけではない。即、突っ込む。乗客は即、殺されるだけでなく、自らも突入の「武器」にされる。ひどい話だ。

多分、自分たちが「武器」にされたことも知らずに乗客は死んでいっただろう。何とも痛ましい。はじめ、「11機がハイジャックされた」と報道された。しかし、これは間違いで、4機だったようだ。2機は貿易センタービルに突っ込んだ。3機目はペンタゴンに突入した。問題は4機目だ。これがよく分からない。「美談」だったのか、「悲劇」だったのか。勿論、悲劇に違いないが、その中に「乗客の抵抗」があったという話もある。

新聞の報道によると、このUA93便ではハイジャックされた時、人質にされた乗客が反撃を試みたという。そして墜落したのだと。自分たちは死ぬ事は分かっているながら、犯人に立ち向

かい、そして「目標」（多分、大統領山荘のキャンプ・デービッドか、あるいはホワイトハウス）に突入する事だけは阻止した。凄い男たちだ。

「産経新聞」（9月19日付）にはこんな見出しが踊っている。「“ワシントン守った英雄”UA93便乗客。『やってやろうぜ』掛け声と共に反撃」。「高まる称賛の声。勲章授与の動き」。

やはりアメリカの男たちは凄いと思った。感動した。普通は、こんな絶望的な状況のもとでは反撃しない。この新聞にはそんな中でも勇気をもって立ち上がった男たちの名前も記され、具体的な会話も載っている。たとえば、ジェレミー・リックさん（31才）は妻に携帯電話をかけ、ハイジャックされ絶望的な状況にいる事が分かった。自分たちが<武器>にされつつあることも分かった。「ぼくは何をするべきか」と妻に言った。夫の問いかけに、妻は考えた末、「ハニー、あなたは戦うべきよ」と答えた。これは感動的な話だ。日本の女性ではちょっといない（まあ、戦争中の軍国婦人ならいたかもしれないが）。アメリカ人は凄いと思った。

トマス・バーネットさん（38才）は妻に4回電話を入れた。高校時代、アメフトの選手で、彼は「反撃計画」を打ち明けた。妻は「目立たないように座っていて」と頼んだが、率先して犯人と立ち向かったようだという。

トッド・ビーマーさん（32才）は会社に電話し、「一緒に祈ってくれ。そして妻に連絡してくれ」といい、最後に「さあ、やってやろうぜ！」と叫んだという。

これだけ具体的に乗客の名前があがっているんだ。嘘じゃないと信じたい。でも、でもだ。週刊誌では「アメリカのミサイルで撃墜された」という報道が多い。4機目が突入を狙っていると分かった時点で、米軍により撃ち落とされたというのだ。「週刊新潮」（9月27日号）ではこの説を採っている。つまり、「乗客が反撃し、格闘になり、機体は錐揉み状態になり墜落した」と信じられてるが、それで墜落するのか、という。乗客は後ろに押し込められていた。パイロットは殺され、犯人が操縦していた。「目標」も設定されていただろう。乗客が反乱しても、操縦席まで入れたのか。また、目標を変更できたのか。これは誰しも疑問に思う事だ。それよりも、米軍のミサイルで撃墜されたと考えたほうが筋が通るという。それに、ちょっと奇妙な報道もある。「産経」では「乗客が救った」といいながら、同19日の夕刊ではこんな記事が出ていた。「テロ直後、指示従わずワシントンへ向かった民間機。大統領が撃墜命令」。ただし、「命令」は出したが、その前に（乗客の反乱で）墜落したという。チェイニー副大統領はこう言っている。

「撃墜命令は恐ろしい決定と思われるかもしれないが、世界貿易センタービルなどで五千人以上が亡くなった事を考えると十分に正当化できる判断だった」。

この決意の前に一機は、ホワイトハウスをさけて、ペンタゴンに激突した。「もう一機もホワイトハウスを目指していたようだが、乗客とテロ犯との揉み合いのうちにピッツバーグ付近で墜落し、撃墜命令が遂行されることはなかった」と説明した。そして美談が生まれた。

果たして真相はどうだったんだろう。いろんな人に聞いてみたが、「ミサイルで撃ち落とされた」と言う人のほうが多い。でも携帯電話の記録がある。「そんなものはいくらでも作れる」。そうかなと思った。そこまでアメリカはやるだろうか。しかし、たとえ、どんな形で墜落したにせよ、<反撃>を試みた勇気ある男たちがいたことは真実だと僕は思う。また、そう思いたい。そんな時、あなたなら立ち上げられるか。「できるさ」と口で言うのは簡単だが。極限の時、人間の勇気が試されるのだ。

そうだ、忘れていた。9月11日にテロがあった前日、「よど号」ハイジャックの田中義三さんの公判で、「懲役15年」が求刑された。重い。そして、18日、「よど号」グループの妻、赤木恵美子さんが帰国し、成田で逮捕された。米テロ事件で、これらのニュースはほんの小さく報道されただけだった。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張10月1日 日本はどう闘うべきか

「テロリストの側につくか、アメリカの側につくか。どちらか一つだ」とブッシュ大統領がテレビで言っていた。凄いことを言う。「テロリストの側につく」とは誰も言えない。日本だってそうだ。小泉首相も、「同盟国アメリカを全面的に支援する」と言明した。「自衛隊も出す」と言った。今のところは「後方支援」だが、「いや、テロリスト制裁なんだから全面的に参加すべきだ」と威勢のいい発言をする評論家がやたら目に付く。

政府は、「輸送、通信、医療など後方で支援するのだから安全だ」という。「本当に安全なら何も自衛隊をだすことはない。危険だから自衛隊を出すんだろう」とある評論家言っていた。それはそうだ。「だから危険な戦争だけど、テロリスト制裁のために行くんだ。自衛隊だってそう思っている」。こう言われると社民党の人も反論できない。「憲法九条を守れ」といっても、「そんなことを言ってるから『日本はテロリストを容認してる』といわれるんだ」と怒鳴られていた。もう憲法なんか言ってもらえない状況だ。タカ派の評論家が毎日、テレビでアジリ、怒鳴っている。いや、国民のほとんどがタカ派になっている。「自衛隊は国外に出すべきじゃない」「危険な地域に出してはマズイ」「憲法違反だ」なんて、言えない状況だ。そんなことを言ったら、「日本人だって何人も殺されている。こんなテロリストをお前は認めるのか!」と言われる。憲法を楯にして逃げて、と言われる。「憲法を守れ」と言うことは今や、「反日的」なのだ。ハッキリ言って、もう「憲法なんて改正された」んだ。いや、「憲法なんてもう無い」といった方がいいかも知れない。

何という変わり様。何という日本。じゃ、これまで何のために憲法論議があったんだ。「憲法さえ守っていれば日本は平和だ」と左翼の人は言ってきた。右翼の人達は「憲法こそ諸悪の根元だ。憲法さえ改正したら全てはよくなる」と主張してきた。だから31年前に三島由紀夫は死をもって憲法改正を訴えた。それほど大きな問題だった。

ところが今、そんな深刻・重大な「憲法論議」はパッと消えた。「そんなことはどうでもいい。自衛隊を出すしかない」となった。不思議な話だ。確かにテロリストは悪いし、彼らを制裁し、二度とテロが起きないようにすることは必要だ。でも、「そのためには自衛隊を出す」となる。きっと「後方支援だけではなく、戦闘にも加われ!」となるだろう。「後ろにいてコソコソやるなんて卑怯だ。堂々と同盟国と一緒に闘うべきだ。それでこそ日本軍だ!」となるだろう。「奇襲は日本が専門だから任せてくれ」と言い出す奴がいるかも知れない。戦闘が長引き、絶望的になったら、「じゃ、世界の平和のために、もう一度日本の神風特攻を!」という声だって出るだろう。特攻は日本が元祖だ。ビン・ラディンの特攻に対しては、日本の特攻を! と世界中が期待するかも知れない。そうしたら志願する若者もいるだろう。世界平和のために死ぬるなら。世界中が見守る中、名誉の戦死を遂げられる。その名は永遠に残る。うん、僕も志願したい。また、そのことによって大東亜戦争の時の特攻も再評価され

る。大東亜戦争の意義もわかってもらえる。万々歳だ。アメリカの同盟国となり先頭で闘うことによって、50年前の〈対米戦〉の正義も証明される。そう思ったら、自衛隊だって戦争に参加したんだろうよ。うずうずしてるだろう。

時あたかも林房雄の『大東亜戦争肯定論』が復刊された。三島由紀夫が大いに絶賛し、当時、我々民族派学生にとって「バイブル」だった本だ。絶版になって久しかった。管理人の神楽坂も以前、神田の古本屋街を探し回ってやっと見つけたが、とんでもないプレミアが付いて買えなかった、という。僕も「今こそ出すべきだ」と、いろんな出版社に言ってきた。ところが思いもよらぬところから出た。夏目書房だ。以前、『「買ってはいけない」は買ってはいけない』を出した出版社だ。3800円と、ちょっと高い本だが、読む価値は充分にあるだろう。今の若者にも読ませようと、予備校の「読書ゼミ」の授業で僕もテキストに使った。

さて、問題を戻して、アメリカの「テロ報復制裁」だ。アメリカには今回の事件が、ビン・ラディンの犯行だという証拠はつかんでいるのだろう。ハイジャックした搭乗者名簿や、ヴォイスレコーダーや、いろんなものから証拠を見つけたと思う。しかし公表しない。日本政府も、それを求めない。「強く求めたらいいじゃないか」と久米宏に問われて、安倍内閣官房副長官は、「アメリカを信頼している。同盟国だから」と言っている。「でも、制裁に協力するんでしょ。犯人だという証拠を出してくれ、と言うのは当然じゃないか」と久米にさらに問いつめられて、安倍はムツとして言っていた。「そこまで聞くからには、日本はそれ相応のことをやらなくてはならない」と。つまり「制裁」には加わらなくて、そんな大事なことは怖くて聞けないというのだ。アメリカを問いつめるのならば、それなりの〈覚悟〉をもって言わなければならないという。金だけ出すとか、後方の安全なところで支援するとか、そんなことしか出来ないで、アメリカに面と向かって聞けないというのだ。アメリカに「日の丸の旗を示せ」といわれるし、このままでは国際社会で疎外されてしまう。憲法だけ守って世界から相手にされなくていいのか、という焦燥感があるのだ。日本も戦争に参加して、犠牲を払わなくてはならない。血を流さなくてはならない。それをやらないのは卑怯だ、そう思っているのだ。これは安倍だけではなく、今や日本の多くの人々の気持ちかもしれない。

今の風潮は、「戦争やるべし」「日本も堂々と戦争に参加すべし」だ。これは恐ろしいほどだ。それに反対する者は、「臆病者」「卑怯者」「反日」と言われる。憲法のことなど、とっくに忘れられた。「そんな論議はどうでもいい。それよりも自衛隊を派遣しよう！」だ。酷い議論だが、これほど憲法が軽視、いや無視されたのは元はといえば、左翼のアホ共が悪いのだ。「この憲法さえ守っていれば日本は平和だ」「たとえ一字一句たりとも直してはいけない」と言っていた。僕はテレビ討論で、「今の憲法は旧仮名だ。これだけでも変えたらいいじゃないか」と言ったら、「いやダメだ」と護憲論者に言われた。それだけでも直したら、それを突破口にして9条や他のところも直されるというのだ。「一点突破・全面展開」は新左翼のスローガンだったが、そのことを恐れているのだ。そして〈改憲〉はタブーになった。改憲論議すらも出来なくなった。そして今、「そんなことはどうでもいい」と、スルリと問題はかわされてしまった。

さて、ではどうするか。本当にキチンと改憲すべきだった。そして自衛隊を認めた方で、「何をしてはいけないか」の制約をキチンと書くべきだった。たとえば、核は持たない、徴兵制度はしかない、海外派兵はしない…とか。それをやらなかったから、自衛隊は認知されなかった。「何も出来なかった」。そして(変な話だが)こんな危機的状況になると、かえって

「何でも出来る」。奇妙な話だ。

今の熱病が去ってから、改憲論議はキチンとやり、改憲すべきだろう。その前に、じゃ、今の危機にどう対処すべきかだ。「日本は憲法があるから何も出来ない。金だけ出します」というのは、もう通じない。やむなく後方支援だけをする。そして、「日本は国際平和に何もしない」「自国だけよければ世界が滅んでもいいのか」と批判される。それも嫌だ、僕ら日本人としてもたえがたい。

実は同じことが10年前の湾岸戦争でも言われた。日本は踏み絵を突きつけられた。また、カンボジアのPKO論議の時もそうだった。「自衛隊は出す」「ただし丸腰で出す」「後方支援だ」と。

この時、野村秋介さんが、「戦争に反対なら、後方ではなく、前面に出すべきだ。そして割って入ったらいい」と言っていた。自衛隊が丸腰で行くのなら、丸腰のままで前線に出せ！と。それでこそ日本は発言権を確保できるのだと。ウーンとうなった。PKOが危ないか危なくないか、一番前に出てみるというのだ。それでこそ、これで大丈夫だ、これはおかしいと世界に向かって言える。何もしないで、後ろでコチョコチョやっていて、「世界はこうあるべきだ」なんて言えない、という。これはそうだ。ましてや、「我々は憲法を守っていたから平和だった。世界の国々も我々と同じ憲法を作って守れ」なんて、とても言えない。

野村さんが生きていたら、今回の事態でどう言うか。「後方支援なんて言わないで、先頭に出る。そのことによって、戦争の拡大を防げるし、『アメリカの野望』も防げる」と言うのではないか。対岸の火事として見ていて、あれこれ言っても仕方ない。「アメリカはアフガンを滅ぼそうとしてるのではないか」「核だって使うつもりだ」と戦火拡大の危惧を言う人はいる。しかし、対岸から言っていては〈止める力〉にならない。野村さんが生きてたら、きっとそう言うだろう。又、三島由紀夫もそう言うだろう。三島は1970年に日本は革命前夜になると思った。その危機を逆手にとって、憲法改正が出来ると思った。今回ならば、同じことを考えただろう。それに『自衛隊二分論』をぶち上げていたのだし。半分は国土防衛軍に、もう半分は国連警察予備軍にしまえと言ったんだ。世界平和のために、あえて自衛隊の半分をやってしまえと言ったんだ。

では、この続きは次回に。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張10月8日 非戦主義者・内村鑑三の戦い

三島由紀夫が自決したのは1970年だ。今から31年も前だ。その2年前だから、今から33年前だが、彼は「自衛隊二分論」を提唱していた。自衛隊を半分に割ってしまえというのだ。半分は陸上自衛隊を中心にして「国土防衛軍」にする。もう半分は航空自衛隊を中心にして「国連警察予備軍」にする。つまり、自衛隊は今のままでは国際平和に協力できないから、半分以上を自衛隊でなくして、国連にやっちゃえというのだ。半分の自衛隊でこの国を守ればいいじゃないかと。画期的なことだ。PKO法案が出る何十年も前だ。

三島はナショナリストの典型のように思われている。改憲して自衛隊を国軍にする、天皇と国軍を結びつけ、強力な国家をつくる。そういう国家主義者と思われている。しかし、違うのだ。日本だけの平和を考えていていいのか、と叫んでいる。そのために、自衛隊の半分は国連にあげ、世界の平和維持の為に協力すべきだという。その「半分」は、世界の紛争解決のために戦地に行くだろう。傷つき、戦死もするだろう。でも、その犠牲がなければ世界の平和は守れないし、日本は世界に対し、自らの主張も出来ない。そういう思いがあったのだ。

野村秋介さんは三島を尊敬していた。「三島のように生きたい。三島のように死にたい」と思っていた。実際、最期は三島と同じく自決した。その野村さんも、かつて湾岸戦争の時に、「後方ではなく危ない前面に出る」と言っていた。「『これは危ない戦争だ、アメリカの言いなりになるな!』と言うのなら、なおさら前面に出て、そこで叫べ!」と言っていた。多分、そうする方法でしか「説得力」はないだろう。「憲法九条があるから自衛隊を出すべきではない」という人もいるが、「出すべし」という大きな声の前にその声は完全に掻き消されている。九条に違反というなら、自衛隊があること自体が違反だ。憲法上は自衛隊は「ない」のだ。「ない」ものが、外に行こうと関係ないのかも知れない。

佐々淳行（評論家）は、「九条なんて言ってるときではない。もし憲法を持ち出すのなら、これは<前文>に基づいた自衛隊派遣だ」と言う。何のことかと思ったら、前文にこんな箇所がある。

「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」

つまり、タリバン政権の「専制と隷従、圧迫と偏狭」、それを除去するために<正義の闘い>をするのだ、という。タリバン政権は多くの人々を弾圧し、圧制を敷き、国民を武力で支配している。そして隷従を強いている。こんな<悪>は排除して、テロの芽を摘み、アフガン国民を助けるのは当然のことではないか、と。そのためにアフガンに攻め込み、空爆し、罪もないアフガン人が大量に殺されるのだろうが、そんなことは構わないと言ってるかのようだった

た。また、他の評論家は、「アフガン人があんな政権を認めてるのだから同罪だ」と言っていた。これもひどい。一割にも満たないタリバン政権が武力でアフガンを実行支配してるのに。「いや、こんな悪党の言いなりになってる国民が悪い。くやしかったら反乱を起こしてタリバンを倒せ」と言っているのだ。「タリバン政権なんて許せますか。日本の新左翼が国家をつくってるようなもんですよ」と言っていた評論家もいた。おいおいと思った。

佐々淳行は、「タリバン政権下では女は顔を出してはいけないし、学校に行っても、仕事をしてはいけない。あんななんか生きていけないんですよ。国会議員として働いているんだから」と辻本議員に言っていた。これも乱暴な話だ。じゃ、カースト制度の残るインドも滅ぼさなくちゃならない。北朝鮮をはじめとした多くの独裁国家も滅ぼさなくてはならない。

しかし今は、そんな冷静なことは通じない。冷静な議論が成り立たない。熱狂を鎮める為にも、熱狂の中に飛び込んで、そこで言うしかないのか。少なくとも、社民党的に「憲法を守っていればいい」と言うのでは全く説得力を持たない。危険があるのなら、危険に飛び込んで、「これは危険だ！」と言うしかないだろう。三島や野村さんだってそう主張した。かつては、内村鑑三も、そう主張していたのだ。

内村は「非戦論」で有名だ。しかし、日清戦争の時は、「これは義戦だ」と言って支持した。しかし、日露戦争にあたっては反対した。この時の反対だけが有名になり、内村は非戦論者だと言われた。しかし、違う。内村はキリスト教徒として戦争に反対した。日清戦争は「義戦」として支持したが、後に反省している。矛盾があるんだ。苦悩した人だ。日露戦争にあたり、キリスト者は、人を殺すべきではないという信念のもとに反対した。非戦論だ。だが、内村のもとに集まる多くの非戦論者達に、召集令状が来たらどうするか。その時は、令状を焼き捨てて獄に入るのか。人を殺すくらいなら自決するか。でも、キリスト者は自殺を禁じられている。神からもらった命を勝手に奪ってはならないのだ。では、どうする。究極の選択だ。内村は言う。その時は戦争に行きなさい、そして死になさい。そのことによってしか、戦争を止めることは出来ないのだ、と。『非戦論者の死』の中で内村はそんな悲痛な叫びを書いている。

もとより、戦争には反対だ。死を賭して開戦には反対する。しかし、国民の熱狂が激しく、キリスト者の「勧告」もむなしく戦争に突入したときはどうするか。そんな時はこうしなさいと言うのだ。

＜国民の義務として我儕にも兵役を命ずるに至らん乎、其時には我儕は涙を飲み、誤れる兄弟の難に赴くの思念を以て其命に従ふべきである。斯くするのが此悲惨なる場合においては戦争を廃止するに至らしむる最も穩健にして、且つ最も適當たる途であると思ふ。若し此時に當て兵役を拒まんか、疑察を以て満ち充ちたる此世は我儕を目するに卑怯者を以てし、我儕の非戦論なるものは生命愛惜のためであると信じ、我儕の説を聞くも之に耳を傾けざるに至るであらう＞

これはこのまま今にも当てはまるだろう。「憲法があるから」と言ってるだけでは、いくら崇高な理念を説いても、「命が惜しいからだろう」「日本だけが平和ならば他の国はどうなってもいいのか」と世界中から非難されるだけだろう。ある人は言う。「テロは悪い。しかし、元々はイスラエルとアメリカが悪いのだ。だからアラブもイスラムも命を懸けて反撃するのだ。それを考えないのはおかしい」。その通りだ。また、「報復は報復を呼ぶだけだ。日本が

アメリカを説いて報復を止めさせるべきだ」と言う。これもその通りだ。だったら、そう言う人がアフガンに行ってタリバンを説得すべきだ。殺されるのを覚悟でやるべきだ。その行動が無くては、アメリカも耳を貸すまい。世界も「日本だけがずるい」と思うだろう。世界中の若者は闘っている。日本だけが若者の血を流さないのか。それほどまでして遊びほうけているようなアホな若者達を守りたいのか！と。

話が横道に外れた。キリスト者の「勧告」が受け入れられず戦争になったとする。キリスト者だけが兵役を拒否し、牢獄に入ったら、他の人間が兵役に行くことになる。それでは他人を「殺す」ことになるではないかと内村は言う。

<且つ又我儕にして兵役を拒まんか、或る他の者が我儕に代え召集されて、結局我儕の拒絶は他人の犠牲に終わることとなれば、我儕は其人等のためにも自身進んで此の苦役に服従すべきである。殊に又た総ての罪悪は善行を以てのみ終に廃止することの出来るものである。可戦論者の戦死は戦争廃止のためには何んの役にも立たない。然れども戦争を忌み嫌らい、之に対して何の趣味をも持たざる者が、其唱ふる仁慈の説は聴かれずして、世は修羅の街と化して、彼も亦敵愾心と称する罪念の犠牲となりて、敵弾的となりて戦場に彼の平和の生涯を終るに及んで、茲に始めて人類の罪悪の一部分は贖はれ、終局の世界の平和は其れ丈け此世に近づけられるのである>

書き写していても背筋がゾクゾクする。壮絶な文章だ。命をかけたキリスト者の覚悟だ。今の日本でこんなことを言える宗教者はいない。これだけのことを言える「非戦論者」はいない。内村は続いてこうも言っている。

<是れ即ちカルバリー山における十字架の所罰の一種であって、若し世に「戦争美」なるものがあるとすれば、其れは生命の価値を知らざる戦争好きの猛者の死ではなくして、生命の貴さと平和の楽しさとを十分に知悉せる平和主義者の死であると思ふ>

この内村の檄を受けて<非戦論者の兵士>たちは戦場に赴いた。その兵隊たちは、「彼等の勇気において、活動において、殊に優しき彼らの大和心において、彼等は少しも他人の背後に出ないとの事」であったという。また、「彼等は基督的紳士として戦場に殪（たお）れて戦争全廃のために潤（ひろ）き道を開いた」と内村は言う。

今回はテーマが重すぎたかも知れない。難しかったかもしれない。しかし、内村は卑怯未練な非戦主義者ではなかった。どうしたら戦争をなくせるか。そのために我々は何が出来るか。どんな犠牲を払うべきか。そこまで踏み込んで考えた。今、最も評価され見直されるべき思想家だと思う。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張10月8日 非戦主義者・内村鑑三の戦い

三島由紀夫が自決したのは1970年だ。今から31年も前だ。その2年前だから、今から33年前だが、彼は「自衛隊二分論」を提唱していた。自衛隊を半分に割ってしまえというのだ。半分は陸上自衛隊を中心にして「国土防衛軍」にする。もう半分は航空自衛隊を中心にして「国連警察予備軍」にする。つまり、自衛隊は今のままでは国際平和に協力できないから、半分から自衛隊でなくして、国連にやっちゃえというのだ。半分の自衛隊でこの国を守ればいいじゃないかと。画期的なことだ。PKO法案が出る何十年も前だ。

三島はナショナリストの典型のように思われている。改憲して自衛隊を国軍にする、天皇と国軍を結びつけ、強力な国家をつくる。そういう国家主義者と思われている。しかし、違うのだ。日本だけの平和を考えていていいのか、と叫んでいる。そのために、自衛隊の半分は国連にあげ、世界の平和維持の為に協力すべきだという。その「半分」は、世界の紛争解決のために戦地に行くだろう。傷つき、戦死もするだろう。でも、その犠牲がなければ世界の平和は守れないし、日本は世界に対し、自らの主張も出来ない。そういう思いがあったのだ。

野村秋介さんは三島を尊敬していた。「三島のように生きたい。三島のように死にたい」と思っていた。実際、最期は三島と同じく自決した。その野村さんも、かつて湾岸戦争の時に、「後方ではなく危ない前面に出る」と言っていた。「『これは危ない戦争だ、アメリカの言いなりになるな!』と言うのなら、なおさら前面に出て、そこで叫べ!」と言っていた。多分、そうする方法でしか「説得力」はないだろう。「憲法九条があるから自衛隊を出すべきではない」という人もいるが、「出すべし」という大きな声の前にその声は完全に掻き消されている。九条に違反というなら、自衛隊があること自体が違反だ。憲法上は自衛隊は「ない」のだ。「ない」ものが、外に行こうと関係ないのかも知れない。

佐々淳行（評論家）は、「九条なんて言ってるときではない。もし憲法を持ち出すのなら、これは<前文>に基づいた自衛隊派遣だ」と言う。何のことかと思ったら、前文にこんな箇所がある。

「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」

つまり、タリバン政権の「専制と隷従、圧迫と偏狭」、それを除去するために<正義の闘い>をするのだ、という。タリバン政権は多くの人々を弾圧し、圧制を敷き、国民を武力で支配している。そして隷従を強いている。こんな<悪>は排除して、テロの芽を摘み、アフガン国民を助けるのは当然のことではないか、と。そのためにアフガンに攻め込み、空爆し、罪もないアフガン人が大量に殺されるのだろうが、そんなことは構わないと言ってるかのようだった

た。また、他の評論家は、「アフガン人があんな政権を認めてるのだから同罪だ」と言っていた。これもひどい。一割にも満たないタリバン政権が武力でアフガンを実行支配してるのに。「いや、こんな悪党の言いなりになってる国民が悪い。くやしかったら反乱を起こしてタリバンを倒せ」と言っているのだ。「タリバン政権なんて許せますか。日本の新左翼が国家をつくってるようなもんですよ」と言っていた評論家もいた。おいおいと思った。

佐々淳行は、「タリバン政権下では女は顔を出してはいけないし、学校に行っても、仕事をしてはいけない。あんななんか生きていけないんですよ。国会議員として働いているんだから」と辻本議員に言っていた。これも乱暴な話だ。じゃ、カースト制度の残るインドも滅ぼさなくちゃならない。北朝鮮をはじめとした多くの独裁国家も滅ぼさなくてはならない。

しかし今は、そんな冷静なことは通じない。冷静な議論が成り立たない。熱狂を鎮める為にも、熱狂の中に飛び込んで、そこで言うしかないのか。少なくとも、社民党的に「憲法を守っていればいい」と言うのでは全く説得力を持たない。危険があるのなら、危険に飛び込んで、「これは危険だ！」と言うしかないだろう。三島や野村さんだってそう主張した。かつては、内村鑑三も、そう主張していたのだ。

内村は「非戦論」で有名だ。しかし、日清戦争の時は、「これは義戦だ」と言って支持した。しかし、日露戦争にあたっては反対した。この時の反対だけが有名になり、内村は非戦論者だと言われた。しかし、違う。内村はキリスト教徒として戦争に反対した。日清戦争は「義戦」として支持したが、後に反省している。矛盾があるんだ。苦悩した人だ。日露戦争にあたり、キリスト者は、人を殺すべきではないという信念のもとに反対した。非戦論だ。だが、内村のもとに集まる多くの非戦論者達に、召集令状が来たらどうするか。その時は、令状を焼き捨てて獄に入るのか。人を殺すくらいなら自決するか。でも、キリスト者は自殺を禁じられている。神からもらった命を勝手に奪ってはならないのだ。では、どうする。究極の選択だ。内村は言う。その時は戦争に行きなさい、そして死になさい。そのことによってしか、戦争を止めることは出来ないのだ、と。『非戦論者の死』の中で内村はそんな悲痛な叫びを書いている。

もとより、戦争には反対だ。死を賭して開戦には反対する。しかし、国民の熱狂が激しく、キリスト者の「勧告」もむなしく戦争に突入したときはどうするか。そんな時はこうしなさいと言うのだ。

＜国民の義務として我儕にも兵役を命ずるに至らん乎、其時には我儕は涙を飲み、誤れる兄弟の難に赴くの思念を以て其命に従ふべきである。斯くするのが此悲惨なる場合においては戦争を廃止するに至らしむる最も穩健にして、且つ最も適當たる途であると思ふ。若し此時に當て兵役を拒まんか、疑察を以て満ち充ちたる此世は我儕を目するに卑怯者を以てし、我儕の非戦論なるものは生命愛惜のためであると信じ、我儕の説を聞くも之に耳を傾けざるに至るであらう＞

これはこのまま今にも当てはまるだろう。「憲法があるから」と言ってるだけでは、いくら崇高な理念を説いても、「命が惜しいからだろう」「日本だけが平和ならば他の国はどうなってもいいのか」と世界中から非難されるだけだろう。ある人は言う。「テロは悪い。しかし、元々はイスラエルとアメリカが悪いのだ。だからアラブもイスラムも命を懸けて反撃するのだ。それを考えないのはおかしい」。その通りだ。また、「報復は報復を呼ぶだけだ。日本が

アメリカを説いて報復を止めさせるべきだ」と言う。これもその通りだ。だったら、そう言う人がアフガンに行ってタリバンを説得すべきだ。殺されるのを覚悟でやるべきだ。その行動が無くては、アメリカも耳を貸すまい。世界も「日本だけがずるい」と思うだろう。世界中の若者は闘っている。日本だけが若者の血を流さないのか。それほどまでして遊びほうけているようなアホな若者達を守りたいのか！と。

話が横道に外れた。キリスト者の「勧告」が受け入れられず戦争になったとする。キリスト者だけが兵役を拒否し、牢獄に入ったら、他の人間が兵役に行くことになる。それでは他人を「殺す」ことになるではないかと内村は言う。

<且つ又我儕にして兵役を拒まんか、或る他の者が我儕に代え召集されて、結局我儕の拒絶は他人の犠牲に終わることとなれば、我儕は其人等のためにも自身進んで此の苦役に服従すべきである。殊に又た総ての罪悪は善行を以てのみ終に廃止することの出来るものである。可戦論者の戦死は戦争廃止のためには何んの役にも立たない。然れども戦争を忌み嫌らい、之に対して何の趣味をも持たざる者が、其唱ふる仁慈の説は聴かれずして、世は修羅の街と化して、彼も亦敵愾心と称する罪念の犠牲となりて、敵弾的となりて戦場に彼の平和の生涯を終るに及んで、茲に始めて人類の罪悪の一部分は贖はれ、終局の世界の平和は其れ丈け此世に近づけられるのである>

書き写していても背筋がゾクゾクする。壮絶な文章だ。命をかけたキリスト者の覚悟だ。今の日本でこんなことを言える宗教者はいない。これだけのことを言える「非戦論者」はいない。内村は続いてこうも言っている。

<是れ即ちカルバリー山における十字架の所罰の一種であって、若し世に「戦争美」なるものがあるとすれば、其れは生命の価値を知らざる戦争好きの猛者の死ではなくして、生命の貴さと平和の楽しさとを十分に知悉せる平和主義者の死であると思ふ>

この内村の檄を受けて<非戦論者の兵士>たちは戦場に赴いた。その兵隊たちは、「彼等の勇気において、活動において、殊に優しき彼らの大和心において、彼等は少しも他人の背後に出ないとの事」であったという。また、「彼等は基督的紳士として戦場に殪（たお）れて戦争全廃のために潤（ひろ）き道を開いた」と内村は言う。

今回はテーマが重すぎたかも知れない。難しかったかもしれない。しかし、内村は卑怯未練な非戦主義者ではなかった。どうしたら戦争をなくせるか。そのために我々は何が出来るか。どんな犠牲を払うべきか。そこまで踏み込んで考えた。今、最も評価され見直されるべき思想家だと思う。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張10月22日

## 残念！ 切りそこなった「赤軍カード」

ボツになったと思ったら、載ってましたよ、ちゃんと。「東京新聞」の「こちら特報部」だ。「識者・著名人に聞く。自衛隊以外の貢献策」という記事だ。

「米とアフガンの仲介を」「テロ捜査にリーダーシップを」「支援得られぬ地域にNGO派遣」と、皆さんがおっしゃる中で、僕は、日本の「隠し球」赤軍カードを使うべきだと主張した。

<『右であれ左であれ』の著書がある一水会顧問の鈴木邦男氏は「日本赤軍は中東では英雄、彼らにイスラム世界と交渉してもらった方が相手も言うことを聞くのでは」と自衛隊派遣の動きを皮肉りつつ、「テロ事件では、ハイジャックされ飛行機ごと突っ込むことが分かった乗客が犯人と戦おうとした。死ぬことが分かっている戦えるかどうか。テロとの対峙にしる国際貢献にしる、国家の決意に加え、個人の決意も問われている時代だ」と主張、今の時代を認識することの必要性を説く。>

日本赤軍の岡本公三、重信房子などはアラブ世界、イスラム世界では英雄だ。日本ではただの犯罪者だが、全く違うのだ。一水会の若者達がイラクに行ったとき、中東各国から来た人々が、「オカモトはすばらしい！ 日本人は素晴らしい！」と絶賛していたという。だから、「岡本は我々日本人の誇りです」を胸を張って言ったそう。岡本はテルアビブ事件を起こし、向こうでは英雄だが、日本に帰国したら、「大量虐殺の犯人」として捕まってしまう。でも本人は全くそんな状況に自覚がないらしく、「また鹿児島大学に戻って勉強したい」と言っている。テレビのニュース番組で言っていた。

この岡本を「日本特使」あるいは「臨時外相」として、アフガンに行ってもらおう。タリバン政権も、ビンラディンも日本赤軍を尊敬してるから、大歓迎だ。なんせ、彼らは日本赤軍だけではなく、日本人そのものが好きだ。アメリカと闘った大東亜戦争を評価し、カミカゼを絶賛している。だから彼らもそれにならって「特攻攻撃」をした。また、広島・長崎に原爆を落とされたことに深く同情し、アメリカを批判している。親日的なのだ。その尊敬する日本の、さらに尊敬する岡本が行けば、話を聞くだらう。

岡本は日本赤軍だが<民族派>だ。三島由紀夫が好きで、特に『奔馬』を愛読している。「忠義とは天皇に自ら握った握り飯を差し出すことだ」と言っている。『奔馬』の中の言葉だが、それにいたく感動したという。「そんな物を食えるか」と拒否されたら腹を切る。もし受け取って下さっても、我々のような者が差し上げた不敬を詫びて腹を切る。そういう死をもってする尊皇の心が忠義なのだと。岡本は、そこにしびれたと言っている。

だから岡本には死を賭して、タリバン政権やビンラディンを説得してもらいたい。「血で血

を洗う戦争はもう止める」と。特攻の先輩国日本として、「あんな自殺テロは止める。無関係の人間を巻き込むな」と説得したらいい。どうしても戦争しかないというのなら、アメリカに堂々と宣戦布告をして戦争したらいい。無辜の民を巻き込んで殺傷するのは卑怯だ。そういう行為はく大和魂>が最も嫌うものだ、と言ったらいい。僕が行けるのなら行ってやるよ。

もう空爆が始まったから、手遅れになったが、それでこそ「米とアフガン」の間に割って入って戦争を阻止できたかも知れない。岡本はイスラエルに捕まって長期拘留され、拷問を受けたために、その後遺症で言葉がよく喋れない。だったら、日本で拘留されている重信房子か、田中義三（よど号ハイジャッカー）がいる。どっちか（あるいは二人を）釈放して、アフガンに行かせたらいい。「犯人を釈放するなんてとんでもない」と言うかも知れない。しかし、新しい世界戦争をやめさせるのだ。そんな小さな事を言ってはいられない。

日本政府はかつて日本赤軍のハイジャック犯に要求され、獄中にある犯人を「解放」したことがある。福田首相の時だったかな。「人間の命は地球よりも重い」という名（迷）言をはいて。大金まで付けて釈放した。「超法規的措置」だと言っていた。それで世界中から輦轡を買った。だが、今回は違う。世界平和のために、あえて「解放」するのだ。テロリストを使って、もっと大きなテロを防ぐのだ。それに岡本、重信、田中も、かつての非合法武装闘争を反省し、もうやらないと言っている。テロの「先輩」として、タリバンに「テロはやめる！」と説得してくれるだろう。また、日本はアメリカと華々しく闘ったく先輩>だ。奇襲だって、特攻だって、日本がく先輩>だ。その先輩として、「同じ過ちを繰り返すな」と説いたらいい。

テロリストを以て、テロリストに戦わせる。これは映画「ジャッカル」でもあったな。

アメリカの大統領を狙う「ジャッカル」というテロリスト（ブルース・ウィリス）がいる。誰も顔を知らない。唯一知っているテロリスト（リチャード・ギア）は獄中だ。だからこいつを出して、ジャッカルと戦わせる。ハブとマンガースじゃないが、虎とジャッカルを戦わせるのだ。

もし重信たちが説得し、同時テロの犯人を自首させることに成功したなら、赤軍関係の罪は全てチャラにする。獄中にある田中は勿論、北朝鮮にいる「よど号」グループの「無罪帰国」も認める。岡本も凱旋帰国する。ついでに「ご祝儀釈放」で連合赤軍の永田、坂口も出す。

「連続企業爆破事件」の「東アジア反日武装戦線」の被告たちも釈放してやる。いいじゃないか。これで三方、丸くおさまる。

獄中の人間を使うというのでは、映画「ランボー」もそうだったな。ベトナム帰還兵のランボーは帰ってきて暴れまくり、警察官相手に「戦争」をして、殺しまくる。ところが「II」では、刑務所にいるランボーを釈放し、特殊任務につかせる。ベトナムで捕虜になっている兵士を救出するのだ。任務に成功したら、罪はチャラだ。そして彼は見事に任務を果たし、自由の身になる。そして「III」だ。これは今から考えると皮肉な話だ。だって、「ランボーIII 怒りのアフガン」だ。アフガングリラと共闘して、ソ連と戦うのだ。この時、ゲリラを助けて金や武器の援助をしたから、タリバン政権が出来ちゃった。「タリバンはアメリカがつくったフランケンシュタインだ」と言っていた人がいたが、確かにそうだ。ランボーの話はフィクションだが、アフガングリラにアメリカがテコ入れしたのは事実だ。それでソ連を追い出した。その結果、タリバン政権が出来た。アメリカにしたなら、何ともバカらしい話だ。「こんなことになるんなら、あの時、ソ連と一緒にあってゲリラをやっつけてたらよかった」と思ってることだろう。

さて、「東京新聞」の「こちら特報部」では、日本が「米とアフガン」の間に割って入れと言う人が他にもいた。もっとも「赤軍カードを使え」とは言ってないが。作家の藤本義一だ。

く第二次大戦で米国と戦い、その前には日露戦争でロシアに勝った日本は、中東和平問題などで欧米に根強い不信を持つ中東の人々に、非常に好感を持たれている。教科書で日本の「カミカゼ」が称讃されるほどだ。国はなぜこうした点に気付かないのか。仲介をすれば自衛隊派遣より、よっぽど世界に尊敬される。>

ヘエー、「カミカゼ」が教科書で称讃されてるのか。日本よりも凄い。じゃ、お礼に「新しい歴史教科書」では国連貿易センター・ペンタゴン突入の「カミカゼ」を称讃してあげたらい。そうはいかないか。

しかし、こんな時こそ外相は頑張るべきなのに。田中外相はダメだね。大体、「パキスタンに特使として行ってくれ」と言われて拒否した。戦争を阻止する千載一遇のチャンスじゃないか。パキスタンどころかアフガンにも行って、説得し、戦争を阻止すべきだった。「私が説得している間は空爆するな！」と叫んで、一生、アフガンにいる。日本ではオジャマ虫でも、一応、一国の外務大臣だ。殺しちゃったら国際問題になる。そうしたらアメリカも空爆できない。そのために命を捨てるなら、捨て甲斐もあるだろう。

それなのに田中外相はビビって行かない。向こうは女性の地位が低いし、差別されてるから行くのはイヤだ、とか理由をつけて。それどころか、この「特使派遣」の話聞いた時、「これは小泉、福田のワナね。私は行かない」と言ったそう。彼女なら言いかねない。あとで「それは嘘だ」と記者会見で言った。「本当の理由は、パキスタンに行ったら国会の開会式に間に合わないからだ」という。バカか、こいつは。開会式なんかどうでもいいじゃないか、戦争をやめさせる方が先決だ。

さらに田中外相のアホな発言は続く。同時多発テロの発生後、米務省の退避先をペロっと喋っちゃった。テロを避けるために米務省がワシントン郊外に臨時米務省を置いた、という極秘事項を洩らしたのだ。これは、「テロリストに標的を教えているようなものだ」と首相らは激怒した。当然だろう。

また、産経新聞（10月2日付）によると、田中外相は首相官邸で行われたムベキ南アフリカ大統領の首相主催晩餐会を欠席した。これは異例なことだ。外相が対応すべき外国要人との晩餐会は十件近くあったが、そのいずれも欠席している。その理由について、「私は主婦だから夜の日程は入れないで」といって、副大臣らが対応するよう指示していたという。困った奴だ。そして、さらには天皇陛下に「小泉は困った奴です」と内奏し、それをバラしている。昔、「天皇陛下からこんな言葉があった」と洩らしてクビになった大臣がいたが、それ以下の行為だ。週刊誌は「ホントなら切腹ものだ！」と書いていた。女でも切腹するのかな。見てみたい（冗談ですよ）。

ともかく、だらしのない田中外相はクビにして、重信外相だね。田中義三でもいい。世界に対しては「タナカ」外相のままだから、変わったと分からないだろう。グッド・アイディアだ。その田中義三さんの公判は、10月29日の午後1時から最終弁論です。そして2月14日に判決です。それよりも、アフガンに行かせる！ と思うんだけどね。無理でしょうな。田中さんは最後の弁論で、「自分の思いの全てを語る」と言ってます。闘ってます。

さて、私事ながら、おいらも闘っています。今月、やっとのことで柔道三段になりました。いつ、ヘルメット軍団に襲われるか分からないし、体は鍛えておかないと、と思ってたんです

よ。それで、稽古し、試合に出て、点数を稼ぎ、型の試験を受け、やっと三段です。講道館入門が昭和63年。翌年、初段になり、二段になったのが平成4年。そして、実に苦闘9年、やっと三段です。合気道三段だから、あわせて六段です。こういうと強そうですが、本当はひ弱で、赤坂にはいつもいじめられて泣いています。ロフトでもいじめられるし、学校では生徒にバカにされるし、弱い男です。でも、汚い技、もとい、秘密の技を知ってるから、「いざという時には…」と思っています。外見はあくまで穏和ですが、心には凶器（狂気）を秘めています。そんな、りりしい男になりたいと思っています。中野区上高田一丁目の小さなボロアパートにいて、東にケンカしている人がいれば、つまらないからやめろと言ひ、それでもやるんなら俺が相手だと買って出る。西にテロをやる人がいれば、もう時代遅れだからやめろと説得し、金もなく、名誉もなく、みんなに「ボケジジイ」といわれ…。

サウイフモノニ、ワタシハナリタイ。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張10月29日

### 機動隊は国連に寄付しちゃえ

「まるでレンブラントの絵のようだった」という1行が今でも印象に残っている。東大安田講堂の攻防戦の時だ。今から30年以上も前だ。上からは全共闘が投石し、下からは機動隊が放水し、ガス弾を撃つ。皆も、テレビや雑誌で見たことがあるだろう。「学生運動の天王山」と言われた。事実、この「安田砦落城」で新左翼運動は急激に退潮する。

この時、機動隊を指揮していたのが佐々淳行だ。学生の投石をかいくぐり、バリケードを破り、一步一步と階段を昇っていく。電気も水道もガスも止められている。真暗闇を、進んでゆく。何階まで昇ったのだろうか。廃虚のようになった所の天井近くの窓が壊れていた。そこから一筋の光が斜めにサーッと差し込んでいた。その時、場違いに、荘厳な感じがした。そして、「まるでレンブラントの絵を見るようだった」と佐々は表現していた。へエーと思った。機動隊の親分にしては絵心がある奴じゃんかと思心した。彼の著書『東大落城』だったと思う。

この時、三島由紀夫は全共闘に絶望した。彼の本にはそう書いている。これだけの闘いをやるんだから、何人かは死ぬだろう。そこまでやるだろうと思った。ところが白旗を掲げて投降した。「こいつらは死ぬ覚悟もないのか」と、愕然とした。失望した。それまでは、少しは彼らに期待してたのに…。こいつらもダメだと思った。じゃ、俺が死をかけた行為を見せてやらなくてはならない。そう思った。全共闘の腑甲斐なさが三島自決の契機にもなった。

三島の本を読むと、そう書いている。そう読める。しかし、佐々淳行の本では少し違っている。三島は佐々と顔見知りだった。現場責任者の佐々に三島から緊急電話がかかってきた。一体何だと思って取ると、「学生に死者が出ないようにしてくれ」と、くれぐれも頼まれたという。この方が、三島の本心だったろう。東大全共闘に呼ばれて討論集会もやったし、三島は彼らに共感するものがあった。死んでほしくないと思った。機動隊なんかに殺されたらたまらないと思った。三島の優しさだ。この時の三島の本心だ。あとで、書いたものは三島の文学だ。本心とは又、ちょっと違う。

又、もっと興味深い話がある。この事件後、佐々は宮中に行き、天皇陛下に内奏した。どんな話をし、陛下がどんなお言葉をかけられたか。それは公開してはならないことになっている。しかし、時効と思ったのか佐々はある月刊誌で書いていた。機動隊はこんなに頑張りました。こんなにひどい過激派の連中を取りおさえました…と、縷々語った。ところが陛下は、「どちらにも死者はなかったのか」と聞かれた。死者は一人もいない。それを聞かれて、「それはよかった」と言われた。

佐々にしたら、暴力学生から大学を取り戻し、治安を守ったのだ。おほめの言葉があるかと思ったのだろう。しかし、ない。「天皇陛下という方はすごい方だ。あの革命騒ぎを、まるで兄弟喧嘩のように思っている」と佐々は書いていた。そう、陛下の目からは同じ赤子なんだ。右も左もない。機動隊も過激派もないんだ。とにかく、死者を出さないよう、怪我のないようにと祈っておられるのだ。陛下の〈赤子〉という点では、赤い共産主義者の方が、ずっと「赤子」かもしれない。

佐々淳行は、1970年の連合赤軍「あさま山荘」事件の時も現場の指揮者だった。この時も犯人を一人も殺さず、傷つけず逮捕している。もっとも機動隊側には死者を出したが。こんなふうに、犯人を殺さないで逮捕する技術というのは、多分、世界一だろう。機動隊は好きじゃないが、この点だけは評価してもいいだろう。「あさま山荘」事件についても佐々は本を出して詳しく書いている。

佐々は、今回のテロ事件について、「自衛隊を出すべきだ」という。「憲法なんかどうでもいい。そんな論議は後で、国会でゆっくりやれ。それよりも、テロリストを捕まえるために世界中が協力してるんだ。日本も自衛隊を出せ」と言っている。又、「あえて憲法というのなら、憲法前文に基づいて海外に出すのだ」と言っている。前文では、「専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と書いてある。タリバン政権は「専制と隷従、圧迫と偏狭」そのものだ。これを除去するのは我々のつとめだと。

でも、これは国と国との戦争ではない。アフガンに潜むテロリストを逮捕するものだ。(アメリカも皆、そう言ってる) だったら、警察行為だ。それならば、自衛隊よりも日本の機動隊の方が犯人逮捕では実績がある。だから、むしろ、機動隊を出した方がいい。東大闘争、連赤事件を鎮圧した佐々が現場復帰し、隊長で行った方がいい。犯人を殺さず逮捕する技術は世界一だ。そのノウハウを世界平和に使わない手はない。

先週、紹介したが「東京新聞」で、自衛隊派遣以外の〈協力策〉は何かないかと書いてたが、「テロリストの捜査・逮捕にリーダーシップを」というのがあった。いきなり、戦争をしかけるのではなく、警察力の行使で逮捕しろ、というのだ。これは賛成だ。

街を歩いていたら共産党が車の上から訴えていた。聞いてたら、こんなことを言う。

「報復には報復では何も変わらない。いきなり戦争をしかけるのは間違いだ。だからといってテロリストを弁護するわけではない。テロリストとの闘いだから、これを警察行為としてやり、犯人を逮捕すべきだ」と。

アメリカだって、そう出来たら、やるだろう。しかし、逮捕できないから、空爆をし、テロリストを追いつめているのだろう。もし、空爆に反対なら、日本も、本当に「警察行為」で協力したらいい。そのためにも、佐々淳行を先頭に機動隊が行けばいいんだ。

大体、日本には機動隊が余っている。60年、70年の〈革命前夜〉の時に、ドッと増やしたし、予算もつけた。ところが、〈敵〉である左翼はほとんどいなくなった。だから、やる事がなくなった。しかし、警察庁や警視庁のお偉いさんの発表

だと、こういう。「いやいや、日本だっていつテロリストが侵入するか分からない」「だから、機動隊も必要なんだ」と。たとえば、10月22日には警察庁で緊急の「全国国際テロ対策担当課長会議」が開かれた。「テロ未然防止に全力」と産経新聞(10月23日付)には出ていた。田中節夫長官は、「軍事行動の開始に伴い、国内におけるテロ発生の危険性が一層高まる」「テロリストは必ず警戒警備の弱点を探し出し、盲点を突いて攻撃を仕掛けてくる」と強調した。(まるでそうあってほしいと期待してるようだ) だから警察は膨大な人員が必要だし、膨大な予算が必要なんだ。そう言ってるのだ。

しかし、他と比べ、日本はまだまだ平和だ。もう左翼も死に絶えた。それに、ほんの少ししかない〈危険〉のために、これだけの警察・機動隊・公安が必要なのか。「日本はおかげ様で、過激派もいなくなり治安もいい。だから機動隊はアフガンに出しましょう。犯人逮捕は我々がやります。だから戦争はしないで下さい」と言えばいい。何なら、機動隊を国連に寄付しちゃってもいい。33年前、三島由紀夫は「自衛隊二分論」を提唱した。このことは前にも書いた。半分は「国土防衛軍」、もう半分は国連にあげちゃえという。「国連警察予備軍」にしろという。

「国連軍」とは言ってない。〈警察〉なんだ。戦争ではなく、今回のように、「これはテロリストを逮捕するのだ。警察行為だ」と言われることを予測したのかもしれない。今なら、三島は「そうだ、余ってる機動隊・公安も国連にやっちゃえ」と言うだろう。

それともう一つ気がついたことがある。自衛隊は、元々は1950年に「警察予備隊」として誕生した。52年にそれが「保安隊」になり、54年に自衛隊になった。いつかは正式な〈軍隊〉にしたいんだけど国民の反発を恐れて、徐々に軍隊化していった。なんか名前のかわる出世魚みたいだ。自衛隊の前身・「警察予備隊」にかけて、「国連警察予備隊」と三島は言ったのかもしれない。

ともかく、「世界一」の日本の警察を日本の為だけに使っているのは世界の人々に申しわけない。どんどん外に出したらいい。過激派がいらないんだから公安もいらぬ。公安調査庁もいらぬ。みな、「国際貢献」のために海外に出せ。何も無いのにスパイばかりやってるから、いろんな不祥事が起きる。市民運動を分裂させようとしたり、ほとんどいない左翼のメンバーに金をわたして〈協力者〉を得ようとする。いらぬんだ、こんなスパイ組織は。

それに共産党は、「戦争にしてはならない。警察行為で犯人を逮捕しろ」と言っている。だったら、共産党が行けばいい。彼らは今も〈正当防衛〉の為の武装部隊を持っている。東大闘争や早大闘争でも「武装日共」「武装民青」は闘った。あの宮崎学はその幹部だった。又、ちょっと昔は「山村工作隊」「中核自衛隊」をもってたし、武装闘争の実践とノウハウをもっている。だから彼らを行かせる。黄色いヘルメットをかぶり、「日の丸」をキチンと見せて、アフガンに行く。ビンラディンを日共が逮捕に行くのだ。成功したら、一躍人気上がる。一挙に与党になれるだろう。でも、宮崎学らが行ったら、事前にビンラディンに情報を流しちゃうだろうな。又もや〈宮崎学スパイ事件〉が起きちゃうかもしれぬ。

他には、新左翼もいる。こいつらも出せばいい。みんな、「戦争には反対」だ。

そして、「テロリストは逮捕しろ」といっている。だったら、彼らにやらしてもらおう。右翼だってそう言ってる人がいる。彼らにも行ってもらおう。「楯の会」の残党にも行ってもらおう。31年前、死に遅れたと思った。だったら今こそ、死に場所を与えてやったらいい。そうすると「拳国一致」の「反テロ団」が出来る。機動隊、公安、日共、新左翼、右翼…と、大部隊が「国際貢献」のために行く。いいじゃないか。雨の神宮で壮行会をやる。思い出しますね、学徒兵の出陣を。いいんだ。歴史はどんどん繰り返せ。

この作戦が成功したら、この部隊はそのまま国連に寄付しちゃう。日本人の国籍も抜いて、「国連人」にしちゃう。この50万人(その位いるだろう)の国連人を基盤にして、世界中から、義勇兵を募集する。それを三島の言う「国連警察軍」にする。(もう「予備」はとれたんだ)。そして、アメリカに支配されない「中立・公正」な世界警察にする。いいじゃないか。日本の機動隊は世界の機動隊になるんだ。誰をも殺さず、傷つけず逮捕する。あの〈世界一の技術〉を使うのだ。天皇陛下も認めた「地球にやさしい逮捕術」を生かすのだ！

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張11月5日 憲法は誤訳されている！？

二〇〇一年十月五日、テロ対策特措法案と自衛隊法改正案が国会に提出された。二年間の時限立法（ただし延長可能）だがアメリカのテロ報復攻撃を支援するための法律だ。

「憲法問題なんかでガタガタ言うな！ それよりも早く自衛隊を派遣しろ！」というタカ派評論家の主張に背中を押された政府が、自衛隊を派遣して「日の丸」を世界に示すつもりだ。つまり、闘いたいのだ。

これが今の政府の方針だ。しかも時限立法にするところなど、「やましき」がみえみえだ。「やっぱり一応、憲法があるんだし、あまりにもないがしろにしたら悪いし、護憲派がうるさいし」とでも思ったんだろう。Mr.イカンザキ率いる公明党への配慮かもしれないな。こんな時だからこそ、憲法をきちんと議論しなくてはならないんだ。

何度も言っているように「何が何でも変えちゃダメ。改憲論議もダメ」と言っていた左翼のアホ共が一番悪いんだ。こいつらが諸悪の根源だ。こいつらがいたから自民党は改憲しないで、「解釈」だけを変更して、自衛隊をつくり、認めてしまった。そして海外に派遣しようとしている。

また、憲法なんか全く尊重していないくせに、都合のいい所だけ引用し、援用している。前にも書いたが、評論家で元内閣安全保障室長の佐々淳行（さっさ・あつゆき）は「これは憲法前文から言っても自衛隊を出さなくてはならない」という。

戦争放棄をうたった第九条では、自衛の軍隊も許していないのに、前文では海外派遣も認められているというんだ。認められているだけでなく、行くのが「義務」だとまで言う。さすが「あさま山荘」に鉄球をぶつけさせた男だ。乱暴者ぶりは衰えていないな。

前文には確かにこうある。

「われらは、平和を維持し、専制と隷属、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」。

タリバン政権は「専制、隷属、圧迫、偏狭」だし、これを「除去」する正義の戦争に日本が参加する「義務」があるというのだ。

でも、この前文のすぐ前にはこう書かれている。

「日本国民は恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く

自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」。

この部分は、直接、第九条リンクするところだ。アメリカが押しつけた憲法だから原文は英語だし、それを急遽、訳したものだから日本語が回りくどいし、悪文だ。でも言いたいことはこんなことだろう。

「軍国主義」のドイツ、イタリア、日本は戦争を起こしたが、悪運尽きて負け、軍国主義はなくなった。だから、もう馬鹿な戦争を起こそうという国はない。今や世界は「平和を愛する諸国民」だけだ。だから、その人々の「公正と信義に信頼して」日本は軍備を棄てた。二度と軍隊はつくらない。戦争には行かない。

そういうことになる。「われらの安全と生存を保持しようと決意した」というのはそういうことだ。

ところが、今の世界はどうか。と昔、改憲運動をしていた僕らは思った。この憲法ができた直後はいざ知らず、今は「平和を愛したい諸国民」ばかりではないか。そんな連中を頼りにして日本の「安全と生存」を保持することはできない。だから改憲すべきだ！ と叫んだ。

つまり、同じ「前文」を読みながら、「だから改憲だ」という人もいれば、「だから自衛隊を認めて海外派兵だ」と言う人もいる。こんなに矛盾した解釈を許すようでは憲法としての意味がない。

それに「努めてゐる」とか「思ふ」とか旧仮名で書かれている。これも時代に合わない。さらに、何度もいうように、英語の翻訳だから意味がよくわからない。かえって英文の方がわかりやすいのだ。だったら、翻訳の悪文で教えるよりも、原文の英語で教えた方がいい。

読者の皆さんも試しに英文で読んでみたらいい。よく分かるし、勉強になる。天皇のことも分かりやすいよ。

例えば、第一条。

「天皇は、日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく」。

英文では、

The Emperor shall be the symbol of the State and of the unity people, deriving his position from the will of the people with whom resides sovereign power.

となっている。「symbol」の「象徴」なんて言葉はこの時につくられたんだ。「印だ」「飾りだ」じゃーカッコ悪い。「象徴」ならなんとなく重々しくて、高貴な感じがする。だから、後半も由緒ありげに響く。なんせ、天皇の地位は「国民の総意」に基づいているんだ。国民の大多数の人が天皇制に賛成している、そう読める。「総意」だもんな。

でも「総意」は「will of the people」の訳なんだ。驚いた。これでは（日本国民の）「意志」か「希望」じゃないか。「総」なんて入ってないぞ。

マッカーサーの原案を訳すときに間違えたのか。それとも意図的に誤訳したの

か。もしかしたら、後者かもしれない。「天皇の地位」は厳粛なものだ。それなのにその時々国民の気まぐれな意志に任せてはアブナイ。そう憂慮した人間があえて天皇制を守るために「総意」にしたんじゃないのか。

本当なら、国民投票でもして、天皇制に賛成かどうか問わなくてはならん。しかし、昔から日本人は天皇が好きだった。どんな政変が起こってもどんな権力者も天皇制を廃止しようとは思わなかった。だから、日本国民はずっと天皇制を維持して来た・・・と読める。戦後、主権者は「天皇」から「国民」に変わった。でも、その国民が支持しているんだから、天皇制は昔どおりに続いている。主権者の「国民」の圧倒的部分（＝総意）が支持しているから、天皇も「主権者」なんだ。でも、新憲法ではちょっと遠慮して「象徴」にした。そんな感じだ。だから、「この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく」というのはなんとも深遠な言い方だ。ここに日本の二六〇〇年の歴史が凝縮されているよねえ。「いや、そこまでは言ってない」とツッコむ人もいる。この憲法を作ったときは、天皇制を認める

「総意」はあったかもしれないが、それ以降、総意を確認していない。だからこれは民主的じゃない・・・と。この点は僕もそう思う。だから、国民投票で「総意」を確認したらいいんだ。十年に一回くらい、最高裁判官の国民審査（衆議院選挙の時にやるアレだよ）の時に同時にやればいいな。あるいは、一年に一回とか、オリンピックの時とか。こんなことをいうと、護憲論者は反対する。負けたら大変だと思うからだ。日頃「大衆はバカだ」と思ってるし。負けたら「天皇制反対」なんて言えなくなる。国民投票さえしなければ、「人民は皆、反対している！」

「民主主義に反している！」と勇ましいことを言える。その方がラクだもんね。みんな腰抜けの連中だ。というわけで、憲法は、前文にしる、第一条にしる、第九条にしる、原文に直接当たらなくては分からないところが多い。だったら、こんな誤訳、悪文の日本語で教えずに、原文でそのまま教えたらいいじゃないか。英語はどうせ勉強しなくちゃいけないだし。

だから、全部英語だ。「日本国憲法」なんて言わない。「The Constitution of Japan」略して「C J」だ。憲法論議も「C J」か「反C J」の闘いになる。なにやらスマートでいいじゃないか。

「そんな馬鹿なことができるか。英文で憲法を教えるなんて反日だ！」という批判もあるかもしれない。でも、アメリカにもらった憲法なんだもの、しかたないよな。自前の憲法ができるまではこれでやるしかない。

それに、日本は昔から外国崇拜で、外国に対してコンプレックスの強い国だった。朝鮮、中国、西欧、アメリカの文化をドッと受け入れてきちまって、コンプレックスを持ってしまった。でもそれが日本を繁栄させるバネにもなった。だから、ちょっと反日的、国辱な方がいいんじゃないの。

ところで、日本で最初にできた憲法は聖徳太子の「一七条憲法」だ。この憲法の第一条は「和を以て貴しとなす」だ。原文では「以和為貴」となっていて、当時はこのまま、それも仏教の経典のように、中国語で「イーホウウェイキィ・・・」と読んでたらしいぞ。金田一春彦さんの『日本語の特質』（NHKブックス刊）に書いてあったんだから本当だ。仏教のお経は、「観自在菩薩（カンジザイボサ

ツ)・・・」とそのまま読むけど、これは日本語だよ。でも元は中国語読みだったはずだ。麻雀だって「東南西北」を「トンナンシャーペー」っていうし。関係ないか。

ってなわけで「一七条憲法」だってインテリは中国語読みだったはずだ。だってずっと外国コンプレックスが強い国だったんだもん。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張11月12日

#### 天才詩人が死ななかつたら、戦争も…

女を幸せに出来ない男…。そういう奴は確かにいる。こんな奴は結婚してはいけないんだ。「お前のことだろう」と赤坂に言われたが違う。いや、おらもそうかも知れねーけど、今、問題にしてるのは違う奴だ。夭逝の天才詩人・金子みすゞの亭主のことだ。こいつさえいなければ、みすゞは26才で自殺しなくてよかった。もっともっといい詩を沢山書いて、この世を明るくしてくれたのに。みすゞが死んだのは昭和5年(1930年)3月10日だ。惜しい。残念だ。悪党亭主と結婚してなかつたら、いっぱい本を出し、(70年後の今でなく)その時、「金子みすゞブーム」になったのに。今の僕らよりも70年前の人々にこそ、みすゞは必要だったんだ。みすゞが70年前にブームになり、〈国民的詩人〉になり大活躍をしていたら、人々はもっと清く、明るく謙虚に生きてありませう。下らない大陸侵略もやらなかつたでせう。下らない戦争もやらなかつたでせう。

「そんな馬鹿な」というあなた。あなたには詩の力が分ってないんだ。東北人は詩人です。関西人は評論家です。だから東北人の私には、「日本の運命」が分かるのです。それほどの天才詩人を殺しただけでなく、人々から詩の力を奪い、やさしさ、思いやりを奪い、日本を戦争に駆りたてたのです。だから、みすゞの亭主こそ「超A級戦犯」なのです。

金子みすゞについては何度か書きました。そしたら、(多分それを見たんでしょう)、映画「みすゞ」の試写会の案内が送られてきた。「エッ、この前テレビでやってたんじゃないの？」って。違うぞな、もし。あれは松たか子主演の「明るいほうへ、明るいほうへ」でしょう。その前にも斉藤由貴主演で芝居にもなってるし、「知ってるつもり」やたけしの番組(「アンビリバボー」だったかな)などでもやっていた。知らない奴はモグリだ。何のモグリかって？ 日本人のモグリだ。いや、人間のモグリだ。いや、みすゞは「生き物」すべてを平等に愛し、いとおしんでいたから、みすゞを知らん奴は「生き物のモグリ」だね。中・高校の教科書はみすゞの詩さえ教えたらいい。歴史なんて、アホなガキ共に教えなくていいや。

前にみすゞの詩は随分と紹介したから気がひけるけど、「生き物」全てを愛した詩を一つ紹介する。

海の魚はかわいそう  
お米は人につくられる

牛は牧場で飼われてる  
鯉もお池で麩を貰う  
けれども海のお魚は  
なんにも世話にならないし  
いたずら一つしないのに  
こうして私に食べられる  
ほんとに魚はかわいそう

ウッ、そうだね。僕は「生長の家」だから生まれてから一度も肉は食べたことはない。そして、この詩を読んでから、お魚を食べるのもやめた。完全なベジタリアンになった。でも、野菜も生きてんのかな。赤坂細子の前世はカブだというし、犬井ふといちはキュウリの生まれ変わりだというし(統一教会でそう言われたらしい。いやらしい)。だから、そのうち野菜も食べるのをやめる。霞だけを食って生きることしよう。まるで仙人だ(仙台出身だから仙人だ)。

今は、とり合えず、お魚をやめました。「ヤメ魚」です。「でも、『ヤメ共』ってなーに？」と予備校生に質問されました。お魚とは全く関係のない話ですけど書いてて突然思い出した。9月13日(木)、読書ゼミの授業で、谷沢永一の『「新しい歴史教科書」の絶版を勧告する』(ビジネス社)を読んでいた。谷沢は左翼ではない。むしろ右翼的・保守的であり超タカ派だ。それなのに「新しい歴史教科書」に敢然と噛みついた。「日本の誇りを取り戻すといいながら、書いてることは西欧コンプレックスでかたまっている。間違いばかりだ。こんな杜撰なものは絶版にする！」と言っている。「卑弥呼や邪馬台国なんてなかった。あんなものは中国がデッチ上げた嘘だ」「大体、町人文化をもち上げて、抵抗史観が底流にある。これは書いてる人間にヤメ共が多いからだ」とも言っている。「ヤメ共」とは共産党をやめた人のことだ。藤岡信勝らのことだろう。昔、共産党員で転向者だから、「日本の誇り」と言っても、つい昔の〈クセ〉が出るんだ、と。

ともかく凄い本ですよ。この本の中に「転びバテレン」ならぬ「転び日共」「ヤメ共」が出てくる。「転びバテレン」は「転向したキリスト教徒」だ。江戸時代、踏み絵を踏んじゃった人々だ。遠藤周作の『沈黙』には詳しく書かれている。まだの人は読むべし。「転びバテレン」と同じように、若い時に左翼、共産主義運動をやっている、やめた人は「転び左翼」だし、「ヤメ共」と言うんだ。「ヤメ共」は日本共産党をやめた人という狭義の意味で使うこともある。高野孟とか有田芳生なんかがそうだよね。右翼だって、年とってやめたら、「転び右翼」だし、「主義者が転んだ」といわれる。「お前のことじゃないか！」って？ まあまあ。

でも、最近では、右も左も「主義者」は老人ばかり。ヨイヨイだ。道を歩いていても、小石につまずいて、転んだりする。それを見て子供たちが、「あっ、主義者が転んだ！」と言ってはやしてる(言ってねえか)。

まア、オラなんかは、さしずめ「ヤメ右」だね。でも語呂が悪いな「ヤメウ」じゃ。ヤマメじゃないんだから。しかたねえ、「ヤメ民」にしよう。でも「ヤメ民族派」じゃなく、「ヤメ民青」みたいだな。あっ、「ヤメ」たり「転んだり」ばか

りで、金子みすゞから話は遥かに遠くに転んでいった。いけん。戻ろう。8月の中旬に、日本映画の試写を続けて見た。8月17日(金)は、あの熊切和嘉監督の衝撃の第二作目「空の穴」だった。「あの熊切監督」といったけど、この人の第一作は連合赤軍事件を扱った「鬼畜大宴会」だ。とんでもない映画で、僕も「SPA！」などで何度か紹介した。でも二作目は、「今度は一人も死なない映画を作りたかった」という。ほのぼのと、やるせない映画だ。北海道でドライブインをやってる男(寺島進)と、そこにフラっときて同棲する女の話だ。寺島進は北野たけしの映画によく出てるし、なかなか味のある役者だ。

で、もう一つの試写会が8月21日(金)で、五十嵐匡監督の「みすゞ」なんだ。みすゞ役は田中美里だ。NHKの「あぐり」のヒロインだったんだ。そして、父が中村嘉律雄、母が永島瑛子だ。西條八十の役はイッセー尾形だ。そして、みすゞと結婚する狂暴なダメ亭主が何と寺島進なんだ。「空の穴」では、やるせないオッチャンだったのに…。日本には渋い俳優はこいつしかいないのかと思ったね。でも、「みすゞ」の寺島はホンマ、憎たらしいね。こんな奴、殺しちゃえばいいのにと心の中で叫んだダヨ。

金子みすゞの家は本屋なんじゃ。だから本ばかり読んで、早熟な文学少女に育ったんじゃ。ところが父は、店の奉公人・葛原信爾(これが寺島進)とみすゞを結婚させる。ところがこの男はダメなんよ。世の中には女を幸せに出来ない男がいるんだよ。こんな男は結婚しちゃいけないのよ。逮捕して断種処分にせにや。金子は元祖「だめんず・うぉーかー」だね。だめな男にひっかかって。別にひっかかったんじゃなく、親に押しつけられたのか。それに「元祖」じゃねえか。大昔から「だめんず・うぉーかー」は山といたんだ。うん、これも感動かな。日本文化かな。(お知らせ。「SPA！」で連載されていた倉田真由実の『だめんず・うぉーかー』(扶桑社)が発売中じゃよ。おもしろかった。よみなせえ)。

そうそう、やはり「SPA！」で描いていた松田洋子の新しい漫画『人生カチカチ山』(角川書店)も面白い。北朝鮮に行ってきた話もでてる。これは思想漫画だ。ぜひ読め！さて、みすゞの夫になった葛原(くずはら)は本当に「くず」なんだ。結婚前は遊廓の女郎と心中しようとし、自分だけは生き残った。又、文学には全く関心がない(そんな男がなんで本屋に勤めるんだ、バカ)。みすゞには「詩をやめろ。本を読むな！」とって暴力をふるう。さらに毎日、遊廓に入りびたりで、何と、みすゞはこの夫から淋病を移される。そして寝たきりになる。それでも夫について行く。アホな女だ。子供も生まれる。夫は詩作も禁じ投稿仲間との交友までも禁じる。こんな夫にいつまでも付いていくみすゞは、ますますアホだ。かわいそう。やっと離婚を決意。しかし夫は「じゃ子供をよこせ」という。明日は子供をとられるという晩、みすゞは思い余って自殺する。26才だ。かわいそうに。全く救いが無い。

こんなダメ夫を押しつけた親も悪いし、ズルズルと夫についていくみすゞも悪い。まわりの人達も悪い。そしてあたら若い天才を殺してしまったじゃないか。そして、救いのない日本は暗い戦争の時代に突入する。ということで今週は暗く、救いのないまま終わる。それが人生の現実なんだ。映画「みすゞ」は池袋新文芸座、

銀座シネ・ラ・セットで現在、ロードショー中だ。見なせえ。見て泣きなさい。

金子みすゞはかわいそう  
むりやり結婚させられて  
淋しい病気を移されて  
好きな詩だって書けんとよ  
だから死ぬしかないんです  
死んだ後にほめられて、本がうれてもなんになる  
やっぱりみすゞはかわいそう

テレビでやったのは松たか子がみすゞ、夫が渡部篤郎だった。やたら金をかけたセットだった。でも、夫の渡部がいい夫すぎる。史実を歪めちゃいかんとよ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張11月19日

#### 『売国奴よ！』が今日発売です

皆さん！今日、11月19日(月)、発売です。お待たせしました。『売国奴よ！魂を売るべからず』(廣済堂出版。1400円)です。今年になって初めての本です。ということは、21世紀初の出版です。うれしいですね。もう本を出すことは一生ないと諦めていましたから。これも、このHPを見て下さってる皆様、そして歴代の管理人の皆様のおかげです。別にこれは社交辞令じゃなくて、本当にそうなんです。特に第3代名管理人の赤坂細子さんにはお世話になりました。

実はですね。この本は、HPに書いた「今週の主張」を基にして作ったんです。それに大幅に加筆し、又、大幅に修正し、項目別に整理し直し…と、大手術をして出来上がりました。〈基〉になったのは、何と言っても「日の丸・君が代」ですね。僕は皆から「日の丸博士」「君が代教授」と言われる位、この問題には詳しい。何も訓詁学的に詳しいのではなく、実践的に詳しいのだ。

なんせ、右翼運動40年間の間に、毎日毎日、日の丸を掲揚し、君が代を歌った。特に学生道場にいた6年間は朝に夕べに国旗掲揚があった。どれだけ日の丸に向かい君が代を歌ったか計算してみたら、何と2万5千回(!)だった。僕は「世界一、君が代を歌った男」だ。(あっ、これもいいな。これを本のタイトルにすりゃよかった)。だから、日の丸・君が代については何だって言える。言う〈資格〉がある。

国旗国歌は法律で決まった。でも、「日の丸・君が代」は国旗・国歌だと書いてるだけだ。だからどうするいう規定がない。これはおかしいだろう。「国旗・国歌だ。だから尊重しましょう」と言わにゃいけん。ちゃいますか。「尊重」というのは、キチンと掲揚する。日の丸をキチンとたたむ(ほとんどの人はたたみ方を知らない。本の中に詳しく書いたけど)、君が代に合わせて、掲揚する。君が代はキチンと皆が合うように歌う。そして、「一生の間に500回は歌うようにしましょう」と決めるんだよ。1年に10回として50年で500回か。ちょっと多いかな。じゃ1年に2回とし、100回だ。これ位が「尊重」のメドかな。とすると僕なんてとっくに一生分歌った。それどころか、「250人分」も歌ったことになる。だから、もうどんなことがあっても歌わなくていい。大相撲の千秋楽に行って、君が代を歌う時も、一人だけ座っていていい。注意されたって、「ウルセー、おれはもう一生のノルマを達したんだ！」と威張ってられる。「何ならお前にもその権利を分けてやろうか」と言っちゃう。あと249人に金で売ってもいい。いや、金がからむと「君が代を尊重」してることにならない。じゃ、これはやめだ。そのかわり〈権利〉を寄付する。贈呈する。たとえば沖縄の知花昌一さんとか赤坂細子さんとか。「君が代をも

う歌わなくていい権利」贈呈式をやる。胸には、そのバッチだ。それさえあれば、どこだってフリーパス。右翼の集会だって、皆が尊敬の眼差しで見る。右翼が君が代を歌っている時も、フンとって鼻で笑って見てられる。

「尊重」というのは実は厳しいんですよ。汚い日の丸の旗を掲げて黒い車で走ったり、日の丸をひきずって走ってる車もあるけど、あれは、尊重してないから逮捕だ。5、6人の集会でも、「おれたちは愛国者だから」と意気込んで無理に大声をあげて、全く合わない君が代を歌ってる人もいるけど、それも逮捕。音痴が歌うのも逮捕。高校なんかで、ペチャクチャ喋ってるガキに歌わせようとする校長・教職員も逮捕。そうしたら、「愛国者」を自称する連中で留置場は満員だ。

かく言うおいらだってそうだった。昔は、「尊重」してなかった。〈回数〉のノルマは達してたけど、大学を出て、右翼になってからは〈内容〉的に尊重してなかった。たとえば、15年ほど前に出た『若者たちの神々』(朝日新聞社)という本がある。それを見ると、日の丸の旗を立てて街頭演説をしているが、その旗がこ汚い。下はグチャグチャに破けている。やってるのが、〈型〉だけだったんだ。本当は日の丸を尊重してない。冒涇していた。日の丸さん、ごめんなさい。又、外国の雑誌のインタビューでは、必ず日の丸の前で写真をとらされた。その日の丸がやはり汚くて破けている。不敬なやつだ。「売国奴め！」と現在の自分が過去の自分を叱った。

それで今回出る本が、『売国奴め！』なのかな。恥ずかしい。ところが発売直前になって、出版社側から、いや、こっちの方がいいとなって、『売国奴よ！』になったのだ。その前は、日の丸君が代がメインだからと、『日の丸弁当・君が代行進曲』だった。変なタイトルだな。いやだなと思ったが、そのうち、なかなか味があっていいと思った。そしたら、「これじゃ売れませんから」ということで、『売国奴め！』になり、『売国奴よ！』になった。著者の僕の方について行けない。そんなら、さっきも言ったように『君が代を2万5千回歌った男！』にすりゃよかった。でも手にとった人に、「それがどうした」と言われちゃうかな。

では、この本の内容だ。日の丸・君が代がメインだから、目次を見てもこんな章立てが並んどる。「君が代は、いろんなバージョンでいいでしょう」「国歌は時代とともに変わるべし」「少年時代の『君が代秘話』」「君が代を合体国歌に」「意外な日豪両国歌の共通点」…。

他では憲法改正問題、戦争と平和、靖国問題、愛国心、ナショナリズム論だ。

「我々は潜在的アイヒマン?」「憲法は英語で教えた方がいい」「平和とはじれったいものなのだ」「東条英機神社をつくれ！」

…と、衝撃的、危ない目次が並んでいる。何やら里見岸雄的だね、と今書いて思った。里見のことは何度も書いたからもう書かん。『天皇とプロレタリア』『国体に対する疑惑』を書いた人だよ。一見、左翼的なタイトルで人を驚かせ、本を手にとらせる。そして読んでみたら、「疑惑」を論破した本だった！というドンデン返しだ。天皇は「ブルジョア」の為にあるものではなく、プロレタリアの為にこそあるものだと言った。この本にはシビレましたよ。知らず知らず、里見的影響は受けている。おいらの処女出版『腹腹時計と〈狼〉』なんて今考えると、モロに里見の

影響だよな。

里見は「一見左翼、本質右翼」だ。「でもお前は『一見左翼、本質も左翼』じゃないか」と赤坂細子にバカにされた。そうかなー。じゃ、タイトルは『愛国者諸君！』にすりゃよかったかな。ともかく読んで皆さんが批判して下さいよ。まあ、赤坂には、さんざんお世話になったから何を言われても反論できない。

赤坂はHPの「今週の主張」を全部プリントアウトし、テーマ別に編集し直し、さらに、僕が朝日新聞など別なところで書いたものを組み合わせ、さらに、「ここが足りないから、ここを書け」と僕に指示し、さらに、さらに…と連日、徹夜の大仕事。細子といわれる痩せた体が、さらに痩せ細って、今や「極細子」と皆に言われている。僕のために本当に申しわけない。又、廣済堂出版の人にも大変お世話になった。そのことを「あとがき」に綿々と書いた。でも、「それはいりません」と削られてしまった。歴代の管理人にも、HPの読者の皆様にも、感謝の言葉を書いたんだ。だから、ここでお礼を言いますよ。

その出版記念を兼ねて、ロフトで集会をやります。ぜひ、おいで下さい。12月2日(日)午後2時からです。

それと、もう一冊、本が出ています。もう11月6日(火)に出版されてます。宮崎学さんとの対談で『突破者の本音』(徳間文庫。514円)です。「天皇・転向・歴史・組織」について真剣勝負(ガチンコ)の討論をしています。死闘でした。燃え尽きました。全てを出し切りました。歴史的な対談になったと思います。

実はこれは、99年に青谷舎から単行本で出た。3刷まで行って2万部を売った。20世紀で最後の世紀末対談だった。ところが青谷舎がつぶれ、今度、徳間書店から文庫本になった。初版3万部だ。はからずも「21世紀の対決」になった。エッ、あの時はこんなことを言ってたのかとギャップも面白い。〈組織〉にこだわっていた僕が一水会をやめ、〈組織〉なんかいらんのだといっていた宮崎さんが、「突破党」をつくり、何と選挙にまで出た。そして例の「スパイ問題」に直面した。世紀末から新世紀に、時代を乗り越える大討論だ。ぜひ読んでみなせえ。本の裏表紙の売り文句を紹介しよう。

〈かたや日共ゲバルト議長。こなた右翼のエリート学生。大学生当時、早大闘争で流血の邂逅を遂げた二人の闘士が三十年間の時を越え、今、再び相まみえることに！！ かつて左翼・右翼の洗礼を浴びた両者が、その立場を超越した視点から、「天皇制の是非」「裏切りと転向の狭間」「正義と不正義の正体」「歴史の嘘と真実」「日本政治の現状」など諸々の論点を縦横無尽、手加減なしのガチンコ闘論。血湧き肉踊る昂奮を！！〉

それともう一つ。パンタさんの対談集『暴走対談』(コアマガジン)が出ています。価格は2000円と、ちょっと高いのですが、凄い人たちが出ています。こんなことまで喋っていいのかという超過激なヤバイ対談です。見沢知廉さん、友川かずき、カルメン・マキ、泉谷しげる、近田春夫、みうらじゅん、塩見孝也、平野悠…と錚々たる人々です。僕も、ツマミでちょっと入ってます。

さらにもう一冊。今日送られてきた、『推理力』(双葉社。1500円)という本

だ。脅迫状、暗号、変装、筆跡鑑定、指紋、凶器など。この危ない現代社会に役立つ必須知識が満載。僕はインタビューを受けている。「被・尾行歴数十年の体験談。“警察式尾行”の凄まじさとは？」。本当に凄まじい内容だよ。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張11月26日

#### 三島家の秘密・赤坂家の秘密

11月20日、『まとりた』（vol.12）が発売になった。特集は「死ねる人、死なない人」だ。時節がら、考えさせられる特集だ。充実し、気合いが入っている。今時珍しく、志の高い雑誌だ。今まで季刊だったが来年からは月刊にするという。僕はここで、「鈴木邦男の憂国者の憂鬱」という連載を持っている。今回は特集に合わせて、三島由紀夫の死について書いた。タイトルは、「そして、三島由紀夫は《歴史》になった」だ。400字原稿用紙で25枚だ。かなり苦労して書いた。巻頭で14頁だ。おわりに「本文を読み解くキーワード」という専門用語解説がついている。

「楯の会」、映画「憂国」…などについて編集部が書いてくれたのだ。なかなかいいいな編集だ。

31年前の決起の時は三島が45才、森田必勝は25才だ。僕は27才で、産経新聞に入社した直後だった。学生運動の〈先輩〉である僕らが皆、運動をやめ企業に入ったり、田舎に帰ったりしていたのに、〈後輩〉の森田はまだ運動を続けてたのかと驚いた。そして、「憂国青年を代表して」死んだ。やり切れなかった。後ろめたかった。そこから昔の仲間たちが集まり、勉強会を始めた。やがて一水会も出来た。

その時、三島というよりは森田だった。だから森田の辞世の歌からとって「野分祭」を毎年やってきた。三島は45才まで生きたんだし、やることは全てやって、世界的に知られた大作家になったんだ。だからいいだろうと思った。その観点から今まで何回も書いてきた。ところが僕自身が三島の年を越えた。森田の二倍以上の生を生きた。そうすると又、別な見方が出来た。その辺のことを書いた。「45才まで生きたらもう本望だろう」と当時は思った。でも、今は、違うと思う。25才よりもかえって世間のしがらみに縛られて、かえって死ねないのではと思った。それを三島は〈意志の力〉でなしとげた。

さらに、三島が25才の時に書いた『青の時代』を参照しながら、三島の死の覚悟について考えてみた。その辺は本文を読んでほしい。ただいかに〈意志の力〉で世間のしがらみを断ち切ろうとしても、家族への情愛はなかなか捨て切れない。自分の死後、子供たちはどうなるか。そのことを考えると三島も心配でたまらなかった。だから死の1年前に、師と仰ぐ川端康成に手紙を出している。『川端康成・三島由紀夫往復書簡』（新潮社）にその手紙が収められている。三島らしくない弱音が書かれている。

「…ますますバカなことを言ふとお笑ひでせうが、小生が恐れるのは死ではなくて、死後の家族の名誉です。小生にもしものことがあったら、早速そのことで世間

は牙を剥き出し、小生のアラをひろひ出し、不名誉でメチャクチャにしてしまふやうに思はれるのです。生きてみて自分が笑はれるのは平氣ですが、死後、子供たちが笑はれるのは耐えられません。それを護って下さるのは川端さんだけだと、今からひたすら便りにさせていだいてをります」

この手紙の「便り」のところに(ママ)と書かれていた。本当は「頼り」なのに三島も家族のこととなると動揺して、書き間違いをしたのかと思った。だから、「まとりた」ではそう書いた。ところが、原稿が校了になった後、東中野図書館から借りた筑摩書房の「明治文学全集」第93巻の「明治家庭小説集」を読んでいて、アッと思った。この中の草村北星の「濱子」を読んでいたら、こんな箇所があったのだ。「…勿論小管は自身のそとに、ひとを便るといふことはない」。ここでも「頼る」を「便る」と書いている。予備校や専門学校で国語の先生に聞いたら、「〈便り〉と書く人が結構いたという。そうだったのか。じゃ、三島が動揺して間違っただけではない。確かに子供のことで動揺しただろうが、だからといって字を間違える人間ではなかった。

だから、そのことを(注)として巻末に、無理矢理に入れてもらった。今と違って明治の小説家たちは漢字を堅苦しく考えてなかった。かなり勝手に使ったり、造ったりしていた。夏目漱石などはそのいい例だ。冗談を常談と書いたりする。僕らが書けばただの間違いだ、漱石が書けば、「それは考えがあってわざと書いたのだ」と言われる。

最近読んだ「岩野泡鳴集」(やはり「明治文学全集」の71巻)の中にはこんな字が見える。泡鳴五部作の一つ「発展」から取ってみる。妾は「目かけ」と書いてるし、獣は「毛だ者」と書いている。目をかけるから妾になるし、毛だらけだから獣なのだ。こっちの方が語源的には正しいのかもしれない。そんな確信を持って、泡鳴にしる漱石にしる漢字を使っていた。又、時には自己流に漢字を造っていたのだ。

ともかく、三島の「便り」の縁で、今は毎週一冊ずつ、「明治文学全集」を読んでいる。ところで、三島の縁と言ったが、実は、ちょっと違うのだ。なぜ、「明治家庭小説」を借りてきたかだが、ちょっとしたドラマがあるのだ。サスペンスだ。三遊亭円朝の全集を以前読破し、気にかかったことがあって調べに行き、その時、床にペタリと座り込んで、「明治文学全集」をパラパラと見ていた。大判の本だし、活字も小さいし、読みにくいなと思っていた。その時、「明治家庭小集」が目についた。

何だこりゃと思った。今じゃ家庭小説なんて言葉はないが、当時は親子と一緒に安心して読める健全な小説という意味らしい。そこに、菊池幽芳の「乳姉妹」があったのだ。あっ！と叫んでしまったね、図書館で。それであわてて借りて来て読んだ。そしたら、他に草村北星の「濱子」などがあり、そこに三島と同じ「便り」という書き方があったのだ。でも、「まとりた」には「実は…」以下のことは恥ずかしいから書かなかったが…。

ところで、「乳姉妹」だ。記憶のいい方なら御存知でっしゃろう。前にこの「主張」で紹介したことがある。中野図書館から「日本映画主題歌集」を借りて聞いて

いた。そしたら、この「乳姉妹」という映画があった。いやらしい映画だなと思った。昔も、叶姉妹がいたのかと思った。ところが何度聞いても、そんなシーンはない。「そんな」といわれても困るが、どこが〈乳〉なんだと思っていた。それがずーっと疑問になって頭の中に残っていた。

だから、原作の「乳姉妹」を見つけて飛び上がって、「ルノワール」を三軒ハシゴして、5時間かけて一気に読んだ。そして、ガーンとなった。巨乳姉妹の話ではないんだ。乳一本で(いや二本か)男をたぶらかし、のし上がっていく姉妹の話だと思ったら違う。そうだったらとても「家庭小説」にはならない。そうではなく、高貴な娘が乳母にあずけられて育った話だ。しかし母は死んでしまう。乳母には実の娘がいる。だから、この高貴な娘も実の娘として育てる。つまり乳母を同じくする姉妹(同然に育てられた二人)の話なんだ。ところがその秘密を二人は知らない。乳母が死ぬ寸前、自分の娘に打ち明けて、高貴な娘に伝えてくれと言って死ぬ。小説は都合のいいもので、高貴な娘は列車の事故で遅れ、乳母の死に目に会えないのだ。その乳母の娘は意地の悪い娘で、自分が高貴な娘にすりかわり…。そして友情、陰謀、殺人がある。毎日、ハラハラ、ドキドキする展開なのだ。

「毎日」といったけど、これは「大阪毎日新聞」に明治36年8月24日から12月26日まで連載された小説だ。実に面白い。読んだらやめられなくなった。昔の小説って、こんなに面白いのかと感動した。「乳姉妹」の作者・菊池幽芳はその反響をこう書いている。

「…読者がこの『乳姉妹』の待遠しさに、新聞到着の時刻を計って、みな売捌店に来るので、配達の手間が入らぬとのことでございました」

すごいね。新聞が配られるのを待ちかねて、販売店に取りに行ったというんだから。それだけの大評判になり、映画にまでなった。それなのに今の学校の「国語」では教えないし、「文学史」にも載ってない。おかしい。文庫にもなってない。河合塾コスモの現代文の先生・牧野剛さんに聞いたら、「乳姉妹」は知っていた。

「同じ乳母に育てられた姉妹ですよ。鈴木さんが考えるようないやらしい意味はないんですよ」と言う。じゃ、男だってあるわけだ。「乳兄弟」というのが。でも、「俺とお前は乳兄弟だ」なんて、ちょっと嫌だな。

それ以来、いろんな人に聞いてるが、牧野さんのように明確に答えた人はいない。いや、一人だけいた。前管理人の赤坂極細子だ。「そんなの常識ですよ」なんて言う。常識じゃねえよ。皆、知らなかったんだ。「だって私も乳姉妹だったんだモン」と意外なことをいう。昔はいいとこのお嬢さんで、家の都合で乳母の家にあずけられていた。しかし、乳母には実の娘がいた。面倒だからと一緒に姉妹として育てられたんだという。知らなかったな。今、明かされる「赤坂家の秘密」だ。そして赤坂は乳母の左の乳を飲んで育ったので左翼になり、右の乳を飲んだ娘は右翼になったんだと。そして映画「新しい神様」に出たという。じゃあの雨宮がそうなの。でも、ちょっと年が合わないんじゃないかな。と、謎は謎を呼び、次週に続きます。

又もやお知らせ。12月2日(日)午後2時から僕の『売国奴よ!』の出版を記念し

たイベントをロフトでやります。超豪華なゲストがたくさん出ます。本がまだの方はそこで買って下さい。もう読んで、鈴木に文句を言ってやろうという方も是非いらして下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張12月9日 ちょっとしたミステリーだ

不思議なことがある。

「ここだけの話ですが」と松崎菊也さんが声をひそめる。おっ秘密の話だ。まさしく「他言無用」だと思った。ここは社会文化会館。昔の社会党本部だ。その5階の三宅坂ホールだ。11月10日(土)の夕方だ。政治風刺コントの「ニュース・ペーパー」から別れて独立した松崎菊也さん、松本ヒロさんらが、「他言無用」と銘打って年に2回ほど過激なライブをやっている。それを見ていた時だ。

「雅子さまもお目出たですね。男の子でしょうか、女の子でしょうか」という話になった。「でも、もう分かっているんです。男の子です。でも、これは他言無用ですよ」と菊也さんは言った。どう見ても、ギャグではない。その証拠に誰も笑わない。「オーツ」と、どよめいている。「そうか、分かったのか」「男のお子さんか」と、真面目に驚き、真面目に話し合っている。実際にお子様生まれたのは12月1日だ。その3週間前にこの話を聞いたのだ。観客は、「コントのネタ」とは思わない。〈本当の話〉として聞いたのだ。

だって、3週間前なら、男の子か女の子か分かる。超音波で分かるらしい。医者も教えてくれる。それによって両親も心の準備が出来るし、名前もゆっくり考えられる。着る物の準備だって出来る。中には、「いや、男の子か女の子か、誕生の瞬間まで分からない方がいい」と言う人もいる。その方が、感動も大きいし、全ては自然の摂理に任すべきだという。

菊也さんはラジオの番組を持ってるし、マスコミの記者の友人が多い。だから、そんな所から話を聞いたのだと思った。雅子さまも超音波で診察され、男の子だと分かった。医者は隠しているが、お目出たい話だし、どっかから洩れた。それを新聞記者からでも聞いて、菊也さんが、ポロッと言ったんだろうと思った。

僕だってそう思った。いや、僕の場合は〈やっぱり、そうか〉と確信のような形で思った。というのは、この前後に、新聞記者や週刊誌記者から、「男のお子さんらしいですよ」という話を聞いていたからだ。「皇室でも超音波で診察するのか」と思った。最先端の医療技術で当たられるのだから、これも当然かと思った。二、三の週刊誌から取材された時も、記者は皆、一様に、「男のお子さまのようですが、これからの皇室はどうあるべきかお話し下さい」と言う。僕もその前提で話した。

「これで女性天皇論議はなくなりましたね」という記者もいた。「そうですね」と僕も答えた。今年の春頃、急に女性天皇論が論議された。一部の国会議員が中心になって話題にしたようだ。今、皇室には男のお子さまはいない。雅子さまのお子さまが生まれてからでは遅い。今のうちに皇室典範を改正し、「女性天皇」を認めるべきだというのがその主張だった。お子さまが生まれて、女の子だったら、それから論議するのでは余りに付焼刃な対応になる。だから今からキチンと法改正をして備えておこうという論議だった。

ところが秋になると、その論議はなくなった。「どうも男のお子さまらしい」という話が広まったからだ。「じゃ、何も女性天皇論など考えることはない」「これでひと安心だ」ということになった。ここで言葉の問題だが、ちょっと前までは「女性天皇論」ではなく、「女帝論」と言っていた。でも、「女帝」というと、「三越の女帝」とか、「外務省の女帝」なんて使われて、イメージが悪い。「女の大ボス」「フィクサー」というイメージだ。それに、皇室ではなく外国の王室のイメージがある。そんなこんなで、今は「女性天皇論」と言われることが多い。

話を戻す。一般の国民レベルでは、「男のお子さまだろうか、女のお子さまだろうか」と思っていた。でも、マスコミや政界では、「男のお子さまだ」と分かっていた。ところが、ところが、この「分かっていた」というのは嘘だったのだ。12月1日、お生まれになったのは内親王さま（女のお子さま）だった。新聞社も慌てた。「親王さま（男のお子さま）誕生」で号外を作っていたからだ。急遽そこだけ書きかえて、号外を出した。

それにしても不思議だ。ミステリーだ。では誰が、「男のお子さまだ」という情報を流したのだろうか。誰かが意図的に流したわけではないだろう。取材していた記者が病院関係者や宮内庁関係者の言葉や表情から、ピンと感じ、それを洩らしたのだろう。「男のお子さまだ」とは言わない。しかし、男のお子さまの話をつまましたとか、皇太子さまが生まれた40ほど前のことを話題にしたとか、あるいは記者が男のお子さまの可能性を訊いたら、否定しなかったとか、ともかく、記者は「ピンときた」。そして、それが洩れて、あたかも「既成の事実」のように一人歩きした。そんなところだろう。

だが、「ピンときた」記者の直感が、勘違いだったし、間違いだった。でも、3週間前だし、「超音波で分かっているはずだ」という前提がある。だから皆、信じたのだ。でも、この診察はされなかったのだろう。あるいは、事前に分かっても、「知らせないでほしい」と皇太子さまは言われたのだろう。

ロフトプラスワンでは12月2日(日)、僕の『売国奴よ!』の出版記念トークがあった。三浦和義さん、森達也監督がゲストで来てくれた。司会はロフトの店長・平野悠さんだった。だから、この「男のお子さま」の話をした。平野さんは、「多分、それは天皇陛下のお考えでしょうね」と言う。自然の摂理に任すべきで、あらかじめ男か女か知る必要はない。そう考えておられるのだ、と言う。僕もそう思った。天皇・皇后両陛下、そして皇太子さま、雅子さまも、そう思われてられたのだろう。科学万能の世の中に対し、もっと自然でいいのではないか。自然の摂理に任せたらいい。そう言われてるような気がした。

平野さんは、グアテマラ（だったかな）に長くいて、万博の時は、グアテマラ館の代表として天皇陛下にお会いし、声をかけて頂いたという。昔は過激派の学生運動をしていたし、「天皇制打倒!」を絶叫していたのに、今は、「尊皇の志士」だ。「だって、陛下にお会いしたらガタガタと震えましたよ。権威に打たれたというか、神聖な方です」と言う。「この日本のことを一番憂え、考えておられる。だから超音波診察なんかいらんと言われたんですよ。自然のままを尊ばれる方ですから」。

僕らは反省する必要があるなと思った。我々と同じ次元で、「皇室でも…」と勝手に考え、推測し、「男のお子さんだ」と思ってしまった。いけないことだ。

でも又これで、女性天皇論儀は再燃した。テレビのワイドショーでもやっている。「世論調査（といっても何百人かだろう）では8割が女性天皇に賛成」と言っていた。扇千景、田中真

紀子なども「賛成」と言っていた。「女性の天皇はダメだ」と女性議員は言えないだろう。

「女帝は私だ」と田中外相などは思ってるのかもしれない。野中弘務(元自民党幹事長)は以外と「革新派」で、靖国問題では「首相の8.15参拜反対」「靖国A級戦犯分祀」を言ってたし、今度もこう言う。「日本は男女共同参画社会を目指しており、外国にも例がある」。

これで一気に女性天皇待望論も沸騰したわけだ。「女性ではダメだ」とは言いづらい雰囲気だ。ウーマンリブの人達だってそうだ。「女性天皇を認める」としか言えない。でも元々は反天皇論者なのだ。それが天皇を認めることになる。彼女らにとっては、この点も痛しかゆしだ。

僕は女性天皇には賛成だ。しかし、野中の言うように、「外国でもある」からとか、日本は男女共同参画社会を目指すからという理由ではない。外国や未来ではなく、それが日本の本来の姿だからだ。日本史上、女性天皇は十代八人(二人は退位後に再即位)いる。だから、〈未来〉ではなく〈過去〉に戻るのだと考えた方がいい。できることなら一世一元も廃止したらいい。昔のように、喜び事があれば改元し、国民皆もあやかって幸せになる。又、天災が続けば、元号を変えて、気分を一新する。政治や経済も国民一人一人の〈気分〉の総和なんだから、改元して気分が一新すると、実際に政治も経済も変わったのだろう。天皇は時間・空間を支配していたんだ。もっと言うなら、側室(後宮)制度も復活したらいい。でも今はもう無理か。

参考にはしたくないが、外国のことを説明する。女王のいる国はイギリス、デンマーク、オランダだ。前に、「サンデー毎日」でウォルフレンさんと対談した時、この話をした。活字にはならなかったが、天皇論、女帝論をかなりやった。ウォルフレンさんは、オランダの王室に並々ならぬ誇りを持っている。「何も我々は、女王様だから偉いと思ってるわけじゃない。人間的にも非常に優秀な方だし、オランダにはなくてはならない方です。一人で街に出て買物もされる。又、国民がそれを暖かく見守っています」と手放して絶賛する。「どうだ、日本とは違うだろう」と言わんばかりだ。

「日本でも皇室の方々は一人で散歩に出、買物に行きたいと思ってるでしょう。でも、警備がゾロゾロつくし、又、天皇制をめぐる左右の争いがまだあって、危ないと思われている。この点だけはオランダの方が進みますね」と言った。

「そんなにオランダでは女王さまを尊敬してるのなら、次も女王さまなんですね」と訊いた。「いえ違います。オランダは民主的です。男女にかかわらず第一子が王位を継ぎます」と言う。「今、第一子は男の子です。だから次は国王です」。そうなのか。「第一子が王位を継ぐ」と決めているのは、オランダの他、スウェーデン、ノルウェー、ベルギーだ。日本の女性天皇論者は、この方式を支持している人が多い。

「じゃ、オランダの王室も安泰ですね」と訊いたら、チラッと軽蔑的な目で睨まれた。

「我々は王位を尊敬してるわけじゃありません。王位について人が立派だから、尊敬し、支持してるんです。能力のない人ならば、やめさせます。それが民主主義です」と凄いことを言う。じゃ、次の国王はどうなんだろう。「余り優秀じゃないですね。だからオランダはこれで王室も終わりかもしれません」と悲観的なことを言う。

さて、日本だ。「決断の首相」小泉さんは女性天皇問題では慎重だ。「いいことだ。すぐにやりましょう」とは言わない。「じっくり考えて」「あわてて議論することじゃない」と言う。多分、こういう問題があるからだろう。法改正をして、女性天皇を認めたとする。しか

し、その後、皇太子ご夫妻に男のお子さまが誕生した場合、「男女 平等」の観点から皇位継承順位をどうするかだ。オランダのように、「男女にかかわらず第一子が王位を継ぐ」となったら、問題はない。第一番目の女の方が天皇になる。しかし、「法改正しなければ、よかった」という悔いは残る。昔ならば、弟の宮様を擁立して、内乱になるだろう。だから、女性天皇を認めるにしても、「オランダ方式」はちょっと難しいだろう。日本の女性天皇も、「つなぎ役」というか、「例外的」であった。だったら、まずは、例外的ではあれ女性が天皇になれるよう法改正をしたらいいだろう。

それにしても、問題は山積みだ。産経新聞(12月4日付)の連載企画「内親王さまご誕生」の第2回は「女性天皇論議」だが、その中で、こう心配する。

「ただし、女性天皇を認める場合、(1)歴代女性天皇は寡婦か独身女性だったが、これからは結婚できるとしても、皇室に入ろうとする男性が今の時代にいるか (2) 天皇直系の女子に限るか、宮家の女子まで範囲を広げるか。広げた場合、宮家の数が 増えて国庫負担も増す--など問題は山積する」。複数の宮内庁関係者はこう言ってる という。「この問題はお子さまのご誕生と関連付けて議論するのは論外だし、男女平等というだけの思考で動いてはならない」。ウーン、これも説得力がある。だからこ そ小泉首相も珍しく慎重になっているのだろう。

昔だったらこんな奇想天外な策もあったのにと、平清盛のことを思い出した。彼は「平家にあらずんば人にあらず」と豪語した。武士や政治をとる人間だけでなく、皇室も平家にしようとした。だから娘を后として入れた。子供が出来た。残念、女の子だ。でも箝口令をひいて、「男の子」と偽り天皇にした。それが安徳天皇だ。ところが、源氏に追いつめられ破れた。あはれ安徳天皇も瀬戸内の海で亡くなった。女官に抱かれ、無理矢理、入水自殺させられた。おごる平家は久しからずだ。と同時に、女 を男と偽って天皇にしたことで天罰が当たったのだという。だから今でも、そんな策は 弄することが出来ない。

「エッ安徳天皇は女だったの？」と訊かれても困る。男だよ。「でも男と偽って… と言ったじゃない?」。だから、それは竹田出雲の「義経千本桜」というお芝居での お話なんだよ。

「管原伝授手習鏡」「仮名手本忠臣蔵」と並ぶ三大名作だよ。一度は 見てみなせえ。携帯やゲームで遊んでばっかりいないで。ということで今週はおわり。

☆ところで、「日本鬼子(リーベン・クイズ)のことを書いたのに、内親王さまご誕生で、後回しになっていた。さらに延ばして、来週に回そうと思ったが、もう映画が 終わっちゃったら困る。その次にはさらに「光の雨」のことを書いた。だから、今回、無理して「日本鬼子」を載せちゃおう。

驚愕するもよし、慟哭するもよし。

12月1日(土)から、衝撃的な映画が公開されている。松井稔監督の「日本鬼子(リーベン・クイズ)」だ。2時間40分のドキュメンタリー映画だ。「日本鬼子」という題 を聞いて、ある大学生は、「日本昔話ですか」と訊いた。アホか、こいつはと思った。鬼ヶ島や瘤とり爺さんの話じゃない。鬼のように恐ろしい日本軍人の話だ。いや、普 段はおとなしい人達なのだが、戦争の中で、〈鬼〉になってしまった元皇軍兵士の証 言映画だ。「日本鬼子」を中国語読みでは「リーベン・クイズ」と言う。

はっきり言って楽しい映画ではない。暗い映画だ。劇映画のように、どっかに〈救い〉があるわけでもない。見ていてただ苦しい。でも、これほど考えさせられた映画 はない。だから1億2千万人の国民全てに見てもらいたいと思う。そう思い月刊「創」(12月号)の僕の連載

「鈴木邦男主義」で取り上げて書いた。又、「ダカーポ」（12月5日発売）に、自衛隊派遣問題とからめて、この映画のことを書いた。さらに、映画パンフレットで松井監督と対談した。だから、映画館では是非パンフレットを買って読んでほしい。一つの映画について、これだけ書いたのは初めてだ。なぜ、それほど係わることになったのか。今回はその話をしよう。

10ヶ月ほど前のことだ。田代廣孝監督から電話があった。「ちょっと危ない映画があるんですが、見てもらえませんか」と言う。元皇軍兵士が中国大陸でやった殺人、強姦、略奪、放火の罪を生々しく告白している映画だという。果たして上映できるのだろうかと言う。「こんな反日映画を許すな！」と右翼が押しかけ、保守派マスコミには袋叩きにされるのでは…と心配してるようだ。「ともかく見せて下さいよ」と言って、ビデオを送ってもらった。

その前に、田代監督のことだ。10年ほど前からの知り合いだ。「あふれる熱い涙」という映画では、フィリピン女性と日本の男の恋を描いていた。何故か、感想を求められたので書いたら、それがパンフレットに載った。又、数年前、「Mr.Pのダンシング・スシバー」という映画を作った、昔なつかしいベ平連のその後を扱った映画だ。ベ平連は、ベトナム戦争に反対し、米兵の脱走をたすけ、手引きした。その時、脱走した米兵と結婚した日本人女性活動家が、その後、アメリカへ帰り、踊るスシバーを開くというお話だ。なかなか面白い映画だった。

エッ、どっかで読んだ話だなと思う人もいるでしょう。実は『がんばれ！新左翼.Part3.望郷編』（エスエル出版会）の「あとがき」で、この映画を紹介している。

ともかく、その田代監督から言われたんだ。だからちゃんと見なくちゃと思った。家で2時間40分のビデオを見た。見て、ヒャーっと叫んだ。一体、これは何なんだと驚いた。14人の老人たちが出てきて、淡々と自分の戦争犯罪を語っていく。これでもか、これでもかと語ってゆく。ビデオを消したかった。耳を覆いたかった。見てる方も拷問だと思った。でも、引き込まれ、ずっと見た。立ち上がれなかった。

何度も言うように、救いのない映画だ。見ていて、居たたまれなくなる。捕虜を殺した話、住民を虐殺した話、子供を火に投げすてた話、強姦した話…と、延々と続く。「そんな噂を聞いた」という伝聞ではない。全て、自分がやった事だ。初めは上官におどされて無理矢理させられた。しかし、慣れるに従って、殺人が〈快樂〉になった。時には、中国人の男女をセックスさせ、男がいく瞬間に銃剣で突き刺して殺した。まるでSM猟奇殺人だ。

住民がゲリラと関係ないと分かって引き上げようとする時、「待てよ」と思った。住民をそのままにして行ったら、彼らは八路軍に言いつけるかもしれない。それで、全員を殺し、火をつけた。

そんな話を14人は、淡々と語る。「チクショー」お前らなんて死んでしまえ！」と思った。背中に冷水を浴びせられたようだった。見た後、ウーンと考え込んだ。だからその時の感想を正直に田代監督に言った。「不愉快な映画だ。しかし、これも戦争の現実だ。それに、14人の告白者も、死ぬ前にこれだけは言っておきたいと思い、命をかけて証言したんだろう。それに対しては右翼だって攻撃できない。堂々と上映したらいいだろう。そして日本中で大論争を巻き起こしたらいいだろう」と。

それに、この映画をとった松井監督は元全共闘の活動家だという。だったら、なおのこと闘ったらいい。（もっとも対談した時は、「全共闘の周辺にいただけです」と謙遜していたが）。あの渡辺文樹監督だって、「腹腹時計」という危ない映画を撮り、警察には弾圧され、

不当逮捕され、会場も拒否され、それでも闘っている。さらに右翼は毎日のように街宣車を連ねて抗議に来ている。それでも堂々と迎えるうち、論争している。「何なら観客の前で公開討論をやるよ！」と言っている。その心意気がいい。だから、その渡辺監督を見習ってやったらいいと言った。この映画についても賛否両論が出て、喧々諤々、論争したらいい。その時はいつでも出ていくと言った。そりゃ そうだろう。言った限りは責任もたなくちゃならない。

「じゃぜひ監督と対談して下さい」という。勿論、二つ返事で引き受けた。はじめはテレビでやる予定だった。というのは、この14人の兵士について、田代監督が11月17日(土)のフジテレビの「ノンフィックス」でやったのだ。深夜の放映だったので、ちょうど「日本鬼子」の宣伝にもなって、タイムリーだった。その中で対談してもらおうと、田代監督は思ったようだが、監督の都合がつかなくて、出来なかった。残念だ。「だったらパンフレットで対談を」ということになり、会った。なかなか気さくな人だった。上智大出身で、何と、ゲタをはいて現われた。楽しい人だと思った。そういえば僕も学生の頃は、毎日ゲタをはいて早稲田に通った。いや、あしだ(高ゲタ)をはいて、カランコロンとわざと音をたてて歩いてたな、と思い出した。ドテラを着て学校に行ったこともある。まるで漫画の「ドテラ猫」だ。女なんか目もくれず、バンカラだった。そして読書と喧嘩の日々だった。あゝ青春だった。松井監督は今でもゲタをはき、今でも青春してるのかと思った。

「今のきな臭い政治状況を見て、元全共闘としての義憤にかられたんでしょう」と訊いた。「いやいや」と言っていたが、きっとそうだ。「それよりも今、撮っておかないと、もう撮れないと思ったんです」と言う。14人の証言者はもう老人だ。老人ホームに入ってる人もいる。監督の焦る気持ちも分かる。「あっ俺もそんな気持ちで取材し、本を書いたことがあったなど、監督の言葉で、30年前のことを思い出した。産経新聞社を無能の故にクビになった直後だった。三一書房から『腹腹時計と〈狼〉』を出し、さて第二弾は何をやるかと考えていた。そうだ、戦前の昭和維新運動の生き残りの人々をたずねて話を聞こうと思った。血盟団事件、5.15事件、神兵隊事件、2.26事件などの関係者だ。今、聞いておかないともう時間はないと思った。それで、毎日毎日、取材して歩き、「やまと新聞」に書いた。この「やまと新聞」は日刊だった。当時は民族派の日刊新聞があったのだ。前の週に月～金までの5回分を書いて、渡すのだ。今ならキツくて出来ないが、当時は若かったし、徹夜しても苦にならなかった。又、「今しかない」「これを書くのは俺しかない」と使命感に燃えていた。

それが一冊にまとまったのが『証言・昭和維新運動』(島津書房)だ。力を入れて書いた本だし、僕としても愛着がある。又、あの時、やっておいてよかったと思う。だって、当時会った人はほとんどが亡くなられた。貴重な証言を聞くことが出来た。重信房子(日本赤軍)の父・重信末夫さんに会ったのもこの頃だ。末夫さんは「血盟団」に入っていた。右翼テロリストの父と左翼の娘。そのコントラストが面白いと思い、町田の自宅まで話を聞きにいった。でも、コントラストというよりも、お互いが信じあっている、うらやましい父と娘という感じがした。この末夫さんのインタビューは『右であれ左であれ』(エスエル出版会)に入っている。でも、『証言・昭和維新運動』は絶版だ。どっか古本屋であつたら買っておい方がいい。いつか文庫にでもしたいと思っているのだが…。

では又、「日本鬼子」に話を戻す。この映画で驚いたのは、14人の証言の「内容」だった。こんな残忍なことを皇軍兵士がやったのかという驚きと、怒りだった。と同時に、よく喋る気になったもんだという「何故？」だった。その「動機」についてだった。戦争だから、大なり

小なり皆人殺しをするだろう。非道のことをやるだろう。上官の命令で、あるいはその場の雰囲気、やらざるを得なくてやることもあるだろう。しかし、戦争が終わったら絶対に公言しない。僕だって、もし人を殺していたら、(たとえ時効になっても)公言したりしない。だからこの14人は〈勇気〉があると思う。死を前にした、究極の男の選択なのかもしれない。

今、『おじいちゃん戦争のことを教えて』という本が出ている。アメリカに留学している孫娘が、元軍人のおじいちゃんに質問するのだ。なぜ日本は戦争したの？なぜ軍隊に入ったの？…etcと。それに対し、おじいちゃんは胸を張って答える。「あれは、やむを得ない自衛の戦争だったんだよ」「国を守るため、国民を守るために純粋な動機で軍隊に入ったんだよ」と。このおじいちゃんは軍人だが、外地には行ってない。だから、捕虜を殺すとか、ゲリラ討伐で民間人を殺すとか、そういったギリギリの場にはいない。だから、戦争の理想を堂々と言うことが出来る。しかし、悲惨な部分は体験してない。それで、「戦争は…」といわれてもちょっとフェアじゃないと思った。

「日本鬼子」に出た14人も本を書いたらいい。孫娘に聞いてもらったらいい。「中国大陸で何をしたの?」。「そうさな一、ちょうどお前くらいの娘を毎日、犯してたんだよ」

「……」。「それに、男と女を交わらせて、いく瞬間に殺したんだ。楽しかったな」

「……」。「押さえつけて水を無理矢理のませて、それで殺したこともあるぞ。腹がパンパンにふくれて死ぬんだよ」「……」。「赤ん坊がうるさいんで、火に投げ捨てて殺したこともあったな。よかったな戦争は。何でも出来るんだから…」「……」

娘はもう声もないでしょうな。でも、これも戦争の真実だ。そのうち全共闘の人たちもおじいちゃんになる。『おじいちゃん、全共闘のこと教えて』を書いたらいい。おらが司会して、「おじいちゃん」に聞くシリーズを作るか。おら自身も『おじいちゃん、右翼のことを教えて』を書くか。「おじいちゃん、右翼ってナーニ？昔は棲息してたんだって?」「そうさな一。たとえるならば、牛だわいな」「…。頭が狂ってるから?」「そりゃー、一部の牛じゃろうが、狂牛病は。そうじゃなくて、赤いものを見ると突っ込んでいくからじゃよ。おじいちゃんも、若い時はそうだったんだよ。サヨクと呼ばれるアホたちを殴りまくってたんだよ」。

☆ あっ、忘れるところだった。映画「日本鬼子」は12月1日から上映中ですが、上映館は渋谷の新しい映画館で「シアター・イメージフォーラム」です。渋谷から宮益坂を上がり、青山学院に行く手前です。仁丹ビルのそばです。渋谷区渋谷2-10-2 telは03(5766)0116です。時間は、11:40、2:50、6:00です。

☆☆又、連合赤軍を描いた映画「光の雨」は12月8日(土)から池袋の新文芸座・渋谷のシネ・アミューズで公開されてます。これもおすすめです。次週はそのお話をしましょう。

☆☆☆「AERA」(12月3日号)の「現代の肖像」で重信メイさん(重信房子の娘)が取り上げられている。テルアビブ事件で日本赤軍が非難された時、房子についての父親(末夫氏)の言葉が紹介されている。〈戦前、維新運動を展開した右翼団体「血盟団」の一員だった房子の父・末夫さんだけは娘の行動は「何ら恥じることはない」と、3人の兵士を悼む漢詩をアラブに送った〉

実は、重信末夫さんについては1時間ほど取材された。だから、「やまと新聞」のコピーをあげたりして、末夫氏のこと、血盟団のことを詳しく話をした。しかし頁数の関係でカットされてしまった。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張12月17日

## 異義なし！僕らも革命をしたかった

これはまさに、「おじいちゃん、連合赤軍のことを教えて」だね、と思った。立松 和平の『光の雨』（新潮社）を読んだ時そう思った。だって、奇妙なんだ。連合赤軍 事件を扱いながら近未来小説なんだ。30年後、日本では死刑が 廃止される。そして連赤事件・死刑囚の永田 洋子・坂口弘が釈放される。坂口は中野 区のボロアパートに一人で住む。アパートの名前は「みやま山荘」だったかな。老人 だが働かないと生きていけない。ビルの清掃をしながら生活している。隣室の予備校 生（河合塾だろう）は、「何だ、この汚いジジイは」と思いながら、いつしか声をかけ、友達になる。そして、昔々の連赤事件のことを聞く。だから、「おじいちゃん、連合赤軍のことを教えて」なんだ。

ところで、この小説では永田、坂口なんて実名は出てこない。全て仮名になっている。だから一般人には分かりにくい。なぜそうなったのか。初め、雑誌に連載してた時は、永田、坂口、塩見、植垣…と全て実名だった。公判記録をはじめ膨大な量の資料、本を読み、立松は書き始めた。「大型トラック一台分の資料を読みました」と立松は言っていた。気の遠くなるような話だ。ところが、連載三回目あたりで、連赤事 件の支援グループからクレームがついた。自分たちの資料や公判での証言などを無断 で〈盗作〉しているという。新聞に大々的に報じられたから覚えている人もいるだろ う。

しかし、こんなことが〈盗作〉になるのだろうか。支援者の資料や、被告人の喋っ たことを引用しなければ小説には書けない。他に誰も連赤に取り組んで書く人はいない。立松は立派 じゃないか。それなのに支援者はクレームをつけた。馬鹿か、こいつらはと思った。しかし、両者の間で何度も何度も話し合いが行なわれ、ついに、立松 はこの小説を中断した。支援者がつぶしたのだ。何ということだと思った。立松は連 赤の兵士たちに同情をもって、あの事件を書いていた。それなのに、ほんのささいな ことで〈盗作〉呼ばわりして、小説をつぶした。

「勝手にしろ。もう連赤のことなんか知るもんか、バカヤロー！」と全て放り出し てもいい。普通ならそうする。ところが立松は、「これを書くのは自分しかいない」と思い直し、全く別な設定で連赤事件を書き始める。つまり、永田、坂口…といった 実名をやめ、全て仮名にして完全な「フィクション」として書き始めた。そして、ボ ロアパートに住むおじいちゃんがかつての革命運動について語るんだ。その革命運動 は〈連合赤軍〉をイメージさせるが、「連合パルチザン」という別の名前になっている。

そして今回の映画だ。12月8日から、映画「光の雨」が池袋・新文芸座、渋谷シネ・ア ミューズで上映されている。もの凄い人気だ。ただ、高橋伴明監督は、立松の原作 を下敷きにしながらかも、〈設定〉を大きく変えた。「おじいちゃん、連合赤軍のこ とを教えて」にはなっ てない。近未来の話ではなく、〈現代〉の話になっている。そし て、連合赤軍事件は「劇中 劇」になっている。

つまりこうだ。元全共闘の人間が、30年たって連合赤軍事件の映画を作ろうとする。そしてオーディションで役者を集め、北海道で映画を撮り始める。立松和平の『光の雨』を原作にして映画を撮るという設定だ。だから、映画の中の話と、映画を撮りながら役者が悩んだり、喧嘩したり、共感したり…という二つのストーリーが同時進行する。それによって、今の若者は連赤事件をどう思っているのか。それが伝わってくる。

ただ、『光の雨』の映画を撮るという設定だから登場人物や事件名もフィクションになっている。頭の中で〈翻訳〉しながら見なきゃならん。だから、ちょっと疲れる。たとえば「革命共闘」は京浜安保共闘らしい。「赤色パルチザン」は赤軍派らしい。二つが合体した「連合パルチザン」が連合赤軍らしいと…。

「革命共闘の幹部・上杉和枝」というのは永田洋子らしい。裕木奈江が扮している。ちょっときれいすぎるよと思うが、でも、なかなかの力演だった。普通の女の子が、時代の嵐の中で、革命家になり、仲間を次々と批判し、総括してゆく。そのシーンが迫力あるし、リアリティがある。山本太郎が扮してるのが森恒夫らしい。あとはよく分からん。いや、メンバーでも分からんだろう。実在の人物をモデルにしながら、フィクションも入ってるだろうから。

11月18日(日)に「映画『光の雨』完成報告と高橋伴明君を励ます集い」が銀座アスター・新宿賓館で行なわれた。役者もほとんどが来ていた。若松孝二監督もこの映画を絶賛していた。そして、「この映画に出ていたモデルがいる」と植垣康博さん(元連合赤軍兵士)を紹介していた。そして、役者たちに向かって、「おーい、植垣を演じたのは誰だ？」と訊いていた。でも役者たちはキョトンとしている。「ナーニ、植垣って？」という顔だ。無理もない。永田洋子位は知ってても、あとは知らないのだ。それに脚本には一切、実名が出てないから分かるはずがない。

でも映画をよく見てたら、総括の時、縛った人間をナイフで刺すシーンがある。「よし、刺そう」と決まっても、最初にやる人がいない。やっぱりビビる。その時、「勇気」を出して、第一番目に刺す男がいる。「あれが植垣さんでしょう」と僕が言ったら、本人は「さあ」といって謙遜していた。でもきっとそうだ。

映画の中では、映画を撮りながら若者たち(役者)の意識も変わってくる。「よくこんな寒いところにいたわね」「逃げたらよかったのに」「革命だなんて、バカみたい」と言ってるが、段々と〈その世界〉にのめり込んでくる。その日の撮影が終わり、居酒屋「雀のお宿」で皆で酒を飲んでる時も、「キツイ。やめたい」という奴に向かって「敗北主義だ!」「総括しろ!」と怒鳴る人間が出たり、酔って「インターナショナル」を歌ったり、結構みな、学生運動気分になっている。いいことだ。

そして、皆、真剣に考える。「あんなギリギリの場に投げ込まれたら自分ならどうする。何が出来たか」と。あの事件では、追いつめられて、自分の兄弟や恋人を殺した人もいた。信じられない話だ。でも、そこまで〈革命〉を思いつめたのだ。逃げるのは簡単だ。実際、日中は一人か二人ずつ作業をしていた。訓練をしたり、小屋を建て直したり、たき木をひろってきたり。中には山をおりて買物に行かされたり、カンパを集めに行かされたりした者もいた。しかし、逃げなかった。脱落者になりたくなかったからだ。立派な革命家になってこの世の中を救おうと思ったからだ。

だから自分から総括を受け、殴られ、刺され、殺されたのだ。「高橋監督を励ます会」の時は、だから僕はそんなことを発言した。「そこまで真剣に、ギリギリまで革命を考えた。それ

に比べたら僕ら右翼学生は甘かった。今、ここで総括し、反省します」。雪山じゃないからいくら総括しても殴られることはないし、殺されることはない。でも、そんな極限状況は見てみたかったと思った。立ち合ってみたかった。なんか、植垣さんが羨ましいと思った。

「この映画を見てどうですか」と塩見孝也さんに聞いた。塩見さんは元赤軍派議長で、いわばあの頃のトップだ。しかし、連赤事件の時は獄中にいた。今まで連赤について書かれたものは、「ただの犯罪」と書かれたものが多い。「それに比べ、この映画はいい！感動した」と言っていた。特に、坂口が海を泳いで羽田の滑走路にかけ上がり、佐藤首相のベトナム訪問を阻止しようとするシーンがある。「あれなんて、胸がジーンときた」と言っていた。

じゃ、実際に雪山の総括に参加した植垣さんはどうなんだろう。「暴力シーンが多すぎますね」と言う。「だって暴力じゃないですか。皆で殴って、ナイフで刺して、14人も殺したんでしょ。暴力以外の何物でもないでしょう」。そう言ったら、「いや、肉体的暴力はそんなにキツなかったんです。それよりも精神的に追いつめられたことがキツかったんです」と言う。ウーン、そういうものなのか。「じゃ、今度、ロフトで二人でその話をしましょう」と言ったら、「いいですね」と言う。「その前に、関西で二人で講演してくれという話があるんですよ」と植垣さん。「いいですよ。植垣さんの為だったら、どこにでも行きますよ」と答えた。

そうだ、立松和平さんにも訊いたんだ。小説では、坂口(らしき人)が娑婆に出てくるところから話は始まる。しかし、映画ではその〈設定〉をやめて、〈劇中劇〉にした。その点の不満はないのだろうか。それとも、映画化という時点で、もう嫁に出した娘のような気分なんだろうか。

「それは全く気にしてませんよ。高橋監督に全て任せてましたから。大体、考えて下さい。10年か20年後の日本なんて、文章では書けるけど映画で表わすのは難しいでしょう。日本はどうなっているのか全く分からないし」。立松さんはそう言う。あっ そうなのかと思ったね。若者は、どんな服を着てるか分かんない。携帯やメールなんて無くなって、皆、耳に埋め込まれているかもしれない。木造アパートなんてないかもしれないし、隣の予備校生と違って、もう予備校もないかもしれない。子供は少なく、全員大学に入れるし、むしろ入りたい人を各大学がとり合って、ドラフト会議が開かれてるかもしれない。

だから高橋監督も、思い切って「劇中劇」という手法でやったのだろう。そうだ、この「パーティ」で、若松監督が吠えてたな。何でも来年の5月頃、もう一つの連赤映画が出来る。それは佐々淳行の原作を基にした映画だ。つまり、警察官が主人公で、「悪のテロリスト」たちを退治する映画なのだ。まるで「ダイハード」のように、強くて正しい警察官(佐々淳行)が大活躍して、悪党をやっつけるのだ。主人公の佐々役は役所広司だという。「ふざけんな！」と若松は怒鳴っていた。「若かったら、そんな権力側の下らない映画なんか爆弾を投げてやるんだが…」と言っていた。酒をきこしめしたとは言え、何とも物騒なことを言う人だ。「今からでも遅くない。やれ！」と無責任にけしかけていた人もいた。オワリ。

〈追伸〉。ところで、高橋伴明、立松和平氏とは昔からの知り合いだ。二人とも早大 全共闘だ。僕らとは殴り合いしてたんだ。しかし、当時はよくはおぼえてない。じゃ、いつ頃から付き合ってるんだろう。それで考えてみた。アツと思った。17年前、たしか「激論・全共闘。俺たちの原点」と題するパネルディスカッションがあった。それはテレ朝で放映され、「朝日

ジャーナル」に載り、講談社から単行本になった。出席者は、中上健次、高橋伴明、立松和平、前之園紀男、そして僕だった。僕だけが反・全共闘だが、あの時代を闘った人間として出た。司会は田原総一郎だった。田原はこの時の体験を基に、「朝まで生テレビ」をスタートさせる。だから、この「激論・全共闘」は「俺たちの原点」と銘打ったが、「朝生の原点」でもあったんだ。

でも、このパネルディスカッションはどこでやったんだろう。と考えていて、思いだした。そうだ、池袋の文芸座だった。あそこに満員の若者がつめかけ、朝まで熱く激論を闘わした。でも、その文芸座は取りこわされてない。いや、今年、新しいビルになり、そこに今度は新文芸座が出来た。そして、その「新文芸座」で映画「光の雨」は今、上映されているのだ！何という運命のいたずらか。因果はめぐる小車か。やはり、〈革命〉が呼んでいるんだ。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張12月24日

## さすがは反近代・チョンマゲ議員の松浪さんだ

「『天皇・皇后陛下はお元気ですか』と開口一番、元国王は言ったんですよ。アフガン人には随分と知人がいますが、まず天皇陛下のことをきいたのは元国王だけです よ」。衆院議員(保守党)の松浪健四郎さんが出版記念会(12月10日)で言ったのだ。タリバン後のアフガンでは、亡命中の元国王に帰ってきてほしいと国民は願っているらしい。「日本のように象徴として戴いたらいいと思う。そうなるように私も努力してます」と僕に話してくれた。「ぜひ、そうなるように頑張ってください」と握手した。それにしても、大きくて、力強い手だ。

それもそのはず、松浪さんは国会議員で、専修大学の元教授だが、それ以前に〈格闘家〉だ。全日本学生レスリング選手権、全米レスリング選手権で優勝している。専修大学教授になってからは、プロレスラーの長州力、馳浩を育てた。だから、プロレスのことも詳しい。

僕は松浪さんに初めて会ったのは、プロレスの取材だった。エスエル出版会から出した『UWF革命』という本を書いた時だ。UWFが出来たばかりの時で、「これはプロレスではない。本物の真剣勝負だ」と銘打って登場し、一大ブームになった。もう15年も前のことだ。その時、僕も書き、さらにいろんな人にUWF論を語ってもらった。骨法道場の堀辺正史先生、そして松浪さんにも聞いた。松浪さんは真黒に陽焼けして、精悍な顔付きで、格好いい男だなと思った。昔はやった漫画で「ワル」というのがあった。氷室なんとかという不良が主人公なんだが、剣道の天才で、いい男で、ニヒルなんだ。ワルだが、ひきつけられる魅力のある男だ。空手、柔道、合気道、何と闘っても負けない。それでいて、闘いにも、女にも、人生にも冷たく、ニヒルだ。この氷室に似てると思った。

精悍で、ニヒルで、過激で…。近くに寄ったら怪我をしそうな、そんな危ない魅力を持った人だった。

取材して驚いたが、言うことも過激だ。「UWFは真剣勝負だというが、そんなことはない。プロレスだ。大体、真剣勝負を30分も出来ますか」と衝撃的なことを言う。実に雄弁だ。圧倒されてしまった。この本が、というより松浪さんのこの発言が波紋を呼び、本は売れた。しかし、「UWFへのエール」を目指したのに、「UWFに敵対するものだ」と思われ、UWFからは反撥、ボイコットされた。

松浪さんとはその後も何回も会い、取材した。専修大学に行ったこともある。サンボというロシアの格闘技があるが、そのサンビストの草分けのビクトル古賀さんも専修大学で教えていた。一緒に話を聞いた。『UWF革命』の時に、ビクトル古賀さんにも確か、話を聞いたんだ。

松浪さんは教授だから、格闘技の歴史についても詳しいし、その方面の本を何冊も出している。又、世界中を旅し、特にイラン、アフガン、パキスタン、トルコ、エジプトなどイスラムの国々を旅行し、その魅力にとりつかれ、75年には、アフガニスタン国立カブール大学で指導

と研究に従事した。89年、社団法人日本・アフガニスタン協会理事長になる。だから、アフガニスタン問題では日本で一番詳しい。又、教え子も皆、偉くなっている。

タリバンにも、北部同盟にも、友人・知人は多く、元国王とも親しい。「行く時は、日本のソーラ時計をおみやげに持っていく」という。だから、タリバンや敵対する北部同盟も、元国王も、腕時計だけは同じソーラ時計をしてるのだという。

でも、松浪さんをこう紹介するよりも、「国会のチョンマゲ議員」と紹介する方が早いだろう。それに、国会で、汚い野次に頭に来て、コップの水をかけたんだ。それで一躍有名になった。コップの水をかけるなんて、吉田茂首相以来じゃないかな。勇気のある人だ。昔だったら乱闘国会になっただろうが、格闘家・松浪健四郎には誰も殴りかかる議員はいない。

その松浪さんが、『松浪健四郎アフガンに行く』（五月書房。1700円）という本を出した。いい本だ。松浪さんでなければ書けないアフガンの本当の姿を書いた本だ。帯にはこう書かれている。「美しくも謎の国。誇り高き国アフガン！ アフガンを第二の故郷とまで言う国会議員・松浪健四郎が、知られざる国アフガニスタンへの思いを語り、大国のエゴを正した問題の書」。

この出版記念会が12月10日(月)、午後6時から虎ノ門の霞山会館で行なわれたのだ。プロレスラーで国会議員の馳浩も来て挨拶した。馳は今でもプロレスラーとしてリングに上がっている。又、師匠・松浪さんと同じインテリ・レスラーだ。何せ、アマレスをやめた後は、高校の古文の先生をしていた。それからプロレスラーになったのだ。大相撲の智の花みたいだ。彼も高校教師をやったが、相撲の夢が捨て切れず、大相撲に入った。馳は、プロレスラーになってからも河合塾に講演にきて、何と古文の特別授業をやった。古文の参考書も書いている。僕も読んだが、面白いし、分かりやすかった。

この出版記念会だが、「政治家のパーティ」とは思えない、質素なものだった。普通はホテルに何百人、何千人と集めて、議員をズラリ並べて、勢力を誇示し、金を集める。会費だって、2万とか3万とか取る。ところが、松浪さんは違う。馳の他は誰も国会議員はいない。あとは普通の人達。それに会費が5千円だ。これはいい。松浪さんの人間性が出ている。

この本を読んで驚いたが、松浪さんは、例のアメリカ同時多発テロ(9月11日)の2日前に、ローマでアフガンの元国王ザヒル・シャーと会っていたのだ。その時、「天皇陛下はお元気ですか」と言われたんだ。元国王は日本の皇室とも交流があるが、亡命後20年たつ。「9月11日のあと、急に元国王も注目されましたが、この時は、忘れられてましたからね。誰も訪ねる人がいないし、暇を持てあましていた。だから僕が訪ねた時は王室一族で大歓待でしたよ」と松浪さんは言う。

元国王と会ったことから始まり、今回の問題の真相、そしてアフガンの実状について詳しく、この本では書いている。さすがは格闘家と思う点もある。例えばこんな所だ。レスリングを教え、練習が終わって一緒にシャワーをあびると、アフガンの男性の男性自身が世界一立派だと発見した。という記述がある。カブール大学で松浪さんの助手をしていたアブドラ君も言ったそう。「(アフガンの)パシュトゥン族の男根は、世界中の民族のうちで最大で、最小は中国人、ベトナム人、そして日本人です」。ゲッ、日本人は〈世界最小民族〉の御三家なのかよ。国辱的だ。でも、松浪さんもこれは認めているし、さらに大きいだけでなく、美しい、という。「わたしはレスリングの試合で、多くの国々を回り、多くの人種とサウナ風呂やシャワーで同席した経験をもつが、美しいと感じさせられたのは、あとにも先にもパシュトゥン族

のそれだけである」。

フーン、そんなものか。だったら、もっと学問的、実証的、比較民族学的に証明してくれなくちゃ。元大学教授なんだから、写真にとって、どこがどう違うのか、どこが美しいのかも証明してくれないと。日本人の代表の松浪さんもモデルになって、写真を出してほしい。ともかく、こういった身近かな話から始まって、政治、経済、教育…と、アフガンの真実が分かる本だ。読んでみたらいい。松浪さんは他にもアフガン関係の本は随分出してる。中公文庫の『アフガン褐色の日々』なんかは手に入れやすいだろう。

では今回はこれで終わりにしようと思ってたら、何と今日(12月17日付)の産経新聞に松浪さんが出ていた。何という偶然。僕のペンが呼んだのか。「書架」というコーナーで、本について書いている。『本は買うもの、信条に1万冊』と見出し。すごい。本は一冊、一冊、金を出して買うものだという。図書館で借りるのもいや、古本屋に売るのもいや。人に貸すのもいや。だから増える一方だという。

じゃ、どこに置いてあるのかと思?ら、5ヶ所に分散してるんだそう。本宅、愛人宅、3号宅、4号宅…かと思ったら、違う。保守党事務所、かつて教授を務めた専修大学の研究室、自宅、都内の妻の実家、議員会館の5ヶ所だという。そんなに分散しては、どこに何があるか分からんだろう、と思ったが、違う。どこにどの本があるかすべて頭に入ってるという。我々凡人とは違う。アマレスをやると頭がよくなるのだろうか。

今月出版した『松浪健四郎アフガンに行く』(五月書房)で著書は42冊になったという。ところで、五月書房と聞いて、アレッと思った。実は、五月書房からは、『イラスト柔道』『実践イラスト柔道』『イラスト柔道の形』などが出ている。僕の愛用書だ。これを見て僕も強くなった。又、昇段試験の時は、何人かに勝たなくてはならないし、その上に型の試験がある。写真やビデオのテキストもあるが、こまかな点が分からない。その点、イラストだと手の位置、足の動きも分かり大助かりだった。この本のおかげで昇段できたようなものだ。では話を戻す。

松浪さんは国会議員として超多忙な日々を送っている。東京と地元大阪を往復しているが、一日に少しでも原稿用紙のマス目を埋めることを日課にしてるといふ。これはいい。「自分にノルマを課して原稿を書くのが趣味。どんなに忙しくてもやる。読むのも書くのも活字中毒症になっている」。

うん、「ノルマとして書く」のはいい。書く原稿がなくても、手紙でもいいし、メモでもいい。あるいは、いい文章の引用でもいい。マス目を埋めることをする。僕は、「ノルマとしての読書」は実行してるが、ノルマとして書くことはやってない。これからは心がけよう。

さて、松浪さんは、これからがいいことを言う。同じく産経の記事だ。活字中毒だが(だからか)、一方で、「機械は苦手。IT化が一番遅れている人間で、携帯電話も持たない。原稿は必ず、愛用の万年筆で書く。パソコンやワープロは使わない。字はその人自身を表現する。悪筆だろうと、自分の字で書くべきだ」。

これは驚きだ。国会議員で携帯を持ってないなんて。多分、「携帯を持ってない唯一の国会議員」かもしれない。そしてパソコン、ワープロも使わない。さらにこう言う。

「情報を集めるだけならコンピューターも便利かもしれない。しかし、書物にはその人の生きざまが凝縮されている。本を読まない世代には、人間に興味を持たない人が多いのが特徴じゃないでしょうか」

異義な一し！と思わず叫んじゃいましたね。コンピューターは便利だけど、人間を墮落させる。「解答がすぐに見つかる」というけど、人生には「解答」がすぐに見つからないものが多い。又、一生、疑問をかかえて考えていく中で人間も成長する。「いい問いはそれ自体で半分以上の解答になっている」と、どっかの哲学者が言ってたが、そうなんだ。何に対して疑問を感じるかで人間の器が決まる。コンピューターで探して、すぐ分かる程度の〈疑問〉しか持ってないんだよ、今の人間は。

僕の知ってる人で、昔は真面目に宗教活動をやり、この世の人々を救おうとしていた人がいる。しかし、携帯を持ち、パソコンを持って、〈情報〉を得るに従い、この世の〈悪魔の情報〉だけに振り回され、「出会い系サイト」にはまって、身を持ちくずした。テレクラで何十万円と使い、キャバクラでは一晩に十万も使ったという。アホか、こいつは。お前はもう一度、統一教会に戻れ！と叫びたいね。

さらに、携帯もってる奴は皆、本を読まなくなったというね。肉の快樂におぼれているんだ。又、本屋はどんどんなくなるし、あってもゲーム本、マンガ本だけだ。こりゃもう本屋といえん。さらに、ゆっくり本を読める喫茶店もどんどんなくなっている。ルノアールも、半分以上はつぶして、「ニューヨーカーズ・カフェ」になった。フランスからアメリカへの転向だ。日本人に本を読ませまいとしている。これこそが、「アメリカの謀略」だ。そして、アメリカ本国ではタバコのCMは禁止し、のませないようにしてるくせに、日本ではドッとやっている。日本なんかどうなってもいいんだ。中国にアヘンを売りつけて、拒否したら「アヘン戦争」をしかけたイギリスみたいだ。日本は、中国のように拒否することも出来ん。亡国ですよ。そうそう、『現代用語の基礎知識』の附録の「現代を読みとくキーパーソン」にお前が載ってたよ、と言われて、本屋で立ち読みをした。おっ、載ってた。それも、かなり詳しい。僕の格闘技歴も載ってる。「噂の真相」(02年1月号)にも載ってるよ、と言われ、これは買った。高橋春男の「絶対安全Dランキング」だ。その「年間総合ランキング」が発表されてるが、何と、僕は58位に入っている。260位まで発表されてるけど、すごいね。今年は「SPA!」の連載は打ち切られるは、「裏BUBKA」の連載も打ち切られるは、収入はないは…で大変で、何も動けず、じっと逼塞してたのに。それでも58位ですか。なんか嬉しいのか悲しいのか。

まア、今年は、「がんばれ邦男君！雌伏編」だったよな。まア、オラは大器晩成を目指すからいいや。エッ？もう晩成はないって？もう人生の〈晩〉だからか。余計なお世話だ。それに、「お前は大器じゃなくて、小器だろう」って？ヤダナ、でも、仕方ないじゃないか。アフガン人と違ってどうせ日本人は小さいんだよ。世界最小、最短民族だから。オレたちは劣等民族なんだよ。

(あ、今、辞書ひいてて気がついたが、「雌伏」(活動しないでじっとしてること)の反対語は「雄飛」なんだね。つまり、オスは飛び出し、メスはひれ伏すんだよ。何か、女性差別的な言葉だね。ウーマン・リブの団体に教えてやろう)。

そうそう、SPA!の連載は打ち切られたのに、最近何故か続けて二週出た。嬉しかったので紹介しよう。まず、12月19日号の「今週の顔」で「敬宮愛子さま」が取り上げられてるが、ここでコメントしている。女帝論について、「男女同権の時代という理由ではなく、過去にも女性天皇はいたという理由で、(つまり、過去に戻るということで)皇室典範改正には賛成」といっている。又、こう言う。

「女性では体力的に大変というのなら、公務も儀式も内容を軽減すればいいのです。こうでなきゃいけない、ああでなきゃいけないと考えているのは、むしろ周囲の側では？ 皇室だけに旧態依然たる倫理観を強制するのはおかしいし、重圧を与えることになると思う」。

昔なら、「必ず男を産め。産まなければ離婚だ」ということはあった。しかし、今はそんなことはない。子供がいない夫婦だっていくらでもある。それも普通だと思っている。ところが、皇室にだけは「必ず男を産め」とプレッシャーをかける。古い倫理観を押しつける。これはおかしいのではないかと思うのだ。

次の「SPA！」(12月26日号)では、本の紹介の欄に僕の『売国奴よ！』(廣済堂出版)が取り上げられていた。ありがたい。

〈改憲もせず実質的には軍隊の自衛隊を海外に出すこの矛盾。国旗の制度を有り難がって国民に押しつけようとするこの不思議。真に国を愛する者だからこそ見えるこの国の欺瞞の数々を鋭く衝いては目を覚まそうと訴える。公明正大を心がけ魂で綴った言葉たち。国民に届くか〉。

「真に国を愛する者だからこそ見える」というのはいいね。うれしいですね。又、この同じ号には福田和也の「罰あたりパラダイス」にあの天才作家、見沢知廉氏が登場していた。「見沢知廉の複雑怪奇愛情は狂わしの鳩ポッポな日本を戦後の豚からひっぺがせるか」。見沢氏の愛国心は複雑怪奇なんでしょうな。

1999年 2000年 2001年

## HOME

1999年 2000年 2001年

### 今週の主張12月31日

#### 学校でも「転生の世界史」を教えたらよかばい

「鈴木さんの過去世は時宗ですよ」と景山民夫さん（作家）は言った。「え、じゃ 僕の前世は日本酒だったんですか」。「それは正宗でしょう。日本刀にもありますけど。そうじゃなくて、鎌倉幕府の執権ですよ。日本を救ったんです。だから鈴木さん もこの日本を救う使命があるんです」

こりゃ大変なことになったなと思った。北条正宗（1251～1284）は鎌倉幕府8代執権だ。文永・弘安の役で元寇を退け、日本を救った。また、宋から無学祖元を招き円覚寺の開山とした。そんな偉い人の「生まれかわり」だなんて、景山さんも冗談がきついなと思った。でも、真面目な顔で言う。

しかし、時宗の生まれかわりが、どうしてこんな貧乏で、仕事もないんだ。政治にも関係ないし。まあ、「前世は日本酒です」なんて言われるよりはいいかもしれないが。これじゃ、日本主義者じゃなくて、日本酒主義者だ。（そういう右翼って多いけど）。酒でなく、刀の正宗が前世だったらどうだろう。もっと人間が鋭くなっていたかもしれない。こんなにボーッとしてなかった。

ちょっと前、巷には「前世占い」がブームだった。デパートの「占いコーナー」でも、前世を占ってくれた。ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の生徒たちもよく行っていた。

「私はフランスの田舎の水車番の娘だと言われました」という生徒がいた。いいね、リアリティがありそうで。「私は18世紀のイギリスのカメラマンの女房だと言われました」。うん、これもリアリティがある。でも18世紀にカメラマンなんていたのかな。なかには、「前世はメダカだと言われました」「僕なんて、ホウレン草だと言われました」という生徒もいる。3千円も占い料をとられて、ホウレン草かよ。かわいそうに。

その点、景山さんは、「ホウレン草だ」なんて失礼なことと言わない。きちんと相手の自尊心を満足させてくれる。とても人に気を使う優しい人だった。1947年（昭和22年）生まれだから僕より4才若い。生きていたら57才だ。作家で、『遠い国から来たCoo』で第99回直木賞を受賞した。いい小説だ。映画（アニメ）にもなった。これも、きれいで楽しい映画だった。

景山さんは、「幸福の科学」に入信し、大きな話題になった。歌手の小川知子さんと共に、「幸福の科学」の広告塔といわれた。この問題にふれて、『私は如何にして幸福の科学の正会員となったか』という本がある。この本を出した頃に僕は知り合った。普通、宗教をやってる人というと（特に広告塔となると）、頭のガチガチの人が多。布教のことしか頭にない。「とにかく入信しなさい」と。その話ばかりする。でも景山さんは違う。他の広告塔とは違う。心が広い。ユーモアのある人だ。

昔は、たけしの「ひょうきんプロレス」に出ていて、プロレスごっこをテレビでやってい

た。三浦和義さんをイメージした「フルハム三浦」になって、「文春ラリアット」を食ったりしていた。「幸福の科学」に入信してからも、プロレス好きは続いてたし。だからユーモア精神も旺盛だった。『闘うことの意味』（エスエル出版会）で僕は景山さんにプロレス、宗教、人生の話を聞いた。他にも何回か対談をした。生きてら、ロフトにも来てくれただろう。

1998年（平成10年）の1月26日、世田谷の自宅の仕事場から出火。翌27日深夜、一酸化炭素中毒で死去した。享年50才。まだまだこれからの人だったのに。「出火原因はタバコの火の不始末であった」。これは何も故人を冒瀆するものではない。だって景山さんの遺稿集『ハッピーエンドじゃなけりや意味がない』（ブロンズ新社。2300円）の年表に書かれているのだ。1月31日、信濃町の千日公会堂で葬儀が行なわれ、僕も参列した。葬儀委員長は小室直樹氏だった。

小室氏は言っていた。「景山さんは国家の問題に取り組もうとしていた。戦争や歴史について書こうとしていた。『鞍馬天狗』を書き終わり、『天皇の世紀』を書き始めた大仏次郎のようだった。そんな時だけに残念だった」。

景山さんから僕は「幸福の科学」の本を50冊位もらって皆、読んだ。又、東京ドームで行なわれた大川隆法主宰先生の講演会にも誘われて7回ほど行った。でも、一度も「入会しなさいよ」と言われたことはない。「鈴木さんは『生長の家』をやったし、プロレス好きだから」と本をくれた。僕も景山さんと会って話すのが楽しかったので喜んで行った。よく、ご馳走にもなった。小川知子さんの家でバーベキュー・パーティに呼ばれたこともある。「幸福の科学」の人達とカラオケにも行った。「鈴木さんもそろそろ入会しなさいよ。何回、ごはんを食べさせてもらったのよ」と言う人もいた。景山さんは、「保険のオバさんみたいなことを言うなよ」と笑ってたしなめていた。

景山さんから教わったことは多かったが、実は「時宗」の話は忘れていた。それなのに、月刊『創』（02年1・2月号）の連載に「文武両道」のテーマで書き、それが活字になった後に、あ、こんなことがあったと思い出したのだ。三島由紀夫は死の半年前に川端康成にこんな手紙を書いている。

「空手を三年目にしてやっと黒帯をもらひ、武芸合計九段になりましたが、さて強くなってみると襲って来る者もなく物足りない気分です。過ぎてをります」

三島さんも意気がってると楽しくなった。僕は今年の10月、柔道三段になった。合気道三段と合わせて武芸六段だ。三島さんにはとても及ばないし、弱い。赤坂はじめ皆に、いじめられている。でも、一生かかって三島さんのように「武芸合計九段」になりたいものだ。そして、「創」では武道を中心に自分史を書いてみた。ガキの頃は相撲ばかりやってたとか、サンボや柔道、合気道との出会い。そして、武道をやることで自分の思想がどう変わったかを考えてみたのだ。

その時、小学校6年の「天誅事件」を思い出して書いた。「この時から民族主義者だったんだ」と書いたが、何のことはない。これは先生が悪いんだ。秋田県湯沢市にある湯沢東小学校六年一組だった。日本史の授業で先生は、元寇の話をした。元が日本に攻めてきた…と、日本は何も悪いことをしてないのに一方的に攻めて来るとは何事かと思った。許せないと思った。生まれて初めて愛国心を持った時だ。そして、愛国心というものは時として暴走する。（それは映画「日本鬼子」を見てもよく分かる）。

この授業のあと、「元は許せん！元をやっつけろ！」と誰かが叫んだ。「ウォー！」とクラ

スの中の男子が立ち上がった。そして元と闘った。元をやっつけた。

「えっ、クラスにもモンゴル人がいたの？」と訊かれても困る。いるわきゃない。東北の田舎の小学校だ。「でも、元と闘ったんでしょ？」。そうだよ。皆が元に襲いかかり、やっつけたんだ。実は不幸なことに、高橋元という生徒がいたんだ。かわいそうに、元君は小学生の愛国的リンチの犠牲の羊にされたのだ。全員がよってたかって、殴り、蹴り、泣かせてしまった。「こいつのおかげで日本は大変な目にあっただ」「こいつのために俺ちの父ちゃん、母ちゃんは殺されたんだ！」と恨みを込めて殴った（父ちゃん、母ちゃんは生きてるのに。変ですね。集団になると日本人は怖ろしいと思いましたね）。

しかし、授業が終わった途端、誰言うともなく、「元をやっつけろ！」とワーツと襲いかかったんだ。不思議だ。いや、授業中に既に、「元め！」「売国奴め！」とひそかに指さして、狙いをつけておいたんだよ、その煽動者は。そいつはお前だろうって？ いや、僕はたった一人、「暴力はやめなさい」と止めた。いや、止めたような気がする。違ったかな。

でも、この「天誅事件」は尾をひかなかった。殴って終わりだ。カラツとしたものだ。今時の陰湿なイジメとは違う。その証拠に、同窓会で会っても皆、この事件を笑って話している。「バカなことをしたよな。誰かに煽動されて元君を殴っちゃって」「うん、それで俺、泣いちゃったんだよな」と本人も笑って言っている。45年前の天誅事件の加害者も被害者も共に、ニコニコと笑って語っている。美しい光景だ。

言っておくけど、この高橋元君、けっして、モンゴル人とのハーフではない。又、お父さんが反日思想の持ち主で、「こんな日本、亡びてしまえ。再び元寇を！」と恨みを込めて名前を付けたのでもない。1月1日の元旦に生まれたので元と付けただけだ。なんだ、人騒がせな親だ。だから、これからは間違っても子供に元とか中国、米国、北朝鮮なんて名前を付けないように。危ないから。

「創」にこのエピソードを書いた時は気がつかなかったが、店頭に出たから、アツと思った。やっぱり、あの時、「元を討て！」と真っ先に叫んだのは俺だったのかと。45年前の記憶が鮮やかに蘇った。そして、800年前の記憶までが蘇った。そう、俺が時宗だった頃の記憶だ。元の使節を斬り殺し、文永・弘安の役を闘った時の記憶も蘇った。そして、あ、景山さんに「過去世は時宗だ」と言われたことを思い出した。いろいろの事件が、一本の糸でピンと結び合わされた。そうだったのかと、胸が熱くなり、思わず眼から熱いものが溢れてきた。

というわけで、謎が解明され、俺の前世も分かり、驚きと感動の中で今週も終わりです。いや、今年も終わりです。では、いいお年を。来年もよろしく願いいたします。あっそうだ、最後に、「生まれ変わり」について、実に感動的な本を紹介しましょう。景山さんにももらった50冊の本の中でも、とびっきりの凄い本だ。きっと歴史に残るだろう。俺は一気に読んだ。そして、河合塾コスモの読書会のテキストにも使った。「えっ、こんなこと本当ですか？」

「世界史でこんなこと習いませんでしたよ」と生徒は驚いて、混乱していた。それもそのはず、世界史の本だが、誰が誰に生まれ変わったかが書かれている。「転生の世界史」だ。こんな本、ちょっとないよ。

大川隆法著『黄金の法=エル・カンターレの歴史観』（幸福の科学出版。2000円）が、その本だ。全く新しい歴史だ。学校でも、家庭でも教えてくれない歴史だ。ちょっと紹介してみる。

「ギリシャは、紀元前八世紀頃から、独特のポリスという都市国家を中心として、栄え始めました。紀元前六世紀の初めには、賢人ソロンが出現。転落農の救済、貴族と平民間の調停のための借金帳消し、負債奴隷の解放、市民の財産区分による参政権授与などを実施しました。この賢人ソロンが、実は六世紀の日本に生まれ変わり、聖徳太子と称された如来なのです。ソロンの魂の兄弟が、十九世紀にアメリカで奴隷解放をなしとげたリンカーン大統領です」

凄いですね。こんな重大な事実は学校で習わなかった。聖徳太子は実はソロンの生まれ変わりだったのか。知らなかったな。こういうことをキチンと教えてくれたら世界史の授業も楽しいのにな。

でもこれが入試に出たら大変だな。誰が誰の生まれ変わりか線で結べなんて問題があったりして。迷うよな。ソロンの生まれ変わりはリンカーンの方がいいと僕は思うけど、この人は「魂の兄弟」なんだ。難しい。しかし、転生はどういう根拠で分かるのだろうか。業績をくわしく検討し、一致点が5割以上だと転生と断定するのか。いやいや、天上から大川先生に、霊示されるのだろうか。では、他のところだ。どんどん紹介しよう。

「ギリシャは、ペリクレスの時代に、アテネが繁栄し、民主政治は最盛期を迎えました。ペリクレスの分身が、十八世紀、江戸時代の日本に生まれ変わり、寛政の改革を断行した松平定信だったのです」

「プラトンは、十八世紀になってヘーゲルという名で、ドイツの国に生まれ変わります」

「アリストテレスは、師プラトンのイデア論を批判し、実体論を説きました。このアリストテレスは、中国は宋の自体に生まれて、禅宗の無門慧開という名で知られ、『無門関』という著書を書き、無の境地を明らかにしました。アリストテレスは、無門和尚として生まれた後、さらに、日本に西田幾太郎という名前でも再び生まれております」

日本最大の哲学者・西田幾太郎は実はソクラテスだったのか。ギリシャ哲学は東洋精神にも入りこみ、そこに「壮大な仏の計画」があったのだと、この本では言います。これはいい。ぜひ、「新しい世界の歴史教科書」にすべきだよ。でも、「仏の計画」を知らない人間によって、検定が通らないだろうな。だからもう少し、「生まれ変わり」を紹介する。

「キケロ（紀元前106年～同43年）は、ギリシャのストア学派ゼノンのストイシズムの哲学の影響を受けて、自然法でもって実定法を批判しつつ、平等の思想を強く打ち出したんです。その後、中国に生まれ変わって、南宋の思想家・朱子となりました」

さらにストア学派の哲学者・セネカは、ドイツに生まれ、厭世哲学のショーペンハウエルになった。『自省論』を書いた皇帝マルクス・アウレリウスは、ジャン・ジャック・ルソーとして生まれ変わった。そして哲学者プロティノス（204年～270年）だが、この人はプラトンの影響を受けつつも、理性主義よりも神秘主義の立場をとる。プラトンが、現象の世界とイデアの世界という二元対立図式の世界観を採用したのに対し、プロティノスは、人間の主観と客観が分かれる前の一者を考え、ほんとうの实在であり神であるとした。そして、この三次元世界は、究極の实在から流れ出てきたものであるという「流出説」を唱えます。…と、個々の哲学者についての説明、解説は実に分かりやすい。勉強になる。ところが、「実は」が付くのだ。このプロティノスも何と…。

「この新プラトン派のプロティノスが、後に日本に生まれ変わって来て、生命の実相哲学を説いた生長の家の初代総裁、谷口雅春氏なのです（1985年没）。この谷口雅春氏の前世はプロティノスですが、その前々世は、日本の神代の時代、紀元前760年頃に日本の九州地方に生まれた伊邪那岐命（いざなぎのみこと）でした。伊邪那岐命は、天照大神という女神になった方が地上に出たときに、その肉体先祖、すなわち父親となった方です。伊邪那岐命--プロティノス--谷口雅春と転生した生命は、現在、梵天界にいる生命体です」

ウッ、凄い。僕は40年も「生長の家」の運動をしてたけど、全く知らなかった。「生長の家」の幹部だって知らないだろう。大体、プロティノスだって知らない。

こう書いてくると、いつまでも終わんない。だって「衝撃の事実」の連続なんだ。知らないことばかりだ。でもあとは、簡単に紹介しよう。ローマ末期に『神の国』を書いた教父アウグステヌスは、ドイツに生まれ、『存在と時間』を書いたハイデgger になった。又、ユートピア思想家として知られるフランシス・ベーコンは実は霊能者で、一万年前のアトランティス大陸の時代に、自分がダビデの子であり、イスラエルの王ソロモンが過去世であることを思い出す。ヒャー、そんなに偉い人だったんですか、ベーコンって。じゃ、ベーコンエッグなんか食ってられないな。不敬になる。

有名なジョン・ロックの過去世は、アテネの雄弁家デモステネスだという。『法の精神』を書いたモンテスキューは、後、天上界から勝海舟、山県有朋を指導する。カントの前世は、旧約聖書の『ダニエル書』にある預言者ダニエルだ。

そして、いよいよマルクスだ。この辺が一番面白い。ドキドキする。

「マルクスの前世は、サモス島に生まれたアテナイ移民の子、エピクロス（紀元前341年～同27年頃）です。ギリシャのいわゆるエピクロス学派の創始者であり、『エピキュリアン』という言葉の語源となった人です。このとき、エピクロスが説いた教えは、万物は原子からなるというデモクリトス流の唯物論でした。プラトンが『パイドン』のなかで力説した、靈魂不滅の考えに対抗して、エピクロスは、原子の分解をもって、人間そのものは亡びてしまうのであり、これによって、人間はもっとも不愉快な死という災いを乗り越えられるのだとしたのです」

「しかし、運命とは皮肉なものです。かつて、ギリシャにおいて、プラトンの批判者として現われた快樂説のエピクロスは、プラトンの転生した姿であるヘーゲルを、今度はカール・マルクスとして、唯物史観でもって批判します。歴史は繰り返すといいますが、まさに、転生における人間関係も繰り返すということです」

歌舞伎にもラストにどんでん返しがよくありますが、これは世界史的などんでん返しですね、すごいですね。こういうことを考え、いや、発見した人は文句なしに偉い。生まれ変わってまで復讐しようなんて凄い人達ですよ。又、復讐する相手も転生してるから、それを見つけないのも大変なはずなのに、ちゃんと見つけて闘いをいどむ。偉いですよ。では、その後どうなったか。

「エピクロスはその唯物論的思考の誤ちの反作用により死後二百年、地獄の無意識界に墮ち、苦しみました。マルクスも同様に1883年の死から、現在に至るまでの百年あまりにわたり、その意識は、地獄の無意識界で彷徨（さまよ）っております。そして、ここ数十年のうち

に起きる、「ソビエト共産主義体制の崩壊」(注)、中国の自由主義革命による路線の変更が終了するまで、天上界に昇ってくることはないようです。マルクスの哲学は、結局、社会が人間を疎外するという被害妄想の哲学であり、その底には、エピクロス時代から続く、ヘーゲル(プラトン)に対する深い嫉妬がありました」

そうなのか。マルクス(エピクロス)にはヘーゲル(=プラトン)に対する嫉妬があったのか。やたらと生ぐさい話だな。ところで、(注)は巻末にこう記されている。「(注)1991年の共産主義ソ連邦の崩壊により、1986年に書かれたこの旧版『黄金の法』の予言は的中した」。すごいですね。じゃ三島由紀夫の前世は誰なんだろう。それに、時宗についても書いてない。僕は景山さんに言われたただけだ。最後に、マルクスの弟子たちはどうなったか。それを紹介しよう。

「ロシア革命のレーニンは、その思想においては誤りがありましたが、人民を救おうとする強い熱意があったため、現在は、五次元善人界の政治家の村に住んでおります。しかし、スターリンは深い地獄に住んでいます。彼の命令で粛清された多くの人々の恨みの念波が消えるまで、スターリンは、そこから出られないはずです。中国の毛沢東は、その思想上の間違ひは今後とも明らかになりつづけるでしょうが、わずかに善なる想いと行ないのほうが多かったため、現在、五次元善人界におります」

フーン、何でも分かるんですね。じゃ、「日本のレーニン」といわれる塩見孝也さんはどこにいるの？ 地獄？ あるいは五次元善人界の政治村？ あれ、まだ生きてたっけ。そうだ、最近、『私の幸福論』(オークラ出版。2800円)という本を出したんだ。(神楽坂注：この前芳林堂へ行ったら、邦男さんの本のすぐそばに置かれてて笑っちゃいました)自分はこうやって幸福になった。だから皆にも幸福を分けてやろうという愛他的な本だ。他人のことを考える、心の清い人だ。きっと前世は聖フランチェスカだろう。

というわけで、長いお話もおしまい。普段の二倍以上の分量になってしまった。それだけ面白い本なんです。ぜひ読んでみなせえ。とっても勉強になったでしょう。今回は年末スペシャルでした。では、よいお年を。来年又、お会いませう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#)